

---

# とある最強の抑止力

Pearl

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある最強の抑止力

### 【Nコード】

N4098X

### 【作者名】

Pearl

### 【あらすじ】

『とある魔術の禁書目録』。その世界に迷い込んだとある転生者。彼／彼女の存在はその世界で何をもたらすのか――科学と魔術が交錯する世界で『無』能力者である少女が新たな物語を紡ぎだす。

## 序 章 とある転生者と学園都市《トリップワールド》（前書き）

初投稿です。拙い文章だとは思いますが、ご容赦のほどを。  
感想、ご指摘があれば遠慮なくどうぞ。

出来る限り参考にさせていただきたいと思います。

## 序 章 とある転生者と学園都市《トリップワールド》

いきなりだが、氷室皐月は『転生者』である。

言うまでもないことだろうが、環境や生活を一変させる意味での『転生』ではなく、生まれ変わりという意味での『転生』だ。

いや、環境や生活も一変したのでどちらにも該当するというのが正しいのだろう。

元は有り触れた日本人の成人男性。それが、何の因果か死後、気が付いたら少女の赤子となっていた。それも記憶と知識を引き継いだ状態で、だ。

要するに漫画や小説などでありがちな所謂『TS転生』と呼ばれるもの。

もっとも前世の記憶は生まれ変わった瞬間に全て思い出せたわけではない。成長するにつれ徐々に、おそらくは脳の成長に合わせる形で思い出していき、自覚していった。

ともあれ、当初は混乱の極みにあったものの、15年も経てば自ずと落ち着きを取り戻す。

生まれ変わったことについては単に『ラッキー』と思えばいいだろう。

しがないサラリーマンだったため、財産なんて呼べるほどの蓄えはなかったし、両親はすでに先だった後だ。兄弟や妻、恋人、子供もいなかったし、親しい友人は居たものの、こればかりはどうしようもないとあきらめるしかない。心残りと言えば、読みかけだった小説の終わりと、借りっぱなしのAVを誰が返却したのか、とそのあたりだろうか。

一方、女となってしまったことについては、意外と如何にかなるものだ、というのが実際のところだ。

少なくともよくありがちな“初めて”やらなんやらで無様な混乱

はなかったと思えるし、自己の性を否定して突発的に死にたくなったりなどはしていない。普通にスカートだって履けるし、下着類も女性用のものをちゃんと使用している。ただフリルやレースがふんだんにあしらわれた服だけは、どうにも受け入れられない——その程度だ。

つまり、さほどの混乱もなく、氷室皐月は現状を受け入れている、というわけだ。

さて、そんな『転生者』である氷室は、当然のことながらその頭脳は大人である。

日本人であるため義務教育はもとより、慣例に従い高校、大学と進学した身の上である以上、相応の学力は備わっている。また体力面でもそれなりに鍛えてあるため、学生生活は優位に立てる——

(はず、だったんだけどね……)

「はい。それじゃ先生プリント作ってきたのでまず配るですー。それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー？」

そう、補習である。

チートとまでは言わないが、かなりのアドバンテージを持って生まれてもなお“ここ”ではそんなもの何の意味もなさない。

確かに“ここ”は『外』とは隔絶した高度な科学力を持ち、それに比例して要求される学力も高い。しかしそれに見合った教育は施され、スタート地点ですでに優位に立っている氷室にしてみれば、少し頑張れば成績優秀者として補習などとは無縁の生活を送れているはずなのだ。

事実、氷室の学力は極めて高い。

ペーパーテストではさすがに満点とは言わないものの、平均点を大きく引き離す得点をマークしており、体育の成績もそれなりにい

い方だ。それならば当然補習に引つかかることなどありはしない。  
しかし現実には非情な補習宣告。

ちなみに本日は7月20日。世の学生たちにとっては『夏休み初日』という記念すべき日である。

(うう、今日は『夏休み突入記念サマーバーゲンセール』の初日だっというのにい)

初日だからなんだ、というかもしれないがバーゲンというのは戦場だ。しかも今日という日に限っては世の学生たちが学業という檻から解き放たれたのだ。財布の紐が緩むのは必然。そこにとってつけたかのような――というか、まさしくとってつけた大安売りであれば即時完売する商品も一つや二つではあるまい。店側も大量入庫で大儲けを期待しているだろうが、店舗スペースを考慮に入れば、その数は自ずと限られてくる。

しかし補習の終了予定時刻は正午0時。

この遅れは致命的だ。特に『服集め』が趣味の氷室にとってクリティカルダメージだ。HPの実に八割が一瞬にして削られる。

ならば初めから補習なんて受けなくて済むようにすればよかったではないか、というかもしれないが――努力はしたのだ、これでも。

先にも述べたとおり、ペーパーテストの成績は決して悪くはなく、授業態度にも特に目立った問題はない。

これが“普通の”学校ならば文句なく補習免除だ。

その上、今回は近年稀に見る本気で挑み、ほぼ満点に近い成績を叩き出した会心の出来だった。

しかし、それでもなお補習が免れないのには、そこに氷室自身の努力ではどうにもならない問題が横たわっているから。

こればかりはどう足掻いたって無理だ。不可能だ。どうしようも

ない。

(はあ……)

氷室がそんな絶望に満ちた深いため息を心の中で吐いている間にプリントを配り終えた、どうみても「身長135センチ十二歳、真っ赤なランドセルとリコーダーが標準装備です」な小学生にしか見えないロリイなクラス担任月詠小萌（アラサー）は、全身を精一杯大きく見せながら声を上げた。

「おしゃべりは止めないですけど先生の話は聞いてもらわないと困るですー。先生、気合を入れて小テストを作ってきたので点が悪かったら罰ゲームですけすけ見る見るですー」

「つてかそれ目隠しでポーカーしろってアレでしょう先生！　ありや透視能力専攻の時間割りだし！　手元のカードも見えないのに10回連続で勝てるまで帰っちゃダメとか言われたらそのまま朝までナマ居残りだとわたくし上条当麻は思うのでせうが！」

あまりに非情な仕打ちにツンツン頭の青年——上条当麻が一縷の望みを託すかのように叫びを上げた。

無理もない、と氷室も思う。彼の発言にもあるとおり、目隠しポーカー10連勝なんて“普通の”人間では無理だ。

確かに“運良く”“偶然”“奇跡的”に10連勝できる可能性はある。だがそれは本当に“運が良く”て、“偶然”で、“奇跡的”な確率でしかない。

そんな方に一つみたいな奇跡の産物を、赤点の罰ゲームにするなど“普通の”学校ではまずありえない——というか、ありえてはならない。それは単なる『虐待』でしかない。

しかし“ここ”では別だ。“ここ”ではそれが『当然』なのである。

そんな“運が良く”て、“偶然”で、“奇跡的”な確率を100%に変えてしまう力——『超能力』なんて代物が実在する、この『

学園都市』では。

一昔前ならばフィクションの産物と一笑されていた『超能力<sup>シロモノ</sup>』は、科学的に解明され、現在では人為的にその力を持つ者——『能力者』を生み出すことすら可能となっている。

それを実現し、今なお更なる高みを目指すために存在するのが、ここ『学園都市』だ。

日本の首都東京の西側三分の一を占めて設立された『学園都市』は、その名にあるとおり多くの学校と研究所で埋め尽くされ、またそれらを客とする商業施設やレジャー施設や各種公共施設、果ては専用の空港まで完備されており、都市として必要なものは全て揃っていると言っても過言ではない巨大都市である。

むしろ『街』というより一つの『国』と称した方が早く、総人口は実に230万人とも言われ、その8割が学生である。

そしてその数は同時に『能力者』の数でもある。

学園都市はあくまでも『超能力研究』の場だ。そのために設立された街ではあるが、超能力者が路端の石ころのようにそこら中に転がっているわけではない。

そのためその研究・実験を行うには自らが編み出した『能力者開発技術』を用いて、被検体となる『能力者』を独自に調達する必要があった。

そこで目を付けたのが『学生』である。

能力の使用には得てして高度な演算能力が要求され、その演算力次第で威力が上昇する傾向がある。そのため能力者に対し高度な知的教育を行うのは必須事項であり、そのための学び舎を設立するのは当然の行為であった。

ならば、逆にそうした学校に通う『生徒』を能力者とし、実験の協力者とすればどちらにとっても益になる関係を築くことができるのではないか、と考えたのだ。



学園都市に通う生徒は、入学と同時に超能力研究の被検体としての契約を結ばされ、脳の『開発』——薬物投与や直な電気刺激など——が行われ『能力者』となり、その力を研究のための資料として提供するのが決まりとなっている。

無論、当初は相当の反発があったそうだが、現在そうした声は下火だ。

その原因は学園都市が能力開発の副産物として手にした高度な科学力にある。

その力は『外』と比べ実に数十年分の差があるとされ、それに釣られるように学校側の教育もより高度なものへと転じていく。それこそ『中』では場末の学校を卒業したとしても、『外』では一流大学を卒業したぐらいの学力が身につくのだ。

さらに都市内での生活は最低限保証されており、実験協力の見返りとして『奨学金』の名目で生徒にはお金が振り込まれる事にもなっている。

水道光熱費は格安で、娯楽品には若干の税が加算されるものの、最先端科学に裏付けされた、それこそ『外』から見れば魔法のような製品が次々と登場し、売り出され、それでいて常人には扱えない『超能力』まで手にすることができると。

それこそ『脳を弄られる』ことすら霞んでしまうような、そんな夢のような生活を前に、人々の心は『学園都市』の存在を許容した。

しかし、現実というのはそんなに甘いものじゃない。

「はいー。けれど上条ちゃんかいはつは記録術かいほうの単位足りないのですどの道すけすけ見る見るですよ？」

可愛らしく小首を傾げながら満面の営業スマイルを浮かべる子供こもえ先生の非情なる一言に、上条少年は絶望に打ちひしがれ絶句する。

そんな級友の姿を見て、彼の隣に座る青髪ピアスの学級委員（男）

が「…むう」と呟くと、

「あれやね。小萌ちゃんはカミやんが可愛くて仕方がないんやね」

「……おまいはあの楽しそうに黒板に背伸びしている先生の背中に悪意は感じられんのか？」

「…なに？ ええやん可愛い先生にテストの赤点なじられんのも。

あんなお子様に言葉で責められるなんてカミやん経験値高いでー？」

「…ロリコンの上にMかテメェ！ まったく救いようがねーな！！」

「あつはーッ！ ロリ『が』好きとちゃうでーっ！ ロリ『も』好きなんやでーっ！！」

「雑食！？」

ぎゃあぎゃあと騒ぐバカ二人の姿に氷室はもう一度ため息を吐く。何を下らない話をしているのか。この二人はいつもこんな調子のやり取りを続けている。

だがそれは『外』となら変わらない、『学生』の姿でもある。

どんなに高度な科学力を持ち、一流大学を優に超える教育を受けていても、そこに暮らす人々はただの『人間』だ。人間である以上、クラスメイトとのバカ話もすれば、補習は嫌だと思ふし、強制居残りも御免被る。

何も変わらない。能力者であれ、そうでなかれ、人の本質は何も変わらない。

だというのに――

「安心しなさい、上条当麻」

「ん？ ……氷室？」

「私も同じだから」

そう、追加の補習を受けるのは彼一人じゃない。

おそらく――否、間違いなく氷室も<sup>すけすけ見る見る</sup>帰れま10確定者だ。

これはもう瀕死のダメージに上乗せしてバットステータスのオンパレード間違いなし。氷室の気分は急転直下の大暴落、ストップ安

記録を絶賛更新中である。

が、その意図が正しく伝わらなかったのか「へ？」と間拔けな顔を晒す上条の脇で、何やら目を丸くしていた青髪ピアスが突如雄叫びを上げた。

「な、なんやてえー！ ひむろんもロリエm————ふぐおっ！！！」

瞬間、青髪ピアスの顔面に飛び蹴りを喰らわせた氷室は間違っていないと思う。

「え、氷室って幼女趣味なのか？」

「違う！ そっちじゃなくて補習の方！ あと『ひむろん』言うなあ！！！」

「——ぐほお！？」

床に倒れた青髪ピアスの腹を踏みつけた氷室の横で、上条はようやく納得の意を浮かべる。

「あ、ああ……そういえば氷室も能力テストの点悪かったって言ってたな……」

悪かったというか『0点』である。問答無用に赤点である。

学園都市の存在意義が『超能力研究』にあり各学校は能力開発実験の場として存在する以上、そこに通う『生徒』は学生としての『学力』よりも被検体としての『能力』の評価の方が優先される。

それを調べるのが定期テストと同時期に行われる能力テスト——『身体検査』だ。

主な能力系統である『予知能力』<sup>ブレコグニッション</sup> 『透視能力』<sup>クレアボヤンス</sup> 『読心能力』<sup>サイコメトリー</sup> 『精神感應』<sup>レバシー</sup> 『念動力』<sup>サイコキネシス</sup> の六項目に対し行われ、その何れかである程度の数値を叩き出せれば合格となる。

無論、数値が大きいほど能力が強力である証であり、評価もそれに応じて高くなる。

逆に規定値以下だった場合は、問答無用で『無能』の判定が下る。そして学園都市のおよそ6割の生徒はこの“規定値に満たない”『無能』力者だ。実感できるほどの、目に見える形で姿を現すほどの力を持たないのであれば、それは最初から『無』いのも同じこと。だがそれならそれで規定値を越えられるよう努力すれば『無能』を脱する事ができる。つまり努力はちゃんと実を結ぶ可能性を残しているのだ。

しかし氷室の場合は、その考えすら当てはまらない正真正銘の『無』能力者だ。

『身体検査』の結果は常にいずれの項目においても0点を記録する。

待てど暮らせど、血管が千切れるほどに踏ん張ってみても1ミリどころか1マイクロミリすら計測器の針は一切触れないため、結果は常に『測定不能』を記す。

そのため『無能』出来損ないではなく『無』存在しない能という意味での『無能力者』として『書庫』バンクには登録されている。

確率的には非常に希少なケースで、小萌先生曰く「だからこそ調べる価値がある」と絶賛する存在なのだが、それを受け取る本人してみれば強制補習の最低評価としか捉えることなど出来ようはずもない代物だ。

言わばそれは『才能』の差というもの。

どんなに努力しようと普通の人間が水中で生活をしたり、空を単独で飛ぶことができないように、その壁は決して努力のみでは乗り越えられない。

だから『無』能力な氷室の努力は、『超能力者』の街では決して評価に繋がることのない『無』駄な努力に過ぎないのだ。

「なんつーか、お互い不幸だよな……」

そう呟く上条もまた、氷室と同じ『無』能力者だ。同病相哀れむというか、共通事項を持つ者特有のシンパシーを感じている。

そしてそんな『無』<sup>バカな子</sup>能力者が大好きで思わず補習<sup>かまい</sup>を充実させたくなってしまう小萌先生が担任となってしまうたこと、これが二人にとって何よりの不幸である。

「あ、あの氷室ちゃん。お気持ちはわかりますけど、それぐらいにしてくれないと先生授業が進められませんですー」

「すみません、つい……」

眉を顰め困った顔を浮かべる小萌先生に頭を下げ、氷室が自らの席へと戻ろうとし――

「むう……、黒の紐パンか。ひむろんは胸だけやなくて下着までエロエロやなあー」

足元から聞こえたそんな声に、氷室は身を強張らせた。

言うまでもないが、女子の学生服というのはどこの学校でもスカートがデフォルトである。

当然、（現世では）女子である氷室もそんな女子制服に身を包んでいる。

そんな格好で青髪ピアスへの飛び膝蹴り後、腹への踏みつけ<sup>つこぎ</sup>。そして“その場から動かずに”小萌先生への謝罪を行ったのならば――

結論――未だ青髪は氷室の足元に“仰向け”で倒れたまま。

「――って、待て待て氷室！ その大リーグボールみたいに振りかぶった青髪をどうするつもりだっ!？」

「今日は空が青いわねえー」

「投げる気満々っ!？ それも外に！ つーか、ここ4階だぞっ!」

「大丈夫。ギャグキャラは死なないのがお約束よ」

「それは漫画の世界の話であって現実にはありえないからっ！ オカルトだからそれっ！」

「科学とはオカルトを実証するために存在するもの。彼にはその礎になってもらいましょう」

「って、端から殺す気かよ！」

「大丈夫。彼が死んでも変わりはあるもの」

「青髪っ——！？」

某世紀末黙示録に登場する使徒な少女の名言に思わず反応を返す上条。

確かに髪の色と語感さんねんは似ているが、当然ながら青髪クローンでもなければ使徒でも女ですらない。

「……なあカミヤん」

「青髪、気が付いたのかっ！」

氷室に胸倉を掴まれ宙ぶりにされている青髪ピアスに上条は必至で声をかける。

「お前から何か言ってやれ！ でないと殺されるぞ！ てか、その前に謝りやがれコノヤロー！」

元はと言えばこのバカがスカートの中身を覗いたりしたのが原因だ。たとえそれが不慮の事故であったとしても——いや、なくても口に出すべきじゃなかった。

触らぬ神に祟りなし。逆に言えば触ったのなら祟られる。口は災いの元というが、今の状況がまさしくソレである。

「早く言え！ さっさと謝れ！ 言っとくが氷室はマジ本気だぞ！？」

自業自得とはいえ見捨てるわけにもいかない上条の必死の訴えに  
対し、当の青髪は——、

「こない美人に殺されるかと思うとゾクゾクせえへん？」

「そうだコイツMだった——っ!？」

それも真正のDM。

「じゃ、本人の了承も得られたところで：Y o u c a n f l —  
」

「だあー、だからやめろって——」

力を籠め投げ放とうとする氷室を引き留めるべく、上条がその“  
右手”で青髪の体を掴み——

「あっ——」

「——へっ?」

ピシリッ、と何かがシュートしたかのような感覚とともに“体重  
が増した”青髪を支えきれなくなった氷室が上条すらも巻き込んで  
後方に倒れた。

「痛っ——!？」

「はわわ、大丈夫ですか氷室ちゃん、上条ちゃ……ん?」

あわてて駆け寄った小萌先生が二人に声をかける。一人足りない  
ような気もするが、おそらく気のせいだろう。誰も気にしてない。

しかしその言葉も、駆け寄ったことで状況を把握したがゆえに途  
切らざるを得なかった。

「……………」

教室に言い知れぬ沈黙が落ちる。

そんな微妙な雰囲気、倒れた際の痛みを堪えた氷室は周囲を見  
渡し首をかしげる。

皆が皆、自分の方を向いて目を丸くする様は異様だ。特に女子生  
徒は顔を赤くし手で覆う者や同情の視線を投げかける者もいる。

(なにが……)

起きているのか。それを探り当てるより前に、

上条、青髪に続く三バカトリオの一角、土御門元春が爆弾を投げ込んだ――戦略級の核弾頭を。

「いやー、カミやんは幸せ者だにゃー。パンツ見せてもらえるだけじゃなくて“押し付け”までサービスしてもらえるなんて」

その一言に今度こそハッキリ氷室の心が凍りついた。

後ろに倒れこんだ結果、氷室は床へと座り込んだ形だ。

しかし何故だかそのお尻は床に触れてはいない。何かやわらかいクッションのようなものがそれを拒んでいる。

下を見る。

少し広がったスカートの端から覗くのは、ツンツンに尖った髪の毛。

つまりは人。それも頭部。

理解した。

自分はツンツン頭の少年――上条当麻の顔の上に座り込んでいるという現実を。

「……ふふ」

自然と笑みがこぼれた。

すくつ、と立ち上がりその場から一步引く。

「……………」

下敷きになっていた上条当麻が姿を現したが、彼は何も言わない。否、言えない。

顔が赤く、鼻から赤い液体が垂れているが、そんなことを気にしている余裕はない。



上条当麻は『不幸』に愛された少年である。

今朝も昨夜の落雷により電化製品が全滅し、冷蔵庫の中身も全てダメになり、非常食のカップやきそばを食べようとしたら流し台に麺を全部ぶちまけ、仕方がないから外食しようとサイフを探している内にキャッシュカードを踏み碎き、ふて寝の二度寝の泣き寝入りを電話で叩き起こされたと思ったら『上条ちゃん、バカだから補習ですー♪』との担任からの連絡網<sup>ラフコール</sup>。そして布団を干そうとベランダに出てみれば真っ白な修道服を着たシスターがすでに干されており、行き倒れというので賞味期限切れのパンを悪戯心で差し出したら腕ごと食われ、『魔術』がどうのというシスターと言い争いをした挙句、彼女が来ていた修道服『歩く教会』を右手でつかんだ瞬間、ものの見事にはじけ飛び、その中身を御開帳させ、直後怒りに狂った素っ裸の少女に全身を噛み付かれるという希少な体験<sup>レア</sup>をしてきたばかりだ。

そのシスター曰く、上条の『右手』が空気に触れているだけで彼が本来受ける筈の『神のご加護』だとか、『運命の赤い糸』だとかをバンバン打ち消してしまっているかららしい。

その話が嘘か真かはさておくとして――

事実、上条当麻は『不幸』に愛された存在なのである。

そしてそんな上条にとって『幸運』<sup>ラッキー</sup>とは、その後の更なる『不幸』<sup>アンラッキー</sup>へのフラグであり、

それは今回もおそらく、いや絶対にご多分に漏れることなく――

「上条君？」

「え、えーっと氷室さん？」

「……言い遺すことは？」

「いきなり死刑宣告!？」

「何か問題でも？」

ニコリと笑みを浮かべる氷室。笑顔とは本来攻撃的なものである。

「ないなら――」

故に、

「死にさらせエエエ！」

「不幸だあああ――！！！」

少女の上履きが上条の顔面を踏み砕くまであと0.5秒。

## 第01章 とある無能力と原作開始《ファーストコンタクト》

案の定、すけすけ見る見る帰れま10の刑に処された氷室は、夏休みの補習だというのに完全下校時刻までしつかり拘束された。

その後急いで『夏休み突入記念サマーバーゲンセール』という名の戦場に飛び込んだものの、目当ての品は粗方掃討され売り切れた後。それでも一縷の望みを託し、戦場方々を駆けずり回ったものの、手に入ったのはほんの僅か。

「……、不幸だ」

昼間公開処刑に処した少年の口癖をつい口遊ぶ氷室のテンションはもはや地の底を割って淀んでいた。

その上、この学園都市の交通機関は学生たちの健全なる育成のために最終便が下校時刻に合わせて運行されており、夕方を僅かに過ぎた程度のこの時間にも関わらず一切走っていないのである。

必然的に帰宅は徒歩となり、夜の帳が落ちた学園都市の道を一人寂しく寮へと向かって歩くしかないのだ。

夜は嫌いだ。

夜の闇は嫌なことばかりを思い出させる。

一人で居るのも嫌いだ。

孤独は不安を増長し、自分はこの世界に一人取り残されたかのような錯覚を覚えてしまう。

静かなのは嫌いではないが、好ましくはない。

お祭り騒ぎが大好きというわけではないため進んで騒ぎに混じろうとは思わないが、それでも静かすぎるより気が楽だ。

生まれ変わったことで文字通り世界は一変した。しかし嫌いなも

のばかりが増えた気がする。

確かに前世の人生は碌なものではなかった。両親には早々に先立たれ、顔はブサイクで、普通に食事をしているだけなのにすぐに太る体質だった。

学校ではイジメられ、社会に出ても同じくイジメられた。

死因もそんなイジメの延長上で、通りすがりの女子OLにさりげなく引っかけられたことで運悪く階段下へと落下。そのまま帰らぬ人となった。

まさか彼女も死ぬとは思わなかったに違いないが、かといって彼女が罪に問われるかと言えば微妙なところだ。

故意か否かなど本人とその周囲の人間の認識によるものだし、その全てから疎まわれていた自覚がある以上、彼女の方に味方する人間は多そうだ。ただでさえその子は美人で人気が高かったし。

それに転んだ先が階段だったのは本当に偶然であり、そうじゃなければ死ぬようなことにはなりえなかった。

だから万が一捕まったとしても証拠不十分で釈放され、良くても執行猶予判決がせいぜいだろう。

死んでなお、誰一人見返すことができないなど、おかし過ぎて涙が出そうだ。

そんな状況だったから、必然的にオタな引き籠りとなり、仕事以外で外出することなどまずありえなかった。

ネットとアニメと漫画が趣味で、ライトノベルを読みふける日々だ。

昼よりも夜の方が好ましく、他人とコミュニケーションを取るなんて以ての外だった。

それが今ではどうだ。

ブサイクだった顔は誰もが羨むほどの整ったものとなり、引き締まったスタイルと大きな胸元は通りすがりの男子を振り返らせることも多く、一人街中に立っていれば自意識過剰な野郎に声をかけら

れ、告白を受けたことだって一度や二度ではない。

そして前世では夜行性だったのに今では夜が嫌いになり、引き籠りだったのに今では一人が嫌いになり、静かな生活は大歓迎だったのに今では逆に落ち着かない。

(まるで別人ね……)

こんな女言葉が自然と出てくる時点でもうそれは証明されている。未練があるわけではないが、かといって現状とどちらが良かったかと問われれば答えに窮す。

嫌ではない。美少女となり、友達も増え、イジメられることもないこの人生が嫌なはずがない。

でもそれだけでこの世界——前世で読んでいた『とある魔術の禁書目録<sup>ベル</sup>』の世界に生まれ変わったことが“よかった”とはけして思えない。

『無能力者<sup>レベル0</sup>』だし、補習の常連だし、ナンパはウザいし、帰り道は一人寂しくだし、嫌いなものがたくさん増えた。

そして何より、氷室皐月は『自分』が一番嫌いだった。

自分は誰かに評価されるような人間ではない。誰かに評価されていいような人間ではない。評価されるようなこと自体、あってはならないことだ。

何故なら——

「……サイレン？」

ふと氷室の耳に甲高いサイレンの音が飛び込んでくる。

近くで火事でもあったのだろうか、と首をかしげる氷室の鼻が“嫌な臭い”を嗅ぎつけた。

それは焼け焦げた煤の臭いではなく、鉄錆にも似た鼻を突くようなそんな臭い。

「……血？」

“嗅ぎなれた”その臭いに顔を顰め、走り出す。

血の臭いがするということは誰かが傷を負っているということだ。それもすり傷やかすり傷ではありえない。こんな場所まで臭いが届くのならば、まぎれもなく大怪我を負っているはずだ。

進むにつれ段々とサイレンの音が近づいてくる。もしかするとそこから香ってきているのかもしれないが、それならそれで構わない。すでに対処されているはずだから、杞憂で終わるだけでしかない。

しかしすぐ近くまでやってきたところで、僅かにその道が反れた。どうやら火事は男子寮の方で起きたらしいが、臭いは少し離れた裏路地から漂ってきている。

ふう、と一息吐いてから、氷室は慎重に路地裏へと足を踏み入れる。

誰かが重傷を負っていたとしても、それを負わせた犯人がその場に未だとどまっている可能性もある。不用意に飛び込むのは危険だし、戦う必要があるのなら不意打ちの方が有利だ。

路地の角までやってきて、身を隠しつつその先を覗き込む。

視線の先には少年一人とベンチに横たわる少女が一人。少女の方は外人らしく、身に纏う衣装も学生服とは異なる。かといって私服とも思えない。

(ここからじゃ判別しにくいけど……)

怪我をしているのはおそらく少女の方だろう。

少年の方は少女の傍で跪き、少女と何やら会話を交わしている。

と、突如少年は少女の体を背負いこちらへと歩き始めた。

(この状況で?)

普通怪我をしている人間は下手に動かさない方がいい。その場に留まって救急車を呼ぶなり、人を呼んでくるなりするのが一般的な対応だ。ましてやすぐ近くに消防車が来ている状況で、わざわざ運ぶ必要はない。無論、一刻を争う自体なら往復の手間を惜しみ運ぶこともあるかもしれないが、少年の進む先はサイレンのする方向とは真逆の方角だ。

(怪しいわね……)

どうする、と自問し、

(なんて、考えるまでもないわね)

答えは出ていると、一気に物陰から飛び出した。

「止まちなさい！」

「っ——誰だ！」

道の中央に立ちふさがった氷室に対し、少年は警戒を露わにし身構える。

「——って、氷室？」

「上条、くん……？」

対面したことでハッキリとした人相に氷室は啞然とし、同時に心の中で盛大な舌打ちを漏らす。

(まさか今日だったとはね……)

おぼろげな原作知識を思い出し、現在の状況を悟る。

おそらく魔術師ステイルⅡマグヌスとの戦闘を終え、現場から逃げてきたところなのだろう。

(となると、この子が禁書目録……インデックス……)

「なんでこんなところに……？」

「それはこっちのセリフよ」

「うっ……！」

夜更けに大怪我を負った少女を背負った少年と、夜遊びに耽っていた少女のどちらが異常かを問われれば、間違いなく上条側がおかしいと断言できる。

無論、夜遊びも褒められたものではないのも確かだが……。

「——って、こんなことしてる場合じゃないんだった。……悪い、氷室。今急いでんだ」

「でしょうね。その子、怪我してるみたいだし」

真っ白な布地に金の刺繍が施された高価なティーカップみたいな修道服を身に纏う少女を一瞥し、頷く。

血の臭いはそのシスター——インデックスから放たれたものだ。  
今現在も足元に血の雫が滴っていることから、傷を負ってからそう時間は立っていないのだろう。

「ああ。だから——」

病院に、と続ける上条の言葉を遮り、

「ええ、だからその子をすぐにおろして」

「——え？ おろす？」

「いいから早く！」

「えっ……、あ、おい！ 氷室っ！」

状況を飲み込めていない上条を無視して、その背からインデックスをはぎ取ると地面にうつ伏せに寝かせ傷口を見る。

「酷いわね」

純白の布は背中の部分だけ真っ赤な血で染まり、黒く濁っている部分も見受けられる。

「そうなんだ。だから早くその子を病院に連れてかないと——」

「なら、なんでサイレンの鳴っているのとは逆方向に向かっているの？」

あれだけの騒ぎなら救急車の一台や二台待機していてもおかしくない。  
はない。

なのに、それをしないのはなぜか。

「そ、それは……」

「事情がありそうだけど、今はこの子を助けるのが最優先よ。少し黙ってて」

言い淀む上条にきっぱりと告げ、氷室は携帯を取り出すと短縮ボタンから目的の番号を呼び出す。

「……………私よ」短いコールの後、電話に応じた相手に開口一番そう告げると、「訳有りの重症患者一名。背後から鋭利な刃物で一撃。傷口は広くて深いけど中は無事みたい。でも出血が酷い。血液型は……」ちらりと上条に視線を向けるが、しきりに首を振る姿を見て、「御免、わからない。応急処置はこっちでしておくから急いで車を



回して。場所は——うん、そう。じゃ、よろしく」

居場所を伝え、電話切ると再びインデックスへと視線を向ける。

「お、おい氷室。今のって……」

「病院よ。当然じゃない」

「い、いや、それは不味いんだ。その子は……」

「IDを持たない“外の人間”でしょ？」

「なっ——!？」

なんで、と目を丸くする上条にインデックスの傷の具合をより深く診察しながら、

「この状況下で救急車も呼ばず、人がいる場所にもいかず、むしろ避けるように行動しているなら答えは一つよ」

あなたが犯人なら話は別だけど、と語る氷室に、上条は必死になって首を振り否定する。

「でも、それなら……」

「大丈夫。呼んだのはそういう“訳有り”でも対応してくれる病院ばしょだから。上に知られるのが不味いっていうならその存在も隠してくれるところよ。だから安心して」

確かにそれならば問題はない。上条は当初、とある事情により担任教師の小萌先生の家へ向かうつもりだったが、きちんとした医療施設に搬送できるのならそっちで治療してもらった方がいいはずだ。

「てか、なんでそんな病院とくろ知ってるんだよ」

「親が務めてるところだから」

「お、親？」

「そう。……それより少し離れてて。止血するから」

「お、おう。何か手伝えることはあるか？」

「ないわ。むしろ邪魔。特にその『右手』がね」

「右手……?」

上条は自らの右手を見る。

その右手にはあらゆる『異能の力』を打ち消す力が備わっている。ついさっきまでその力を使い、インデックスを狙ってきた『魔術

師』を自称する男と戦ってきたところだ。

(けど、それが止血とどう関係するんだ？ いや、それ以前に――)

なんで氷室はこの『右手』の事知っているんだ、と首を傾げる上条の目の前で、あろうことか氷室はその手をインデックスの傷口に押し込んだ。

「うっ――!?」

「お、おい！ 氷室!？」

「黙ってて！ 少し痛いけど、我慢してね。すぐに血を止めて病院に連れて行ってあげるから」

優しく諭すようにインデックスに告げると、氷室は再び視線を傷口へと向け、集中する。

(傷口の範囲は広いけどきれいに切られている。これなら止血して適切な処置を施せば傷跡も残らないわね)

心の中でそう呟きながら、意識を傷口全体に広げ、膜で覆うようなイメージを思い描く。

すると、

「……血が、止まった?」

「ええ。このまま維持してれば、病院までなら何とか持つわ」

「で、でもどうやって……」

氷室は上条と同じ『無能力者』<sup>レベル0</sup>のはず。何の能力も持たない、持っていたとしても現実に効果を及ぼすほどの力など持たない、無能力な能力なはずだ。

「……私もね、上条君と同じよ。<sup>システムスキャン</sup>身体検査では検出されない能力者」

「検出されない……?」

再び上条は自身の右手に目を落とす。

<sup>イマジンプレイカー</sup>

『幻想殺し』と呼ばれるその右手は、超能力であれ魔術であれ、それがたとえ神様の奇跡なんてシロモノであれ、一撃で打ち消す力を持つ。が、逆を言えばそれだけでしかない。拳銃から放たれた弾丸を防ぐことは出来ないし、燃え移った炎を消すこともできない。

<sup>システムスキャン</sup>

ましてや身体検査で用いられる機械には何の効果ももたらさないた

め、結果的に『無能力』の烙印を捺されるのだ。

「私の能力――『抑止力』はね、『止める』能力なの」  
「とめる？」

「そう。正確には『対象の持つベクトルに干渉し、その量を0にする』能力。ベクトル量が0になった物体は動くことができないから、結果的に『停止』することになる」

しかしその力は“初めから動いているもの”に対してしか効果を発揮しないため、静止した状態からの動きを読み取る身体検査では計測されることはない。それどころか計測器の動きすら『止めて』しまうために、値が0から動くことはなく計測不能となってしまう。故に結果は『無能力』判定。

「今はこの子の傷口の血を『止める』ことで血管に蓋をしている状態。だからもし上条君の右手が干渉すれば、その蓋は外れて再び出血が起きることになる」

だから邪魔なのだ。

その言葉に、上条は小さくうめいた。

自分の『右手』<sup>ちから</sup>は異能の力を打ち消すことは出来ても、不良からは逃げるしかなく、テストの点上がる訳でもなく、女の子にモテたりする事もない。ましてや瀕死の少女を救う事すら出来はしない。それに比べ氷室の能力<sup>ちから</sup>は同じ『無能力』とされながらも、こうして少女の傷を塞ぎ、その命を繋ぎとめているのだ。応急処置とはいえ、それは確かにインデックスの事を救っている。今、まさに。

「卑下する必要はないわ。たまたま状況が合致しただけで、私の能力だって“使えない”能力なんだから」

「使えない？」

なんで、と問いかける。今まさにインデックスの命を救っているのは氷室の能力によるものだ。それが“使えない”なんてもののはずがない。

「使えないわよ。ベクトル量を0にするって事は『止める』こと“しか”出来ないってことだもの。加速することも減速することもで

きない。何かを生み出すこともできないし、操ることも不可能。あらゆる攻撃を防ぐことは出来ても、攻撃力は皆無。そんな力、こんな場面以外にどこで使えていうのよ？」

確かに『物を止める』という力が役に立つ場面はそれほど存在しない。例えばブレーキの壊れた暴走トラックを止めるのに使えるが、そんな場面に出くわす方がレアで、そんな限定的な場面にしか使えないのでは意味が無い。あらゆる攻撃を止めるというのも、攻撃を仕掛けてくる者を排除することが出来ない以上、ただ防ぎ続けるだけで、相手があきらめるのを待っていることしかできない。先に力尽きてしまえばその時点で殺られてしまう、その程度の力ではない。

今だって、インデックスの命を繋ぎ止めてはいるが癒しているわけではない。あくまでも延命であり、それ以上の事は他の者の手に委ねるしかない。

「だから今回は偶然状況が私の能力に適していただけで、異なれば立場は逆転していたか、どちらも役立たずで終わっていたはずよ」

「あ、ああ……」

そういう事なら上条だって理解できる。

お互いたったひとつの事に特化しているせいで、それ以外の事がなんらできないというだけの事だ。

これがもし何らかの『異能の力』によってインデックスの命が脅かされているのならば氷室カウスターストップの能力ではなく上条イマジンプレイカーの右手の出番となつたはず。

「それと、このことは誰にも言わないでね」

「え？　なんでだ？」

無能力者の肩身は狭い。能力者の街であり、学校の評価もそれに準ずる以上、最底辺に位置する『無能力者』は他の能力者から見下される事が多い。

それに能力云々を除いたって、力あるものが力なきものを虐げるのはいつの世も変わらない事柄だ。

しかし氷室にはちゃんとした能力が備わっている。例えその力が“使えない”能力だとしても、能力者であるという事実があれば彼女の地位は向上し過ぎやすくなるはずだ。

「必要ないから」

「必要ない？」

「だってそうでしょ？ スプーンを曲げるならペンチを使えば良いし火が欲しければ100円ライターで十分よ。テレパシーなんてなくてもケータイがあるし、テレポートなんて使わなくても自分の足で歩けばいいだけじゃない」

「まあ、そうだな」

エレクトロマスター

それは昨夜、とある電気使いに上条自身が吐いた台詞でもある。他の何かで十分代用可能ならば、わざわざ超能力を使うまでもない。ただ少し便利だな、程度のもので、その超能力だって1人1つしか持つことができないから自身の能力以外の事柄は、やはり何かで代用するしかない。

「普通に日常生活を送るだけなら超能力なんてものも必要ないのよ。だからそれで得られるものなんて『私は優秀なモルモットです』って評価だけよ」

バカバカしい、と吐き捨てる氷室に、上条は納得しながらもどこか薄ら寒いものを感じた。

『優秀なモルモット』。確かに違いない。ここは超能力を研究する街であり、生徒は『学生』の名を借りた超能力が使えるという『被検体<sup>モルモット</sup>』だ。その能力が向上するということは即ち『より優秀なモルモット』になったと言える。

だがそれを言ってしまうと――、

今も必死になってレベルを上げようとしている多くの能力者達<sup>がくせい</sup>の努力はどうなる？

『無能』の烙印を捺されて腐っていった者たちの嘆きはどうなる

？

そんなものに何の意味もないのだと、そういう事なのか？

「どいつもこいつも能力、能力……超能力がどれほどのものだっていうのよ。そんなものだけで人の価値が決まるわけじゃないでしょうに……」

なおも続く氷室の怨嗟。

そう、怨嗟だ。

それはまるで、過去にそういう扱いを受けたことがある様な、そんな過去に対する恨み辛みを吐き出すような言葉に、上条は氷室の中にある“何か”を垣間見た気がした。

上条にとつての氷室皐月という少女は、美人で、胸がでかくて、ノリのいい、物静かなクラスメイトだ。

普段は一人静かに教室の片隅で本を読むか窓の外を眺めているかのどちらかで、眼鏡をかけていればまさしく文学少女という言葉がぴったりと当てはまりそうだ。

かと思えば、今朝の一件のようにノリがよく、話してみれば決して悪い印象を抱くことはない。面倒見も良く、クラス委員長（女）と一緒に何かを手伝っている場面もよく目にする。

クラスのみならず学校中で密かな人気を博し、非公式にファンクラブまで発足しているという噂も耳にしたことがある。

見た目は文句なしの美人だし、スタイルもいい——特にその胸が。それでいて人柄もいいともなれば、多くの好感を集めるのは当然だろう。

頭もよくて勉強もでき、でも能力テストだけは最低得点のため補習の常連客。

それが上条がこれまでの抱いてきた氷室皐月というクラスメイトの人物像だ。

しかしそれは高校に入学してからのこと。中学は別の学校だったため、それ以前の彼女がどういう人物だったのかを上条は知らない。だからそこに人には言えないような“何か”があったとしてもなら不思議ではない。

だが同時に、今の氷室を見ているとそれを信じることは出来なかった。

およそ『無能力者<sup>レベル0</sup>』であるということ以外に欠点なんて見当たらないこの少女が、これほどまでに悪感情を抱く“何か”があったなど見当もつかない。

身勝手ながらに上条は、彼女は人を羨むことも恨むこともないのだとさえ思っていた。

だけどそれは違ったのだと。彼女も一人の人間であり、ならば当然そういった暗い感情を宿すただの人なのだと、理解した。

(でも、なんで……)

怨嗟を綴る氷室の表情はどこまでも冷たく無表情で——感情無しには語れないと示しているかのようで——それは彼女の抱える暗さがどこまでも深く、底の知れない深淵の『闇』を連想させるほどに暗いものだと言おうで——

(なんでそんなに、悲しそうなんだよ……)

何故だか上条には、氷室が一人泣いているかのように見えた。

「上条君？」

ふと名を呼ばれ顔を上げると、氷室が不思議そうな表情で上条を見つめていた。

そこに先ほどの暗い冷たさは微塵も感じられない。いつも通

りの氷室皐月がそこに存在し、先ほどの夢が全て夢だったかのような錯覚を覚えてしまう。

（夢、だったのか……？）

今日一日いろいろとあり過ぎたせいで疲れているのかもしれない。

「えっと…悪い。で、なんだっけか？」

「だから秘密にしといてくれって話よ」

「あ、ああ。でも、それなら尚更バラしちゃった方がいいんじゃないか？」

氷室の過去に何があったのかはわからないが、かといって『無能力者<sup>ル</sup>』であるより、無い方がやはり都合がいいのではないかと思う。「まあ、普通<sup>ル</sup>の能力だったらそっちの方が面倒がないんでしょうけど……」

「何か問題があるのか？」

それはやはり“暗い過去”に関係するのだろうか、と上条は氷室の顔を窺ってみるも、眉を顰めてはいるものの先ほどの様な冷たい無表情ではなかった。

「問題、というか……希少<sup>レア</sup>なのよ、私の能力は」

「まあ、そうだろうな……」

上条だってすべての能力を知っているわけではないが、それでも『物を止める』だけの能力なんて聞いたことがない。逆ならば腐るほどあるのだが。

「勘違いしているみたいだから訂正するけど、『止める』ことが希少<sup>レア</sup>なことじゃないからね」

「へ？ 違うのか？」

「ええ。問題なのはそれが『ベクトル』に干渉する能力だってこと」「ベクトル……？ そののどこが問題なんだ？」

物を止めるのならベクトルに関わるのは当然だろう。

物体は須らく何らかのベクトルを有しているのだし、動いているということはそのベクトルが作用しているという事だ。その作用を『止める』以上、ベクトルに関連するのは必然だと思うのだが……。



「間接的にベクトルに作用する能力者は大勢いるわ。『サイコキネシスト念動力者』もある意味そうだしね」

物体に力を加えて操る彼らも間接的にベクトルを操っていることになる。

「でも直接ベクトルに干渉できる能力者は私以外にはこの学園都市に一人しかいないの」

「二人だけっ!? マジかよ」

「マジよ」

学園都市の人口は230万人とされ、その八割が学生⇨能力者だ。つまり184万人もの能力者がいて、その中のたった二人しか存在しない。

確かに希少だ。レア

ちなみに『イマジンプレイカー幻想殺し』はそれ以上の珍種レアモノなのだが、本人に全くその自覚がないためここでは捨て置かれている。

「しかもその能力者っていうのが、第一位なのよねえ……」

「だ、第一位って……、学園都市に7人しかいない『レベル5超能力者』の第一位っ!?!」

学園都市における能力者はその力量により0から5の6段階に振り分けられる。

最底辺は言うまでもなく上条達が所属する『レベル0無能力者』。そこから一般的に能力者と呼ばれ始める『レベル1低能力者』、『レベル2異能力者』と続き、『レベル3強能力者』で一人前、『レベル4大能力者』ともなればエリートと認められる存在となる。

そして最高位の『レベル5超能力者』は学園都市に僅か7人しかいない。その7人の中でもさらにランクがあり、その第一位トップともなれば正真正銘学園都市最強の能力者ということになる。

「そ…、だからわかるでしょ? 第1位最強の能力者と同じ系統の能力を、レベル0最弱である私が持っているなんて知れたら大騒ぎになるわ」

騒ぎにならないはずがない。大事だ。

「私は今の生活で十分満足しているの。それ以上もそれ以下も望んでいないから……」

「……わかった。誰にも言わない」

「助かるわ」

確かにすごいことであり、自慢できることではあるが、それをどうするかは本人次第だ。他人が持て囃したところで碌なことにはならない。

そもそも話したところで信じる者などいないだろう。氷室が『無能力者』であることはすでに『書庫』<sup>バンク</sup>にも登録されている事実だ。その力が『身体検査』<sup>システムスキャン</sup>で検出されない以上、上条の『幻想殺し』<sup>イマジンプレイカー</sup>同様、その評価が覆ることはない。

だが万が一、ということもある。

本人がそれを望まないのであれば、上条には面白半分でそれを風潮する気は微塵もなかった。

「……来たみたいね」

未だ鳴り止まない男子寮側のサイレンとは別の方角から聞こえてきたサイレンが近くで止まる。

すぐさまストレッチャーを連れた一団がこちらに向けて駆け込んできた。

「運ぶの手伝って」

「おう……って、大丈夫なのか？」

「直接効果範囲に触れなければ平気よ」

「わかった」

チラリと見たインデックスの容態はすでに虫の息だ。

ここからは時間との勝負となる。

「もうすぐ病院だからな。それまで死ぬんじゃないぞ、インデックス」

冷たくなったインデックスの手を上条当麻は力強く握りしめた。

## 第02章 とある介入者の即興演出《インプロビゼーション》

「妻の初産を待つ夫か、あんたは……」

インデックスが手術室の中に消えてからというもの、無意味に廊下を行ったり来たりする上条の様子に氷室はあきれたように声をかける。

「ちょっとは落ち着いたら？ ああ傷なら手術を受ければ問題ないはずよ」

「いや、わかってはいるんだけど……」

それでもじっとはしていられないと、立ち止まりはすれどソワソワと手術室のドアへとしきりに視線を向ける上条。

「はあ……」

気持ちとは分からなくもないが、いくらなんでも心配のし過ぎだ。

「こんなところで心配したってすでに債は投げられた後よ。上条君が執刀するわけでもないのだから、私たちに出来ることなど何一つないの」

そう割り切ったことが言えるは単に氷室がドライなだけか、それとも他人事だと思っているからなのか。もしくは――

「大丈夫。さっきの医者はこの学園都市で最高の医師よ。彼に救えない患者は誰にも救えない。だから安心して黙って座ってなさい」

「最高の、医師……？」

上条はインデックスとともに手術室に消えていった医者顔を思い出す。

失礼ながら、なんていうか潰れたカエルみたいな顔をしている初老の男性で、とてもじゃないが彼が最高の医師だなんて上条には思えない。

ましてやここは学園都市。最先端科学の結集するこの街において最高とは、即ち世界一の名医ということになる。

「……あれが？」

「ええ」

「いやいやいや。どう見ても上条さんの見立てでは田舎の小さな診療所で御老人相手に世間話ついでに診察を行っている方がよく似合っているといった感じなんですが？」

「だとすればずいぶんとハイカラな田舎よね、ここ」

「ハイカラって……いつの時代の言葉だよ、それ」

「明治の後期から戦後にかけてね。でも今でもキッチンと辞書に載っている歴とした現代語よ」

「いや、それはわかってるけど……、てか、マジでそうなのか？」

「ええ。疑う気持ちもわからなくていいけど紛れもなくそうよ」

自信満々に頷く氷室からの様子に嘘をついている気配はない。

が、だからと言ってすでに「田舎の小さな診療所で御老人相手に世間話ついでに診察を行っている町医者」という認識が出来上がってしまっている上条には、どうにも信じがたい。

「……上条君。冷凍催眠コールドスリープって知ってる？」

「それってあれだろ？ 人間を氷漬けにして、後で解凍して蘇えらせるって言うヤツ。たしか有人での惑星間移動時に無駄に歳を取らないようにするための技術、だっけか？」

「ええ、不治の病とか死者蘇生の望みを繋ぐとかの理由で医療現場でも用いられることもあるらしいけどね」

「けどアレってたしか、冷凍する時に問題があって現実には不可能とか言われてなかったか？」

「そうよ。人体の6割から7割は水分で構築されているけど、『水』は他の物質と違って液体よりも固体の方が体積が大きくなる特殊な物質だから、冷凍時に細胞内の水が体積膨張を起こして細胞膜を壊してしまうの。だから解凍してもほとんどの細胞が死滅しているから、蘇生は不可能とされているわね」

「だよなあ……。で、それがどうしたんだよ」

少なくとも今のインデックスにそんな処置を施す必要などない。というか、蘇生が不可能ならそれはただの『人殺し』だ。他にどう

しようもなく、助かるかもしれないもしもの未来に一縷の望みを託すより他にない状況ならばともかく、それがいつになるのか、そもそも本当にそんな日が訪れるのかもわからないのに実行するヤツの気がしれない。

「あの医師はね、その不可能を可能にしたの。それもほとんど後遺症らしい後遺症を残すことなく、ね」

「なっ——、マジかよっ！　どうやって！」

「奇跡的に体積膨張が起きてなかったからね。なら後は解凍するだけだったから大した問題ではなかったよ」

そう答えたのは氷室ではなく、手術室の中から姿を現したカエル顔の医師。

「先生！？　インデックスは！　手術はどうなったんですか！？」

彼の顔を見るや否や飛びつくように上条が詰め寄る。

「安心していい。手術は成功。ただ失血が酷いからね。二、三日は絶対安静だよ」

「よかったぁー」

「言ったでしょ、大丈夫だって」

はぁ、と安堵の息を漏らし胸を撫で下ろす上条の姿に、笑みを噛み殺しながら氷室はその肩をそっと叩く。

「……にしても、よく言うわね。『解凍するだけだったから大した問題ではない』なんて言えるの、あなたぐらいでしょうに」

「そうかい？　確かに解凍時にも問題はあるけど、その問題さえ分かっているのなら“それに適した解決策”を用意して対応すればいいだけの話だ」

「その解決策がぶっ飛んでるっていうのよ……」

人の体は種類の異なる無数の細胞で構築されているため、熱の伝わり方が場所によってそれぞれ異なる。そのため均一に熱を加えた

だけでは解凍する速度にムラができ、例え正常に解凍できたとしても人体の機能に多くの問題を抱えた状態となってしまう可能性が高いのだ。

それをこの医師は、熱の伝導率毎に分けて解凍するという方法を取った。

要するに氷漬けの人体をバラして、解かして、再度繋ぎ合わせたのだ。

しかも後遺症を残さないために各部の解凍速度を調節し、手術の進行と併せるといふ荒業までやってのけている。

もしこの話を普通の医者が聞けば、まず信じないか、信じたとしても目を丸くして言葉を失うか、泡を食って倒れるかの何れかだろう。一般人ならまず正気を疑う凶行だ。

だが、どんな凶行であろうともそれで患者の命を救えるのであれば彼は何を犠牲にしてもそれを実行する。

法も、常識も、倫理も、道徳も、慣例も、その全てを無視し、一切の手段を問わず、ただ一つの目的と信念のために行動する。

患者を見捨てない。

医者としてごく当たり前の、しかし現実的には非常に難しい、ただそれだけのためだけに行動し、実行し、達成する。

それが彼にとっての“当たり前”であり、それが出来なければ彼は自分に『医者』を名乗る資格はないとさえ考えている。

どこまで行っても彼は医者であり、どんな時でも医者であり、どうなろうとも医者であり続ける。

そうしてこれまで多くの患者の命を救いだし、奇跡を起こしてきた。

それによりついた二つ名が『冥土帰し』<sup>ヘブンキャンセラー</sup>。奇跡の医師。

もっともその名の通りに死者を甦らせるなんてことはさすがの彼でも不可能だ。

先の冷凍催眠の例は、ただ氷漬けになって眠っただけだったから可能だっただけで、もし冷凍された際に細胞膜が壊れていたのなら、さすがの彼も手の施しようがなかった筈だ。

しかし“死んでさえいなければ”彼は必ず患者を救い上げる。どんな手段を用いても。

それが彼という人間の存在意義だから。

「それはそうと、一つ聞いてもいいかい？」

「あ、はい。なんですか？」

喜びを噛みしめていた上条に『冥土帰し』ヘブンキャンセラーが自身の喉元を指さしながら問いかける。

「あの子のここ、喉の奥の方に、なんだかよくわからないマークが刻まれていたんだけどね。君、何か知っているかい？」

「マーク？」

「そう。ちょうど星占いとかで使われているような、そんな形の印だよ。直接じゃなく、何らかの能力みたいなもので付けられているみたいんだけどね。よくわからなかったし、とりあえずは問題なさそうだったから放置しているんだけど……その様子だと何も知らなそうだね」

「はい……」

「わかった。一応こっちでも検査はしてみるよ。けど彼女、シスターみたいだから、何か宗教的な意味があって付けているのかもしれないけどね？」

「……………」

「じゃ、僕はまだやることがあるから、これで失礼するよ」

そう言って『冥土帰し』ヘブンキャンセラーは踵を返そうとし、突如忘れ物でもしたかのように足を止めると「あ、そうそう」と言いながら氷室へと向き直る。

「君もあまり無茶はしないようにね？」

「……わかってるわ」

「ならいいんだけどね？」

それだけ告げると今度こそ『冥土帰し』ヘブンキヤンセラ―は手術室の中へと戻っていった。

「……知らないけど、心当たりはある、って感じね」

『冥土帰し』ヘブンキヤンセラ―の姿が見えなくなると同時に物思いにふけっていた上条に、氷室が声をかける。

「あ、いや……」

「ウソ。おおよそその子を襲った犯人に関連する事でしょう？　で、巻き込みたくないから話さない、ってところかしら？」

「……すげえな。なんでこれだけの情報でそこまでわかんだよ」

（そりゃ、原作みらいを知ってますから）

感心する上条の問いに氷室は心の中で答えを返す。

無論、口に出すことはしない。出したところで信じてもらえないだろうし、何より氷室の持つ原作知識は完璧ではない。

元々原作が未完だったというのもあるが、色々と記憶から抜け落ちてストーリーいる知識が結構ある。

例えば今日が上条とインデックスの出会いの日であり、原作の開始日だったなどすっかり忘れていた。

夏休み初日という分かりやすい日であるにもかかわらず、氷室は覚えていなかった。

よって自信を持って言えるのはせいぜい主要人物のプロフィールアウトラインとあらすじ、それとおおよその時系列程度だ。

それ以外はこれから読み取れる事象を氷室が独自に推測し、補間しているに過ぎない。

しかしそれでは不確定要素が多すぎるため確証に欠け、他人に伝えるなんてことできる筈もない。

それにすでに原作への介入を果たしてしまっている現状、それらの知識は参考程度にしか役に立たないだろう。



なんせ『氷室皐月』なる人物がすでに原作には登場しない『不確定要素』なのだから。<sup>ギュラー</sup>

（問題は、できるだけ原作の流れを崩さずに、どこまで都合のいい結末を紡ぎだせるかね）<sup>エンド</sup>

元々氷室は原作に介入する気などなかった。

それは最初から無理だと理解はしていたが、少なくとも今回の一件に関しては自分の出る幕ではないと判断していた。

しかしあの場であれ以外の行動をとる方が逆に不自然だ。自分にはその状況を解決できる術と人脈を持ち、それでいて何もしないなんてことできる筈がない。

それに個人的な心情で、インデックスを見捨てることができなかつたというのもある。

無論、見捨てたとしてもそれならそれで原作通りに進んだかもしれない。

だが、そうならなかったかもしれない。

あの僅かな邂逅が、後の展開にバタフライ効果を及ぼさないとは限らないのだから。

なら関わったことを悔やむより、物語が破綻させてしまった責任を果たすべきだ。

介入を続け、流れを修正し、見届ける義務が氷室にはある。でなければ最悪の結末を迎える可能性もありうるから。<sup>バッドエンド</sup>

だからと言って原作通りに進めるつもりはない。それはすでに破綻しているし、あの物語も万事解決とは呼べる代物ではない。<sup>ハッピーエンド</sup>

しかし原作から離れすぎても今後の展開が読めずアドバンテージを失うことになる。

それになんだかんだ言っても原作の終わり方が最善であることも多い。

だがそこへ至る経緯が欠落している以上、慎重に事を進める必要

がある。

原作と現在の情報のすり合わせをし、どこでどれだけの情報を開示し、どれほどの介入をして、どれだけの修正と破綻を行えばいいのか。

それは単に原作を<sup>台本</sup>なぞるよりも難易度の高い『即興劇』だ。

始まりと終わり方だけが決まっっていて、後は演じる役者たちに全てが委ねられている。

しかし彼らは自分達が『即興劇』を演じているという自覚がない。だからそれぞれがそれぞれの思惑に従い、思うがままの行動をとり続ける。

そんな状況で氷室が果たすべき役割は役者兼演出家だ。

自覚なき役者たちの意図をくみ取り、先読みし、物語が破綻しないよう調整し、テコ入れをし、<sup>ハッピーエンド</sup>最良の結末へとこじつける。

それも決して自らが<sup>デウス・エクス・マキナ</sup>都合主義の神様にはならず、その場にいる者たちが自然とそちらへと向かってような、そんな演出を誰にも悟られず、極自然にこなしていかなければならない。

（どんな苦行よ、それ……）

目の前にそびえ立つ壁の高さを思うとくらくと眩暈を覚えるが、偶然とはいえずでに後戻りのきかない場所に立ってしまっている以上、やるしかない。

すでに債は投げられている。匙まで投げるわけにはいかない。

（とりあえずはこの先の展開へと介入する糸口、これを本格的に繋ぎ合わせるのが先決ね）

上条当麻は無関係な人間が関わるのをよくは思わない。できる限り遠ざけようとするだろうし、それが女の子であるならばなおさらだ。

朴念仁で無鉄砲で、後先考えない唐変木ではあるが、同時に生粋のフェミニニストでもある。後、無類のお人よし。

しかし頑固というわけでもない。理屈があれば理解はするし、流されやすく、人の話を鵜呑みにしやすいという欠点もある。

(となれば――)

数瞬の思考でとりあえずの道筋を立てた氷室は上条を真正面に捉え見つめる。

「……話して。何が起きているのか、あの子が誰に狙われているのか」

「いや、それはダメだ」

案の定、即座に首を振る上条。

「インデックスを助けてもらったのには感謝してる。でも、だからこそ、これ以上氷室を巻き込むことは出来ない」

どこまでも真摯に、率直に、当たり前前の言葉で申し出を拒否する上条当麻。

しかしそんなことは織り込み済みだ。

「勘違いしないで。別に進んで巻き込まれたいわけじゃないわ」

「だったら――」

「けど、嫌が応でもすでに巻き込まれている状態なの。言わなかった？　ここは親が務めている病院だって」

「……そういや、そんなことも言ってたっけ」

「ちなみにさっきの医者がその親なんだけど……」

「……………はあ？」

長い長い沈黙の後、シリアスも何もかもをぶっ飛ばして、上条当麻は間抜けな顔を晒した。

「……………あれが、親？」

「そうよ」

「……………冗談？」

「じゃないわよ」

「……………マジで、親？」

「そう言ってるでしょ」

「……………奇跡だ」

これぞまさに遺伝子の神秘。奇跡が起きたとは思えない程、上条の目から見て二人は似てない。

似ている方を探すのが困難なぐらい似ていない。

逆間違い探し、それも世界最高難易度を誇る超難問と呼べるくらいに全く以て似ても似つかない。

「言っておくけど、血は一滴も繋がってないわよ」

「ってことは、連れ子か？」

「いいえ、『捨て子』よ」

「捨て……………、っ!？」

「『置き去り』だから、私」  
チャイルドエラー

「……………!？」

今度こそハッキリと上条は絶句した。

チャイルドエラー

『置き去り』とは学園都市が抱える特有の社会現象のことだ。

学園都市は入学した生徒の生活を最低限保証する制度が存在する。これは入学と同時に『開発』を受け『能力者』となることで、その存在そのものが学園都市の機密情報と化した生徒をむやみに外部に流出させないようにするための機密措置の一環として存在する制度だが、これにより学生たちは学園都市内の生活が保証されることとなる。

しかしこれを悪用し、手を付けられない子や育児を放棄した親が、入学金だけを支払って我が子を学園都市に放り込んだのち行方を眩ますという行為が頻発するようになった。

これに対し、学園都市側は入学時の審査を厳しくする等の措置を取ってはいるものの、大した効果はなく、かといって入学手続きそのものが正当に行われている以上、入学と同時に能力開発を行って

しまい、以後その子を外部へと放り出すこともできなくなってしまう。その上、何の保証もせずにいると治安の悪化を招くだけのため、保証はせざるを得ず、それに託ける無責任な親は後を絶たない。そのため有効な手段がとれぬまま年々その数は増え続けているという、厄介な連鎖が発生しているのだ。

そうして親に捨てられた子供の事を学園都市では『置き去り』と呼んでいる。

「驚くことじゃないと思うけど？ 学園都市じゃたいして珍しくもないんだし」

「いや、それはそうだけど……」  
確かに珍しくはない。年々増加傾向にある『置き去り』が具体的にどれだけいるかなど上条にはわからない。だが決して少なくないことは知っている。

それに学園都市は外部の人間が立ち入るのを嫌っているため、親兄弟であっても中に入るには面倒な手続きと検査を幾重にも行わなければならない、頻繁に訪ねてくることはないし、外との連絡だってある程度の規制が設けられている。

そのため本人が『置き去り』だと言わない限り他の学生と何一つ変わらない生活を送っているため、区別をつけることはできない。だから偶然となり居合わせた子が『置き去り』だったとしてもなんら不思議ではない。

だがしかし、自分から『置き去り』だという者は珍しく、普通は隠すものだ。親に捨てられたなんてこと、他人に話したがるヤツはそうはいない。

しかも目の前にいる人気者の少女が『置き去り』だなんて、上条じゃなくても信じられないに違いない。

「少し前に大怪我を負ったことがあってね。その時、執刀してくれたのが彼で、その誼で保護責任者を買って出てくれたのよ」

「だから、『親』か……」

「そう」

氷室は一度だって『父』や『母』という言葉は使っていない。ただの『親』、それだけ。

それは父でも母でもなく、どちらでもあり、どちらでもない、自らを庇護する存在としての意味であり、それ以上の意味を持たない言葉だ。

だがそれでも『保護責任者』ではなく『親』という言葉を使うのは、その人物に敬意と感謝の気持ちを払っているから。

「だから、ここが戦いの場になるのなら、それは他人事じゃないの。……犯人、まだ捕まってないんでしょ？」

「ああ……」

インデックスを襲ってきた——本人曰く、傷つけたのは別の人間で、自分はただ『回収』しに来ただけだと言っていたが——魔術師は上条の一撃で気を失い倒れたものの、それだけで諦めるとは到底思えない。

かといって警備員ジャッジメントにそう易々と捕まるようなヤツでもおそろくはない。

ならまたあの魔術師はインデックスを狙って襲撃を仕掛けてくる。対策を練ったうえで、必ず。

「けどさっきも聞いた通り、あの子は二、三日ここから動くことができない状態よ。でも襲撃犯がそれを悠長に待ってくれるとは限らない。なら、ここは戦場になるわ。そしてこの病院とその患者に危害が加えられるのなら、私はそれを黙って見過ごすことはできない」

ここは病院だ。それなりの警備セキュリティーは配備されているものの、あくまでも“それなり”であり、一般的な犯罪を想定したものではない。

そもそも病院が襲われるなんてことはそうそうありえず、ましてや魔導師なんてふざけた連中が襲ってくるなど言うまでもなく予想外の事態だから、大した効果は期待できないと思っ

その上、ここにはインデックス以外にも多くに入院患者が在籍し、彼らの面倒を見るため常時医師や看護婦などが詰めている。

そこが戦場になるということは、つまりそんな彼らにも危害が及ぶ危険性があるという事だ。

（くそっ、やっぱ病院は不味かったか……）

かといって当初の予定通り、小萌先生に頼っても結局のところ同じだ。どの道、無関係な誰かを巻き込むことになるのは変わらない。（だったら、どうすればよかったっていうんだよ！）

インデックスを見捨てて逃げればよかったのか？

そんなことはできない。できたのであれば上条当麻は魔術師なんてメルヘン野郎に挑みかかったりはしなかった。

なら今すぐインデックスを連れて逃げればいいのか？

しかし途中で容体が悪化した場合、またここに戻って来らざるを得なくなる。

だけどこのままここに置いておいても、無関係な誰かを巻き込んでしまう。

「大丈夫よ。こと防御に関してなら私の能力は完璧だから」

「……どうということだ？」

「こういうことよ」

そういうと氷室は持っていた空き缶を上条に向けて放り投げた。

上条は思わずとっさにそれを受け止めようと前に出る。

——が、予測していた場所に空き缶は“落ちてこず”、勢い余って前のめりに倒れ、

「あだっ——！？」

空き缶に盛大に頭をぶつけてしまう。

「大丈夫？」

「大丈夫って——狙ってやがっただろ、絶対！」

「そんなつもりはなかったんだけどね……さすがカミヤん。不幸に

は定評があるわね」

「いらねーよ、そんな定評！」

しかし上条当麻が不幸に見舞われるのは、物を投げれば地面に落ちるぐらいに当然の事なのである。

（――物を投げれば地面に落ちるのが、当然？）

それは何の不思議もない事なのだが、ふと疑問に思い、上条は視線を上へと向けてみる。

そこにはさっき受け止め損なった空き缶の姿。当然そこは空中で、何もなく、“普通なら”空き缶は床へと落ちる筈だ。

宙に浮かんだ空き缶を試しに左手で触れてみる――が、ピクリとも動かない。

（――これ、空中で『止まってる』んだ）

掴んで引っ張ったり、逆に押したり、握りつぶそうとしてみるもピクともしない。空中で完全に固定されている。

だが上条が『右手』で触れた瞬間、カランという甲高い音を立てあつけないほどに空き缶は床へと落下した。

つまりそこには『異能の力』――氷室の『抑止力』カウンターストップが働いていたという証だ。

「どう？」

「どうって……」

氷室は空き缶をただ投げただけ。投げた時点で空き缶は『停止』していなかったのだから、上条に向けて飛んできた。

しかし上条が取ろうとした段階で空き缶は空中に『停止』し、その結果目測を“誤らされた”上条が不幸な目にあった。

「……つまり、氷室の能力は手で直接触れたりしなくても物を止めることができるってことか？」

「ええ。対象の位置座標さえ分かれば可能よ。ま、あの子の時は傷が深かったから手を入れて正確な位置情報を掴む必要があったけど、基本的には目視の利く範囲なら可能ね。それに一度止めてしまえば能力を行使している限りどんなに力を籠めてもそれを動かすことは



できなくなる。これを壁や床、扉なんかにかけたらどうなると思う？」

その壁や床、扉は動かすことがなくなる。

動かない、ということは外からどんなに力を加えても動かすことができないという事だ。

「そ。それ以上に壊すことすら不可能になるわね。私の能力はあらゆるベクトルを対象とできるから、分子、原子単位での『停止』も可能よ。それらが動かないのなら、それらで構築された物体を壊せるはずがない」

「すごい……」

硬度を上げるなんてレベルじゃない。破壊不能な物体を作り出すなんてこと、他のどんな能力にも不可能だ。

「つてことは、それを使えば病室をシェルターみたいにできるってことか」

「そ。たとえば核爆弾を落とされようとも、巨大隕石が降ってこようともビクともしないわね」

「いや、さすがにあいつらもそこまでではないと思うけど……」

「それに11次元ベクトルも止められるから空間移動テレポートによる侵入も防げるわ。『難攻不落』ですら生温い、まさしく『絶対不屈』の要塞よ」

「……確かに、それなら守りきれるかもな」

「でも私の体力は無限には続かないから……」

「ただ閉じこもっているだけじゃ根本的な解決にはならない、ってことか」

「そういうこと。だから無駄な力を使わないためにも、向こうがどんな力を使ってくるのか知っておきたいの。それにあの子がどんな事件に巻き込まれているのかを知れば、戦闘を回避する手段を講じることが出来るかもしれないし、できなくても何らかの対策は練れるはずよ」

今、インデックスをこの病院から動かすことはできない。

かといって上条一人で病院や入院患者たちも含めて全部を守りきるなんてことは不可能だ。

イマジンブレイカー

上条当麻の力は防衛戦には向かない。

イマジンブレイカー

『幻想殺し』の効果範囲は右手、それも手首から先の部分だけだ。その部分に触れた異能は須らく打ち消すことができるが、それ以外の場所は何の効果も持たない、ごく普通の高校生の肉体があるだけだ。

だから自分一人を守るのならばなんとかなるかも知れないが、その背に誰かを背負って守る盾とするにはあまりにも小さすぎると言わざるを得ない。

カウンターストップ

一方で氷室の能力は彼女の言うとおり防衛戦に特化している。

破壊不可能、侵入不可能な『絶対不屈』の砦を築き、一切敵を近づけさせない。

しかしその砦も永遠に機能し続けるわけではない。

ならば――

「手を組みましょう、って言ってるの。私はこの病院とあの子を含めた患者たちを守るための盾となる。上条君はあの子を守るために盾に阻まれ動きを止めた彼らを排除する矛となる。互いの利害が一致した理想的な布陣だと思うけど？」

「ダメだ――、と言っても氷室は退かないんだろ？」

「当然」

上条がインデックスを守りたいと思うように、氷室にも守りたいものが存在する。それを守るためなら、絶対に退くことはできない。退けば守りたいものを守れなくなるから。

そして両者の願いが重なり合うのであれば、協力した方が成功率は高くなる。

あらゆる異能を打ち消す『幻想殺し』と、あらゆる攻撃を防ぐ『抑止力』。この2つが揃えば、魔術師相手でも十分やりあえる。

「……わかった」

どの道、魔術師も一人ではないようだし、自分一人で全てを背負

えるほど上条当麻は偉くも強くない。

協力者となってくれる者がいるのであれば、これほど心強いことはない。

「話すよ……と言っても、俺の知っていることなんてたかが知れてるし、正直俺自身も信じられないようなことばかりなんだが……」  
「構わないわ。それならそれで、そこから推測していけばいいだけだから」

「そうだな。氷室は俺と違って頭はいいんだし」

上条一人では見るこのの出来ないところも見えてくるかもしれない。  
い。

「あら、頭だけじゃなくて顔もいいでしょ？」

「……普通自分で言うか、それ？」

「上条君がブス専だとは知らなかったわ」

「なんでそうなるっ！」

「違うの？」

「違うっ！」

「残念」

「何がっ！？ 違くなかったらどうなってたんだ俺!？」

「中学時代のゴリマッチョなクラスメート（女？）を紹介しようかと……」

「全力でお断りさせていただきますっ!？」

### 第03章 とある幕間の休息时间《ブレイクタイム》（前書き）

今回はちょっと短めで内容薄し。

次回から本格的に事件に踏み込んでいくつもりです。

……三話目にしてタイトル付けに難航中orz

### 第03章 とある幕間の休息时间《ブレイクタイム》

「要約すると、あの子——インデックスはイギリス清教のシスターで、10万3000冊もの魔導書の内容を記憶していて、それを狙った魔術師とやりに追われていると」

「ああ、ステイルとかいう赤髪の外国人だ。他にもカンザキって言うヤツもいるらしい。そっちがインデックスを斬ったみたいだけだな」

「で、本来ならあの子の来ていた修道服——『歩く教会』の絶対防御であらゆる攻撃を防げたはずなんだけど、上条君が幼女の裸を見たいがために壊しちゃって、それを知らずに向こうは思いつきり斬り付けちゃったものだから、瀕死の重傷を負うことになった、と」

「そうだ……って、違えええ！」

思わずうなずいてしまった上条が、真っ赤になって否定の雄叫びを上げる。

「誰が裸を見たいがためだ！ 俺はそんなこと思ってない！ あれはアイツが俺の右手の事をバカにして信じなかったからで——っ！」

「でも、見たんでしょ、裸」

「うっ…」

「見ちゃったんでしょ、裸」

「……………」

「無垢で敬虔な修道少女シスターの裸、見ちゃったんだよね？」

「……………」

「……上条君の変態」

「だああ——、そうさそうだよそうですよ、上条さんはバッチリインデックスさんの裸見ちゃいましたよ、わるかったですね！ 氷室さんはそんなに俺を貶めて楽しいですかこんちくしょうっ！」

「うん、ものすごく♪」

「いい笑顔で認めたしっ！」

不幸だ、と頭を抱える上条にサムズアップしながら微笑む氷室。  
話の内容は割とシリアスなはずなのに、そんな気配を微塵も見せないやり取りが真っ暗な待合室で繰り返されていた。

一度集中治療室に移ったインデックスを見舞った後、改めて行われた情報交換——と言っても上条側からの一方的な事情説明だが——は、往々にしてこんな感じで進んでいた。

ちなみに夜の病院でこれだけの大騒ぎをしていれば看護師が鬼の形相ですっ飛んでくるはずなのだが、未だ訪れる気配はない。

理由は氷室がこっそり『抑止力』カウンターストップで即席の制音壁を周囲に築いているからだ。

一定量以上の音波に対し『停止』を行うよう演算式を調節することで、どんなに騒いでも小声で話している程度の音量しか周囲には漏れ出ない空間を構築しているのだ。

見た目に反し、かなりの高等技術をサラッと使っている氷室だが、正直こんな事に能力を使うよりも声量を抑えて話すよう気を付けられればいいだけで、能力の無駄遣いもいいところである。

「まあ、上条君のラッキースケベは今に始まったことじゃないし……てか、上条君ってそれだけは不幸が適用されないのよねえ」

原作でもたびたび女性陣の風呂を覗いたり、着替え途中に乱入したりと事欠かなかった気がする。

「いえ、常にその後とてつもない不幸が待ってるんですが……」

「それは自業自得。ラッキースケベとでプラマイゼロでしょ？」

「いや、絶対マイナスだと思う……」

頭を抱えたまま蹲る上条を冷めた視線で見下ろしながら、氷室は「ふむ……」と腕を組む。

「それにしても『魔術』、ね……」

「……まあ、信じられないのも無理はないと思うけどな」

上条だって未だに信じ切れていない。

いや、その右手に『幻想殺し』なんてものがなければ、絶対に信じなかっただろう。

科学万能のこの時代、しかもその最先端に位置するここ学園都市で、そんなオカルトの最たる存在を信じろというのが無理な話――、のはずなのだが、

「なんで？」

「……へ？」

「だって魔術でしょ？」

「だって魔術だぞ？」

「うん。信じてない道理はないと思うけど？」

「いやいやいや、普通信じないだろ！ どう考えたってオカルトだぞ！？」

「そうね」

サラリと上条の固定概念を真っ向から否定する氷室の態度は至極自然体だ。何の気負いも見られず、至って『当然』といった感じだ。「前に言わなかったっけ？ オカルトを証明するのが科学だって」  
「そういえばそんなことを言っていた気がする」と、芋蔓式に思い出した制裁の記憶に顔を青ざめながらも上条は頷く。

「確かに魔術はオカルトよ。少なくとも多くの人間がそう思っている。でも、だからと言って『存在しない』と決まったわけじゃないわ。もし魔術がオカルトと呼ばれているのであれば、それは未だ科学のメスが入っていないか、もしくは証明に至るだけの検証が十分なされていないだけ。第一、超能力だって一昔前までは立派なオカルトだったじゃない」

「まあ、言われてみればそうなんだけどさ……」

「そもそも科学の基盤となったのは中世に流行った錬金術よ？ あれも魔術の一環としてみれば、科学は魔術から派生したとも言えるものなもの」

「うーん……」

確かにその通りではあるのだが、だからと言って「はいそうです

か」とは中々割り切れるものではない。

科学と魔術は別物という概念が定着している上条にとって、理解はできても納得まではいかない事柄だ。

それをさも当然のように受け入れ、認めている氷室に上条は感心する。自分だったらそう簡単には納得できない。というか納得できなかったせいで某シスターをひん剥く結果となってしまったわけで……。

もっとも、氷室にしてみればその事実を初めから知っている上に、この世界自体がすでにフィクションの産物だという認識があるため、大抵の非常識オカルトは許容範囲なってしまうというだけの話なのだが。

「ともかく、これ以上はあの子が目覚めるの待つしかないわね。情報量が少なすぎて、現段階じゃなんとも言えないわ」

「えっと、すまん……」

「上条君のせいじゃないでしょう？ 多分あの子も上条君の事、巻き込みたくないと思ってたからわざと突っ込んだ話はしなかったんだろうし……」

「そう、だよな……」

——私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？

今朝インデックスと別れた際、彼女にそう問われ、上条は答えに窮した。

思えばその時からわかっていたはずだ。

インデックス  
彼女が今、その地獄の淵に立っている、なんてことぐらい。

そしてその手を取らず、夏休みの補習日常を選択したのは上条だ。

置き忘れていったフードに気付いていながらも、探して届けようとせず「そのうち取りに戻って来るだろ」なんて安易な考えで放置していたのも上条だ。



その考え通り、取りに戻ってきたせいでインデックスが斬られた。これも上条のせいだ。なんせ彼女を守っていた修道服歩く教会を壊したのは他ならぬ上条だからだ。

つまり、全て上条当麻が巻き起こした『不幸』だ。

その『不幸』に一人の少女インデックスを巻き込んでしまった——ただそれだけのこと。

「————」

ギリリと齒を食いしばり拳を固く握る上条に、氷室はそつとため息を吐く。

彼は自らを責めているようだが、決して彼が悪いわけではない。ただ本当に偶然に偶然が重なり『不幸』な結果が招かれたただけだ。けど——、

（その『不幸』もアナタの仕組んだシナリオなのかしらね？）

そつと窓の外へと目を向ける。

煌めく夜の建物達の向こうに見える『窓のないビル』。

そこに居るとされるとある人物。

「……氷室？」

「え…あ、なに？」

「いや、なんか怖い顔して外を睨んでたけど、何かあったのか？」

「……なんでもないわ。それより上条君、これからどうするの？」

「どうって、そりゃ……」

インデックスを守る。それはもう決めたことだ。少なくとも彼女の身の安全が図れるまでは、上条当麻は逃げ出すつもりはない。

「そうじゃなくて、今夜はどこに泊まるのかって話。さすがに寮には帰れないでしょ？」

「あ……」

確かにそうだ。今や正体不明の火事——あのスタイルとかいう魔

術師の仕業だ――により、消防車や警備員がごった返している所だ。  
しかもちょうど上条の部屋の前が出火場所のため、帰ればいろいろと事情聴取に駆り出されそうである。

第一、一度襲撃を受けた場所にこのこと戻るほど上条はバカではないし神経も凶太くはない。

だがそうなると一転して、今度は上条当麻の行き場がなくなってしまう。何せ唯一の行き場たる自宅には帰れないのだから。

「まさしくホームレスね、今の上条君」

「……不幸だ」

「ま、ここで寝泊まりできるよう、掛け合ってあげるわ」

「ありがとうございます氷室様！」

さっきまで頭を抱えて蹲っていたのに、一瞬で自分の手を取り跪く上条の変わり身の早さに、氷室は若干頬を引き攣らせる。

「……どうせ私も泊まる気だしついでよ」

「へ？ 氷室も？」

「当然でしょ？ おそらく今日はもう襲ってはこないと思うけど、だからと言って安心はできないもの。彼女が入院している間はこちらにいるつもりよ？」

「いや、そこまでしてもらわなくても……」

「しなくちゃ共同戦線を組んだ意味ないじゃない。私にとって彼女  
インデックス  
はあくまでついでなのよ？」

「……そうだったな」

建前上、氷室は病院とそこに努める関係者及び入院患者の保護のためとなっている以上、インデックスの事はついだ。

もっとも入院患者のカテゴリにインデックスも含まれているため、どの道同じことなのだが。

「じゃ、そういうわけで……コレ」

「はい？」

おもむろに手渡されたものを見て上条は首を傾げる。

その手に置かれたのは髭面のおっさんが描かれた長方形の紙切れ

だ。

「あ、上条君には縁のない代物だった？」

「んなわけねーだろ！千円札ぐらい上条さんだって持ってるっつの！」

「そう？　じゃ、そのコンビニ行って夕飯買ってきて」

「パシリかよ！」

「だってしょうがないじゃない。こんなことになるなんて思ってもみなかったんだから、部屋に帰ってから食べるつもりだったんだし……」

「うっ……」

それを言われると上条に言い返すことはできない。

半ば強引に応急処置から病院への搬送・手術の手筈を整えたのは氷室だとはいえ、それで助かったのは紛れもない事実であり、上条にしてみれば（インデックスの）命の恩人でもある。

しかしそのせいで夕食を食べそびれているとなれば、やはりそれは上条のせいということになる。

「というわけで、カルボナーラと旬の彩サラダとデザートにプリンとクリームたっぷりロールケーキ……あ、それとスナック菓子を二、三袋とポッキーと、後ジュース類もお願い。病院で買おうと割高だから、いっその事1.5ペットで3本くらい」

「って、ちょっと待て。明らかに千円じゃ足りないと思うのですが？」

「え？　足りない分は上条君が出してくれるんでしょ？」

「なんでだ！」

「誰のせいで夕食食べそびれたのでしょうか？」

「上条さんのせいでもあります」

「ですよねー。ってなわけで串焼き3本も追加ね。食べたいものがあつたらついでに買ってきていいから。無論、自腹で」

むしろ千円出すだけでも殊勝よねえー、と暢気にのたまう氷室を恨めしそうに睨みつけ、上条ははたと動きを止めた。

「あ、あー……氷室さん？」

「ん？ なに？ 500円だけで良いって？」

「いやいやそんなことは一言も言っていないし！ というかですね…

…」

「？」

ダラダラと汗を流しながらしどろもどろする上条の姿に、氷室は心底不思議そうに首を傾げる。

「実は今朝、上条さんはうっかりキャッシュカードを踏み碎いてしまいました、」

「いつもながらに見事なまでの不幸っぷりよね。いっそ感心するわ……」

「で、今現在の手持ち残金が30円しかないのをごさいますっ！」  
「……………」

（何だろう、悲しくないのに涙がでちゃう。だって不幸だもの……）  
心底憐れんだ目で見られ、上条の瞳からポロリと雫が零れ落ちた。  
そんな上条に氷室はさらに高額紙幣を二枚追加で手渡し、その肩を優しく叩く。

「それで好きなもの買っていいわよ」

「その良心が心に痛い……」

「ちなみにトイチね」

「——って、利子取んのかよ！」

「10秒で1割」

「しかも暴利！ いまどき闇金の高利貸しだってもうちよつとマシだぞ！」

「いらないうらいけど……キャッシュカードの再発行って確か最悪一週間ぐらいかからなかったっけ？ あと手続き費用も——」

「ありがたく貸していただきます！」

背に腹は代えられない上条さんなのでした。

翌日の昼にはインデックスの容態も安定し、一般病棟へと移ることができた。

「にしても、ホント間一髪だったよなあ。助かったぜ、氷室。ほら、お前からも礼を言え」

「あ、うん。ありがとうね、サツキ」

「いいわよ。困ったときはお互い様でしょ？」

肩をすくめ、軽く笑って大したことではないと告げる。

ちなみに自己紹介はすでに済ませている。その際上条が未だインデックスに名を告げていなかったことが判明し、ひと悶着あったがそれも解決した後だ。

「ううん、そんなことないよ」

氷室の気遣いにインデックスは僅かに上気した顔を静かに振る。

熱があるのは体が体力の回復を図っているためで、特に問題があるわけではない。点滴と休息を続ければ数日後には普通の生活に戻るようになるだろうと、医師のお墨付きも出ている。

「サツキのおかげで誰にも迷惑をかけずに済んだから。普通の人に魔術を使わせるのはあまりよくないからね」

「そうなのか？」

「うん。魔導書ってのは、危ないんだよ。そこに書かれている『異常識なる常識』に『違法則違える法則』——そういう『違う世界』って、善悪の前に『この世界』にとっては有害なの」

『違う世界』の知識を知った人間の脳は、それだけで破壊されてしまふとインデックスは言う。

コンピュータのOSに対応していないプログラムを無理矢理に走らせるようなモノなんだろうか？ と上条は頭の中で翻訳した。

一方で氷室は別の考えを抱いていた。

（『違う世界』の知識……私の持つ『原作』もある意味それだけど……）

だとすれば、自身はすでに壊れているのだろうか？

少なくともその自覚はない。壊れていないとは決して言い難いが、それが『原作』知識のせいだとは思えないと思う。

（でも、そう思っていないだけで、実際はどこか歪んでいるのかもね……）

自分の特殊性。『抑止力』カウンターストップという異常な能力。それらの根源が、もしかするとそこに由来するのだとすれば……。

（『この世界』にとっては有害、か……。そうかもしれないわね）

『氷室皐月』が居なくてもこの世界はキチンとまわり続ける。それこそ『原作』通りに突き進み、最後はなんだかんだでハッピーエンドが待っているのだろう。

未完のままこちらに來たためハッキリとは言えないが、でなければ読者が納得しないだろうし。

だとすれば、確かに『氷室皐月』は有毒な存在だ。

ハッピーエンド  
予定調和を打ち壊し、無用の混乱を招く、『どあ魔』この世界の毒物。イレギュラー

（だからと言って、遅きに失している。もう後戻りはできない）  
それに氷室だって望んでこの世界にやってきたわけじゃない。

どこの誰の仕業かも不明で、もしかすると誰のせいでもないのかもしれない。

単なる偶然。神の奇跡。

なのにそれを一方的に『有毒』だと言われるのは実に不愉快だ。  
（なら毒を以て毒を制すればいいだけよ。毒は使い方次第で薬にもなるんだから……）

それを為すのが自分の責務で、存在価値。

そうでも思っていないければ、異世界トリップなんてやってられないと、一人密かに自嘲した。

「……私は宗教防壁で脳と心を守っているし、人間を越えようとする魔術師は自らの常識げんかいを超え、発狂たどりつくする事を望んでる。でも、宗教

観の薄い普通の日本人なら一度なら平気かもだけど二度目なら確実に――、終わる」

つまり『死ぬ』と。

「ふ、ふうん……」上条は受けた衝撃を何とか表に出さないように、「何だよ、もったいねえ。折角なら誰かに錬金術とかやってもらおうかと思ってたのに。知ってんぞ錬金術。鉛を金に変えることができるんだろ？」

ちなみにその情報源は某女の子の錬金術師が主人公の道具調合RPGというのはもちろん内緒である。

「……、黄金の変換はできるけど――今の素材で道具を用意するとこの国のお金だと……えっと、7兆円ぐらいかかるかも」

「……………、超意味ねえ」

「残念ね上条君。そう簡単にわらしべ長者にはなれないってことよ」魂の抜け落ちた上条の呟きに、氷室も含み笑いを浮かべながら揶揄し、インデックスも弱々しく笑って、

「……だよ。たかが鉛を金に変換したって貴族を喜ばせるしかできないもんね」

「けど、あれ？ 冷静に考えてみたら、それって何なの？ どういう原理？ 鉛を金に換えるって、まさか鉛と金の原子を組み合わせるって、え？」

「よくわかんないけど、たかが14世紀の技術だよ？」

「ばっ……って事はアレか？ 原子配列変換って事でオッケーなの！？ 加速器使わなくても陽子崩壊起こせて馬鹿でかい原子炉なくても核融合を引き起こせるってか！？ ちょっと待て、そんな学園都市に七人しかいない超能力者だってできるかどうか分かんねぞ！」

「あ、私できるけど？」

サラリと手を挙げた氷室の発言に、一瞬で場の空気が凍りついた。

「……………、マジ？」

「やったことないけどね。要は原子核同士の『核力』と『クーロン力』の関係が肝だから、そのベクトルを『止め』て調整すれば理論上はたぶんできる、と思う」

「って、どこが攻撃力皆無だよ！ 思いっきり原爆レベルじゃねーか！」

「だから実際に試したことないし、やろうとも思わないわよ。ってか、どこで使えってのよ、そんな大破壊力<sup>オーバーキル</sup>」

「いや、けど……」

理論上可能ってだけでも十分脅威だ。

今度から絶対に怒らせないようにしよう、と心に決める上条であった。

「と、とにかく、儀式で使う聖剣や魔杖を今の素材で代用するって言っても、限界があるんだよ？ ……特に神殺しの槍、ヨセフの聖杯、<sup>The Good</sup>ゴルゴダの十字架なんていう神様関連の聖具なんかは1000年経っても代用不可能らしいんだか……痛ッ……」

興奮して一気に捲し立てようとしたインデックスは、二日酔いみたいにこめかみを抑えた。

「無理して興奮しちゃダメでしょ。病み上がりなんだから……ほら、これ飲んで」

「う、うん……」

妹を叱りつける姉の様な口調で注意する氷室の手から、インデックスは水の入ったコップを受け取り小さく肩を窄めながらチビチビと飲み干す。

「と、言いつつ悪いんだけど……、いくつか聞きたいことがあるの。聞いてもいい？」

「う、うん。というか、サツキは私の事……」

「うん。上条君からあらましは聞いたわ」

その答えにインデックスが目に見えな光を宿して、上条を睨み付



けた。

「とうま……」

「い、いや。だって俺一人じゃどうにもならないし、助けてもらった手前何にも話さないってのもな……」

「彼を責めないで上げて。私が無理矢理聞き出したようなものだし」

「でも、危ないんだよ？」

「知ってる」

「ホントにホントに危ないんだよ？ 殺されるかもしれないんだよ？」

「平気よ」

「なんで！ だって死ぬかもしれないんだよ！」

「そうね。でも私を殺せる『人間』はこの世界に“二人”しかいないから……」

「え……？」

何を言っているんだ、と目を丸くするインデックスに構わず、氷室はにこやかに微笑み、

「そして、私を殺していいのはこの世で“ただ一人だけ”よ」

その相手はずっと前からすでに決まっている。それは絶対に揺るがない決定事項だ。

氷室皐月はその人物以外に自分を殺させる気も殺される気もない。

「だから何の心配もないわ」

それが当然で、それが当たり前なのだと、何の疑問も気負いもなく答える氷室の姿に、残った二人はただ茫然とするしかなかった。

「だから聞かせて。貴女が抱えている事情を。貴女を取り巻く問題を。できる限りの力になりたいから……、ね？」

優しく、諭すように告げる氷室の姿に、インデックスは思わず『聖母』という単語を頭の中に思い浮かべた。

## 第04章 とある少女の諸々事情《サーカムスタンス》（前書き）

ほぼ原作通り。

そして説明回のため、無駄に長い。

## 第04章 とある少女の諸々事情《サーカムスタンス》

「とりあえず確認から……」

場が落ち着くのを見計らって改めて氷室が話を切り出す。

「まず、貴女が10万3000冊もの魔導書を記憶しているってのは本当？」

「うん、ちゃんと10万3000冊<sup>持つて</sup>記憶してるよ。でないと『禁書目録』とは呼べないからね」

「つてことはエイボンの書、ソロモンの小さな鍵、<sup>レメゲトン</sup>無名祭祀書、<sup>ネームレス・カルツ</sup>妖蛆の秘密、<sup>ウェルミス・ミステリイ</sup>食人祭祀書、金枝篇、エノクの書、断罪の書、ルルイエ異本、法の書、セラエノ断章、ナコト写本、<sup>アル・アジフ</sup>野獣の咆哮の書、……なんて所も？」

「当然！<sup>もちろん</sup> あ、でも死霊秘法は有名すぎるから亜流、偽書が多いくてどれが原本かわからないかも」<sup>アル・アジフ</sup>

「……上条さんには最初から全部わかりません」

初っ端から置いてけぼりを喰らっている上条を無視し、二人の会話は進む。

「それが本当なら……貴女は完全記憶能力者ってことになるわね」

「そう。だから私は『禁書目録』として選ばれたんだよ」

「あー、アイツもそんなこと言ってたけど、それってやっぱ珍しいのか？」

「当然よ。っていうか上条君、ちゃんと『記憶術』の授業聞いてたの、って、聞くまでもないか」

「悪かったな……どうせ、俺は氷室みたいに頭よくねーよ」

「そういう問題じゃないんだけど……」

上条のふてくされた態度に氷室は頭痛を耐えるかのように顔を顰め、頭を押さえる。

「記憶には短期記憶と長期記憶って言うのがあってね、基本的にまずは短期記憶として見たら聞いたことを覚えるのよ。でもこ

れはその名の通り『短期』的な記憶に過ぎないから普通はすぐに忘れてしまう。上条君が授業の内容を全く覚えていないのは、記憶の過程がこの短期記憶の段階で終わってるからね」

「……じゃあ、長期記憶ってのは？」

「こちら文字通り『長期』に渡って継続する記憶の事よ。通常『記憶した』と呼ぶのはこっちな。記憶すべき事柄を何度も反復することで神経細胞の繋がりが強化され、短期記憶から長期記憶へと状態が移行するの。そして長期記憶となった記憶は基本的に失われることはないわ」

「そうなのか？ でも昔必死で覚えたことも、時間が経つと忘れてりするだろ？」

「それは『忘れる』んじゃないくて『思い出せない』だけ。記憶の『想起』——『再生』か『再認』に問題が起きているからで、記憶自体はキッチンと脳に刻まれたままよ」

「つまり再生機が壊れていても、記録装置にはキッチンとデータが保存されている、って感じか」

「そういうこと。再生機を直してやればデータはきちんと再生されるでしょ？ だから『忘れてる』わけじゃないのよ」

「なるほどな」

「ちなみに上条君がテストで赤点取る原因は、長期記録に移行するために必要な反復が圧倒的に不足しているからよ。決して再生に問題があるわけじゃないから、勘違いしないように」

「ぐはっ——！」

痛いところをつかれた上条が胸元を抑えて呻くのを尻目に氷室は続ける。

「で、完全記憶能力者はこのプロセスを飛ばして一度で記憶を長期記憶に移行させるの」

「つまり物覚えがすごくいい、と」

「その代り無駄な情報も余さず覚えてしまうから一長一短ね。すぐに忘れてしまいたい記憶っての中にはあるでしょ？ それすら許

されず、全てを覚えてしまうのが完全記憶能力者よ」

「……………」

それはつまり『忘れる』ことができないということだ。

『忘れる』という行為は全て悪いというわけではない。

嫌な思い出や辛い記憶は『忘れる』ことで、以後の精神の安寧を保つことができるようになるのだ。

けど完全記憶能力者はそれが許されない。  
インデックス

許されないから、ずっと辛い記憶を抱えたまま苦しみ続けることになる。

「なんだよ、それ……」

「ま、ある意味では能力者私たちと似たような障害者いじょうしゃだとも言えるわね」

超能力も『誤った現実の認識』というある種の脳障害を利用して用いられる力だ。

そして学園都市における『開発』とは、その『障害』を人為的に誘発させることを意味している。

つまり能力者とは脳の障害者であり、学園都市はそんな障害者を量産する街だとも言える。

「えっと、よくわかんないけど、私は平気だよ。別にそれで困ったこととか全然ないし」

「でしようね。さっき上条君が言ったように記憶は時が経つと自然と『想起』がし辛くなるように出来てるから。だから自然と『思い出せなく』なるものなのよ」

「じゃあ、別に『忘れる』ことが出来なくても問題はないんだな」

「ええ」

人は『忘れる』ことはできなくても、『思い出さない』ようにすることはできる。

それを知って上条はホッと息を吐く。

もし昨夜の記憶を永遠に覚え続けているのなら、それは紛れもない『不幸』だと思うから。

けど、忘れることはできなくても、思い出せなくなるのなら問題ない。

インデックス

彼女が辛い記憶のせいですと苦しみ続けなくても済むのなら、それに越したことはない。

「けど、そもそもなんで『10万3000冊の魔導書』なんてものを覚えてんだ？」

「それは私が『禁書目録』だからだよ」

「だから、それだよ。あのステイルとか言うヤツは『悪い見本』だとかなんとか言ってたけど、正直その理由ってのがよくわかんねーんだけど……」

魔導書が危険なものだというのはこれまでの話でなんとなく上条にも理解はできてきた。

しかしだからと言って、わざわざそんなものを覚える必要がどうしてあるのかが理解できない。

たった一冊でも発狂するような代物を、10万3000冊も覚える、その必要性が上条には見当たらない。

その問いに対し、インデックスは少しだけ躊躇って、

「知りたい？」

そう、謝るように小さく問いかけた。

その静かな声は、いつでも明るいインデックスだからこそ、より一層の『決意』を思わせた。

正直な話、上条当麻にとってインデックスの事情なんてものはどうでもよかった。

どんな事情があるにせよ、上条当麻はインデックスという名の少女を見捨てる事なんてできはしないのだから。だから、とにかく『

敵』を倒してインデックスの身の安全さえ守れば、それでいい。わざわざ彼女の古傷を抉るような真似をする必要なんてない、と思っていたのに。

「私の抱えている事情、<sup>もの</sup>ホントに知りたい？」

もう一度問われ、上条はその場にいるもう一人の協力者へと視線を向けた。

その協力者は静かに頷き、無言で「任せる」と答えた。

だから上条当麻は再びインデックスへと視線を戻し、覚悟を決めるように、答えた。

「なんていうか、それじゃこっちが神父さんみたいだな」

なんていうか、本当に。――罪人の懺悔を聞く神父さんみたいに。

何でだと思う？ とインデックスは言った。

「十字教なんて元は一つなのに、<sup>カトリック プロテスタント</sup>旧教と新教、ローマ正教、ロシア成教、イギリス清教、ネストリウス派、アタナシウス派、グノーシス派。どうしてこんなに分かれちゃったんだと思う？」

「それは……」

いくら氷室に馬鹿だ馬鹿だと言われている上条でも、さすがにそこまで馬鹿じゃない。歴史の教科書を流し読みした程度の知識でも、その答えは容易に導き出せる。

だが、それを『本物』のインデックスの前で口に出すのは少し気が引けた。

そんな上条の心境を悟り、

「うん。それでいいんだよ」

インデックスは逆に笑った。

「宗教に政治を混ぜたから、だよ」

「厳密には完全に切り離さなかったから、と言った方がいいわね」  
インデックスの答えに氷室が注釈を加える。

「切り離す？」

「日本語で政治は別名『まつりごと』と呼ぶでしょ？　つまりは『お祭り』——五穀豊穰や地鎮のために神へと捧げる儀式。それを仕切ることが政治本来の役目なのよ」

「つまり元は一つだった、ってことか」

「ええ。信者の前シスターでこんなこと言うのもなんだけど……」氷室はちらりとインデックスを伺い、彼女が静かに頷いたのを見て、「昔の人は天災や飢饉と言った人の力ではどうにもならない現象に対し怖れを抱いた結果、それを『神様』の仕業だと結論付けたわけ。理由がわからないより、どんなに荒唐無稽であつても何らかの理由があつた方が人は安心できるからね」

未知への探求心は、同時に『未知』を『既知』とすることで、理解できない恐怖を払拭しようというある種の防衛本能に根差すものでもあるとも言える。

「そしてその理由に対し、今度は何らかの対処を試みた。天災を避けるために、神の怒りを鎮めるために、祈祷や供物、生贄なんでものを捧げるという手段でね。これが宗教の始まり」

生贄という言葉に上条は僅かに顔を顰めたが、そういったことが行われていたことは知っているため黙って先を促す。

「けど次第に人が増えてくると、祭りの規模も大きくなって皆がバラバラにやっていたんじゃないや收拾がなくなってくる。だからそれを取りまとめるリーダーが自ずと出来上がってきたのよ。村なら村長、街なら町長、そして国ともなれば——」

「国王。つまり王様だね」

「そう。そしてリーダーとなった人物は祭りのみならず、その他の事柄にまで引っぱり出されるようになった。諍いの仲裁や問題への対応、解決とかね」

これが政治の始まりね、と氷室は言い、

「一方で宗教は人心掌握の手段としての一面を見せ始めた。多くの人を取り纏めるには意識の統一が肝心だから。物事に対する規範——これはよくて、これは悪い、なんていう尺度ルールを定め、その尺度ルールを



破った者には不幸や災難、即ち『神の裁き』が下るとすれば、誰もそこから外れたくなくなるでしょ？」

「要は法律ってわけか」

「そ。でも必ずしも守られるわけじゃない。法があればそれを破る者が必ず現れる。故意か不慮かを問わずにね」

やむにやまれず法を犯す者が出るのは世の常だ。逆に進んで法を犯す者中にはいる。

「けど上条君じゃあるまいし『不幸』なんて普通は早々起きやしない。だから法を犯した者には現実に存在する誰かが罰を与えなければならぬ。それを与えるのは当然、纏め役であるリーダーの役割よ。でも、それって結局『悪事をなしても必ず神の裁きが起きるわけじゃない』と認めているようなものだから……」

「だから分離したのか」

「そういうこと。政治ってのは得てして綺麗事だけじゃ済まされないからね。時に悪事を以て事を納めなければならぬこともある。でも人心を取り纏めるのにそれじゃ誰もついてはこない。人は悪よりも善に魅かれる生き物だから。だから綺麗事だけを並べて成立する『存在』ってのが必要なのよ。それが教会やお寺なんかの宗教組織ってわけね」

「けど元は同じものだから……」

「裏では繋がったまま。政治の悪を宗教的な善で覆い隠し、民衆に政治の正当性を示し、また隠しきれない場合でもそこを抛り所にすることで人心の乖離を最小限に防ぐ。そうして政治を最小の被害で円滑に進めることができるシステムを、当時の人達は築いたわけ。けどいつしかそのシステムを利用して私利私欲に走る者が現れた。無論、それを否定する者もね」

「その結果、私達は分裂し、対立し、争い合って——ついには同じ神様を信じる人さえ『敵』になって。私達は同じ神様を信じていながら、バラバラの道を歩く事になったんだよ」

それは人が人を支配する以上、必然的な事ではある。

誰もが皆、博愛精神に溢れていれば、この世に争いなんてことは起きやしない。

けど現実には争いは起き、戦争が勃発し、それにより命を落とす者がして、それに涙した者が為した者に対し恨みや憎しみを抱き、そしてまた争いが起きる。

歴史とは常にこの連鎖で成り立っている。そしてそれは今なお途切れることなく、世界各地で何時燃え上がるとも知れない火種として残されている状況だ。一部では現在進行形で燃え上がっている場所もある。

「……交流を失った私達は、それぞれが独自の進化を遂げて『個性』を手に入れたの。国の様子とか風土とか——それぞれの事情に対応して、変化していったんだよ。ローマ正教は『世界の管理と運営』を、ロシア成教は『非現実<sup>オカルト</sup>の検閲と削除』を。そして私の属するイギリス清協は……」

インデックスは、そこで僅かに言葉を詰まらせた。

「イギリスは、魔術の国だから」それが苦い思い出のように、「……イギリス清教は魔女狩りや異端狩り、宗教裁判——そういう『対魔術師』用の文化・技術が異常に発達したんだよ」

「そもそも魔術も神の奇跡も目に見える分には同じ非現実<sup>オカルト</sup>だからね。宗教家としてはそれを不当に扱う存在を野放しにはできなかったでしょうし……」

自らの権威を守るため、神の奇跡を独占するため、理由は様々だろうが、無秩序に蔓延らせていては教会の存在意義に関わる事態となる。

必然的にそれらを排除する流れが作り出され、その過程で『対魔術師』用の文化・技術が瞬く間に発展していったのも当然と言えるだろう。

「イギリス清教にはね、特別な部署があるんだよ」

まるで自分の罪でも告白するかのように、インデックスはそつと言った。

「魔術師を討つために、魔術を調べ上げて対抗策を練る。必要悪の教会」ウス ネセサリ

「ひつようあく？」

「そう。敵を知らなければ敵の攻撃を防げない。だけど、汚れた敵を理解すれば心が汚れ、汚れた敵に触れば体が汚れる。だから『汚れ』を一手に引き受ける必要悪の教会が生まれた。そしてその最たるものが……、」

「10万3000冊ってか」

「うん」インデックスは小さく頷き、「魔術ってのは式みたいなモノだから。上手に逆算すれば、相手の『攻撃』を中和させることもできるの。だから私は10万3000冊を叩き込まれた。……世界中の魔術を知れば、世界中の魔術を中和できるはずだから」

上条は自分の右手を見た。

役立たずと思っていた右手。不良の一人も倒せないし、テストの点も上がらなければ女の子にモテる訳でもない。ただ『異能の力』を打ち消すことしか能のない右手の力。イマジンプレイカー

だけど、少女はそこへ辿り着くために地獄を見続けてきた。

「けど、魔導書なんてヤバイモン、場所が分かってんなら読まずに燃やしちやえばいいじゃねーか。魔導書を読んで学ぶヤツがいる限り、魔術師は増え続けんだろ？」

「バカね。教科書テキストがなくても授業は可能でしょ？ 教師が口頭で内容を教えられるだけなんだから。だからこの場合、『本』そのものに意味はないのよ」

「そう、重要なのは『中身』だから」

そういう人間は魔術師じゃなくて魔導師って言うんだけどね、とインデックスは言う。

「それに読み取っただけでは魔術師とは呼べない。そこから自分なりにアレレンジを加え、新たな魔術を生み出してこそその魔術師なんだよ」

「変異性の高い病原体ウイルスみたいなモノってことね」  
「なるほどな」

インフルエンザなんかを思い起こせば分かり易い。

インフルエンザの原因となるウイルスは変異しやすく、それでいて感染力が比較的高いのが特徴だ。

その歴史は古く、最古の記録は古代エジプト時代まで遡るとされている。

そして時々大流行しては多くの死者を生み出してきた。特に規模が大きいのは1918年頃に流行した通称『スペイン風邪』と呼ばれるインフルエンザだ。感染者6億人とも言われ、死亡者は4000万人を超えていると言われている。

その原因は先にも述べたとおり、その変異のし易さにある。

変異したウイルスはそれまでのものとは完全に別の存在となるため、過去に発症し生み出された抗体が役に立たない。そのため、免疫が十分に働かず、その強い毒性により、最悪死に至るケースが発生するのだ。

もちろんワクチンや治療薬も開発されてきたが、前者は効力が短期間でかつ培養に時間がかかるため、あらかじめ流行するであろう種類の予測と結果が異なれば十分な効果が認められず、後者はあくまでかかった後の対処法となるため場合によっては手遅れとなる事もある。

さらにそれに対応した新型も生まれ始め、結局のところイタチごっことなっているのが現状だ。

それでいて新型が発生したからと言って過去のウイルスが絶滅するわけでもない。段々と種類が増え続けながらも、その根本的な解決策は今をもっても存在しないのだ。

かといって放置すれば死者の数が膨大に及ぶため無視することもできない。

だから常に新型の発生を監視し、予測し、研究し、早期に対処することで被害を最小限に収めるよう努力し続けるしかない。

インデックスの所属する必要悪の教会はそういった魔術ウィルスに対応するための組織というわけだ。

そしてその研究に必要なサンプル集として生み出されたのが『禁インデックス書目録』。

10万3000もの魔導書ウィルスを記憶させた研究資料。

「それに、魔導書はさっきも言った通り危険だから。写本コピーの処分でさえ専門の異端審問官は両目を縫って脳の汚染を防ぐ——それでも5年は洗礼を受けないと『毒』は抜け切れないけど」

「だとすれば原典オリジンともなれば殆ど『死病』に近いわけね。筆者も大抵狂人とかそういう人物像で伝えられているし……」

とりわけ有名なのは狂える詩人アブドゥル・アル・ハザードだろう。彼は狂気の中で『死霊秘法ネクロノミコン』を書き記し、そのまま息絶えたとも言われているぐらいだ。

書く方も読む方も強烈な邪気と狂気の中に晒される。それが魔導書オリジナルの原典。

「そうだよ。だから世界に散らばる10万3000冊は、どうしようもないからこそ『封印』するしか道がなかったんだよ」

まるで売れ残った核兵器みたいだ、と上条は思った。

むしろまさしくその通りなのだろう。処分しようにもできず、誰にも触れられない場所に放置することしかできない厄介物シロモノ。

「チッ。それにしたって魔術おれたちってな『能力者以外の普通の人間』なら誰でも扱えるモンなんだろ？ だったらあつという間に世界中に広まっちゃうじゃねーか」

「それは平気。魔術結社の連中も、無闇に外へは持ち出さないから」

「？ 何でだよ？ 連中にしたら、戦力なにかまは多いに越した事ねーだろ？」

「だからこそ」、なの。鉄砲持ってる人がみんな友達だったら、戦争は起きないよね？」

魔術を知っているからと言って、その全員が仲間だと言うわけではない。

むしろその威力と危険性を理解しているからこそ、無闇に広めて『敵の魔術師』を作るわけにもいかない。

逆に言えば、広まってしまうと自身が窮地に立たされかねない代物でもあるというわけだ。

「つまりは、だ。連中はお前の頭ん中にある“爆弾”を手に入れたって訳なんだな」

「……うん。10万3000冊は、全て使えば世界の全てを例外なく捻じ曲げる事ができる。私達は、それを『魔神』って呼んでいるの」

“魔界の神”という意味ではなく、“魔術を極め、神の領域に足を踏み入れた人間”という意味での、『魔神』。

(……ふざけやがって)

上条は無意識の内に奥歯を噛み締めていた。

インデックスの様子を見れば分かる。彼女だって何も好き好んでそんなもの10万3000冊を頭に叩き込んだ訳ではない。

彼女は少しでも魔術によって犠牲になる者を減らすために生きてきたっていうのに……。

その気持ちを逆手に取る魔術師も気に食わなければ、そんな彼女を『汚れ』と呼ぶ教会も気に食わなかった。

(どいつもこいつも人間ひとをモノみたいに扱いやがって——)

そしてインデックスはそんな人間ばかりをずっと見てきたはずなのに。

「……、ごめんね」

それでもなお、他人の事ばかり考えている少女がインデックス一番気に食わなかった。

「つぎけんなよテメェ！」

上条は唐突に立ち上がると、パカンとインデックスのおでこを叩く。

「上条君！」

そんな突然の行動に、氷室も慌てて立ち上がるとインデックスを背後から抱きしめ、叩かれたおでこを摩りながら上条を睨み付ける。理不尽な悪意いかりから子供を守る母親のように。

しかし上条はそんな視線に臆すこともなく、逆に睨み返すように見返す。

「氷室は少し黙っててくれ」

「……………」

その有無を言わさぬ迫力にさすがの氷室も口を閉ざし、代わりにインデックスを抱き締める腕に力を込めた。

「そんな大事な話、何で今まで黙ってやがった」

「だって。信じてくれると思わなかったし、怖がらせたくなかったし、その……あの、」

ほとんど泣き出しそうなインデックスの言葉はどんどん小さくなっていき、最後の方はほとんど聞こえなかった。

それでも、

“嫌われたくなかったから”

という言葉を上条は確かに聞いてしまった。

「ふ、ぎけんなよ。ぎつげんなよテメェ!!」

氷室の耳にブチリという幻聴が確かに届いた。

「ナメた事言いやがって、人を勝手に値踏みするんじゃない！ 教会の秘密？ 10万3000冊の魔導書？ 確かにスゲーな、とんでもねー話だったし聞いた今でも信じらんねえような荒唐無稽なお話だよ」

だけどな、と上条はそこで一拍置いて、

「たった、それだけなんだろう？」

その言葉にインデックスの両目が見開かれた。

彼女の身体は小刻みに震え、小さな唇が何かを紡ごうと必死に動くが、言葉は何も出てこない。

「見くびってんじゃないねえ、たかだか10万3000冊を覚えた程度で気持ち悪いとか言うと思ってるのか！ 魔術師が向こうからやってきたらテメエを見捨ててさっさと逃げ出すとでも考えたのか？ ざっけんなよ。んな程度の覚悟ならハナからテメエを拾ったりしてねーんだよ！」

上条は口に出しながら、ようやく自分が何にイラついているのかを理解した。

悔しかったのだ。

上条は単にインデックスの役に立ちただけだっただけだ。何の見返りも求めず、ただこれ以上彼女が傷つくのを見たくなかった、それだけなのだ。

なのに、彼女は上条の身を庇おうとしても、決して上条に守ってもらおうとはしない。ただの一度さえ、彼女は「助けてほしい」と言った例がない。

頼ってほしいのに、頼られてはくれない。頼っていいのに、頼ろうとしてくれない。

それは、とても悔しいことだ。



それは、とてもとても、悔しいことだった。

「……ちったあ俺を信用しやがれ。人を勝手に値踏みしてんじゃねーぞ」

たったそれだけの事なのだ。

例えばその右手に何の力がなくても、ただの一般人だったとしても、上条当麻には退く理由がない。

そんなもの、あるはずがない。

上条を突き動かすのは、インデックスを助けない、と言う至極単純なただそれだけの理由からだから。

だから他に特別な理由とか、特殊な事情とか、そんなものは初めから必要ない。ただ助けたいと思ったから助ける。

人としてごく当たり前の感情と行動を、上条は思うままに取っているだけなのだ。

それは見方によっては単なる我俣に過ぎない。けど我俣だから、誰かに言われたからと言って退く理由にもならない。

上条当麻は己の我俣でインデックスを助ける。だからインデックスも遠慮なく、その我俣を受け入れればいいのだ。それが許されるのだ。

そんな上条の言葉にインデックスはしばらく呆けたように上条の顔を見上げていたが、

ふえ、と。いきなり、目元にじわりと涙が浮かんだ。

それは春の訪れとともに始まった雪解けのように、次から次へと溢れ出す。

嗚咽を隠すように唇を噛みしめ、インデックスは必死に涙をせき止めようとしていた。

しかし一度決壊した堰は元には戻らず、洪水となってベツトを濡らしていく。

おそらく上条の言葉だけが原因ではない。上条もそこまで自惚れてなどいない。

それはきつと、今の今まで溜め込んできたものが、上条の言葉を引き金として溢れ出してきただけなのだ。

そして今の今までこの程度の言葉すらかけてもらえなかったのか、と痛ましく思うとともに、それでもやっぱり上条は、ようやくインデックスの『弱さ』を見られたような気がして、少しだけ嬉しかった。

だが、やっぱり上条は女の子の涙を見ていつまでも喜んでいられるほど変態ではない。

というか、超気まずい。

何か言わなければ、ととっさに思考を働かせ——やめた。

上条が何も言わずとも、インデックスを抱き締めていた氷室がその胸の中に彼女の顔を隠したからだ。

そのまま何も言わず、ただ黙って氷室はインデックスの背を撫で続ける。まるで赤子をあやす母親の様な笑みを浮かべながら。

そんな光景を前に、くだらない気の利かない言葉を投げかけるのは野暮というものだ。

病室に一人の少女のくぐもった嗚咽が響き渡る。

上条はそれが止むのをただ黙って見守り続けた。

## 第04章 とある少女の諸々事情《サーカムスタンス》（後書き）

作中の説明は諸所を省きざつくばらんな話として挙げています。

細かいところを突けば矛盾点も出るでしょうが、そのあたりはご容赦の程を。

次回からオリジナル展開が出始めて……くると思います。おそらく。

## 第05章 とある少年の多肢選択《マルチプル CHOICE》

「……なんか恥ずかしいね」

一通り泣き終えたインデックスは掛布団で赤くなった顔を半分隠しながら冗談めかしに呟いた。

目も少し腫れ赤くなっているが、それを指摘する者は誰もいない。

「あ、ごめんねサツキ。洋服、濡らしちゃって」

「平気よ。これぐらいならすぐに乾くわ」

夏だからね、と氷室は優しく微笑んでそっとインデックスの頭を撫でる。

「それより、もう少しだけ話を聞いてもいい？」

「あ、うん」

氷室の問いかけに姿勢を正したインデックスが小さく頷く。

「貴女を取り巻く状況は理解できたわ。10万3000冊の価値とそれを狙う者が居るってこともね」

「うん。だから何としてでも守らないと」

「殊勝な心がけね」

そう言っただけで氷室はもう一度インデックスの頭を撫でた。

それを猫みたいに擦ったそうにしながらも嫌がらずに受け入れるインデックス。

実に微笑ましい光景だと、上条は先ほどの緊迫した心が和らぐのを実感する。

（やっぱり女の子同士だからだよな……）

男である上条ではこうはいかない。上条にできることと言えば、照れ隠しに彼女をからかって怒らせ、感情を高ぶらせることで強引に忘れさせるぐらいだ。もちろんそれでも一応の効果はあるだろうが、その代償として上条には『不幸』が跳ね返ってくるだろう。お冠の少女から頭を丸かじりされるといふ貴重な体験（ふじゅうたいけん）と言う形で。

「けど一つだけわからないことがあるの」

「なにが？　どこか説明が不十分なところでもあったかな？」

自らの不備を疑い首を傾げるインデックスに、氷室は静かに首を振る。

「いいえ、そうじゃない。貴女がイギリス清教の必要悪の教会ネセサリウスに所属していて、その組織内で重要な役割を担っているのは理解できてる。でも――」

そこで氷室は一旦言葉を切り、インデックスを真正面から捉え、

「そんな貴女が、何故一人で日本にいるの？」

「あ――、」

氷室の問いに上条はようやく気付いた。

確かにおかしい。変だ。ありえない。

『インデックス禁書目録』なんてモン作った連中が、それをたった一人イギで本拠地リスから遠く離れた島国ニホンに送り込むだろうか？

『インデックス禁書目録』を狙うヤツが居ると知っていて、一人にするだろうか？

するわけがない。普通なら必ず護衛の一人や二人つけるはず。でなきゃ奪ってくださいと言っているようなものだ。

なのに、インデックスは一人で逃げ回っていた。魔術師の追っ手からたった一人で逃げ回り、屋上から飛び降り、上条の部屋のベランダへと落っこちて行き倒れるハメとなっていた。

だったら護衛はどうなった？　つけられているべき護衛は、一体どこで何をしているんだ？

少女が斬られ、『禁書目録』が奪われそうになってなお、その姿を見せないのはなんでだ？

「たぶんこの国に悪い魔術師いたんしゃが居て、それを狩るために来たんだと

思う」

「まあ、貴女の役割を考えればそうでしょうね。……けど一人で？ インデックスは10万3000冊の魔導書を抱えてはいるが、それを使うことはできないと言っていたのを上条は思い出す。

魔力を練ることができないかららしいが、そのせいで回復魔術は知っていても、それで自分の傷を癒すことすらできなかったのだ。

だから仕方なく、魔術を使うことができる人間——この学園都市で『開発』を受けていない数少ない『大人』である小萌先生を頼ろうとしたのだ。

そんなインデックスがいくら敵の魔術師の攻撃を中和する術を知っているからと言って、一人で倒すことなんてできるのだろうか？ 絶対防御力を持つ『歩く教会』があったからと言って、それは身を守るだけで攻撃にはなんの役にも立ちもしない。倒すためには攻撃する必要がある、そのための魔術をインデックスは使うことができない。

なら、使える人間が一緒に行動していなければおかしい。

それなのに、

「たぶんそうだと思う」

「……たぶん？」

曖昧な言葉に上条は思わず眉を顰める。

“たぶん”、“思う”。さっきからそんな推定を表す言葉ばかりが繰り返されている。

インデックスは完全記憶能力者だ。なら当然その事も覚えていなければおかしい。

完全記憶能力

いや、例えそんな能力を持っていなくても、普通は忘れない。忘れるわけがない。

だけどそれが分からないということは、つまり——

「うん。1年前こつちぐらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスは笑っていた。

完璧に、一切の曇りなく、笑っていた。

だから上条には、その裏にある焦りや辛さが見て取れた。

「最初に裏路地で目を覚ました時は、自分の事もわからなかった。

だけど、とにかく逃げなきゃって思った。昨日の晩御飯も思い出せ

ないのに、魔術師とか禁書目録インデックスとか必要悪の教会とか、そんな知識

ばっかりぐるぐる回ってて、本当に怖かった……」

「……じゃあ。どうして記憶を失くしちゃったのかも分かんねーって訳か」

うん、と小さく答えるインデックス。

上条だって心理学はサッパリわからないが、ゲームやドラマからの知識で記憶喪失の原因となるものぐらいは知っている。

記憶を失うほど頭にダメージを受けたか、心の方が耐えられない記憶を封印しているか——この何れかだ。

ちらりと視線を氷室へと向ける。

氷室は小さく首を振ってその視線に答えた。

(今は聞くな、ってことか……)

インデックスが辛い思いをしているのは氷室も理解しているのだろう。

だからこそ、今ここでそれを根掘り葉掘り聞き出して古傷を抉る様な真似をする必要はない。ただでさえ、ついさっきまでそんな惨いことをさせていたのだ。だからこれ以上は、少なくとも今するべきことではない。

氷室に頷き返し、胸の内で暴れ回る感情と一緒に上条は押し黙る。

「えっと、聞きたいのはそれだけ？」

「ええ、とりあえずは。そろそろお昼の時間だし、ずっと話しっぱなしで疲れたでしょ？ それまで少し休んでた方がいいわ」

「だな。あ、でも食事はあまり期待するなよ。病院食なんてどこも

マズイって相場が決まってるしな」

「むむ、失礼だようま。出されたご飯はマズくてもちゃんと食べないと。でないとバチが当たるんだから。“もったいない”って、確かこの国の言葉だよね？」

すてきな言葉だよね、と笑うインデックスにもう一度氷室はその頭を撫でる。

「そうね。それに栄養バランスとか考えて作られているから、しっかり食べないとよくなるものもよくらないしね」

「だな。病人なんだから、食うもの食ってちゃんと寝てろ」

「病人じゃなくて怪我人だよ」

「どっちもたいして変わんねーだろうが」

上条も氷室にならってインデックスの頭をぐしゃぐしゃと撫でまわす。

その光景は第三者がこの場にいれば、病気の子供を見舞う両親のように映ったに違いない。

「じゃ、私は少し着替えてくるから……上条君、ちょっといい？」

「あ、ああ……。ちゃんと寝てろよ」

「むう、お子ちゃまじゃないんだからわかってるよ、そんなこと」  
むくれるインデックスの姿に苦笑しつつ、上条と氷室は病室を後にする。

扉が閉まりインデックスが視界から消えると、氷室は徐に能力を行使し、周囲に防音の結界を築く。

それを見計らって上条は徐に口を開いた。

「知ってたのか……」

「記憶喪失の事？」

「ああ」

「可能性としてはね」

「なんでだ」



「気づいてると思うけど、彼女が一人っきりでいる状況なんて本来ならありえない」

「それはわかってる」

「けど現実として、彼女は一人きりで上条君以外に頼れる存在みかたがない。そして彼女自身それをおかしいとすら思っていないかった」

「だから、忘れている、と？」

「ええ。あくまでその可能性があるかも、ってレベルだったけどこれで確証が取れたわ」

だからあえて問いかけたのだ。他に誰かいないのかと。彼女の味方となってくれる存在はいないのかと。

「けど、そうだとすると少し事情が変わってくるわね」

「どういうことだよ」

「あの子、思い出を綺麗サッパリ忘れているのよ？ それでいて知識だけは残ってる。だからその知識だけを頼りに物事を判断してきただの」

それは普通の事ではないのだろうか。

上条は記憶を失ったことは『幸運』にも未だないが、知識だけしか存在しないのであれば、それを判断基準として行動するしかない。そしてインデックスは訳も分からない状況のまま1年もの間逃げ回り続け、ようやく会えた最初の『知り合い』がたまたま、上条だっただけなのだ。

だから異常に嫌われるのを恐れ、傷つくのを恐れ、何が何でも守ろうとした。自分の身が危険にさらされる事を理解していながら、発信機の役割を持つ、未だ壊れていなかった『歩く教会』のフードを取りに戻ってきたのだ。

「くそったれが……」

「気持ち分かる、とは言わないわ。途中から割り込んだ私には貴方とあの子の間にあるものを真に理解はできないから。でも、責める事だけはしないであげて」

「ああ。わかってるさ」

憤っているのはむしろ自分の方にだ。

そんなことも知らず、理解しようともせず、助けを必要としている事を理解していながら、そうしなかった自分に対して憤っているのだ。

だからインデックスを責めるつもりなんて毛頭ない。必死になって生きて、その必死さの中でも他人を気遣おうとしたインデックスを責める事なんてできる筈がない。そんな資格、上条にはない。

「それで？」

何とか気持ちを落ち着け——それでも奥底では様々な感情が渦巻いている状態だが——、上条は先を促す。

「ええ。知識だけでしか判断できないあの子は、自分の持つ『禁書<sup>ばく</sup>目録<sup>だん</sup>』を守らなくちゃ、という使命感だけで動いている。だから魔術師が近くにいれば当然逃げるっていう選択肢を選ぶわね」

「だろうな。そいつらが何のためにインデックスを必要としているのかはわかんねーけど、だからと言っておいそれと渡していいもんじやないからな」

「そうよ。でも、考えてみて。あの子に着けられていたはずの護衛つてのも、その魔術師つてやつなんじゃないの？」

「あ——」

魔術師が狙ってきているのなら、魔術師を護衛としてつけるのは当然だろう。

けどインデックスには記憶がない。誰が護衛<sup>みかた</sup>で誰がそうじゃないかの判断が付けられない。

だから魔術師であるのなら、敵も味方も関係なく、須らく『禁書<sup>てき</sup>目録<sup>めき</sup>を狙う存在』として判断して逃げ出す。それが自分を守ってくれる存在<sup>みかた</sup>だとしても、だ。

「だから、あくまで可能性の話としてだけ……」そう氷室は念を押して、「そのステイルって魔術師が彼女の護衛である可能性もあり得るかもしれないってことよ」

「なっ——」

一瞬言葉を失った。しかし直後にそれを否定する。

「いや、ありえないだろう。もしそうならなんでインデックスを傷つける必要があるんだよ！」

味方ならそんなことする筈がない、と言う上条に、もう一度“可能性の話だ”と念を押し、

「今のあの子にとって魔術師の語る言葉は自分を誑かす甘言に過ぎない。そう判断しないと、万が一本当に騙されていた場合、『禁書目録』を悪用されてしまうから」

だからあの子はひたすら逃げ続けるしかない、と氷室は続け、

「でも必要悪の教会側<sup>ネセサリウス</sup>からしてみれば、何が何でも彼女を『回収』しなくちゃならない。他の連中に奪われるわけにはいけないからね。記憶を失っているのなら尚更よ。だけど聞く耳を持たず逃げ回る相手を『回収』する術は、もう実力行使しか残されていないんじゃないかしら？」

『歩く教会』<sup>絶対防御</sup>もあったことだしね、と言って肩をすくめる。

確かに連中もインデックスの『歩く教会』が壊れていることを知らなかった。だから斬れるはずがないと思い斬った可能性は大にある。

「けど、それでもあんなこととしていい理由にはならない。それにアイツは教会に行こうとしてたんだろ？　なら別に無理に回収しようとしなくて自然と戻って来るはずじゃねーか」

「そうね。でもそれを彼らが知らなかった、気づかなかったという可能性もある。それに万が一知っていたとしても、妨害する理由はあるわ」

「理由？」

「そう、……上条君。さっきの会話で教会にも色々と種類があるって話は覚えてる？」

「ああ。さすがにそれぐらいは覚えてるさ」

そう答えて、そういうえば、と上条は昨日の朝にしたインデックスとの会話を思い出す。別の教会に行っても門前払いを受けるとい

話だ。

だが、もし彼女が『禁書目録』だと相手側の教会が知ったら、門前払いでなく率先して保護しようとするかもしれない。それだけの価値がインデックスにはあるのだから。

しかしインデックスはキッチンと自ら所属するイギリス清教の教会を探していた。

ならまかり間違って違い教会の戸を叩くことはないだろうから、やはり力づくで阻止する理由にはならない。

そう言うと、氷室は「そうじゃない」と否定し、肩を竦め、

「十字教は元は一つだったのに分裂してバラバラになった。けどそれともう終わった過去の事なのかしら？」

「それは……」

「うん。教会の歴史とかそういうのに限らず、人が作る組織ってのには必ず派閥ってものが存在するわ。権力の椅子は数が限られているからね。そして彼女は『禁書目録』、イギリス清教の切り札とも呼べる存在。そんな彼女を手中に収めれば、組織内での発言力、権力は揺るぎようのない、絶大なものになるんじゃないしら？」

「つまり、インデックスを手に入れてのし上がりとしているヤツが居るってことか？」

だとすれば上条にも理解できる。

インデックスの向かった教会の人間が自分の派閥の人間だとは限らないわけだから、確実に自分の手に入れるために強硬手段を取るのもわかる。

けど、だからと言って力づくでというのは許される行為ではないし、インデックスをそんな風に使おうとすること自体、上条には許せない行為だ。

「あくまで可能性の話よ。ステイルとかいう魔術師が組織とは無関係に個人的理由で動いている可能性もあるし、単に『禁書目録』に書かれた魔術を手に入れる事自体が目的の可能性もある。もちろん、敵対組織の人間である可能性もね」

けどね、と氷室は上条を真正面から捉え見つめる。

強い意志を感じさせる瞳に、上条は知れず唾を飲み込んだ。

「あの子は『禁書目録』よ。イギリス清教の切り札。その価値は彼女が『禁書目録』であり続ける限り失われることはないの」

つまり、

「彼女を手にした人物が魔術だけでなく、権力まで手に入れる事ができるって事実は永遠に付きまとうのよ」

「な——、それじゃあ、インデックスがイギリスに帰れたとしても……」

「政争の具として使われる可能性は決して消えない。そして私たちもあの子自身も、誰が本当の味方なのかを判断することができない。いいえ、本当は味方なんて誰一人いない可能性すらある」

記憶を失ったインデックスに、組織内で誰が親しかったかと言う記憶は存在しない。いや、たとえ覚えていたとしても裏では利用しようとしていたのかもしれない。

そもそも『禁書目録』なんてふざけたシステムを考えるような連中だ。善人であるはずがない。

「ちつくしょお——！」

ゴン、と近くの壁を叩く。

「なんだよそりゃ、ざっけんなよ！」

例え魔術師の手からインデックスを守り切れたとしても、守りきった先でまた別の誰かの思惑に踊らされることになる。

それじゃあ救われない。どうあってもインデックスは救われない。

「落ち着きなさい」

「これが落ち着けるかよ！　だってそんなのアリかよ。そんな事あっていいのかよ！」

「仕方ないわ」

「仕方ない？」

思わず上条は氷室の胸ぐらを掴みあげる。

「仕方ないってなんだよ！ 氷室はインデックスがそういう目にあっていいっていうのかよ！」

「よくないわよ」

「だったら！」

「だったら、私たちに何ができるというの？ 必要悪の教会の内情なんて知らない、その存在だって今さっき知ったばかりの私たちが、その組織に対して何ができるっていうの？」

「——っ！」

そう、何もできない。氷室も上条もただの高校生だ。能力者ではあるが、政治的な権力なんて何一つ持ち合わせていない、ただの一般人に過ぎない。

そんな自分たちが、異国の、それも常識すら異なる世界の、その最たる暗部組織に干渉することなんてできるわけがない。

それを氷室はわかっていて、わかっているからこそ「仕方ない」と割り切るしかないと理解している。“理解せざるを得ない”ことを理解している。

（そうだ、わかってる。わかってるさ、氷室だって辛いつてことぐらい……）

先の病室での光景を見れば、氷室がインデックスの事をどうでもいいと思っているなんて思える筈がない。

怒りにまかせ怒鳴りつけた上条を睨み付け、彼女を守るように抱き締めていた氷室が、インデックスをどう思っているかなど確かめるまでもないことだ。

それなのに——

「くっそ——、」

自分の浅はかさに苛立ち、とりあえず氷室から手を離す。

それでもやりきれない気持ちを吐き出すために、無意味に壁を殴りつけた。

「なら、どうすればいいってんだよ。どうすればインデックスは救

われるんだよ……」

敵を倒せばいいと思っていた。敵を倒してインデックスを教会に連れて行けばいいと、そう思っていた。

それはよくあるRPGの勇者ヒーローのように、魔王を倒して捕らわれのお姫様をお城に返してハッピーエンド、そういう類の話だと上条当麻は思っていた。信じていた。

けど現実はどうじゃない。エンディングの後にもお話は当然のようについていく。

お姫様は魔王に汚されていたとか言われて迫害を受けるかもしれない。魔物に荒らされ下がった国力を回復するためにクソツタレな隣国の王子と無理やり結婚をさせられてしまうかもしれない。

けどそれらに対し勇者にできることは何一つない。勇者の役割は魔王を倒してお姫様をお城に返すところまでだ。それさえ済んでしまえば用無しの穀潰しでしかない。

だから、上条当麻ゆうしやにはインデックスを真に救うことはできない。これはそういうお話。

「一つだけ、方法がないこともないわ」

「ホントかつ！」

絶望に瀕した上条は、その一言に縋るように氷室へと食らいついた。

否、真実縋っていた。縋るよりほかになかった。

「教えてくれ氷室！ その方法ってのを。インデックスを救うために俺は何をすればいい。何が俺にできる。何でもする、なんだってやってやる！ だから——」

「その言葉、嘘じゃない？ 本当に後悔しない？」

「するかよ！ アイツがこれ以上辛い思いをしなくて済むってんなら、なんだっていい。俺にできる事なら全部してやるさ！」

「そう——」

上条の言葉に僅かに視線を伏せた氷室は、そのままゆっくりと顔を上げ、

「なら、上条君があの子を守りなさい。魔術師から、教会から、あの子に価値を見出す世界中の全ての存在から、あの子を一生かけて守り抜きなさい」

「————」

上条の口からは何の言葉が出なかった。理解が追い付かなかったからだ。

それを理解していてなお、氷室は続ける。

「言っとくけど、生半可な事じゃないから。誰が敵か味方かもわからない——いいえ、全てを敵とみなし排除するの。個人も組織も関係ない。立ち寄ったレストランで隣の席に座る人物も、街ですれ違っただけの御老人でも、その全て敵と判断して近寄ってくるなら須らく排除するの」

「すべて……」

「そうよ。あの子に価値を求めるのは何も魔術側の人間だけじゃない。この学園都市の科学者だって、異なる法則、異なる常識の存在を知れば、研究しようとする輩は当然いるでしょうね。そんなヤツがインデックスが10万3000冊の原典魔術オリジナルスベルを所持していると知れば、寄って集って手に入れようとするわよ？」

そうだ。『開発』なんて面倒な事をしなくても能力者と同等、もしくはそれ以上の力を使える術があると知れば興味を持たないわけがない。

そんな奴からもインデックスは10万3000冊を守っているのに、そんな奴らに協力を申し出ることはできない。

学園都市は頼れない。他の教会や魔術結社も当然ダメ。だったら国か？ どの？ その国がインデックスを利用しようとしないとどうして言いきれぬ？



なら組織は頼れない。けど相手は組織だ。上条当麻<sup>こじま</sup>一人の力で抗えるほど容易い相手ではない。いや、無理だ。不可能だ。

だったら組織に属さない誰かに協力を求めるか？　けどその人物が本当にインデックスを守ろうとしてくれるのか？　そいつもインデックスの10万3000冊を狙っていないとどうやって判断できる？

ああ、と上条は理解した。

氷室が問うた覚悟の意味を。憐れみの籠った視線の意味も。

ああ、と上条は理解した。

インデックスの現状を。今までどんな気持ちで彼女が逃げ回っていたのかを。

——私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？

（ああ、確かに地獄だよ。地獄の底だよ、ここは）

インデックスが居たのは地獄の淵なんかじゃなかった。インデックスのいる場所が常に地獄の底——中心なのだ。

だから彼女を守りたいのなら、助けたいのなら、自分もそこについていく必要があったのだ。ついて行って、ずっと付き従う必要があったのだ。

（はは、なんだ。アイツ最初からわかってたんじゃねーか）

それを上条は正しく理解していなかっただけ。気安く考え、安易な気持ちで“助けたい”なんて思っていただけだ。

“助ける”という言葉の意味を正しく理解しないまま、英雄<sup>ヒーロー</sup>を気取ろうとしていただけなのだ。

「言っておくけど、一番いい答えは今すぐイギリス清教に連絡を取って彼女を迎えに来てもらう事よ」

「ああ……」

「それで来たのがステイルとかいう魔術師でも、他の組織の人間であつてもよ？」

「っ——、」

「それが嫌ならロンドンまで一緒について行って、教会に直接引き渡せばいいわ。それですべてが終わる。あの子との関係もそこで切れる」

「……………」

「それでも嫌だというのなら、自分の一生をあの子に捧げなさい。世界中を敵に回して逃げ続けなさい。私はそこまで付き合えないから」

「……ああ、わかってる」

わかっている。もともと巻き込まただけの氷室に、それ以上を求める義理はない。

インデックスの怪我を直してもらった。完全に回復するまで一緒に守ってくれると言ってくれた。

それだけでもう十分だ。それだけでもう十分すぎるのだ。

だから、そこから先は上条の問題だ。氷室にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

「決めるのは貴方よ。他の誰でもない、貴方が納得のいく答えを、貴方自身の意思で決めなさい」

「ああ……」

「猶予はあるわ。退院は術後の経過観察と検査を含めて4日後。それまでは現状維持でも十分。私も約束通りあの子を守るわ。でも退院すれば、あの子はこれまで通り教会に保護してもらうために行動するでしょうね」

だから4日がリミットなのだと。

上条がどう思おうと、それを過ぎたらインデックスは教会へと赴く。そして上条の思いなど無視して、教会のために働くことになるだろう。それがただ利用されているだけなのだとしても、そこが彼

女がいるべき本来の場所なのだから。

「それと今の話はあの子にはしないように。すでにわかっているかもしれないけど、無用な心配をさせる必要もないでしょ？ それにそれで上条君が悩んでいるのだと知れば怪我しているのも構わずに姿を消すと思うから、あの子」

「だろうな……」

上条を巻き込みたぐがないゆえに、自身の危険を差し置いてフードを取りに戻ってきたような人間だ。

自分のせいで上条が悩んでいると知れば、姿を消す。上条が悩む必要などどこにもないのだと言って。

「精々悩みなさい。悩んで、答えを出しなさい」

そう言うとき氷室は上条に背を向けて廊下の向こうへと歩き始める。そして数歩進んだところで、ふと立ち止まり顔だけを上条へと向けた。

「ああ、最後にこれだけは言っておくわ——」

そう告げて、その一言が言い終わると躊躇うことなく氷室はその場から立ち去った。

その姿を見届けた上条は、もう一度だけ壁を殴りつける。

「わかってる。わかってんだよ、そんなことは——」

氷室が最後に告げた言葉が上条の胸に深く突き刺さる。

——全部思い通りになるなんて、そんな都合のいいことこの世には存在しないのよ。

「それでも……」

上条当麻には認められない。

インデックスを救う方法がこの世に存在しない、だなんて。

## 第06章 とある病室での異文化交流《カルチャースクール》（前書き）

徐々に閲覧数が増えてきてうれしい限りです。

感想、ご指摘随時受付中です。

率直な感想をいただけるとやる気がアップするかもしれません。

また話中に出てくる魔術理論に関しては若干の独自解釈を行っております。

原作とは少し設定が異なるかもしれませんが、この物語の中ではそういうことだと理解していただけたらと思います。

## 第06章 とある病室での異文化交流《カルチャースクール》

あれから3日が経過した。

インデックスの容態はすこぶる良好で、傷は完全に塞がり跡も残らないという。

体調もほとんど回復し、明日の検査結果次第では即日退院が可能だと、あのカエル顔の医師が言っていた。

それは大変喜ばしいことで、素直に喜ぶべきことだ。  
なのに、

「……………はあ」

真夏の炎天下の中、上条当麻は深いため息を吐いた。

インデックスの怪我が治ることは確かにうれしい。それは紛れもなく本心だ。

だが明日が退院と言うことは、上条にとっては今日が制限時間タイムリミットの最終日と言うことになる。

答えはまだ出ていない。いや、出る筈がないことは初めからわかっていたことだ。

どんな答えを選んだところでインデックスは救われない。

彼女の望みどおりに教会へ送り届けても、待っているのは道具として利用される運命だ。

かといって氷室の提案通りインデックスに近づく全てを上条が排除し続けても、それはそれでインデックスに罪悪感を抱かせることとなり、結局苦しませることになる。そして最後は上条が潰され、彼女をもっと悲しませるのだろう。

「けど、答えはださないと」

無論、上条が何もせずとも答えは出る。インデックスが退院すれば彼女は教会の門を叩き保護を求め、そしてイギリスへと帰ってい

くだろう。そして道具としての人生を生きることとなる。

しかしそれは上条の納得いく結果ではない。結果的にそうなったというだけで、上条が納得のいく答えとはなりえない。

それが正しい姿で、一番いい結果なのは上条とて理解できている。けど許せない、させたくない、と思っている以上、上条にとってその結果は受け入れがたい結末だ。

けど受け入れなくてはならない。受け入れるために、氷室はわざわざ悪役を買って出てくれたのだから。

正直な話、あの場でその事実を話す必要はまるでなかった。

話せずに、当初の予定通り敵を倒してインデックスを教会に連れて行けば万事解決、と言うことにしておいてくれていれば少なくとも上条は疑う事すらなく終わりを迎えていたはずだ。

けどあえて氷室はそれを言った。

それは後になって上条がその事実<sup>こと</sup>に気づき、後悔しないようにするため。

同じ悔やむのならば、取り返しのつかない状況に陥ってからではなく、まだ選択の余地が残されている内に悩んで悩んで、悩み抜いた上に出した答えのもと悔やんだ方がいい。そういう気遣いのもとに言ったのだ、氷室は。

それで上条から恨まれることも覚悟の上で、自分だって納得しきれていないだろうに、それでも一番ショックを受けるであろう上条を気遣って、話したのだ。

時間が経ち、冷静さを取り戻してからそれに気づいた上条は、本当に敵わないと思った。

頭がいいとかそういう話ではなく、人としての器が違う。

上条ではたとえその事実にまで辿り着けたとしても、同じ行動を取れるかどうかわからない。自分の事で精一杯で他人を気遣う余裕なんてきつとないに違いないと思う。

それをあの短時間で見抜き、決断し、実行するなんて上条には無理だ。

だから上条当麻は答えを出さなければならない。

氷室のためにも、上条自身のためにも。

後悔しないための、後悔の道を選ばなければならない。

気付けば病院の玄関へと辿り着いていた。

ここからインデックスの病室まではさほど時間はかからない。

答えはもちろん出てはいない。

しかしだからと言ってそれに悩む姿をインデックスの前に晒すわけにもいかない。

インデックスも自分より他人を優先して気遣う類の人間だ。上条がそんな姿を見せていれば、自分のせいだとすぐに察して無茶をするに決まっている。

上条がこうして外に追いやられたのもそれが原因だ。

氷室に、その辛気臭い顔を出直してきなさい、と暗に言われ、口実として買い出しを託されたのだ。

上条自身もできる限り表に出さないように心掛けていたのだが、やはり制限時間<sup>リミット</sup>が迫るにつれ、気付かないうちに剥がれてきていたのだろう。

「しっかりしないとな」

気遣いばかりかけられている自身の不甲斐なさに喝を入れ、上条は病院の廊下を突き進む。

昼間と言うこともあってか多くの人が診察に訪れ、入院患者も多数行き来している。無論彼らの面倒を見る医師や看護師も忙しなく動き回っている。

美人な看護師さんのミニスカにちょっと目を奪われつつも、上条はこの3日間の事を思い返す。

昼の間は氷室と上条が出来る限りインデックスの病室で待機し、彼女の暇つぶし相手を務めつつ魔術師の襲撃に備えていた。

さすがに連中も人気の多い昼間の病院で襲ってはこないだろうと上条は思っていたのだが、インデックス曰く魔術には『人払い』というものがあるらしい。

文字通りその効果の及ぶ範囲内へと人が踏み込めないようにするものらしいが、強制的な排除ではなく無意識のうちにそちらを避けるようにする類なのとか。薄気味悪い場所には近寄りたくない、といった感じなのかと上条は解釈している。おそらくステイルと戦った際に寮に誰もいなかったも、その『人払い』が仕掛けられていたからだろう。

しかしそうだとすれば昼間でも意図的に人目のつかない空間を作れるということになる。故に警戒を怠るわけにはいかなかった。

夜は交代制で仮眠を取り、昼間どうしても用事がある際はどちらか一方が必ずその場に残る事になっていた。

ちなみに夏休みの補習に関しては氷室が小萌先生に直談判をし、インデックスが退院するまでは保留という事にしてくれた。もっともなくなったわけではないため、事が済めば再び補習地獄へと戻らなければならないのだが。

そしてそれが功を奏したのかはわからないがこの3日間、幸いなことに魔術師たちの襲撃はなかった。

氷室曰く「相手もインデックスが死ぬような事態は避けたいはず」との事で、今は彼女の回復を優先しあえて控えているのだろうとの事だ。

確かにインデックスが死んでしまえば、彼女が記憶している10万3000冊は失われる事になるわけだから、その予想は間違っていないと上条も思う。

しかしもうほとんど回復し退院を間近にした現状、いつ襲われて



もおかしくはない。

病室へと辿り着き、一度深呼吸をし、気持ちを切り替える。

中からは少女二人の話声が聞こえ、未だインデックスが無事であることに少しだけ安堵する。

そしてそんな少女の無事な姿をその目も確認するため上条は徐にドアを開け、

「じゃあただルーンを書いただけじゃ、魔術は発動しないのね」

「うん。オリジナルならともかく、ただの一般人が単に刻んだだけじゃ意味がないの。ルーンって普通にアクセサリーとかお守りとか、そういったのに刻まれてお土産として売られてるでしょ？　そういったもので無闇矢鱈と力を発揮したんじゃ、危ないよね」

「でも、それだと市販のお守りには効果がないってこと？」

「ううん、そういうわけでもないんだよ。厳密には効果はあるけど大した力は持ってないの。サツキは偶像理論って知ってる？」

「“類似したもの同士は互いに影響を及ぼしあう”、いわゆる類感呪術でしょ？」

「そう、教会の屋根にある十字架はゴルゴダの十字架って訳じゃないけど、それでも同じ力は宿ってる。もちろんオリジナルゴルゴダの十字架には遠く及ばないけどね。でも力の種類は同じ。同じ性質、同じ状態、同じ能力を秘めてるの。そしてオリジナルにより近いものなら、それだけ力も強くなるんだよ。これを私たちは『天使の力』テレズマって呼んでるんだけど」

「確かその言葉の起源は黄金S.M.の夜明け団だったかしら？　クロウリーが所属してたっていう」

「近代西洋魔術の雛型となった魔術結社だね。今は分裂して『黄金系』と呼ばれる複数の結社が存在するだけだね」

「つまり出力が足りないから書いただけでは意味が無いってことね。……でもルーンを使った魔術は実在する」

「それは魔術師が足りない分の力を自らの魔力で補ってるからだよ。だから魔力を練る方法知らない一般人が刻んでも意味はないけど、魔力を練って注ぐことができる魔術師なら、キッチンとその力を発揮させることができるの。もちろん刻むルーンもオリジナルに限りなく近くすれば、その分だけ必要とする魔力も減るし、同じ魔力の量ならその分威力は増す事になる」

「つまり魔力ってのは増強剤<sup>ブースター</sup>って訳ね」

ふむふむと頷きながら氷室がノートに何かを書き込んでいく。

そんな様子を病室の入り口で間抜け顔を晒しながら茫然と見つめる上条の心境は、

(……さっぱりわからん)

何について話しているのかは理解できるが、そこで話されている内容となるとサッパリ理解不能だった。

元々無能力<sup>レベル0</sup>である以前に上条は学力においても『不良』である。にもかかわらず科学とは根本的な理論やら常識の異なる魔術を理解することは宇宙人と会話するに等しい難題だ。

まさしく異文化コミュニケーション。英語すらまともに離せない上条にそれを求めるのは無理があるというものだ。

とはいえ、全くの不利解であるわけにもいかない。

敵はそんな『違法則』『異常識』を用いる魔術師であり、それに対抗するには彼らの理論をある程度理解する必要がある。

例えば先の戦闘でステイルの放った炎弾を打ち消すことはできたが、その後に展開された炎の巨人<sup>インケンティウス</sup>は消すことが出来なかった。理由はそれそのものが本体ではなかったからだ。

イマジンプレイカー  
幻想殺しはあらゆる異能を打ち消すことができるが、触れた対象に現在働いている分の力にしか効果はない。

ステイルの『炎の巨人<sup>インケンティウス</sup>』は、周囲にばら撒かれた『刻印<sup>ルーン</sup>』によつ

て映し出された映像の様なものである。そのため映写機である『刻<sup>ル</sup>印<sup>イン</sup>』を排除しない限り、映像は何度でも蘇<sup>きよじん</sup>える。

あの時はインデックスがそれを指摘し、スプリンクラーを発動させてインクを洗い流すという荒業で解決できたが、向こうも今度はそれに対する対処をして襲<sup>き</sup>つてくるだろう。

そして毎回インデックスからの助言が得られるとは限らない。ならば事前に出来得る限りの情報を入手し、その場で自ら判断できるようにしておくのは必要な事だ。

（それは分かっただけど……、正直ついていけません）

10万3000冊

世界中の魔術を記憶しているインデックスはもとより、オカルトの蒐集が趣味だと公言する氷室もかなり博識で、そんな両者による魔術談義は専門用語が続々と飛び交う内容はかなりのハイレベル仕様となっている。そこに魔術初心者の上条が加わったところで、用語一つ一つに注釈を入れてもらわないとサッパリ理解できない。

言うなれば今の上条は若者の会話についていけない御老人、と言った所だ。

妙な疎外感を感じ、思わず黄昏てしまう。

「あ、とうま」

「遅いわよ、上条君。缶ジュース一本に何時間かけてるのよ」

魔術談義がひと段落したことで上条の帰還に気付いた二人が上条へと振り返る。

そして相も変わらず手厳しい氷室の一言に上条はガックリと肩を落とした。

「おまえなあ……、こちららご所望の品を手に入れるため炎天下の中を延々彷徨うハメになってたんだぞ。てか『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』ってなんだよ。お茶なのか？ コーヒーなのか？ それともガラナ？」

「お茶でありコーヒーなのよ。しかもガラナ成分によりカフェイン

増量で徹夜したいときのお供に最適よ。微糖だからカロリーも控えめだし」

「いや、そういう問題か？」

どこからどう見てもゲテモノかはたまたネタとしか思えない飲み物だが、学園都市ではよくありがちな商品でもある。

学園都市は超能力の研究が基本ではあるものの、それに引きずられるように様々な分野での研究もおこなわれている、いわば『実験都市』でもある。

無数に存在する大学や研究所などで作られた『商品』の『実地テスト』として、街の至る所に生ゴミの自動処理オートメーションや自律走行する警備ロボットなどの『実験品』が溢れている。それは当然食品の分野にも及び、コンビニや自販機などにもそういった『実験商品』が立ち並ぶ訳だが、

「訳だが、やはり学生達は同じお金を払って買っているんだという事実が何故偉い人には分らないのかと問い詰めたい」

「普通の商品も売ってるんだから、嫌ならそっちを買えばいいだけじゃない？ てか、ぬるっ！？」

上条の手から買い物袋を引ったくり中を漁っていた氷室が、取り出した缶ジュースを前に眉を顰めた。

「しゃーねーだろ。この猛暑の中を歩いてればそりゃ温くもなるって」

「っていうか、コレ受付横の自販機に置いてあったでしょ」

「売り切れてたんだよ。だからわざわざ外まで買いに行ったんだろーが」

希望を聞いた際に「間違ったら殺すから」とまで言われたら、さすがの上条も「ありませんでした」と引き下がるわけにもいかない。あの時の氷室の目はマジだった。マジで殺す気だった。缶ジュース一本でどうしてそこまで思いもしたが、そんな理由で殺されでもしたら笑い話にもならないので、上条は真夏の猛暑日記録を絶賛更新中の外への買い出しを決断したのだ。

「……って、何故に飽きた目でみられてるのでせう？」

「飽きてるのよ、マリアナ海溝の底から」

「そこまで!？」

「なかったのならないって言いに来ればいいだけでしょ？」

「いや、殺すとか言ってなかったか？」

「とうま。サツキは『間違ったら』って言ってたけど『なかったら』とは一言も言っていないよ？」

「あー……」

言われてみればその通り。氷室の剣幕にビビッて早とちりした上条の落ち度である。

「温いと不味いのよね、コレ」

「んじゃ、飲まなきゃいいだろうに」

「飲むために買ってこさせたんだから、飲まないわけにもいかないでしょ」

そういうと氷室は徐に袋の中の缶を全て空中へと放り投げた。放り投げられた缶はそのままベットのの上には落ちずに、空中で停止する。

「うわあ!　とうまとうま、何もないのに缶ジュースが浮かんでるよ!」

「あー、それは氷室の能力だ。物を止める事ができるんだとよ」

「へえー」

まるで遊園地のショーを見ている子供のように目をキラキラさせたインデックスがしきりに手を伸ばし、宙に浮かんだ缶の周囲を探っている。

10万3000冊の魔導書とそこに記述された無数の魔術を知りながら、超能力による現象に目を輝かせる様は何とも不思議な感じだ。

(けど、逆の立場だったら俺も同じような反応をするかもな)

もっとも最初に魔術を目にした時――『歩く教会』の件は別として――は、そんな事考えている暇もなかったため、そうはならな

ったが、もう少し落ち着いた場面で、もうちょっと穏便な魔術を目にしていたら、純粹に驚き感動できただろうと思う。

そんなインデックスの反応にも興味を示さず、一人何かを観察するかのよう周囲を窺っていた氷室は、「うん」と一つ頷くと、

「上条君。ちよっとその窓開けてくれる？」

「窓？　ってか何する気だよ」

冷房の利いた病室の窓を開ければ当然のことながら外の熱気が入り込んで、室温は高くなる。

ついさっきまで茹だるような熱気にさらされていた上条にしてみれば、もう少しこの涼しさを味わっていたいところなのだが、

「念の為よ」

「だから何の」

上条の問いに対し、氷室はニヤリと笑みを浮かべると指を一本突き立てる。

「おバカな上条君に問題です。物体の状態変化はなぜ起きるのでしょうか？」

「いや、いくらなんでもそれはバカにし過ぎだろ。それぐらいわかるっの。温度変化によるものだろ？」

今日日、小学生だって答えられる問題だ。高校生である上条がいくらバカだからと言って、そこまでバカにされると実に不愉快だ。

「じゃあ、何故温度が変化すると状態が変化するのでしょうか？」

「そりゃ……」

問題のレベルが上がったが、それでもまだ答えられるレベルだ。

上条は少しだけ時間を取り、考えをまとめると、

「……温度が上昇すると分子の運動が激しくなるから、だろ。分子同士の引き合う力よりそれが大きくなると分子が散らばるから気体になる。逆に温度が下がると引き合う力の方が強くなるから集まって固体になる」

「正解。つまり温度の変化は分子の運動量に比例するって事ね」

「まあ、そうだな。それが？」

再度上条が問いかけると、氷室はさらに笑みを濃くし、

「では最後の質問。分子の運動量が0になるとどうなるでしょう？」

「どうってそりゃ……」

分子は動かなくなるわけだから、それに比例する温度は当然下がる。それも最低値まで。

（……、最低値？）

氷室の能力は『物体に働くベクトルの量を0』にするという力だ。つまり分子の運動量を0にすることができる。

そして分子の運動量が0となった物体はその温度が最低値にまで下がってしまう。

つまり0度。ただし単位は<sup>セリシウス</sup>℃ではなく<sup>ケルビン</sup>K。

「ねえ、上条君。“絶対零度”って知ってる？」

「ちょ、ま——」

止める間もなく、氷室はパチリと指を鳴らすと、その瞬間病室の中が真っ白な煙で覆われた。

「ひゃい！？　な、なにこれ、冷たい！？」

冷たいというよりむしろ寒い。外では絶賛猛暑日記録更新中なのに、ここだけ南極大陸のご真ん中にいるみたいに寒い。

（真夏に凍死なんて冗談じゃねーぞ！？）

上条は慌てて窓に噛り付き、開け放つ。

同時に物凄い勢いで突風が舞い込み、上条が盛大に吹き飛ばされたが、程なくして部屋中を覆っていた冷気の煙は綺麗サッパリ姿を消した。

「何しやがる、氷室！」

「少しは涼しくなったんじゃない？」

「涼しい通り越して凍死するわ！」

「だから窓を開けてって言ったんじゃない」

「事前に説明しろよ、そういうことは！」

「でも頭は冷えたでしょ？」

「……………」

上条は言葉を返すことが出来なかった。

どうやら病室の前で切り替えたつもりだったが、切り替えきれていなかったらしい。

そんな上条の頭を完全に切り替えさせるために、氷室はこんな茶番——にしては命がけだった様な気もするが——を演じたようだ。

ニヤニヤと笑う氷室に眉を顰めながらも、“また” 氣遣われたことに不甲斐なさを感じ、上条はガシガシと頭を掻く。

「それより、ハイ」

そう言って放り投げられた缶ジュースを受取ろうとし、

「って、ちょっと待て！」

直前で手にするのを止めた。

ギリギリのところで止めたため、缶はそのまま地面へと落ちるかと思われたが、才覚ある氷室によって即座に『止められた』ため事なきを得ている。

それよりも、だ。

「そんなもん絶対零度”に触れたら手が張り付いて取れなくなるだろーが！」

「あんたバカあ？」

心底飽きた、と言った風に半眼を投げかけ、氷室は手に持った『宇治抹茶珈琲ガラナ風味—微糖—』を開け口に含む。

「張り付くはずなら、そもそも投げられないでしょうに」

「あ……」

氷室が投げ渡したということは、それが張り付いてしまうほどの低温では無いという事だ。

例に指先でつついてみると、確かに冷えてはいるが張り付くことはない。

「うわあ、ホントに冷たくなってる。ねえサツキ。これもサツキの超能力なの？」

「厳密にはその応用ね。さっきの話は聞いてたわよね？」



「うん。温度はブンシっていうのに比例するってやつだよな」

「ええ。分子っていうのは物体を構成する粒子の様なものよ。物体はその粒子が集まってできてるの」

わかる？ と科学側の事情に疎いインデックスに講義を開始する氷室。

その生徒であるインデックスが頷くのを確認し、

「温度——熱って言うのは隣り合う2つのものの間に差があると、自然と両者を平均の値にして保とうとする性質があるのよ。だから温かい部屋の中に氷の塊を置いておくと、温度の高い空気が低い氷に熱を分け与え、氷は温度が上がって溶ける。逆に室温は熱を奪われるから低くなるの。さっき部屋の温度が下がったのはそのせいよ」  
「つまりサツキが超能力で氷を作ったから、部屋が冷たくなったってこと？」

「そう。そして上条君の懸念はこの缶自体を氷にしたと思ったから。でもそれだと飲めなくなっちゃうでしょ？ だから私が凍らせたのは缶ジュースじゃなくて、その周囲の空気の方。それもほんの少しだけ凍らせたのよ」

「それであんな風に真っ白になっちゃうの？」

「なっちゃうの。私の能力は『運動量を0にする』ことしかできないから、これで物を凍らせると必ず-273・15℃にしかならないのよ。この温度は“これ以上下がることのできない温度”だから、大量の熱がそこに奪われて、周囲の空気に含まれる水蒸気が一気に氷になっちゃうの」

「つまりさっきの煙は、煙じゃなくて霧なんだね」

「そういうこと」

すごいね、と素直に感心し、手にした『練乳紅茶—糖分控えめ—』を口にするインデックス。しかし直後に「うえ〜」と強烈な甘さに舌を出して音を上げた。さすがに糖分控えめと謳っていても練乳の甘さは緩和しきれていなかったらしい。

一方上条も手に取った緑茶（こちらはごく普通の緑茶だ）を口に

しながら、ふと感じた疑問を投げかけた。

「確かにすごいけど、なんだか面倒臭くないか、ソレ」

「面倒よ、すぐく面倒。ベクトル量を自由に操ればこんな手間かけずとも冷やすことはできるのに、0にしかできないから“周囲の気体をクッションにして低下度合いを調節する”なんて回りくどい方法を取らないといけないのよ」

その結果が、真夏の凍死未遂というのはさすがに笑えない話だが。

「氷室もいろいろ苦勞してるんだな」

「そうね。できればこんな能力じゃなく、普通に<sup>バイロキネシス</sup>発火能力とか<sup>サイコキネシス</sup>念動力とかでよかったのに」

「何の能力が発現するかなんて、『開発』してみなきゃわかんねーもん」

「上条君の場合は、天然でしょ？」

「ああ、生まれつきみたいだな。もつともそうだと知ったのは<sup>こ</sup>学園都市<sup>つち</sup>に来てからだけど」

異能の力にしか反応しないため、その力が存在しない一般の生活の中ではまず気付くことのない能力である。むしろ、能力自体を持っている事すら気づくことができない類だ。

「原石、ね」

「げんせき？」

再び見知らぬ言葉を聞き、インデックスが首を傾げた。

「天然ものの超能力者の事よ。学園都市<sup>こ</sup>では薬物とか電気刺激とかで人為的に『開発』することで能力者を“作り出し”てるけど、世の中にはそんな方法に頼らずとも稀に超能力を手にする人がいるのよ。それを私たちは『原石』と呼ぶの」

「もつとも“居るだろう”ってレベルの噂だけどな」

「あら、原石はちゃんと存在するわよ？」

「そうなのか？」

「ええ。でなきゃそもそも超能力の研究なんて行われる筈がないじゃない。『開発』の方法はその研究の過程で生み出されたものなん

だし」

「言われてみれば……」

「それに上条君自身がそうなんだから、それを否定するってのもどうかと思うわよ？」

「あー、そういわれてもそんな実感とかあんなないしな……」

「まあ、そうでしょうけど……」

そう締めくくると、病室内に束の間の静寂が訪れる。

特に誰かが何かを話そうとするわけでもなく、ただ全員が自らの手にする缶ジュースに口をつけチビチビと飲み干していく。

それが不思議と気まずくなく、むしろ穏やかとも呼べる心地よさを感じるぐらいだ。

『宇治抹茶珈琲ガラナ風味ー微糖ー』なんてゲテモノを平然と飲む氷室。

『練乳紅茶ー糖分控えめー』の過激な甘さに舌を出しつつも飲むのをやめようとしないインデックス。

そんな有り触れた平和な光景を見ると、このまま時間が止まればいいのに、とそんな埒もないことを上条は感慨深く思ってしまう。

だがそれが叶わぬ望みであることなどわかりきっている。時を止めるなんてこと超能力でも、おそらく魔術だって不可能だ。神様だってそんな事できないかもしれない。

だからいつかは終わりが来る。

そしてその“いつか”はもうすぐそこまで迫っているのだ。

(出さないとな、答え……)

終わりが来る、その前に――

**第07章 とある女医と秘密診療《シークレットサージェリー》（前書き）**

今回、作りこみが甘いです。

もしかすると後で改訂するかもしれません。

## 第07章 とある女医と秘密診療《シークレットサージェリー》

ゆっくりと流れる穏やかな時間。

時折、何気ない雑談を交わし、笑みをこぼし合い、度々黙っては  
その余韻を噛みしめるように味わう。

しかし時は確実に流れるもの。そして始まりがあれば、必ず終わ  
りは訪れる。

平穏を打ち破ったのは、病室の扉を叩く小さなノック音だった。

「……………」

即座に上条と氷室は視線を交わし合い、事前に取り決めていた互  
いの役割を確認する。

上条がインデックスに悟られないよう注意しながら彼女の傍に寄  
り添い、氷室がそれとなく入り口近くに陣取る。

この配置の理由は上条よりも氷室の方が防御力に優れているから  
だ。

カウンターストップ

『抑止力』には氷室自身が自らの意思で能動的に使用する他に、  
リアクティブ・アーマー  
無意識の内に常時発動している『反応停止』と呼ぶ自動防衛能力が  
ある。

これは全身の体表面上を覆う保護膜と言う形で展開され、自身の  
身に害を及ぼすとされるベクトルがその膜に触れた際、それらを自  
動で感知し、接触と同時に即時『停止』させるというものだ。

これにより何時如何なる状況で奇襲を受けても、氷室は傷一つ負  
うことなく相手の攻撃から身を守ることができる。

もともと『魔術』という異能の力にどれほど効果があるのかは氷  
室自身も未知数だ。しかしそれでも右手にしか効果のない上条より  
かはかなりマシなはずである。

その上条にしてみれば女性を矢面に立たせるのに強い抵抗がある。男は女を守るもの、という前時代的な考えではないが、それでも女性の後ろで安全を貪っているのは、あまりいい気がしない。

だから当初は「自分が前に出る」と頑なに主張していたのだが、氷室から『リアクティブ・アーマー反応停止』の話を聞き、その後の罵詈雑言のドS発言込み説得によりあえなく陥落。現状戦力で一番理想的かつ合理的な配置という事で、納得させられていた。

無論、それで完全に納得したわけではない。

だからいつでも飛び出せるよう態勢を整え、もしもの場合の備えを怠らない。

上条からしてみれば氷室は自分達の事情に巻き込んでしまった人間だ。いくら本人がそれを望んでいるとはいえ、それを理由に全てを託す事など出来ようはずもない。

いざとなれば文字通りその身を盾にしても、上条は氷室とインデックス、この二人を守るつもりでいる。

互いに準備が整ったことを確認し、扉の向こうで待つ来訪者に向けて氷室が口を開いた。

「……どうぞ」

氷室の応答にゆっくりと扉が開かれる。

病室の中に緊張が走る。

上条はその脳裏にあの夜戦った赤髪の魔術を思い描き、さらに腰を落とす。

氷室は即座に能力を発動できるよう扉付近の座標を演算領域に捉え、警戒を強める。

そしてついに扉が完全に開かれ――

「あ、いたいた♪ 皐月ちゃん、こんなところにいたのねえ」

「……………はい？」

現れたのは一人の女性だった。

底抜けに明るい表情を更に笑顔で輝かせ、呑気に手を振ってまでいる。

白衣を着ていることからこの病院の関係者——おそらくは女医——だと思われるが、なぜかその下に来ているのはショッキングピンクのナース服。しかも胸元が大きく開き、スカート丈が極端に短い。ぶっちゃけるとコスプレ衣装っぽい格好だ。それも風俗仕様の。

「えっと、……………誰？」

「この病院に勤める医師」

「医者あ！？」

「……一応」

一応が付くんだな、と上条は小さく呟きながらも、なんとなくその理由を察していた。

何しろ第一印象からして軽い。軽すぎる。

医者という雰囲気はまるでなし。貫録もなし。

そもそもまずもって病院に務めていること自体が間違っていると感じるハイテンションっぷりだ。

とても医者だとは思えない。見た目の恰好通り、裏通りのネオン街に務めていると言われた方がまだ納得が行く。

もしこれで本当は、インデックスを狙ってきた刺客まじゆつしなんです、なんて言われたら、上条は魔術師という存在のあり方を根本的に考え直さなければならなかっただろう。

それぐらい目の前の女性はいろいろと場違いな存在だった。

「つか、また何でそんな恰好を……」

心底疲れたといった様子で氷室が肩を落としガツクリと項垂れる。

「えー、可愛くない？」

「可愛い可愛くないの問題じゃありません。歳考えろ、四十路」  
「四十路っ!？」

氷室の痛烈なツツコミの内容に思わず声をあげる上条。

格好もそうだが、見た目からしてよくて20代前半、ともすれば10代後半にも見える容姿だ。とても倍近くあるとは思えない。

「正確には42」

「いゃん♪ 歳は言わないでえ」<sup>それ</sup>

自身の体を抱き締め身をくねらせる御年42歳独身女性現在彼氏募集中の姿に、頭痛を覚えた氷室は頭を抱え眉間に深い皺を刻んだ。

「大体ナース服って……」

「えー、看護婦さんってえ、女の子の夢じゃない？」

「夢じゃない! ってか、あんた科学者だろ、本業はっ!」

「それは元。今は悩める患者さんの心を癒す、白衣の精神科医よん」  
♪

「白衣で何故ピンクナース!？」

「だってそれは……」

「それは？」

「女の子だもん♪」

「黙れ、行き遅れ」

「いゃん♪ 今日の臯月ちゃんも相変わらず絶好調に冷たい♪」  
「……………もう、いいです」

(ひ、氷室が言い負かされてるっ!?)

よろよろと力なく壁にもたれ込んだ氷室の姿に、上条の目が驚愕に見開かれる。

「ってか、ホント誰なんだよ、この人？」

「夢野由夢先生<sup>ゆめのゆめ</sup>。私の主治医よ。遺憾ながら……」  
「あらん？」

上条の問いかけに、ようやくその存在に気付いた夢乃が徐に上条



に近寄り、上から下までを舐め回すような視線を向けた。

「はぁん…、ふーん…、なるほどなるほど…」

一通り観察を終えた夢乃はニヤリと意味ありげな表情を浮かべると、くると氷室へと振り返り、

「さっ、つき、ちゃん♪」

「物凄く聞きたくないですけど…、なんででしょう？」

「もう、こういうことは真っ先に言ってくれないと♪ いやはやようやく皐月ちゃんにも春が来たのねえ」

「とりあえず軽く絶対零度を体感してみますか？ 今年の夏は猛暑らしいですから、ぜひとも院内の省エネエコ活動にご協力していただきたいのですが。っーか、しやがれ」

「いゃん♪ そんなことされたら私…、」

うふふふ、と夢乃は怪しげな笑みを浮かべ

「…濡れちゃいそう」

「いや、濡れる前に凍るから！ むしろ死ぬからソレ！ てか、もしかして濡れるってソッチの意味！？」

「ねえ、とうま。ソッチってどっち？」

「18歳未満は聞いちゃいけませんっ！」  
お子ちゃん

インデックスの素朴な疑問に、即座に反応した上条が青少年に対する情操教育的有害物質から彼女の身を守らんとその両耳を塞ぎ、視線を余所へと強制的に向けて遮断する。

それに対し氷室は心の中で「グッジョブ！」と親指を立てたのは言うまでもない。

「で、何の用ですか、夢乃センセ？ 遊びに來ただけなら即刻帰ってくれませんか？ てか、仕事しろ」

「あらやだ。そのし・ご・とで来たのよ」

「仕事？」

もはやツツコむ気すら起きない氷室は、夢乃の馬鹿げた言い回しを華麗にスルーしつつ問い返す。

「そうよ。皐月ちゃん、忘れてるでしょ」

「何を？」

「し・ん・さ・つ♪」

「あ……」

しまった、と頭を抱えた氷室に、夢乃が「ほらね」とばかりに笑顔で氷室を責めたてる。

「もう、ダメじゃない。皐月ちゃんはいろいろとデリケートな患者さんなんだから、そう言ったことはちゃんとしてくれないと……」

「……すみません」

先ほどとは打って変わって医者らしい口調と指摘に、自らの落ち度を認める氷室は素直に頭を下げた。

「キッチンとベットの用意をして、いつ来るかいつ来るかって楽しみにしてたのにいゝ。全然来ない上に、ナースの子に聞けば病院には来てるっていうじゃない？」

だから探しに来たのだと。

「あー、いろいろと立て込んだもので……」

「まあ、彼氏が出来たのならそっちを優先したい気持ちは分かるけど……」

「か、彼氏い!？」

「そこに幼女が一人いる状況で、どうしてそういう答えが出るのか、一度脳ミソ診てもらった方がいいんじゃないですか？　むしろいっそ冷凍してみますか、完全に？」

辛辣な言葉とともに夢乃をギロリと睨み付けるつけるも、向けられた夢乃はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべるだけ。

ちなみに『幼女』と呼ばれたインデックスは上条の隔離政策によりなおも耳を塞がれている状態のため聞き取ることが出来ず、氷室の暴言に非難の声を上げることはなかった。

「とにかく、後で伺いますから、とっとと失せていただだけませんか？　てか、失せろ」

「もう、そんな冷たい態度ばかり取っていると彼氏に飽きられちゃうわよ?。」

「先生には物理的にも冷たくしてあげましょうか？」

わなわなと右手を掲げ睨み付ける氷室にも動じず、上条に「こんな子だけどよろしくね♪」と何故か投げキッスのオマケまでして、夢乃は病室を後にした。

「……………はあゝ」

夢乃の姿が見えなくなると同時に、深いため息をついた氷室が汚れるのも構わず床へと座り込む。

「え、えっと……」

「何も言わないで、お願いだから」

「お、おう」

相当な精神的ダメージを負ったらしい氷室の様子に、上条は彼女の新たな一面を垣間見た気がした。

しばらくして立ち直った氷室は、ヤケクソ気味に残った『宇治抹茶珈琲』を飲み干し、

「ああ、もう！」

鬱憤を晴らすかのように吠えた。

「あの人は、アレさえなければ優秀なのにつ！」

どうして私の周りにはあんな変人しかいないのか、と愚痴をこぼす。

「あー、氷室？ 結局なんだったんだ、今の」

「別に大したことじゃないわよ。ただの予後観察ついでの定期健診よ」

「それって前に言ってた大怪我ってヤツのか？」

「そ、」

「けどあの人は、精神科医って……」

精神科医、つまり脳や心に関する病気を専門に扱う医者だということだ。

とてもそうは見えなかったが、嘘を言っているようにも見えなかったし、言う理由もないだろう。

となると氷室には、そういう病に関する何かを患っているという事になる。

「まあ、少しばかり脳にも影響があったからね。殆ど問題はないんだけど、一応念の為、ってやつよ。大げさな理由なんてないから、心配しなくても大丈夫よ」

「そう、なのか？」

「そうなの」

キッパリと言い切る氷室だが、上条は何故だかその言葉を完全には信用できなかった。

目の前にいる少女が、脳や心に障害を負っているようには見えない。

しかしあの女医（？）は氷室の事を『デリケートな患者』と呼んでいた。

もしかすると、目には見えないところに何か重大な問題を抱えているのではないか、そういう風にも見て取れる。

この数日間、一緒にいることでより深く氷室皐月と言う少女を理解し始めた上条だが、それでも彼女に関する謎は多い。

むしろ付き合えば付き合うほど、よく分からない部分が増えていく。それはまるで掴む事の出来ない蜃気楼のような存在だと、そんな錯覚をふいに覚える事があるのだ。

もしかすると彼女は、その奥に何か重大な秘密を隠しているのかもしれない。

鈍いと揶揄される上条だが、この件に関しては理由もなく確証に近い、そんな予感を抱いていた。

だとすれば、自分に何ができるのかわからないが、力になりたい、と上条はそう思う。

インデックスを助けてもらったことに始まり、こうして共に彼女の護衛をし、上条を気遣って憎まれ役まで買って出てくれたクラスメイト。思えば自分は貰ってばかりで、何一つ彼女に返すことが出

来ていない。

そのことに気付き、上条は自分の至らなさを再度自覚する。

(といっても、無理に聞き出すのもなあ……)

隠したいと思っているものを無理に暴き出すのもそれはそれで失礼な話だ。少なくとも上条と氷室の間にはそこまでするほどの縁も義理も築かれていない。

(だけど、もし、氷室が助けを求めてきたら……)

その時は迷うことなく力になる。

受けた恩を返すために。増えすぎた借りを返すために。

いや、そんなものがなくとも上条当麻は必ず力を貸すだろう。それが上条当麻と言う人間の在り様だから。

「それより、いい加減解放してあげたら？」

「……へ？」

心の中で並々ならぬ決意を固めていた上条に、氷室の何気ない指摘が飛ぶ。

「そのままだと寝てないのに寝違えるわよ、彼女」

「うわあ！ すまん、インデックス！」

氷室に指摘され、あわてて上条はインデックスの拘束を解く。

「ううー、とうまヒドイ」

「いや、ホントすまん。けどあの場合にはああするしかなかったというか、ああするのが正解と言うか……」

しどろもどろに言い訳を募る上条に対し、インデックスはその柔らかな頬をめいっぱい膨らませ、

「私、お子ちゃまじゃないもん」

「いや、だから……」

「お子ちゃまじゃないもん」

「えっと……インデックスさん？」

「立派なレディだもん」

「……………レディ？」

上条の頭上に思わず疑問符が飛ぶ。

同時にその脳裏にはこれまでのインデックスの行動がハイビジョンで再生される。

ベランダで布団よろしく干されたまま、行き倒れを主張するインデックス。

差し出されたヤキソバパンを上条の腕ごと丸呑みするインデックス。

とりあえず部屋に連れ込めば笑顔で脅迫しつつ食事を要求するインデックス。

腐りかけの野菜で作った炒め物を拙い箸の持ち方でかつ込むインデックス。

裸を見られ、合宿時の蚊のごとく全身くまなく上条に噛み付くインデックス。

「……………ふっ」

「その含み笑いはなにな、とうま？」

「いやいや、実に見事な淑女<sup>レディ</sup>っぷりだと思ひまして」

「……、そこはかとなく馬鹿にしてるね」

「いえいえ、そんなことは……」

「……、そこはかとなく馬鹿にしてるね」

「……………」

伏し目がちでプルプルとし始めたインデックスに、上条の脳内警報がけたたましいサイレンを鳴らし始める（↑もう遅い）。

これはヤバいと、助けを求め氷室の方を向くと、

「今のは上条君が悪い」

助けはなかった。まあ、わかりきっていたことだが。

「とうま……」

「え、えっと……、弁解の余地は？」

「「ない」」

ですよねー。

「許可します。インデックス、やっちゃいなさい！」

「了解ーっ！」

「不幸だあー！」

「じゃ、ちょっと行ってくるから、インデックスの事よろしくね」  
そう言ってインデックスに頭を丸齧りされている上条を残し、氷室は病室を後にする。

そのまま勝手知ったる病院内を奥へ奥へと進んで行き、辿り着いたのは関係者ですら滅多に立ち入ることのない、病院の一番奥まった場所にある、とある一室。

「来たわね」

部屋へと入ると、コンソールを弄りながら夢乃が歓迎の声を上げる。

明らかに先ほどの病室とは態度の異なる夢乃だか、そんな事は気にせずに氷室は部屋の中へと入って行く。

「とりあえずこれに着替えて。その間にいくつか質問させてもらうから」

「どうせいつもと同じ質問でしょ？」

暗に回答を拒否しつつ、氷室は手渡された貫頭衣へと着替え始める。

「そういうわけにもいかないのよ。デリケートな作業なんだから、今の貴女の状態を正確に知っておく必要があるの。わかってるでしょ？」

「はいはい」

気のない返事を返しながら、ブラウスのボタンを外し脱ぎ捨て、近くに置いてあった籠の中へと放り投げる。

その様子を見ながら夢乃は両手にカルテとペンを持ち、

「じゃあ、一つ目の質問。体調の方はどう？」

「問題なし」

「睡眠は？　ちゃんと取れてる？」

「ぼちぼち」

「ちなみに昨日は？」

「三時間ぐらい、かな？　少し徹夜してたから」

「そう……。食事はちゃんととってるわよね」

「もちろん」

「前回から何か変わったことは……。って、彼氏が――」

最後まで語る前に氷室が投げつけたスカートによって強制的に口をふさがれた。

「次」

「……もう、ちよつとした冗談ジョークじゃない」

「つ、ぎ！」

「はいはい」

やれやれといった具合に肩を竦め、投げつけられたスカートを籠の中へと放り、夢乃は質問を再開する。

「最近特に気になる事とか、何か変化が起きたとかは？」

「絶賛トラブル進行中。内容はプライベート保護のため話せません」

「また厄介事に首を突っ込んでるのね……」

はあ、と深々とため息を吐く夢乃を心外だとばかりに氷室は睨み付ける。

「失礼ね。それだと私が率先して厄介事トラブルに関わってるみたいじゃない」

「違うの？」

「違う！　ってか、誰のせいだと……」

「……そうね。ごめんなさい」

「……いいわ。今のは私の失言だったから」

小さく謝罪して、氷室は貫頭衣を被り、その裾を正す。  
とそこで一旦手を止め、



「……やっぱ下着も？」

「当然」

「はあ……」

ため息をつきつつ、いそいそとブラとショーツを脱ぎ捨てた。

「出来たわよ」

「じゃあ、そのベッドに横になって」

「了解」

指示されたベッドに横たわり、備え付けられたヘッドギアを手取る。

そして、そのままいつも通り被ろうとし、

「あ、ちょっと待って」

「……なに？」

いつもならこのまま『診察』が始まる予定なのだが、今日に限って夢乃は何かを言いたげに氷室を見ていた。

「なんなのよ、一体」

「うん。えっと、その…、最後の質問、がまだだったから……」

「最後？」

いつも通りの質問は、先ほどので全部終わっているはずだ。

「ええ。最後にひとつだけ聞かせて」

「だから、何を？」

急かす氷室に、夢乃は一瞬だけ躊躇ったのち、

「ねえ、皐月ちゃん」

ゆっくりと、何かを恐れるように、だが同時に何かを期待するかのような目で、氷室を見つめ、

「私の事、恨んでる？」

「何をいまさら」

即答だった。

「愚問ね。質問にすらならない」

「そうね……」

氷室の答えに何かをゆっくりと噛みしめるかのように呟き、夢乃はベット脇の装置へと手を伸ばす。

「どうしたのよ一体」

そんないつもと少し違う夢乃の様子に、氷室は眉を顰める。

「別に大したことじゃないのよ。ただ、なんとなく聞いてみたかっただけ」

そう呟きながら装置のコンソールを素早く叩き、何かを入力していく。

氷室もそれ以上問う気はなく、いつも通りにヘッドギアを被りベットへと体を預けた。

しかし、

「ねえ、皐月ちゃん。私がここで何かを仕組んだりするんじゃないかって思わないの？」

「ホント愚問ばかりね、今日は。するんならとつくにしてるでしょうに」

「そうよね。でも……」

それでも納得がいかないのか。最後のボタンに手をかけたまま夢乃は立ち止まる。

「何を考えてるのか知らないけど、あの人が貴女に任せたの。私も貴女以外に適任者がいるとも思えないから、後は言われるままに従うだけよ」

「そう……。信頼してるのね、彼の事」

「当然でしょ？ 恩人だから」

「そうね。恩人、ね」

夢乃は感慨深げに言葉を繰り返すと、気持ちを切り替え「はじめるわ」と装置のスイッチを押す。

それに応える形でベットの上にガラス製の蓋がされ、中が完全に密閉されると、氷室の被るヘッドギアが忙しなく明滅を繰り返し始めた。

これで氷室の五感は外界と切り離された。

それこそ地震が起きようが全身に落書きをされようが、彼女はそれを感知することはできない。故に装置が止まるまでの間、その身は完璧に無防備な状態。彼女を常に守っている『リアルタイム・アーマー反応停止』すらの状況では機能しない。

だからもし、この場で夢乃が氷室を殺そうとしても、何もそれを阻むものは何もない。

「バカね……」

ポツリと呟いたその言葉も今の氷室には届かない。

それが分かっているとお、夢乃の独り言は止まらない。

「なんで私なんかのこと、信用できるのよ……」

自分がそれに値しない人間であることは、夢乃自身が十分承知している。

特に目の前で無防備な姿をさらす少女には殺されたっておかしくないのだ。いや、殺されるべきだとすら感じている。

それほどの事を夢乃はこの少女にしてきたのだから。

ふと手元に置いたカルテを手取る。

そこには先ほどの質問の回答が記されているが、それは氷室が答えたものとは若干内容が異なっていた。

特に顕著なのは『睡眠』に関する項目だ。

昨夜の睡眠時間を氷室は『3時間』と答えたが、夢乃の書いたカルテにはその上に『合計』の文字が付け足されている。

聞き間違えたわけじゃない。夢乃が自身の判断で意図的に付け加えたものだ。

おそらく一回当たりの睡眠時間はおよそ10分、最長でも30分は下回ると予測している。それらを合計してようやく3時間。

しかもこれは今回だけでなく、毎回の事だ。そして毎日がそうな

のだろう。

夢乃はもう一度、ベットに横たわる氷室へと目を向ける。

今は顔半分を覆うヘッドギアに隠されて見えないが、その下の目元には尋常じゃない程の隈が出来ているはずだ。

氷室はそれを特殊メイクさながらの化粧で隠し、他人にはそうと悟られないようにしていることを夢乃は知っていた。そしてそのプロ顔負けのメイク技術はこのためだけに磨かれたと言っても過言ではないことも。

事情を知らない者が聞けば、「どうしてそこまで」と首を傾げるだろう。

だが彼女にとっては必要不可欠な事なのだ。

夢乃は再び視線を移し、今度はベット脇のサイドテーブルに置かれた缶ジュースへと目を向ける。

『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』と銘打たれたソレは、氷室が常日頃から愛飲して止まない飲み物である。

それこそ三食には必ずと言っていいほど常用し、それこそ1日の水分をそれだけで賄うかのように飲み干しているくらいだ。

しかしこの商品は一度事件を起こし、訴えられている。

その理由は大量に含まれているカフェイン。

抹茶、珈琲、ガラナはいずれもカフェインを多く含むものであり、『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』はそれを前面に押し出したと言っても過言ではない商品である。そのため受験生や寝る間も惜しい研究者の間で強力な眠気覚ましとして根強い人気を博している一方、幼い子供が飲用し急性中毒で搬送される事件が続発したことや、コレのせいで不眠症になった患者まで出たことで裁判沙汰となり、一時は製造中止の危機にまで陥った過去もあった。

そんなある種毒物とも取れる飲み物を湯水のごとく暴飲する事も

彼女のとある思いを表している証拠と言える。

「怖いね、寝るのが……」

もっとも単にそれだけならば、他にも同様の患者は大勢いる。夢乃は精神科医だ。そういう患者をこれまで多くその目にしてきた。

しかし氷室のソレは彼らとは一線どころか遥かに隔絶した異常とも呼べる症状だ。常軌を逸していて狂気に達してるとも言えるほどの執念で睡眠を拒絶している。

無理もない、と夢乃は瞑目する。

そして同時に襲い掛かる罪悪感に胸を締め付けられる思いをする。

その原因を作り出したのは、他ならぬ夢乃自身だ。

一人の少女から『眠る』と言う人間の基本的な行為を奪い、安息の夜を得られない状況へと陥れた。

それがどれほどの罪なのか、当時の自分はまるで理解していなかった。理解しないまま目的のために、“あの”処置を施してしまった。

しかし後悔してたところでもう遅い。彼女が“目覚めて”からこれまで、安息の時間を取り戻すことなんてできない。時間はどんな超能力を用いても、巻き戻すことなんてできないのだから。

「でも、まだ間に合う」

過去は取り戻せずとも、この先の未来は作り出すことはできる。奪ってしまった安息の時を、再び彼女の手に戻すために夢乃はこうして治療を続けているのだから。

「待っててね皐月ちゃん。絶対に解いてあげるから……」

その身にかけられた『呪い』を。自らがかけた恐るべき『悪夢』

を。

(そしてそれが終わったら……)

そこまで考えて夢乃は頭を振り、もう一度夢乃の姿を目に焼き付けた後、再び装置のコンソールへと手を伸ばす。

ディスプレイに表示された無数のデータを目で追い、軽やかな指使いでキーを叩き細かな調整を付け加えていく。

その表情には、あの病室で見せた軽さは一切見当たらない。

むしろ重苦しいと感じるほどの重圧を周囲に放ち、夢乃はただひたすらに作業へと没頭し続ける。

それが自分に出来る唯一の『罪滅ぼし』であると信じて。

## 第08章 とある甲夜の急展開《サドンリー》（前書き）

ようやく話が動き出します。

ちなみに『甲夜』とは夜を5つに分けたうちの第一の夜。午後7時  
〜9時頃のことを指す言葉です。

## 第08章 とある甲夜の急展開《サドンリー》

「サツキ、遅いね……」

「検査に時間がかかってるんだろ？」

インデックスのお怒りも収まり、再び穏やかな時を取り戻した病室だが、一人減っただけでなんだか寂しく思える。

必然と両者の会話は減り、病室はシンと静まり返る機会が多くなった。

元々出会って間もない二人の間にはそれほど共通の話題が多くあるわけでもない。ましてや上条は魔術側の事情に疎く、逆にインデックスは科学側の事情に疎いと、それぞれの分野が完全<sup>せかい</sup>に食い違うため、何かを語り合っても微妙なズレが生じて会話のキレが鈍くなるのだ。

それを思うと魔術側にも科学側にも相応の見識のある氷室の存在はこの二人を繋ぐ『潤滑油』的な役目を担っていたのだと、いまさらながらにその重要性に気付かされる。

（ダメだなあ。完全に氷室に頼りきりじゃないか、俺）

むしろ氷室の方が出来過ぎているわけなのだが、比較対象が彼女しかないため上条はそれに気づかない。

「……つと、すまんインデックス。ちよつとトイレ」

徐に尿意を感じ、上条がそう断りを入れるが、

「もう、とうま！ そういう事はレディの前で気安くそういう事言うべきじゃないと思うんだけど」

デリカシーなさすぎかも、とインデックスは頬を膨らませて上条を睨み付ける。

「そうかあ？ 普通じゃないか、これくらい」

「そういうところが、デリカシーがないっていうんだよ！」

「そういうもののかねえ……」



男である上条にはそう言った女性的な機微と言うのはほとんど理解の及ばない領域だ。それこそがデリカシーの無さなのだと彼が気付くのは、はたしていつになるのだろうか？

「とにかく行ってくる。ちゃんと大人しくしてろよ？」

「もう！ 子供じゃないって何度言ったらわかるの！」

「はいはい。子供じゃないんなら大人しくできるよな」

「バカにして、バカにして……もう一回頭嚙んだ方がいいかも」

「ご遠慮させていただきます」

即座に頭を下げた上条は、すぐさま戦略的撤退を兼ねたトイレタイムのために病室を後にする。

(……って、インデックス一人残すことになるけど、大丈夫だよな) トイレはすぐそこにあるし、そう時間がかかるものでもない。

(すぐに戻れば平気か)

そう考え、上条は少し小走りにトイレへと直行する。

だから気付かなかった。

柱の陰に赤髪の男が潜んでいたことに。

だから気付けなかった。

それが風雲急を告げる事態の幕開けになるなど――

「お疲れ様」

ベッドを覆っていたガラス蓋が開くと同時にむくりと起き上がった氷室に、彼女が“お気に入り”の『宇治抹茶珈琲』を差し出しながら夢乃が声をかける。

「気分はどう？」

「自覚が出るようなものでもないでしょ？」

ヘッドギアを外した氷室は開口一番から皮肉な台詞を吐きつつ、受け取った『宇治抹茶珈琲』のプルタブを開け、一気に啣る。

「それはそうだけど、もし気分が悪かったりしたら再調整し直さないといけないじゃない」

「問題ないわ。いつも通りよ」

「そう。それならいいんだけど……」

氷室の言葉は信用ならないとばかりに疑いの眼を向けるが、ベッドから立ち上がった彼女の様子に特に違和感を感じられない。むしろ処置前よりしっかりしているくらいだ。

「……ちゃんと、眠れたみたいね」

「……おかげさまで」

氷室が安心して眠れる機会は、月一回のペースで行われるこの処置を行っている数時間だけだ。

それ以外は本当に短い睡眠時間しか取れず、『眠る』と言うより『休める』といった程度でしかない。

夢乃にしてみれば、もう少し頻繁に機会を設けたてあげたいのだが、機械の調整やそれに用いるデータの作成などに時間を要するため、それもなかなか叶わない状況なのだ。

（ままならないわね……）

一刻も早く解放してあげたいところだが、焦れば逆効果を及ぼす可能性も多く、下手をすれば最悪の事態すら考えられるとあっては是が非でも慎重にならざるを得ない。

「それで、今回はどんな感じなの？」

苦悩する夢乃を尻目にさっさと着替え始めた氷室は、下着を身に着けながら処置の内容について問いかける。

「とりあえず覚醒条件の緩和を試みてみたわ。今までみたいにちよつとの刺激で覚醒<sup>めいせ</sup>めることはないはずよ」

「そう。けど、どこまで効果があったかは相変わらず試してみないとわからないんでしょうけど」

「ごめんなさい……」

「責めてるわけじゃないわ。下手を打たれるよりマシだし」

「ええ。それだけは避けるよう、気を付けてるから」

「かけた時には全く考慮してくれなかったけどね」

「……………」

冗談のつもりなのだろうが、夢乃にしてみれば胸に痛い言葉だった。

「ま、気長にやりましょ。それに、完全に居なくなられても困るし……」

確かに、と夢乃はその言葉に頷く。

氷室を侵す『呪い』はその身を“蝕む”と同時に“守る”役割も担っている。それを完全に失うと、今度は別の意味で彼女は眠れぬ日々を送らなくてはならなくなってしまうだろう。

完全に解くのもダメ、焦り過ぎてもダメとなっては氷室の言うとおり気長にやっていくしかない。

だがその『気長』が一体いつまで続くのか。それを思うと夢乃の心はどんよりと重たい雲に覆われていく。

自業自得とわかってはいても、過去の自分を恨みなくなる瞬間だ。「ところで夢乃センス？」

「な、なに？」

暗い気持ちを無視するかの様な気安い呼びかけに動揺しながらも、夢乃は氷室へと振り返る。

既に下着をつけ終えスカートのホックに手をかける氷室は、首だけで振り返り夢乃の姿を上から下へと眺めると、

「やっぱその格好、やめた方がいいと思いますよ？」

「そ、そう？」

「うん。特に襟元は締めといた方が……」

大きく開いた胸元は青少年にとっては目に毒だろう……本来なら。その“まな板”じゃ、失望させるだけでしょに……」

残念ながらその名に反して夢乃の胸には夢がない。“ゆめのゆめ”ならぬ“ひらのむね”だ。

「ひ、ひどーいっ！人が気にしてること言うなんてえー」

「気にしてるなら隠せよ、寸胴」

「女は見せることで磨かれるのよっ！」

「良いこと言ったつもりでしょうけど、残念ながらその胸に夢や希望が詰まる余地は欠片ありませんから。あるのは絶望だけ——  
—というか絶壁？」

「うわぁーん」

よほどショックだったのか半ばマジ泣きし始めた夢乃を無視して、元凶たる氷室は淡々と着替えを再開する。

と、その背後からスクツと手が伸び、

「どうせ皐月ちゃんみたいに大きくないわよ！」

「つて、ちょ、ま——！」

脇の下から延びた夢乃の両手が氷室のたわわな果実を鷲掴みにし、揉みしだく。

「ええい、こんなもの！　こんなものお！」

「や、まっ…、ちょっと、ホントにやめてっ——！？」

「この、この、この——！」

執拗なまでに恨みを込めて揉みしだく夢乃の行為に、能力を使う事も忘れて氷室が暴れるが、いっそ執念とも怨念とも取れるしつこさで夢乃はけして放そうとはしない。

それどころか、

「……皐月ちゃん、また大きくなってる？」

「なって、ない……」

「ウソっ！　絶対1カップは大きくなってるでしょ！　この前測った時はEだったから……Fですってえ！？」

驚愕し、恐怖に慄き、さらに執拗さを増す夢乃の攻撃。バイモミ

「巨乳が何よ！　巨乳が何よっ！　おっぱいなんてデカくても、歳とったら垂れるだけじゃない！」

「と言いつつ、恨めし気な顔をしないでくださいっ！　私だって好きで大きくなったんじゃない！」

「巨乳なヤツはみんなそう言うのよお！　ついこの間まで同じつるぺたすといんだったのに、何が原因なの！　教えなさい！」

「いつの話をしてるんですか！ あとやっぱうらやましいんじゃないかっ！」

「そうよ！ だから、ソノニクヲワケロ」

「ああ、もう！ いい加減にしないとぶっ飛ばしますよっ！」

「ワケロォー！」

もはや妖怪ムネニクワケロと化した夢乃には人間の言葉は通用しないらしい。

しかしきゃいきゃいと戯れる二人の姿は、傍から見れば背後に百合の花が散りばめられているかのように映るに違いない。

そう、その光景を、

「——ここかっ！」

ガラッ

「ひむ——、」

こんな風に、

「……………ろ？」

第三者が目撃すれば。

「……………」

「……………」

秘密の診察室に嫌な沈黙が落ちる。

勢い良くドアを開け姿を現したツンツン髪の少年は茫然とその場に立ちつくし、

少女の胸を弄っていた童顔の熟女女医は、その手をピタリと止め冷や汗を流し、

そして半裸の状態で辱めを受けていた少女は――

「き、」

「き?。」

「キャアアアアア!！」

「すんませんでしたあー!」

「で、遺言は?」

「またいきなり死刑宣告ですか!」

「なにか?」

身だしなみを整え、少年に正座を強いた少女の視線はどこまでも冷たい。それこそ昼間に体感した絶対零度を彷彿とさせる冷たさだ。

「なんでもありません。全て上条当麻わたくしめが悪いのです」

「ええ。責任を取れなんて言わないから、潔く死になさい。駅前の広場で全裸で」

「ぜ、ぜんら……?」

「安心して。腐らないように凍らせといてあげるから」

「それなんて放置プレイっ!」

ニッコリと極上の笑顔（ただし目だけは笑ってない）で死後なお続く羞恥プレイまで宣告された上条は、いっそ責任を取れと言われた方がマシかもしれないと涙した。無論、責任を取らされるのもそれはそれで問題なのだが。

「というかそれ以前に、そもそも何でこんなところに上条君がいるのよ。……インデックスは?」

打ち合わせでは、どちらか一方が所用で居なくなる場合は必ずもう一方がそばに張り付いている手筈となっているはずだ。

「! そうだ、インデックス!」

「……何があったの」

とたん立ち上がった上条の切羽詰まった表情に、氷室の顔が険しいものへと切り替わる。

「居なくなっただんだ！　ちょっとトイレに行ってたうちに、病室から！」

「――――っ！」

上条の衝撃発言に、氷室は息をのみ、

「――バカ！　どうしてそれを先に言わないのよ！」

「す、すまん。けど病院中を探したけどどこにもいなくて……」

「窓は？　病室の窓！」

「……開いてた。ってことは外かつ！」

「探しに行くわよっ！」

「お、おう！」

その場にいた夢乃に別れも告げず、氷室と上条は部屋を飛び出し駆け出す。

「ホント、スマン」

「謝るのは後よ。それに私にも責任はあるし……」

“診察”なら延期する事も可能だった。むしろ状況的に見ればそうするべきだった。

「いや。それは違う」

自責する氷室を上条は即座に否定する。

あくまでも彼女は、上条達の事情に巻き込まれ付き合っているだけの存在だ。それに彼女の身に何か異常があるのなら、そちらを優先するべきだと上条は判断する。

「責任の在り所を問うのは不毛ね。とにかく今はあの子を……」

「ああ。きつとどこかに魔術師<sup>やつら</sup>が潜んでたんだ……クソッ」

ちよつとの間だからと、あの時病室を離れていなければ、と後悔したところでもう遅い。

二人並んで夜の街を駆け抜けるが、時間が経っているためインデックスがどこに逃げたのかの当てもない。

それどころか、

「人が、いない……？」

夜の8時近い時間帯とはいえ、これだけ走っていて一人の人ともすれ違わないのはおかしい。

「なあ、氷室。これって……」

「『人払い』よ」

氷室は足を止め、言葉とともに手近な壁に貼られたカードを一枚剥がす。

「それは……」

「ステイルとか言うルーン魔術師のものでしょーうね。水害対策にラミネート加工を施して耐水性を上げてきたか……。意外と近代的だけど、なるほど合理的ね」

台紙自体の強度も増す上、取り出しやすく、携帯しやすく、使い勝手も増すと一挙で何得も得られる対策と言える。

「使用されているルーンは『Opila』。その意味は『土地』。このカードを貼った空間の内側を自らの所有地とすると、他の人間が立ち入るのを防いでいるって所ね」

「さすがだな。ってことは……」

「ええ。近くにいますよ」

人の立ち入りを禁じたという事はその空間内で魔術を使用するという意図を意味している。

つまり『人払い』がされている空間内にステイルと言う魔術師が存在するという事。そして彼は今現在インデックスを追っているという事。

「二手に分かれましょう」

「ああ。じゃあ、俺は向こうに」

「わかったわ。合流は……、上条君携帯は持ってきてる？」

「わりい。うっかり踏み砕いちゃって、壊れてんだ」

相変わらずの不幸体質っぷりに、氷室は少しばかりげんなりしつつ、

「……しょうがないわね。学校近くの個室サロン、わかる？」



「ああ。使ったことはないけど……」

「その702号室。私の名前を出せば開けてくれるはずだから、そこで合流しましょう」

「？」

氷室の言葉に上条が疑問符を浮かべる。

個室サロンとは学園都市特有のサービスの1つで、普段学校や寮やらで何かと監視の目が常日頃から付けられストレスを感じる事の多い学生が、完全なプライベート空間を得るために時間貸しで部屋を借りることの出来る。言うなれば子供たちのための『秘密基地』だ。

無論、商売であるため時間あたりに相応の金額を支払う必要がある。それもこの学園都市ではそう言った娯楽関連のものには高めの税金がかけられているため、決して安いとは言い難い金額だ。しかも普通は使うたびに支払いをするシステムのはず……。

「年間契約で借りてるのよ。運営会社の株を持ってるから、その特典と割引だね」

「うわぁ……」

こんなところにも上条は氷室との格差を感じ、呆けてしまう。

「そんなことより、」

「つと、そうだった。わかった。そこに行けばいいんだな」

「とりあえずは。あとは臨機応変に、ってことで」

「わかった。気をつけろよ」

「そっちこそ」

そう言って二人は背を向け、振り返ることなく走り出す。

今は一時の時間も惜しい状況だ。一刻も早くインデックスを見つけ出し、保護しなければならぬ。

大通り方面に走って行った上条に背を向け走り出した氷室は、そ

のまま“空中を駆け上がり”手近なビルの屋上へと駆け上る。空気を『停止』させ足場とすることで、即席の階段としたのだ。

そのまま眼下に広がる夜の街を見下ろす。

人気のない夜の町並みは、どこか寂しく、そして恐ろしいものを感じる。

（――なんてね）

クスリと状況に合わない笑みをこぼし、氷室はゆっくりと息を吐く。

（とりあえずここまでは“予定通り”。思いの外、うまくいったわね）

そう、この状況は氷室の『演出』<sup>しかけ</sup>が功を奏した結果だった。

あの夜、氷室が上条達と出会ったことで、現在の状況は原作とは異なる展開となっている。

その最大の違いと問題点は『場所』とそれによる『環境の差』だ。

原作では上条達は小萌先生の自宅たるおんぼろアパートへと押しかける事になっていた。

そしてそこで彼女の手を借り、魔術を用いてインデックスの傷を癒し、そこを拠点に物語は進んでいくこととなる。

一方この世界では、氷室の手筈によりインデックスの傷は科学的な医療によって塞がれ、拠点も設備の整った清潔感溢れる病室で、三食昼寝付の悠々自適な生活を送れる環境にある。

そのため、外に出歩く必要性はなく、籠りっきりの生活を続けていれば問題ない状況となってしまうていた。

しかしそれでは原作で起きうるはずの事件が起きなくなってしまう。

それも物語を加速させ、終局へと導くために重要な要素を含む事件が、だ。

それを解決するためには、如何にかして魔術師たちを再び舞台へと上げる必要があった。

だが、病室内で上条と氷室が常に待機しては、向こうも無闇に手を出すことができない。

手を出させるためには、双方が病室を離れている状況を作り出す必要がある。それもごく自然に、誰にも疑われずに、だ。

まずは氷室自身の理由付けだが、こちらは大した事はしていない。単に前もって予定していた『診察』を忘れたふりをし、夢乃に迎えに来させればそれでいい。

後はそれを理由に病室を退出すればOKだ。

問題は上条だ。

取り決めとして「どちらか一方が所用で居なくなる場合は必ずもう一方がそばに張り付くこと」としている以上、氷室が部屋を離れれば上条は彼女が戻ってくるまで待機せざるを得ない。

とはいえ、取り決め自体は何の不自然さもない、むしろ当然の事のため、これを覆すには上条が止むに止まれず部屋を出る必要がある状況に追い込まなければならなかった。

そこで氷室は一計を案じ、まず上条に外へと買い出しに行かせた。無論、最初から外へと行かせたのでは不自然さが残るため、手近な場所で購入する筈のものを買えない状況とし、仕方なく自発的に外へと出るよう仕向けた。具体的には病院内の全ての自販機にある『宇治抹茶珈琲』を予め買い占めておき、その上で脅しをかけて絶対に買ってくるよう厳命したのだ。

それにより、上条は遠く離れた場所まで買い出しに行くハメとな

り、買ってきた『宇治抹茶珈琲』は途中で温くなってしまった。

そしてそれを指摘し、絶対零度による冷却を行いつつ、それによって生じた霧に乗じてこっそり上条用の飲み物を事前に用意していた別のものへとすり替えたのだ。数時間後にトイレに行きたくなるよう成分を調整した利尿剤入りのお茶へと。

後は夢乃が到着するのを待ち、氷室は『診察』を受けに行き、それが終わりに近づいた頃、彼は尿意を感じてトイレに行くために病室を後にする。

これで魔術師たちが付け入る隙の完成、というわけだ。

そしてこれまで手を出したくともできなかった彼らが、その“作られた”隙を逃すはずがない。

案の定、そこを突いて病室を襲撃し、インデックスは“思惑通り”窓から外へと逃げ出した。

（まあ、向こうの動きは半分賭けだったけど、うまく動いてくれて助かったわ）

動かなければ明日の退院後にまた別の方法を考えなければならなかったところだ。

（けどこれで条件はクリアした。上条君の方には間違いなく神裂がぶつけられるはず……）

原作でもおんぼろアパートにはない風呂を求めて銭湯に向かう途中、上条は彼女の襲撃を受けている。

あらゆる異能<sup>まじあつ</sup>を打ち消す事の出来る上条でも、彼女相手にはそれも通用しない。それを向こうも理解しているだろうからこそ、その対戦カードは覆らないとみていいだろう。

そして、そんな状況を作り出すのが、今回の目的であった。

（そこで彼はインデックスにかけられた『呪縛』を知ることとなる）  
それこそがこの事件を終局へと向かわせるために必要な鍵<sup>キー</sup>。

それを手に入れてもらうために、上条には戦って傷ついてもらわ

なければならぬ。

（我ながら残酷ね。いくら殺されることはないとはいえ、確実に大怪我を負う事になる戦いに向かわせるんだから……）

それでも物語を進める上ではなくてはならない一戦だ。なんと罵られようとも、これだけはこなし貫わなければならない。

（さて、その間に私は……）

氷室も氷室で仕込まなければならないことがある。

ただ原作をなぞるだけではなく、出来る事ならば穏便に事を済ませたいと願っている。

そのために解呪に必要なピースを“彼ら”にも手に入れて貰わなければならない。

「……と、その前に、」

周囲に意識を巡らせる。正確には今現在自身に干渉している『違和感』の正体に、だ。

その原因はステイルが展開している『人払い』<sup>Opria</sup>によるもの。

このルーンは展開した場所を所有地——即ち『私有地』とすることで他者が無意識の内に他人の財産を冒さないようにしようとする心理を利用した魔術だ。そのため、“初めから他者の財産を冒そうとする者”には効果は薄い。

しかし、だからと言って全くないわけではない。今の時代に生きている者ならば幼少期の頃から多かれ少なかれ『他人の物を奪ってはいけません』と躾けられ、無意識に自覚している。そのため『奪おう』と強く意識していても、心のどこかで『それはいけないこと』なのだという無意識の罪悪感が発生して『人払い』<sup>Opria</sup>の影響を受け入れる事になる。

そしてそれに強く反発しようとすれば無意識下の領域に大きな齟齬が生じ、無意識下で能力を制御している能力者にとっては、その

演算制御を乱す効果を生み出してしまふのだ。

それは氷室の身を守る『リアクティブ・アーマー反応停止』の効果を大きく減らす事へと繋がる。

（けど、それが解っているのなら話は簡単）

一部の能力者——とりわけ高位能力者はその能力を使うに当たり、自らの能力に則った対象を観測する力も併せ持っている事が多い。

たとえば電気使いなら電磁線の可視化や電気信号の読み取りなど、パイロキネシスト発火能力者ならば周囲の温度・熱量の感知・計測といった具合だ。

そして氷室もそんな観測能力を持っている。

彼女の能力『カウンターストップ抑止力』はベクトル干渉系の能力だ。当然それを扱うためには『ベクトル』の観測が必須となるため、意識を向ければそれがどんな方向に、どれぐらいの力で働いているのかを直感的に読み取ることができる。

故に『Opia人払い』と言う魔術の力が自身に影響を及ぼそうと向ける『干渉ベクトル』を解析し、逆算し、それを『リアクティブ・アーマー反応停止』のフィルターに追加してやれば、干渉を止め、影響を防ぐことができる。

それは言うなれば『魔術』という名の新たな制御領域の拡大の取得だ。  
クリアランス

この世界に存在するもう一方の側面への介入。そして、その力は氷室がこの先の未来を切り抜けていくために必ず必要となってくるものでもある。

そう言った意味ではこの事件に介入を行ったのは、彼女にとって偶然とはいえ僥倖だったと言えるだろう。

氷室は自らの行動によって得られるものを何一つ無駄にはしない。また無駄にするだけの余裕もない。

無駄な行動をとり続けられる程、彼女を取り巻く環境は易くはない。もんだい

だから常に意図を持ち、意味を持たせ、思考を続け、行動し、最良の結果を求め続ける。

そのためにはなんだって利用する。誰だって活用する。

(だから、盗らせてもらおう魔術師。あなた達の領域を)クリアランス

『違和感』が晴れた。これで『人払い』Opiriaによる無意識への干渉は行われない。

けどまだだ。まだこの程度では足りない過ぎる。

意識を拡大し、干渉領域を『人払い』Opiriaの仕掛けられた空間全てへと広げていく。

『抑止力』カウンターストップに距離の限界はない。対象の位置情報さえ取得できれば、例えば地球の裏側でも干渉は可能だ。

もつとも処理能力の問題から現実的には実行は難しく、即応性を考えれば精々目測が可能な視界範囲内が限界だと言える。それ以上の距離はできないとは言わないが、一筋縄では行かない至難の業だ。しかし、ただ『観測』するだけならば、距離の限界はさほど問題にはならない。

そして今回観測するべきベクトルは“空気の流れ”——『気流』だ。

人が動けば空気が攪拌され気流に乱れが生じる。その乱れを観測し、その原因となっている存在を逆算して辿れば、現在逃亡中のインデックスとそれを追うステイルの居場所を割り出すことができる。もっとも普段は多くの人が行き交うため、この方法で目的の人物を割り出すことなど不可能に近い。よほど特徴的な“乱れ”を生み

出すような存在ならともかく、ただ単に歩いている、走っている程度で生じる“乱れ”となれば全ての人がその条件に合致し、かつそれらが互いに干渉しあって複雑化してしまうため実際には不可能だ。しかし現在、この周囲は『人払い』<sup>Oppia</sup>によって無関係な人物が排除されており、自分と上条、そしてインデックスと魔術師達しか存在しない空間と化している。ならその元凶の数は限定されており、その何れかが目的の人物であるとわかっている以上、彼らを特定し補足するのはそう難しい話ではない。

だから上条のように馬鹿正直に地道に地べたを駆けずり回る必要は氷室にはないのだ。

「……見つけた」

氷室はニヤリと唇の端を持ち上げ、躊躇うことなく夜の街へと飛び込む。

『魔術』という名の異能が存在する新たなる領域<sup>クリアランス</sup>へと。



## 第09章 とある夜街の魔術師戦《ウィザーズバトル》（前書き）

長いため一度途中で切ってます。続きは明日にも更新予定です。  
また今回ノタリコンをルビに振っている関係上、携帯の機種によっては見辛いかもしれません。

## 第09章 とある夜街の魔術師戦《ウィザーズバトル》

「――巨人に苦痛の贈り物を！」  
Purissaaupiz Gedo

轟！ という音とともに灼熱の炎剣がインデックスの背後から迫りくる。

それを前方に飛び込むかのようにさけ、即座に立ちあがると振り返ることなく再び駆け出す。

「ふむ、怪我の方は完全に回復したようだね」

冷静にそんな事を述べながら彼女を追うスタイルは再びその手に炎剣を生み出し、振るう。

それをインデックスは真横に飛んで避け、そのまま狭い路地を転がるように切り抜け少し開けた大通りへと飛び出す。否、飛び出してしまったと言うべきか。

（いけない……！）

敵の目を欺き逃げ延びるには、死角の多い狭い路地を抜けていくべきだ。障害物も多く駆け抜けるには不都合が多いがそれは相手側も同じことが言えるため、うまく利用すれば追撃の速度を遅らせ、距離を引き離すことができる。攻撃も手近な障害物を盾として利用すれば防ぐことがある程度なら可能だ。

しかしこうして開けた場所ではそれらを活用することはできない。その上、ただでさえ今までその身を守ってきた『歩く教会』は壊れ、その絶対防御力は失われている状況だ。しかも病室からそのまま抜け出してきたため、着ているのは入院患者用の貫頭衣。それに防御力なんてものではなく、一撃でも攻撃を受けてしまえばほぼ間違いない敵の手に落ちてしまう。

（急がないと……）

すぐさま立ち上がり別の路地へと逃げ込もうとし、

「巨人に苦痛の贈り物を」  
Purissaaupiz Gedo

「左方へ歪曲せよ！」  
TTL

背後から響いた声に対し、とっさに声を張り上げる。

それは『強制詠唱』<sup>スベルインターセプト</sup>と呼ばれる魔術を使うことの出来ないインデックスが敵の魔術からその身を守るために使用する対魔術師用の護身術の1つだ。禁書目録から相手の術式を解析し、高速詠唱<sup>ノタリコン</sup>による割り込みをかけ、その発動を止めたり誤作動を引き起こさせるというもの。その魔術が自律行動を取る類の物ならば効果はないが、相手の意思により遠隔操作が行われているものならば、割り込みをかけ照準を逸らすことができる。

その『強制詠唱』<sup>スベルインターセプト</sup>に従い、インデックスを飲み込まんと一直線に迫っていた炎は軌道を左へと逸らし、すぐ傍のアスファルトを砕いて爆ぜた。

「きゃあ！」

その爆風と飛び散る破片に煽られたインデックスの体はそのまま大通りの中央へと吹き飛ばされる。

「選択を誤ったようだね。君らしくもない」

逸らすのなら『左』ではなく、爆風を受けても路地へと飛び込むことの出来る『右』を選択するべきであった。

「焦っているのかい？」

「――っ！」

凶星だった。

病室の入り口に魔術師<sup>ステイル</sup>の姿を捉えた瞬間、思い浮かんだのはあの夜、自らを助けるためにこの魔術師へとその右手一本で戦いを挑み、見事殴り倒した少年の姿だった。

トイレに行くとして行った彼がもしこの場に居合わせたのなら、きっとまた戦うことになる。インデックスを魔術師の手から守るために。

それはダメだ、とインデックスは即座に首を振った。いくら彼の右手にあらゆる魔術を打ち消す力が宿っていても、それだけで100%勝てるほど魔術師という相手は容易くはない。ましてや自

分を庇いながら戦うなど、ただでさえ低い勝率を更に下げる事になる。

いや、それ以前に自分の事情にこれ以上無関係な彼を巻き込みたくない、という思いが即座に窓から逃亡するという選択をインデックスに取らせていた。

しかし、だからこそきつと彼は誰も居なくなった病室を見て、何があったかを悟り追いかけてくるだろう。

その前にこの魔術師から逃げ延び、どこか遠くまで行かなければならない。

もう傷は癒えている。後はイギリス清教の教会を見つけ出し、そこで保護してもらえば終わりだ。これ以上、魔術とは無関係な彼らを巻き込む必要もなくなる。

だから遠くへ。この魔術師からも、あのとうまという少年からも、手の届くことのない、どこか遠くへ。

だがその焦りが冷静な思考を阻害し、判断力を鈍らせ、逃げ場のない窮地へと自らを追いやる結果となってしまった。

「君の気持は解るよ。僕だってできる事なら一般人を巻き込みたくはないからね。だからこそしてこのあたりに『人払い』をかけさせてもらっているわけだし……」

これだけ派手に逃げ回っているにも関わらず誰も駆けつけてこないのは、そのせいだ。

それはインデックスにとっても都合はよかったが、だからと言って安心できるものではない。そんな『人払い』すらあの少年の右手は打ち消してしまい、ここへと辿り着く道を開くことになるだろう。彼は来る。きつと、絶対に。でなければあの時すでに逃げ出していたはずだから。何より、彼自身がそう口にしていたではないか。でもだからこそ巻き込めない。巻き込むわけにはいかない。

「けど、向こうからやって来るならこっちとしても対処せざるを得

ないからね。どうだい？ 君が大人しく僕らとともに来てくれれば、そんな事にもならないんだが……」

「お断りだよ」

即座に否定した。確かに彼らに従えばあの少年は戦わずに済む。しかしだからと言って10万3000冊の魔導書を彼ら魔術師の手に明け渡すわけにはいかない。

まだ逃げる術は残されている。だから絶対にあきらめるわけにはいかない。

「そうかい。なら——」

魔術師ステイルの手に再び炎が宿る。

（あの攻撃を逸らして目晦ましにして、それから路地へと逃げ込む——）

方針を立て、必要な『強制詠唱』ノタリコンを頭に思い浮かべ、

「インデックス！」

その背後からやってくる少女の姿に両目を見開いた。

「サツキ——っ！」

あの少年と同じく、自分を助けてくれた少女。血止めをし、病院を手配し、姉のように、母のように優しく接してくれた聖母のような少女。

インデックスを大事に思ってくれる、インデックスが巻き込みたくない、もう一人の少女。いっほんじん

「やれやれ。困ったね、これは……」

「ダメ、サツキ！ 来ちゃダメっ！」

とっさに拒絶の言葉を発するが、駆け込んでくる少女は止まらない。

「“また”巻き込んでしまったみたいだね」

そう言うやいなや、魔術師ステイルはその右手に掲げた炎を少女へと向け、

「——巨人に苦痛の贈り物を！」  
Purissaauppiz Gedd.

「ダメええええ——！」

インデックスの叫びもむなく、放たれた炎は少女の体をあっけなく飲み込んだ。

「……………」

「これが現実さ。君にもわかっただろう？」

懐から煙草を取り出し、火をつけながら魔術師ステイルがそんな事を言うてくる。

それはインデックスの耳には届いていたが、しかし彼女の意識は燃え盛る炎の中に消えていった少女へと向けられていて心にまでは届かない。

それでもなお魔術師ステイルは紫煙を吐き出しながら続ける。

「追ってきたのが彼女だったのは意外だったけど、さすがにあの少年のような奇跡ことはないだろうさ。あんなバカげた奇跡ちからが2つも3つもあったら、魔術師なんてやってられない」

あらゆる魔術を打ち消す力。それは魔術師たちの存在を否定する力だ。魔術が通用しないなんて、魔術師たちは何のために発狂する思いをしてまで力を求めたのかわからなくなってしまう。その原理や理屈は不明だが、その存在は紛れもなく魔術師たちの天敵となり得るだろう。

「さあ、これでわかっただろ？ 君がどんなに彼らを思って逃げ出そうが、彼らはそれを無視して追いかけてくる。そういえば、もう一人の少年の方は、今どうしているのかな……？」

「！？」

サツキがここに来たという事は、やはりとうまもインデックスを探しに来ているという事だ。

「ま、彼の相手は神裂に任せる事になっているから、僕が考える事でもないんだけどね」

そう言って深く紫煙を吐き出し、

「神裂は『聖人』だよ。君にならわかるだろ、その意味が」

「――!?」

魔術師スタイルの言葉にインデックスは言葉を失った。

「そう、アレの『右手』がどんなものであれ『聖人』相手に勝ち目はない。もしかすると今頃すでに始末されているかもしれないな……」

「――とうま!?」

インデックスは衝動的に駆け出そうとした。しかし魔術師スタイルがそれを阻むように立ちふさがる。

「どこに行く気だい? 無駄だよ。君が行った所で結果は同じさ。それよりここで大人しく投降してくれば、“まだ生きているかもしれない”彼を助ける事も可能かもしれないけど?」

それはまさしく悪魔の囁きだった。

今、とうまを襲っている『聖人』が彼の味方なのならば、この場ですぐに連絡を取り合う術も持っているだろう。そしてインデックススタイルが彼に投降すれば彼らの目的は達成され、とうまをこれ以上傷つける意味はなくなる。彼を助ける事が出来る。

しかしそれは魔術師の手に10万3000冊を明け渡すという意味に繋がる。世界を須らく改変するだけの力をもった恐るべき『禁書目録』を、だ。

「さあ、どうする? 彼を見捨てて『禁書目録』10万3000冊を守るかい? それとも罪のない仔羊を助けるためにその身を捧げるかい? なに、

どちらを選んだところで責めはしないさ。どちらも君の職分だしね」

インデックスはイギリス清教に仕えるシスターだ。上条当麻は信徒ではないものの、この世の全ての人間は神のより造られ、その祝福を受けるべき存在だ。そして教会の徒であるインデックスシスターには、そんな彼らを導き、救う義務がある。たとえその右手が神のご加護を打ち消すような代物であっても――、いや、だからこそ神の僕たる自らが救わなければならない存在だ。

同時にインデックスは『禁書目録』を守る義務がある。それは世

界を須らく改変するだけの力をもつ危険な代物であり、それを魔術師に奪われる事は世界を危機に陥れる事に繋がる事になる。それを防ぐことは世界とそこに住まう多くの人々を救う重要な役目だ。

自身を案じ助けようとしてくれている一人の少年か、はたまた見<sup>上条当麻</sup>ず知らずの世界中の人々か。<sup>赤の他人</sup>

どちらかを選べと言われれば、後者を選ぶべきだとわかってはい<sup>1</sup>る。1を救うために9を犠牲にするなんてことは許されない。せざるを得ないのであれば逆だ。世界を救うためにとうまを見捨てるべきだ。

だけど……、

「悩んでいる時間はないと思うけど？　こうしている間にも彼の命<sup>アレ</sup>は刻一刻と死に近づいているわけだしね」

まだ死んではない、そう魔術師<sup>ステイル</sup>が暗に告げたことに気付きホッと安心するも、同時にその命が今にも失われそうになっている現実を理解し、インデックスは自らの身を抱いた。

わかっている。見捨てるべきだ、と理性が叫んでいる。こことうまを助けたところで、この魔術師の目的如何では再び彼を窮地に陥れる可能性があることも。

それに彼自身が言っていた通り、上条当麻の右手は魔術師にとって天敵となる。そんな存在を知りながら、わざわざ生かしておく通りはないことも。

けど、もしここで素直に従って、この場だけでも彼の命を救う事ができたのなら。

『禁書目録』はインデックスの記憶の中にのみ存在し、それを知るためにはインデックス自身がその口で語らない限り手にすることが



できない代物だ。直接記憶を覗く術もあるが、それが魔術であるならば『禁書目録』を使って防ぐこともできる。

だからまだ間に合う。たとえ自分が彼らについて行ってもそこで最悪を迎えるわけではない。

「さあ、答えは出たかな？」

ステイル  
魔術師の問いにインデックスは頷きかけ、

「答えはノーよ」

それを発したのはインデックスではなく、魔術師ステイルの背後で燃え盛る炎の中からだった。

「―――、な」

ギクリ、ステイルの動きが固まり、錆びたブリキのおもちやのようなきこちない動きで振り返る。

その視線の先で燃え盛る炎が、その中に佇んでいた“少女の右手によって打ち払われた”。

「悪いわね。そんなバカげた奇跡ちからが2つもあって」

「馬鹿な……」

ありえない、とステイルは現実を否定した。認めたくなかったから。認めるわけにはいかなかったから。

しかしそれは紛れもない事実だ。少女の右手が振るわれた瞬間、炎は初めから存在しなかったかのようにかき消され、その姿を失った。

それはあの夜、あの少年が見せた奇跡と全く同じ光景だった。それをステイルはその目でしかと見ている。そんなバカげた奇跡ちからがこの世に存在する事実を認めている。

（馬鹿な！ だからと言ってそんな力が2つも3つもあってたまるか！）

しかし目の前で起きた現象はそれを肯定している。

目の前に立つ少女はあの少年ではない。性別すら異なる全くの別人だ。

だが起こした現象は同じ。魔術を打ち消す、魔術師の存在を否定する天敵たる力。

（いや、待て。そんなことは“ありえない”。そう、何か別の方法で、“そう見せているだけ”だ）

現実を直視したくない感情がステイルにそう判断させ、天敵の存在を否定する。

「はは！　すごいな。どうやって防いだかは知らないけど、無策で飛び込んできたわけではなさそうだ。けど、悪いが君にかまけている時間はないんだよ。申し訳ないが、全てを忘れ帰ってもらえないかな？　僕としてもこれ以上無関係な人間を殺さなければならいなんてしたくはないからね」

「問答無用で攻撃してきた割にはお優しい言葉なこと。なら遠慮なく帰らせてもらおうわ——その子と一緒にね」

くい、と顎でインデックスを示し不敵な笑みを浮かべる少女に、ステイルは首を振った。

「いやいや。それは遠慮してもらえないかな。僕はこの子に用があるんだ」

「ふーん。こんな人気のないところで少女を追い回す必要がある用って……、わかった」

少女は何かを会得したかのように深々と頷き、

「貴方ロリコンなのね」

「——、」

ステイルの額に井型の血管が浮かぶ。

「悪いが用があるのはこの子の頭の中にある10万3000冊の魔導書の方だよ。それと——僕はこの子と同じ14だ！」

「その老け顔で？　しかも喫煙までして、歳をごまかそうだな

なんて無理があるでしょ。……安心しなさい。別に幼女趣味だからって私は差別しないから。区別はするけど……」

いっそ憐れみを込めるような視線を向けられ、額の血管がさらに太さを増す。

「違う！ 本当に僕は14歳だ！ それに14だって煙草は吸えるだろ！」

「未成年者の喫煙はこの国でも認められていないはずだけど？」

「法に縛られていたら魔術師なんてやってられない！」

「つまり自分が法を犯してるって自覚はあるわけね」

「余計なお世話だ！」

いよいよもってヤバ気になってきた額の血管を抑えつつ、ステイルは話が逸れ始めている事に気付き、大きく息を吐いて気を落ち着かせる。

「もういい。君に退く気がないというのなら仕方がない」

「変態相手に退く理由なんてないと思うけど？」

あくまで自分を幼女主義者にしたらしい少女の言葉に、ぶちりと何か切れる音を聞いたステイルは、

「ふふ、いいだろう。そこまで言うのであれば——Fortis931」

声を張り上げ徐に両手を掲げる。

「『強者』？」

「そう。魔法名だよ。あの少年から聞いてはいないのかい？」

「殺し名、だったかしら？」

「そうさ！」

ボウ！ と両手の掌に炎が灯る。

AshToAsh DustToDust  
「灰は灰に、塵は塵に——」

燃え盛る紅蓮の炎剣と化したそれを大きく振り上げ、

SqueamishThroatsword  
「—————吸血殺しの紅十字！」

力ある言葉と同時に放たれた二本の炎剣が、十字を刻んで少女へと襲い掛かる。

先ほどの炎よりも威力も範囲もある攻撃だ。まず避けられない。避けられたとしても耐えきれぬわけがない。

そうたかを括るステイルの目の前で、少女は右手を差し出し――

「なるほど……、これが『魔術』ねえ」

交差した炎剣の中心を受け止め、握りつぶした。

――

今度こそ、ハッキリとその光景を目にしたステイルは言葉を失う。もう否定はできない。逃避することも不可能だ。

理由は分からないが、目の前に立つ少女の『右手』にも、あの少年と同じ『魔術を打ち消す力』がある。

（……まさか、）

偶然であるはずがない。偶然が同じ場所に二人も存在し、魔術師じふん達に向けられてくるなんてことあるはずがない。

だとすれば、それは意図的なものであり、この少女もあの少年も学園都市に所属する人間だ。

なら答えは一つ。

（学園都市は“魔術への対抗手段”を完成させたというのか！）

それがこの『魔術を打ち消す右手』だということであれば、危険だ。魔術側の世界を脅かす要因になりかねない。

今現在、魔術と科学は世界を二分し、それらが互いの領分を冒さないことでその均衡を保っている。

しかしそれはあくまでギリギリの線で踏みとどまっているだけで、決して両者が仲良しこよしで手を取り合っているわけではない。天秤の針が僅かにでも振れれば即座に戦争へと発展しかねない危険を常に孕んでいる。

だからこそ、科学側の筆頭たる学園都市が魔術への対抗手段を模索するのは当然と言える。

しかしそれが現実のものとなり、それがこんな非常識な代物であるのであれば、

天秤の針はもう、振り切らざるを得ない状況となる。

魔術と科学は互いにぶつかり合い、世界を巻き込んだ一大戦争が勃発する。

動揺を隠せないステイルを尻目に、少女は何かを噛みしめるかのように、

「なるほど。火種と可燃物は魔力によるものだけど、『燃える』という現象そのものは物理法則に則ったもののね」

「だ、だからなんだって言うんだ——」

「別に、ただの確認よ。……それよりまさかこの程度で終わりってことはないでしょうね、『強者』さん？」

一步、何気なく踏み出されたその足にステイルの足も一步下がる。  
(な、恐れているというのか！ この僕が！)

一度その力に敗れた身ではあるが、だからと言って怖気づく程のものではない。

そう、すでにその敗北から学び、対策は練ってある。

「——世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

問題ない。そう思いながらも止まる事のない嫌な汗を無視しながら

魔術師は朗々と声を上げる。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり、それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不

幸<sup>D</sup>なり。

その名は炎、その役は剣。<sup>I I N M S</sup>

顕現<sup>I C R</sup>せよ、我が身<sup>M</sup>を喰<sup>B</sup>らいて力<sup>G</sup>と為<sup>P</sup>せ――――

―ッ！

ステイルの修道服の胸元が大きく膨らんだ瞬間、内側からの力でボタンが弾け飛んだ。

轟！ という炎が酸素を吸い込むと同時に――服の内側から巨大な炎の塊が飛び出した。

それはただの炎の塊ではなかった。

真紅に燃え盛る炎の中で、重油のようなドロドロとしたモノが『芯』になっている。それは人間のカタチをしていた。タンカーが海で事故を起こした時、海鳥が真っ黒な重油でドロドロに汚れたような――そんなイメージを植え付けるモノが、永遠に燃え続けている。

「それが、『イノケンティウス』」

「そうだ。その意味は――『必ず殺す』」

「『必殺』とは大きく出たわね。……けど、その名は返上するべきじゃない？ 一度敗れてるわけだし」

確かに、あの夜、あの少年の手により『魔女狩りの王』<sup>I N K E N T I U S</sup>は打ち破られた。

しかし、

「残念ながらすでに対策済みさ。刻印<sup>ルーン</sup>はラミネート加工を施し、周囲二キロに渡って結界を刻んである」

ましてやここは屋外。スプリングラーなんて代物は使えず、雨でも降らない限り水で洗い流すなんて荒業は使えない。そしてたとえ雨が降ろうともラミネート加工された刻印<sup>ルーン</sup>のカードは水を弾き、インクが滲むなんて事もない。

「君のその『右手』に魔術を打ち消す力があるとも、この『魔女狩りの王』<sup>ケンティウス</sup>は刻印<sup>ルーン</sup>そのものを消さない限り消える事はない。そして使用枚数は16万4000枚。その全てを一度に排除することなんて不可能さ」

だから結果は変わらない。『必殺』の理は揺るがない。

しかしそれを聞いてなお、目の前に立つ少女は、

「ふーん……なら、試してみる？」

揺るがない。超然とした態度を崩さず、不敵な笑みを浮かべ挑発してくる。

「強がる必要はない。死にたくないのならすぐさま逃げるべきだ」

「この期に及んでお優しいこと。それとも自信がないのかしら、『必殺』する自信が？」

「――言っただけ、能力者」

退く気はない、と。

ならば取るべき行動は一つだ。

「殺<sup>や</sup>れ、イノケンティウス！ あの子を焼き殺せ！」

ステイルの命を受けたイノケンティウスの手には炎の剣が握られる。

いや、それは剣ではない。人間でも磔にするような、2メートル以上の巨大な十字架だ。

それを両手に握り、少女に向かって勢いよく振り下ろす。

少女は動かない。『必殺』の結果を受け入れるかのように、摂氏3000度もの炎の十字架が振り下ろされる様を見続け、

ドガンッ！ という轟音をが鳴り響き、砕けたアスファルトの破片が漆黒の夜空に高く舞い上がった。

## 第10章 とある魔術師の心理戦《サイコバトル》

爆煙に包まれたその場所を見つめながら、ステイルは少女の命が潰えたことを確信する。

「これで終わりだな。なんだかあっけない終わりだったけど……」  
もう少し抵抗があるのではないかと思っただけに、あっけない幕切れに肩透かしを食らった気分となる。

その虚しさを紛らわすためにもう一本煙草を取り出すと、火をつけ暗い夜空に真っ白な白煙を吐き出す。

「さて、これで——」

わかっただろう、とインデックスへと向き直ろうとし、

「これで——、何？」

死んだはずの少女の声を耳にし、口にした煙草を取り落した。

「—————、」

無言のまま振り返る。

そして見た。

轟！ と燃え盛る『イノケンティウス魔女狩りの王』の脇に立つ“殺したはずの少女”の姿を。

無然とした態度で腕を組み、その長い黒髪の手を掴んで弄ぶ五体満足の少女の姿。

「さすがは切り札って所かしら。一步間違ったら危なかったかもね」  
おかげで毛先が焦げちゃった、と何の気なしに呟く少女の様子に、  
ステイルは叫ばざるを得なかった。

「毛先が焦げただど！ ありえない！ イノケンティウスは摂氏3000度の炎だぞ！ それに毛先を焦がすだけで済むはずが——」  
そこまで言っただけで気が付いた。

毛先どころではなく、少女の身に何一つ変化がないことに。



そしてその彼女の傍に立つ『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>が微動だにしないことに。

「な、何をしているイノケンティウス！ その女はまだ死んでいない！ 早く殺せ！」

そんなステイルの叫びにも『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>は反応を示さない。

いや、反応はしている。だが――、

「イノケンティウス！」

「無駄よ。この子はどう動けない」

まるで狭い空間にでもおしこめられたかのように身動きする術を奪われた『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>は、轟々と燃え続ける事しかできない。

「何を、した……」

打ち消すわけでもなく、かといって何かをしたようにも見えない。しかし現実として『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>は拘束され、その力を封じられている。

そんなステイルの問いに、少女はクスリと笑みを浮かべ、ポケットの中から1枚のカードを取り出す。

そのカードには見覚えがあった。無いはずがない。それはステイルが『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>を生み出すためにバラ撒いていた刻印<sup>ルーン</sup>のカードの1枚。

「イノケンティウス――使用されているルーンは『松明』<sup>Kaunaz</sup>と『神』<sup>Ansuaz</sup>。意味は『炎の神官』って所かしら？」

ひらひらと手に持ったカードを振りながら、そこに記された刻印<sup>ルーン</sup>を解説する少女。

「その名は15世紀末、魔女狩りや異端審問に力を入れた第213代ローマ教皇イノケンティウス8世の事ね。そして魔女の処刑は火炙りと相場が決まっている。これは炎が『浄化』の意味を持っているから。そんな彼の所業と炎による悪意の浄化――即ち敵性体の排除を組み合わせた魔術……と言った感じかしら？」

「ぐっ……」

少女の指摘にステイルは呻いた。

魔術を嗜んでいる者ならば、その刻印<sup>ルーン</sup>を目にすればこの程度の事は容易く読み解くことができる。

しかしそれを読まれたところでステイルにとっては大した痛手にはならない。

『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>の厄介なところは無数の刻印<sup>ルーン</sup>を以てそれを発現させていることだ。

ひとつの刻印<sup>ルーン</sup>だけで構築されたのであれば、その一つを排除されればその時点で終わってしまう。しかし無数に存在する刻印<sup>ルーン</sup>を一つ一つ排除するにはかなりの時間を必要とするため、その間に『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>が敵を捕らえ確実に排除する。

無論、そのためには準備にも相当な時間を必要とし手間がかかるというデメリットはあるが、元々『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>は拠点防衛用の魔術だ。その目的を考えればそれほど問題とはならないし、看破された程度で即座に如何にかなる代物でもない。むしろあの少年があの短い時間の中で、それを可能とする手段を構築したことの方が異常なのだ。

それより問題なのは、それを見抜いたのが“学園都市に所属する人間”であるということだ。

科学側の人間が魔術に理解があるはずがない。それがこの世界における常識だ。無論、一部の――上層部に位置する人間はその存在自体を知っているが、内容までは理解してはいない。せいぜい<sup>超</sup>自分達とは異なる異能である、その程度の認識だ。

しかし目の前の少女は正しく『魔術』を理解していた。

それはつまり『魔術』について相当な知識を保有しているということである。

いよいよもってステイルの中で、「学園都市が魔術を無力化する力を開発した」説が有力になってくる。

「ま、そんな事はどうでもいいんだけど……」

興味がないとばかりに少女は手にしていたカードを投げ捨て、  
「さすがにこのクラスの切り札を二枚も三枚も持っていないだろうし、コレも一体しか出せないみたいだしね。もうさすがに打ち止めでしょ？」

そう言って静かに近づいてくる少女にステイルは無言を貫く。

確かに少女の言葉通り、ステイルの持ち得る手札はもうほとんど切られている。他にも手札<sup>カード</sup>がないわけではないが、それらは補助的なものばかりで攻撃に用いるような手札は炎剣と『魔女狩りの王』<sup>イノケンティウス</sup>だけであるのには変わりはない。そして今から新たにカード<sup>カード</sup>を作り出すなんて暇はない以上、魔術師<sup>ステイル</sup>にこれ以上の切り札は存在しない。だが、切り札<sup>カード</sup>がないことが手段<sup>手段</sup>がないことには繋がらない。

（なら、直接叩き込めばいいだけだ！）

その手に炎剣を取り、近寄ってきた少女との距離を一気に詰めて襲い掛かる。

（とった——っ！）

少女が反応できないうちに振るわれた炎剣は、確実に少女の身を焼き切る——はずだった。

「な———、」

振るわれた炎剣は確かに少女の体へと斬り付けられた。

しかしその切っ先が少女の肌に触れた瞬間、ピタリと停止しその肌を焼き切る事は叶わない。

（——違う。剣が止められてるんじゃない。止められているのは——）

「残念無念、また来週っ！」

「……ッ!？」

ステイルがその答えにたどり着く前に、大きく蹴り上げられた少女の足が男の急所を正確に捉えた。

その壮絶なる痛みに、思わずステイルは股間を抑え前かがみとな

って蹲る。

そんな苦悶に喘ぐ姿を、元凶たる少女は「ふふん」としてやりとりと言った笑みを浮かべ見下ろしている。

ちなみに、その少女も以前は同じ男であり、その痛みの何たるかを理解しているはずなのだが、そこに一切の遠慮も躊躇も存在しなかった。むしろだからこその一撃とも言える。

『変態には死を！』とでも言いたげな表情を浮かべた少女は、徐々にステイルの顔を覗き込み、

「まず詫びとくわ。私は上条君みたいに道理も理屈もすっ飛ばして魔術を打ち消すなんてデタラメな力は持っていないの」  
そう告げた。

「私の能力は『ベクトルの停止』。この世のあらゆるベクトルの量を0とし、『止める』ことの出来る能力。『燃える』って現象は、要は酸化反応だから。それによる発熱と発光が人の目には『燃えている』と認識されているわけ。なら『酸化』そのものを『止めれば貴方の魔術を打ち消すことができるって訳よ」

奇しくもステイルが最初にした予測は当たっていたのだ。  
そしてその説明を裏付けるようにステイルの体はピクリとも動かない。動かそうとしてもその力を『止め』られる。

あらゆる力の停止。そんなものが実在するのかと、ステイルは慄く。

「な、ならイノケンティウスは！」

酸化を止めているのであればイノケンティウスも消えているはずだ。消えて、そして新たに復活するはずだ。

「ああ、この子は単に消しただけじゃすぐに復活するみたいだから？ 周囲の気体を『止めて』、ちよつと籠の鳥になってもらっているだけよ」

酸素の流入自体は止めず、そこから『魔女狩りの王』が抜け出そ

うとしても即座にその穴を塞いで『止め』、外への脱出を防いでいるのだと語る。

「――――」

それがどれほどの事なのかを正確に理解することは能力者でないステイルには不可能だ。しかし容易い事ではないことぐらいは予想がつく。

少なくとも目の前の少女の口調のように気安いものでは決してないはずだ。

「さて、そっちの質問に答えたんだから、今度はこっちが質問する番ね」

「質問、だと……」

「ええ、そうよ。ネセサリウス必要悪の教会の魔術師さん」  
「――――っ!？」

その言葉にステイルは思わず背後を振り返った。

それがその言葉を肯定することだとわかっていても、それを“あの子”に聞かれるわけにはいかなかったから。

「ビンゴ」

そんな声を聴きながら振り向いた先に見た光景にステイルは再度慌てる事になる。

視線の先には確かにインデックスが居た。しかしその体は冷たいアスファルトに倒れピクリとも動かない。

「ああ、安心していいわ。ただ気絶してるだけだから」

「な、に……」

「呼吸をね、ちょっと止めさせてもらったのよ。聞かれたくないんでしょ？」

そのために窒息させ気絶させたのだと。

(いつの間に――!?)

思えば途中から彼女の声が聞こえなくなっていた。

イノケンティウス

『魔女狩りの王』を出した時にも、その前の『紅十字』を放った際にも。

「まさか、最初から……！」

「だと言ったら、どうする？」

だとすれば、今までの行動は全て彼女の手の中で踊らされていた結果だということになる。

ステイルを執拗なまでに挑発していたのも、魔術を打ち消した力をあの少年の『右手』だと錯覚させたのも、『イノケンティウス魔女狩りの王』まで出させ、その全てを尽く防いだのも、インデックスを気絶させたことに気が付かせないための陽動だ。

そしてそれは全て先の問い——ステイルネセサリウⅡマグヌスが必要悪の教会の魔術師である事を確認する、そのために仕組まれたことなのだという事になる。

言い知れぬ怖気を感じ、ステイルは震えた。

“あらゆる力を止める能力”。確かにそれは恐ろしい力だ。正直すぐには対抗策が見当たらない。

しかし彼女の真の恐ろしさはそこじゃない。本当に恐ろしいのは、それを十全に活用し、自らの目論見を一切悟らせることなく、相手を意のままに操るその脳力ずのうだ。

魔術師同士の戦闘とは、得てして手の内の読み合いと駆け引き行う心理戦となる。

相手の魔術の正体を看破し、その弱点を探り、そこを正確に突く事で無力化し、敵を打倒する。これが魔術師同士の戦闘だ。

それ故、相手の意図や目的を探るのは基本中の基本となる。ましてや自分が誘導されている事に気付かないなど、魔術師として失格とも呼べる事態だ。

しかしステイルは気付けなかった。魔術師でもない、能力者風情に、気付けぬまま良いように踊らされたのだ。

目の前の少女をインデックスを助けに来た一般人と誤解し、その

後はあの少年と同じ力をもつ天敵だと錯覚させられ、その意識をすべて彼女に向けたまま、背後で起きていたことになど見向きもなかった。させようとすら思わなかった。

言い訳をするのであれば、助けに來たはずの人物がまさか助け出すべき対象の身動きを奪う事なんて考えもしないことだ。

しかしその前提がそもそも間違っていたのなら？

この少女の目的が“インデックスの救出”ではなく、“ステイルに問いかける事”だったのならば。

その行動の全てに納得がいく。

そして少女は最初からそのつもりで動き、企み、実行し、ステイルをその手の上転がしていたのだ。

気付いた時にはもう遅い。全てが終わった後によやくそうだったと気付かされるレベルの心理誘導。むしろこうして態々ネタ晴らしをしてくれなければ今を以ても気付けなかっただろう。

そしてステイルは今度こそ打つ手はなくなった。

身動きは一切取れず、僅かにでも動こうものなら即座に『停止』

させられるだろう。『イノケンティウス魔女狩りの王』も封じられ、その気になればインデックスにしたように呼吸を止めて気絶させられる。

いや、それができるのならそのままその先——文字通り『息の根』を止める事すら可能なのだ。

「化け物が……」

視線一つで、意識一つでいとも容易く人の命を奪い取るそれは、もはや人の領域を超えた力——化け物が持つべき力だ。

「そんな目で睨まれても、ね……」

少女はそう言って眉を顰めたが、ステイルは構わず睨み付ける。それ以外に出来ることなど何一つないのだから。

「まあ、いいわ。それより質問よ」

「質問、だと……？」

それは先ほどの問いで終わっているのではないか、と思ったステイルだが、すぐさま思い直した。

確かに少女はステイルをカマにかけ必要悪の教会の魔術師であることを知りえた。しかしそれはどちらかと言えばすでに知っていた事実の確証を得る行為であり、“質問”として投げかけられたものではない。

だとすれば、この少女がここまでして聞きたい“質問”とはなんなのか。

僅かに興味がわいた。

「答えてくれる気になったみたいね」

まるでこちらの心を読んだかの様な言い回しに、ステイルの顔が苦々しくゆがむ。そう思うように仕向けられたのだと気付いたからだ。

この場合は完全にこの少女によって支配されていた。

苦し紛れにその顔に唾を吐き出すが、それは少女の肌に触れるより前に『止められ』、虚しく地へと落ちる。

そんな行為にも動じない少女は自らの喉元を指さし、

「あの子のここ……喉の奥の方に何か魔術的な刻印がなされているの、貴方知ってる？」

「こくいん、だと……！？」

ステイルの目が驚愕に見開かれる。

「知らないみたいね。見つけたのはうちの医者よ。私も見させてもらったけどルーンじゃなく、木星を示す刻印だった。あの子と同じ必要悪の教会の魔術師なら、何か知ってるのかと思ったけど……当てが外れたわね」

そんなものは知らない。そもそも喉の奥なんて場所、よほどの事がなければ見る必要もない場所だ。あえて覗こうとでも思わなければ、一生目にする機会などありはしないだろう。

（そんな場所に、魔術的な刻印だと――？）



もし本当にそれがあるのであれば、教会が何らかの意図をもってつけたものに違いない。でなければ、わざわざそんな場所に施す必要なんてない。

「おそらくは『首輪』の類だと思うんだけど……、知らないならどうしようもないわね」

「首輪？」

首輪、と言う聞き捨てならない言葉にステイルは思わず問い返していた。

「ええ。首輪よ」

「なぜ、そう思うんだ……」

「なぜって、決まってるじゃない」

そう言って少女は不敵に笑い、

「金の卵を産むガチョウを野放しにする馬鹿はいないでしょ？」

さも当然といった様子で、ステイルにとって衝撃の事実を言い放った。

「放し飼いにするなら『首輪』の1つでもつけているはずよ。万が一、裏切ったときの保険にね」

そう言って少女は通りの先に倒れているインデックスへと目を向ける。

「おそらく一定期間を過ぎると発動し、あの子に何らかの苦痛を与えるか、さもなければ物理的に頭を吹っ飛ばすとか……、そんな類のものじゃないかしら？」

「な——、！？」

「驚くほどの事じゃないと思うけど？」

驚愕に声を失ったステイルに少女はさもあらんとばかりに答える。「万が一敵の手に落ちて『禁書目録』の知識を奪われでもしたら大変じゃない。そんな事になるくらいなら、いっそ……、なんて考えてもおかしくはないと思わない？」

もしかすると遠隔操作も可能かもね、と少女は肩を竦めながら話を締め括った。

その内容にステイルは動揺を隠せない。

ありえない、なんて言えない。むしろ十分にありえる事だ。

『10万3000冊の魔導書の原典』なんて狂気の代物を、幼気な少女一人に記憶させ背負わせた連中なら、そんな残酷な方法を取る事など微塵も厭わないだろう。

完全記憶能力者はあの子一人ではない。インデックスならば万が一、自らの手で失う事になっても、その時は別の完全記憶能力者だれかを使って新たな『禁書目録』を作り出せば済む話だ。多少の手間と時間がかかるが、敵の手に落ちるよりマシだと言える。

だが、もしそうならば――。

ステイルはその事実を知らない。インデックスあの子に何かを仕掛けているなんて話は聞かされていない。

だが聞かされていないことが＝仕掛けられていないことにはならない。

そして、そんな物騒なものが本当に仕掛けているのであれば、それを自分達に話すはずがない。

だとすれば、もしかすると――。

「真偽の程については任せるわ。ヤバくなってもこっちには『幻想殺し』があるしね」  
ブレイカー

「イマジン、ブレイカー？」

「『右手』の事よ、上条君の。わかってるでしょ？」

上条、と言うのがあの少年の事だとすれば、その意味は理解はできる。

ステイルの魔術を打ち消し、法王級の『歩く教会』すら破壊したその『ちから右手』ならば、あの子にかけられた『首輪』も破壊できるかもしれない。

だがそれを解っていないながら、わざわざステイルに問いただした理由は一、

「ま、言いたいことは言えたし、そろそろ向こうも気になるから――」

そう言って少女はニヤリと笑い、

「ごきげんよう、ステイルⅡマグヌス。またお会いしましょう？」

その右足がステイルの頭を撃ち抜いた。

（クソッ、初めから『コレ』が目的か……！）

薄れゆく意識の中で少女の真の目論見をようやく知ったステイルは、視界を掠めた黒い布地を臍氣に捉えながら、闇の中へと意識を落としていった。

「あー、スカートで蹴りはマズかったかなあ……」

とりあえず地に伏せ気を失ったステイルの頭部を踏みつけながら、氷室はポリポリと頭を搔く。

とはいえ人並み程度の腕力しかない氷室では、一撃で彼の意識を刈り取ることなど出来ない。そのため頭を能力で固定したうえで、腕の3倍の筋力を持つ脚による一撃をお見舞いしたのだ。その結果はご覧のとおり。しかしスカートの中身を盛大にさらす事となったのは全くの誤算だった。

「うーん、やっぱ『レールガン超電磁砲』みたいに短パンでも履くべき？」

なんだかそれはそれで負けたような気がするのよね、と現状とは似つかないどうでもいい事を考えつつ、さらにもう一度ステイルの頭を蹴り飛ばしてから、ゆっくりとインデックスの元へと向かっていく。

そして倒れているインデックスがキチンと息をしていることを確

認し、ホッと安堵の息を吐くと、そのまま両手で抱え上げ、なんと気なしに遠くを見つめた。

「あとは上条君がしっかり聞き出してくれるか、ね……」

既に終わっているのなら回収に向かう必要があるだろう。

取り合えずインデックスを病室に寝かし、それからかな、と今後の方針を立てつつ、氷室は夜の街をゆっくりと歩き出す。

そこでふと立ち止まり、

「期待してるわよ、ステイルⅡマグヌス。私が求める『回答』<sup>ピース</sup>を持って帰ってきてくれることを、ね」

倒れ伏すステイルにそれだけ告げると、今度こそ病院に向かい夜の街へと消えていった。

## 第11章 とある聖人と地獄円舞《エターナルロンド》（前書き）

長いです。これまででおそらく最長です。

その上、原作とほぼ変わりません。

なので原作既読者は呼び飛ばしても問題ないと思います。

## 第11章 とある聖人と地獄円舞《エターナルロンド》

「何度でも問います」

その言葉とともに『斬撃』が飛ぶ。

一瞬の内に放たれたその『居合斬り』は、目にも止まらぬ速度で10メートル先の地面を、<sup>アスファルト</sup>街灯を、街路樹をバターの<sup>アスファルト</sup>のように切り裂き、切り刻んだ。その内の宙を舞った握り拳ほどの地面の破片が上条の右肩を強打し、それだけで上条は吹っ飛ばされて気絶しそうになる。

上条は右肩を押さえながら、視線だけで周囲を見渡す。

一本。二本。三本、四本五本六本七本——都合七つの直線的な『刀傷』が平たい地面の上を何メートルにも渡って走り回っていた。<sup>アスファルト</sup>様々な角度からランダムに襲う『刀傷』は、まるで鉄板を釘でデタラメに引っ掻いた跡のようにも見える。

チン、という刀が鞘に収まる音。

「魔法名を名乗る前に、あの子を保護したいのですが」

右手を刀の柄に触れたまま、女は何の感情を示さない無機質な声で問いかける。

インデックスを探し回る上条の前に突然姿を現した『神裂火織』と名乗るその女は、Tシャツに片側だけ大胆に切ったジーンズという幾分普通の格好に見える。だが、腰に巻いたウエスタンベルトから拳銃のようにぶら下がる二メートル以上の日本刀が一般人ではないことを示していた。

「私の七天七刀が織り成す『七閃』の斬撃速度は、一瞬と呼ばれる時間に七度殺すレベルです。人はこれを『瞬殺』と呼びます。あるいは『必殺』でも間違いではありませんが」

上条は無言で、右手を押し潰す勢いで握りしめた。

この速度と威力、そして射程距離。間違いなくあの『斬撃』は普通じゃない。それどころかそもそも女の細腕であの馬鹿みたいな刀

を振り回す事はおろか、普通なら抜く事すらできないはずだ。

だが、実際に『斬撃』は放たれた。それも一瞬で七回もの『居合斬り』を、その気になれば七回が七回とも上条の体を両断できる『必殺』の七斬撃を放ったのだ。

にもかかわらず、刀が鞘に収まる金属音はただの一度。

それは明らかに普通じゃない攻撃。通常ではありえない現象。常識ではありえない、それを可能とする力——即ち『異能』。

だがそれは超能力ではない。超能力とは異なるもう一つの『異能の力』。

（魔術……）

それを扱うステイルと同じ魔術結社に所属する人間。そして彼と同じくインデックスを付け狙う、上条当麻の敵。

しかし、それが『異能の力』によるものならば上条にはそれを打破する『力』がある。だからあの『太刀筋』に——

「ステイルからの報告は受けています。あなたの右手は何故か魔術ディスペルを無力化する。ですが、それはあなたが右手で直接振れない限り不可能ではありませんか？」

——そう、触れる事が出来ない限り上条の『右手』は何の意味も持たない。

ただ速いだけならば問題はない。斬撃の来る方向を先読みすれば打ち消すことができる。だが神裂火織の『七閃』の太刀筋は変幻自在で、上条が『幻想殺し』イマジンプレイカーを使うものなら、七つの太刀筋は迷わず上条の腕を輪切りにするだろう。

（くそっ、こんなところで立ち止まってる暇なんてないってのに……）

視界の隅の一角が夜にもかかわらず茜色に染まっていた。その直前に響いた爆音。おそらくステイルという魔術師が放つ炎によるものだ。燃え盛る炎が夜空を照らし、夕方の様に空を染め上げているに違いない。

そしてそこには間違いなくインデックスがいる。狙われて、追われている。

上条当麻はまだ己の答えを出してはいない。

しかしだからと言って助けに行かないという道理にはならない。答えが出ていないからこそ、上条当麻には“まだ”インデックスを『助ける』という選択を行う権利がある。

ならば上条当麻にとって助けに行くのは当然のこと。

しかしそこに行こうとすれば――、

「幾度でも問います」

神裂の右手が、静かに腰の七天七刀の柄へと触れる。

（来る――）

上条の頬に冷たい汗が伝う。

上条をあの場合所へ行かせまいと放たれる神裂の『七閃』は決して上条本人を傷つけることなく、周囲を切り裂き足止めするだけに留まっていた。

しかしその『気まぐれ』がいつまで続くかわからない。神裂が本気で殺しかかってくれば上条は一瞬で文字通り八つ裂きにされるだろう。何十メートルという射程距離、街路樹をまとめて輪切りにする破壊力を考えれば、後ろに逃げたり何かを盾にする、という考えは自殺行為にしかならない。

ならば活路は一つ。

「魔法名を名乗る前に、彼女を保護させてもらえませんか？」

その言葉が言い終わるよりも早く、震える膝に活を入れ、地面に張り付いた両足を無理矢理引き剥がすように、一歩前へ踏み込む。

神裂の片眉がピクンと動く前に、上条は弾丸のように次の一步を爆発させた。

「おおっ……あああああああ！！」

「何があなたをそこまで駆り立てるのかわかりませんが……」



神裂は、呆れよりも、むしろ哀れみの色が混じるため息を吐き出して、

七閃。

周囲に漂っていた砂埃が上条の前で轟！ という風の唸りと共に八つに切断された。

「あ、—————オオッ！！」

『右手』で触れれば消せる——頭では理解していても、心がとっさに回避を選んだ。頭を振り回すような勢いで身を屈め、頭上を通り過ぎる七つの太刀筋に心臓が凍える。

計算も勝算もない。避けられたのは単に偶然。たまたま運がよかっただけ。

だがそれを実感する事もなく、上条はさらに一步踏み出す。

七閃がどれだけ得体の知れない攻撃だとしても、その基本は『居合斬り』だ。鞘走りを滑走路にして、一撃必殺の斬撃を繰り出す古流剣術。逆に言えば刀身が鞘から抜けている間は居合斬りを使えない無防備な『死に体』という事だ。

残りは一步。その一步で神裂の懷に飛び込むことができる。

そしてその一步を飛び込んでさえしまえば————勝てる。

そう思った上条の最後の余裕は、チン、という小さな音によって木端微塵に撃ち碎かれた。

鞘に納めた刀が立てる————あまりにも速すぎる、ほんの小さな金属音に。

七閃。

「ち、くしょ……ああああああ！」

目前で、ゼロ距離とも呼べる間近で放たれた斬撃に上条はとっさに右手の拳を突きだす。

それは防御とか攻撃とかそういった意図で出されたものではなく、ただの反射。目の前にボールが投げ込まれたとき、とっさに手が出してしまうような、そんな条件反射による行動。

しかしそれが『異能の力』によるものならば、上条の右手は神や吸血鬼の力だって消し飛ばす。

ましてやゼロ距離から放たれた七つの斬撃は一つに束ねられた状態<sup>イメージブレ</sup>で上条に襲い掛かってきている。これならばたった一度の幻想殺<sup>イカ</sup>しで七つ全てを吹き飛ばすことができる。

——はずだった。

「な……ッ!？」

消えない。幻想殺<sup>イメージブレイカー</sup>しを以てしてもこの馬鹿げた太刀筋は消えてくれない。

太刀筋が拳を作る指の皮膚にめり込んでいく様を感じ、とっさに手を引こうとする。だが間に合わない。そもそも飛んでくる日本刀の一撃に自ら拳を差し出し、すでに太刀筋は上条の右手に触れてしまっているのだから。

神裂はそんな上条の姿を見てほんのわずかに目を細めて、次の瞬間、辺り一面に肉を引き裂く水っぱい音が鳴り響いた。

上条は血まみれの右手を左手で押さえつけ、その場で膝を折って屈んだ。

驚く事に、上条の五本の指はまだ切断されずに繋がっている。

もちろんそれは上条の指が特別頑丈な訳でも、神裂の腕が鈍い訳でもない。単に上条の指が千切れる前に神裂が手加減に加減を加え見逃した、というだけの話だ。

上条は膝をついたまま、頭上を見上げる。

新円の青い月を背負う神裂の前に、蜘蛛の巣のように張り巡らされた赤い『何か』があった。

上条の血が付いたことで初めて目に見えるようになったそれは――  
七本の、細い鋼糸<sup>ワイヤー</sup>。

「なんて、こった……」

上条は齒噛みして、

「……そもそも魔術師じゃなかったのか、アンタ」

「言ったはずです。ステイルから話を聞いていた、と」

神裂はつまらなそうに呟いた。

「これで分かったでしょう。力の量ではなく質が違います。ジャンケンと同じです。あなたが100年グーを出し続けた所で、私のパ―には1000年経っても勝てません」

異能の力なんて使っていない、『七閃』の正体はただの手品<sup>トリック</sup>。刀を抜いたと見せかけ、その仕草に紛れ七本の鋼糸<sup>ワイヤー</sup>を操っていただけ。終わりに鞘に納める音を僅かに鳴らせば、本当に抜いたのだと錯覚させる事が出来る。

そして異能の力でない以上、上条の幻想殺<sup>イマジネレイカー</sup>しは通用しない。攻撃を打ち消せず、上条の拳が神裂を捉えるよりも神裂が鋼糸<sup>ワイヤー</sup>を操る速度の方が速い以上、上条当麻に勝ち目はない。

「なら、その刀は……」

「この七天七刀は飾りではありませんよ。『七閃』を潜り抜けた先には真説の『唯閃』が待っています」

つまり『七閃』は前座にすぎない。本命はその後に待っており、前座すら潜り抜ける事が出来ない上条は、その本命には絶対に敵わない、と。

「それに何より――私はまだ魔法名を名乗ってすらいません」  
名乗っていないから魔術は使わない。名乗ってすらいらないから殺す価値もない。

それを聞き、上条は黙って血まみれの拳を、握る。

「名乗らせないでください、少年」

そう言つて神裂は、唇を噛む。

「私は、もう二度とアレを名乗りたくない」

握った拳が震えた。コイツはステイルとは明らかに違う、一発芸だけの人間ではない。基本の基本、基礎の基礎、土台の土台から上条とは全く作りが違ふ人間なのだ。

それでも、

「……、降参、できるか」

拳を握る。もう、感覚もない右手を、強く握りしめる。

「何ですか？ ……聞こえなかったのですが」

「うるせえつつつたんだよ、ロボット野郎！！」

上条は血まみれの拳を握りしめ、目の前にいる女の顔面を殴り飛ばそうとする。

が、それより前に神裂のブーツの爪先が上条の水月みづおちに突き刺さる。肺に溜め込んだ空気が全て口から吐き出されると同時、顔の横を七天七刀の黒鞘で横殴りにされ吹き飛ばされる。竜巻のように体が回り、上条は肩から地面へと叩きつけられた。

痛みに呻き声を上げる前に、上条は自分の頭を踏み碎こうとするブーツの底を見た。

とっさに避けようと、横に転がった所で、

「七閃」

声と同時に七つの斬撃が上条の周囲の地面アスファルトを粉々に碎き、その破片が一斉に上条へと豪雨のように叩きつけられる。

「ごっ…あ……ッ!？」

まるで集団リンチを受けたような激痛に、上条はその場でのた打ち回る。

「もう、良いでしょう？ あなたが彼女にそこまでする理由はない

はずです。ロンドンでも十指に入る魔術師を相手に30秒も生き残れば上等です。それだけやれば彼女もあなたを責める事はしないでしょう」

「……、」

そうだろう、とほとんど朦朧とする意識の中で上条は頷いた。

インデックスは上条の事を責めたりなどしない。けど、その代り自分を責めるのだ。自分のせいだと、そう言っ

そうしてずっと誰にも頼らず、誰をも巻き込もうとせず、ただ一人耐え続けるからこそ、上条当麻は諦めたくないのだ。

あんな辛そうな顔で、あんな完璧に微笑む少女を、助けてやりた

いと。

（ああ、そうだよ。簡単な事じゃないか……）  
答えは出ていない。けど、その答えを導くための式なんて、こんな単純で簡単な事なのだ。

だから上条当麻は動く。死にかけの虫みたいに、壊れかけの拳を無理矢理握りしめて。

「……何でだよ」

上条は崩れ落ちたまま小さく呟いた。

「アンタ、すぐくつまらなそうだ。アンタ、あのステイルとかってヤツとは違うんだろ。アンタ、敵を殺すの躊躇ってんじゃないか。その気になれば全部が全部、俺を必殺できたくせに、“殺せなかった”」

ステイルⅡマグヌスと名乗ったルーンの魔術師は、そんな躊躇いなど微塵もなかった。問答無用で攻撃を仕掛け、摂氏3000度の炎で塵一つ残さず消<sup>こ</sup>そうとしてきた。

だが目の前にいる神裂火織はそうじゃない。

彼女は何度も、何度も聞いてきた。

魔法名を名乗る前に終わらせたい、と。

「アンタは、“そこで躊躇ってくれるだけの常識ある『人間』”なんだろ？」

「……、」

神裂火織は黙り込んだ。激痛で意識が朦朧とする上条はそんな事にも気付けない。

「なら、分かんたろ？ 寄って集って女の子が空腹で倒れるまで追い回して、刀で背中を斬って、そんな事、許されるはずないって、もう分かっちゃってんだろ？」

血を吐くような言葉に、神裂は何もできずに耳を傾け続ける。

「知ってんのかよ。アイツ、テメエらのせいで一年ぐらい前から記憶がなくなっちゃってんだぞ？ 一体全体、どこまで追い詰めりゃそこまでひどくなっちゃうんだよ」

返事は、ない。

上条には、分からない。不治の病の子供のためでも良い、死んでしまった恋人のためでも良い——それこそ氷室の言うような権力を求めるためでも良い。認めたくはないが、何かそう言った『望み』があつてインデックスを狙うのなら、まだ分かる。許せる許せないは別として、理解はできる。

けど、コイツは違う。

コイツは『組織』の一人として、組織の“誰か”に言われたたった一言だけで、一人の女の子を追い駆け回して背中を斬りつけたのだ。

そこに個人的な理由はない。個人的な感情もない。仕事だから、命令だから、そんな下らない『理由』しか存在しない。

「何で、だよ？」

上条は繰り返した。歯を食い縛るかのように、

「俺はさ、テメエの命張って、死に物狂いで戦って——それでもたった一人の女の子も守れねーような負け犬だよ。テメエらに連れ去られるのを、指を啜えて地面に這いつくばってんでいる事しかできねー弱者だよ」

ましてや馬鹿で、考えなしで、脳タリンで、氷室が居なかったら取り返しのつかない過ちを犯していたかもしれないぐらい馬鹿でア

ホな無能力者だ。

けど、それを教えてくれた氷室でさえ、組織の前には退くしかなかった。どんなに悔しくても、苦しくても、ただの学生に出来る事はないと、そう諦めざるを得ないことを理解して、心を殺して諦めようとしていたのだ。

「だけど、アンタは違うんだろ？」

彼女は組織の人間だ。その上、ロンドンでも十指に入ると自称していた。それはおそらく嘘ではないだろう。少なくとも有数の実力者であるのは間違いない。それはつまり、彼女が魔術結社の中でも相応の地位にいる人間だという事だ。

それだけの地位が、それだけの実績が、

「それだけの力があれば、誰だって何だって守れるのに、何だって誰だって救えるのに……」

なのに、どうして、

「何だって、そんな事しかできねえんだよ！」

悔しかった。

それだけの力があれば、上条は守りたいモノを全て守り抜く事が出来ると思えるのに。

悔しかった。

そんなにも圧倒的に強い人間が、女の子一人を追い詰める事にしか力を使えない事が。

悔しかった。

まるで、今の自分はそれ以下の人間だと言われているみたいで。

悔しくて、涙が出るかと思った。

長い、長い沈黙の後、

「……、私。だって」

神裂はポツリと呟いた。まるで心の内から滲み出した雫が、静かに、ゆっくりと、地面へと落下していくように。

「私だって、本当は彼女の背中を斬るつもりはなかった。あれは彼女の修道服『歩く教会』の結界が生きていると思ったから……絶対に傷つくはずがないから斬っただけ、なのに……」

予想外だった、という声を震わせる神裂の言葉に、上条の脳裏に氷室の予想の一つが過ぎる。

——そのステイルって魔術師が彼女の護衛である可能性もあり得るかもしれない。

——必要悪の教会側からしてみれば、何が何でも彼女を『回収』しなくちゃならない。

——だけど聞く耳を持たず逃げ回る相手を『回収』する術は、もう実力行使しか残されていないんじゃないかしら？

「まさか、アンタ……」

「……私の所属する組織の名前は、あの子と同じ、イギリス教会の中にある——必要悪の教会」

「——！？」

「彼女は、私の同僚にして————大切な親友、なんですよ」

上条には理解できなかった。

氷室にその可能性があると言われても、そんな事ありえない、と心のどこかで否定していた事実が、今日の前に示されたことに、脳が受け入れる事を拒絶している。

けど、神裂火織の表情は辛く、苦しく、心の底から今の現状を嘆



いているようにしか見えず、  
ならその話は嘘ではなく、真実なのだと、上条は頭でなく心で理解した。

だからこそ解せない。

「なんで……」

上条の問いに神裂は、血を吐くように、  
「こうしないと彼女は生きていけないんです。……死んで、しまわ  
んですよ」

「し、ぬ……?」

「そうです」

淡々と、けど泣き出しそうな表情で頷く神裂の言葉に上条の心が  
一気に冷え固まった。

戦闘で高まった熱も、悔しさで震えていた激情も、何もかもが冷  
え切って、ただ示された言葉を否定しようと心が閉ざされようとし  
ている。

そんな上条を無視して、神裂は切々とその心の内を吐露する。

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えはありますか？」

「ああ、10万3000冊の正体、だろ」

上条は切れた唇を動かし、

「……全部、頭の中に入ってたんだってな。言われたって信じられね  
ーよ。一度見たモノを残さず覚える能力なんて。だって、馬鹿だろ  
アイツ。とてもじゃねーけど、そんな天才には見えねえよ」

完全記憶能力そのモノは否定しないが、それがインデックスに備  
わっているとは到底思えない。

「……、あなたには、彼女がどんな風に見えますか？」

「ただの、女の子だ」

即答だった。そのことに神裂は驚きよりも、むしろ疲れたような  
表情をして、ポツリと言った。

「ただの女の子が、一年間も私達の追撃から逃れ続ける事ができる

「と思えますか？」

「……、」

「ステイルの炎に、私の七閃と唯閃——魔法名を名乗る魔術師達を相手に、あなたのように異能に頼ることなく、私のように魔術にすがること無く、ただ自分の手と足だけで逃げる事が出来るか？」

神裂は自嘲するように笑い、

「たった二人を相手にするだけで、これです。必要悪の教会という

『組織』そのものを敵に回せば、私だって一ヶ月も持ちませんよ」

そう、上条ですら、イマジンプレイカー幻想殺しという神の奇跡さえ一撃粉碎できる能力をもつてさえ、4日も逃げ続ける事が出来なかったのに——彼女は。

「アレは、紛れもなく天才です。扱い方を間違えれば天災となるレベルの」

神裂は、そう断言し、

「うえ教会が彼女をまともに扱わない理由は明白です。怖いんですよ、誰もか」

「それでも……、それでもアイツは、人間だよ。道具なんかじゃねえ、そんな呼び名が……許されるはずがねえだろ……ッ！」

「そうですね」

神裂は頷く。

「その一方で、現在の彼女の性能は凡人とほぼ変わりません」

「……？」

「彼女の脳の85%以上は、インデックス禁書目録の10万3000冊に埋め尽くされてしまっているんですよ。……残る15%をかりうじて動かしている状態でさえ、凡人とほぼ変わらないんです」

確かにそれはすごい話だろうが、今はもっと先に知りたい事がある。

「……だから、何だよ。それがどうしてインデックスを追い回す理由になるんだよ！」

「そうしなければ、インデックスが死んでしまうからですよ」

今度こそ、ハッキリと上条は聞いた。

拒絶する心の壁を貫いて、神裂の引き裂くような叫びに撃ち碎かれて、強制的に理解させられた。

「言ったでしょう。彼女の脳の85%は10万3000冊の記憶のために使われている、と」

神裂は小刻みに肩を震わせながら、

「ただでさえ、彼女は常人の15%しか脳を使えません。並みの人間と同じように『記憶』していけば、すぐに脳がパンクしてしまうんです」

「そ、んな……」

信じられない。信じたくない。そんな思いが、上条に『否定』を選択させる。

「だって、だって、おかしい。お前、だって、残る15%でも、俺達と同じだって……」

「はい。ですが、彼女には私達と違うモノがあります。完全記憶能力です」

神裂の声から少しずつ感情が消えていく。

「そもそも、完全記憶能力とは何ですか？」

「……一度見たモノを、絶対に忘れない、能力、だろ？」

「では、『忘れる』という行動は、そんなに悪い事ですか？」

「……、」

「人間の脳の容量は、意外に小さい。人間がそれでも100年も脳を動かしてられるのは、『知らない記憶』を忘れる事で脳を整理しているからです。——あなただって、一週間前の晩御飯なんて覚えていないでしょう？ 誰だって、知らない間に脳を整理させる。そうしなければ生きていけないからです」

ところが、と神裂は凍えるように告げる。

「彼女にはそれが出来ない」

完全記憶能力者だから、と。

「街路樹の葉っぱの数から、ラッシュアワーで溢れる一人一人の顔、空から降ってくる雨粒の一滴一滴の形まで……『忘れる』事のできない彼女の頭は、そんなどうでも良いゴミ記憶であつという間に埋め尽くされる」

神裂の声が凍る。

「元々、残る15%しか脳を使えない彼女にとって、それは致命的なんです。自分で『忘れる』事のできない彼女が生きていくには、誰かの力を借りて『忘れる』以外に道はないんです」

そんな話、聞いていない、と上条は否定したかった。だって氷室は『思い出せなくなる』から問題ないのだと、そう言っていたではないか、と。

けど同時に思い出す。氷室は『記憶』そのものは残るのだと、そう言っていた事を。呼び出せないだけで、記録はされているのだと。つまり『思い出せなく』ても『忘れて』はいないのだから、『記録』は脳に蓄積されていき、そして何れ一杯になって——、

パンクする。

「じゃ、じゃあアイツが記憶を失ってるのって……」

「ええ、そうです」

神裂は上条の問いに小さく頷き、

「私達が“消しました”」

どうやって、と問う必要はなかった。彼女は魔術師だ。ならその方法は一つしかない。

そして、そんな彼女が何度も名乗りたくないと言った『魔法名』。それは殺し名であると共に、魔術師が“魔術を使う際に名乗る”名前。

つまり神裂は、その名を名乗って同僚の、親友の、インデックスの記憶を“消した”。

これはそういうお話。

「……、いつまで、だ？」

「記憶の消去は、きっかり一年周期に行います」

神裂は疲れたように息を吐き、

「……あと3日が限界です。早すぎても遅すぎても話になりません。ちょうどその時でなければ記憶を消すことはできないんです。……あの子の方も、予兆となる、強烈な頭痛が現れていなければ良いのですが」

上条はゾツとした。確か、インデックスは一年程前から記憶を失っている、と言っていた。

そして、頭痛。――上条はてっきり、手術後の後遺症か何かだと思っていた。

けど、そうじゃなかったら？

もう彼女は、いつ頭が壊れてもおかしくない状態で動き回っていただけ、だったら？

「分かって、いただけましたか？」

神裂火織は言う。その瞳に涙はない。そんな安っぽい感情表現は当の昔に忘れてしまったとでも言うように。

「私達に、彼女を傷つける意思はありません。むしろ、私達でなければ彼女を救う事はできない。引き渡してくれませんか、私が魔法名を名乗る前に」

「……、っ」

上条の脳裏にインデックスの顔が一瞬過ぎり、奥歯を噛むように目を閉じた。

「それに、記憶を消してしまえば彼女はあなたの事も覚えていませんよ。今の私達を射抜く目を見れば分かるでしょう？ あなたがどれだけ彼女を想った所で、目覚めた後の彼女には、あなたの事は『

10万3000冊を追う天敵』にしか映らないはずです。そんな彼女を助けた所で、あなたにとって何の益にもなりませんよ」

「……益？」

その言葉に、上条は違和感を覚えた。

「何だよ、そりゃ……」

違和感は一瞬で爆発する。さながら、ガソリンに火を放つように。

「何だよそりゃ！ ふざけんな！ アイツが覚えているか覚えてないかなんて関係あるか！」

そんなものは関係ない。上条当麻がインデックスを助ける理由はただ一つだ。

「いいか、分っかんねえようなら一つだけ教えてやる。俺はインデックスの仲間だ、今までもこれからアイツの味方であり続けるって決めたんだ！ テメェらお得意の聖書に書かれてなくなたって、これだけは絶対なんだよ！！」

そう、どんな結末を迎えようが、どんな地獄に落とされようが、上条当麻はインデックスを見捨てる事なんてできない。どこに居ようが、どんな状況であろうが、上条当麻はインデックスの味方になり、助けられることならば助け出す。それだけは絶対だ。必ずだ。答えなんて関係ない。それだけは何があっても変わる事のない、ただ一つの真理だ。

「なんか変な話だと思っただけ、単にアイツが『忘れてる』だけなら、全部説明して誤解を解きや良いだけの話だろ。聞く耳持たねえってんなら、聞くまで説明し続けりゃいいだけの話だろ！ 何で誤解のままにしてんだよ、何で敵として追い回してんだよ！ テメェら、なに勝手に見限ってんだよ！ アイツの気持ちを何だと

「————うるっせえんだよ、ド素人が!!」

上条の怒りが、真上から襲い掛かってきた神裂の咆哮によって押し潰された。

「知ったような口を利くな!! 私達が今までどんな気持ちでの子の記憶を奪ってきたと思ってる!?!」

言葉遣いも何も、全てを剥ぎ取った剥き出しの感情が上条の心臓を握り潰そうとする。

「あなたはステイルを敵視しているようですが、アレが一体どんな気持ちであの子とあなたを見ていたと思ってるんですか!?! どれほどの決意の下に敵を名乗っているのか! 大切な仲間のために泥を被り続けるステイルの気持ち、あなたなんかに分かるんですか!!」

「な……、」

あまりの豹変ぶりに驚いて声をあげる前に、倒れた上条の脇腹がサッカーボールのように蹴り飛ばされた。何の手加減もない一撃に、上条の体が浮いて、地面に落ち、2、3メートルも転がされる。

腹の中から口の外へ、一気に血の味が溢れかえる。

だが、激痛にのた打ち回るより先に、頭上の月を背に神裂が飛びかかってきた。

「……!?!」

ゴグギ、という鈍い音。

七天七刀の鞘、その平たい先端が、ハイヒールの踵のように上条の腕を押しつぶしていた。

けれど、悲鳴をあげる事すら許されない。

上条の目の前には、血の涙でも流しかねない、神裂の顔。

恐い。

七閃でも唯閃でも、魔術師もロンドンで十指に入るといふ実力も

関係なく、

これほどまでに『人間』の感情をぶつけられる事が、上条は恐い。

「私達だって頑張ったよ、頑張ったんですよ！」

七天七刀の鞘が横殴りに叩きつけられる。

「春を過ぎ夏を過ぎ秋を過ぎ冬を過ぎ！」

一撃、二撃、三撃、四撃、

「思い出を作って、忘れないようにたった一つの約束をして！」

右に、左に、力任せに振るわれる七天七刀の鞘がボロボロの上条を更にズタボロにしていく。

それでも神裂の攻撃は止まらない。思いの丈を全てぶつけるかのごとく、上条の体を打ち据える。

「日記や写真<sup>アルバム</sup>を胸に抱かせて！」

腕を、脚を、腹を、胸を、顔を——次々と降り注ぐ鈍器が体のあちこちを潰していく。

「……、それでも、ダメだったんですよ」

ギリ、と奥歯を噛みしめる音が聞こえて、

ピタリ、と神裂の手が止まった。

「一から思い出を作り直して、何度繰り返しても、家族も、親友も、恋人も、全て……ゼロに還る」

やるべきことはやったと。すべてやって、やりつくして、それでもなおその望みは叶わなかった、と。

「私達は……もう耐えられません。これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて、不可能です」

あの性格のインデックスにとって、『別れ』は死のような苦痛だろう。

それを何度も何度も味わっていく、地獄のような在り方。

死ぬほどの不幸<sup>わかれ</sup>と、直後にそれを忘れて再び決められた不幸<sup>わかれ</sup>へ走っていく無残な姿。

永遠に終わらない、地獄<sup>わかれ</sup>の円舞<sup>ロンド</sup>。



だから、神裂達は残酷な幸福であらうを与えるより、できうる限り不幸を軽減する方法を選んだ。

初めから失うべき『思い出』を持たなければ記憶を失う時のショックも減る。

だから、親友を捨てて『敵』である事を認めた。

インデックスの思い出すべてを黒く塗り潰す事で。

インデックスの地獄さいごを、少しでも軽いものにしようとして。

「ふ、ざけんな……」

それを聞いてなお、上条当麻は奥歯を噛み締め、絞り出すように呻いた。

「……ふざけんな！」

気持ちは分かる。きつと足掻けるだけ足掻いたのだろう。悲しみを堪えて、記憶を消し続けながらも、それでも『記憶を消さずに済む方法』をずっと探し続けたのだろう。上条だってそうする。そしてそれはたったの一度も叶わなかったことも、分かる。

だけど、それは、

「んなモンは、テメエらの勝手な理屈だろうが！」

諦めたのだ。打てる手をすべて打ち尽くして、それでも叶わなかった事に疲れ、諦めたのだ、コイツらは。

けど、それは、

「インデックスの事なんざ一瞬も考えてねえじゃねえか！ 笑わせんじゃねえ、テメエの臆病のツケをインデックスに押し付けてんじやねえぞ！！」

この一年間、インデックスは誰にも頼れずたった一人で逃げ続けてきた。

それが一番正しかった選択だなんて、絶対に認めない。認められない。認めるわけにはいかない。

「じゃあ。他に……どんな道があったと言うんですかッ！」  
神裂の七天七刀が、上条の顔面目がけて思いっきり振り下ろされる。

それを、上条はボロボロの右手を動かし、顔面を襲う前に握って食い止める。

もう、こんな魔術師は恐くない。

もう、こんな魔術師に委縮することはない。

体は、動く。

動く！

「テメエらがもう少し強ければ……」

上条は、歯を食い縛り、

「テメエらがウソを貫き通せるほどの偽善使用フォックスワードだったら！」

もう碎けている左腕を無理矢理に動かして、さらに鞘を掴み、

「一年の記憶を失うのが怖かったら、次の一年にもっと幸せな記憶を与えてやれば！」

その鞘を支えに、ボロボロの体を無理矢理使って起こし、

「記憶を失うのが怖くないぐらいの幸せが待っているって分かっているって、もう誰も逃げ出す必要なんざねえんだから！」

全身の至る所から血が噴き出すのも構わずに、

「たったそれだけの事だろうが!!」

立ち上がる。上条当麻は立ち上がる。

「その、体で……戦うつもりですか？」

「……、うる、せえよ」

「戦って、何になるんですか？」

既に立っている事すら奇跡と言える上条の気迫に、神裂はたじろぐ。

「たとえば私を倒した所で、背後には必要悪の教会が控えています。私はロンドンで10本の指に入る魔術師と言いましたが、それでも上にはいるんですよ。……教会全体から見れば私など、こんな極東の島国に出張させられるような下っ端にすぎません」

それはそうだろう。

彼女がインデックスの仲間だと言うなら、彼女を道具として扱う教会のやり方に反発したはずだ。そこで反発しきれなかったという事は、それだけの力の差を示している。

それでも、

「うるっ……せえつつってんだろ!!」

ガチガチと、今にも死にそうな体を無理矢理に動かして睨み付ける上条に、ロンドンでも十指に入る魔術師は一步後ろへと下がった。

「ンなもん関係ねえ!」

そう、関係ない。簡単な話だ。ひどく単純な話なのだ。

上条は心の中でこれまでグジグジと悩んでいた自分を嘲笑う。

その上で、告げる。目の前にいる人物に語ると共に、自らに言い

聞かせるように。

「テメエは力があるから、仕方なく人を守ってんのかよ！」

上条はボロボロの足を一步前へと踏み出す。

「違うだろ、そうじゃねえだろ！ 履き違えんじゃねえぞ！ 守りたいものがあるから、力を手に入れたんだろうが！」

ボロボロの左手で、神裂の襟首を掴んで、

「テメエは何のために力をつけた？」

ボロボロの右手で、血まみれの拳を握り、

「テメエは、その手で誰を守りたかった！？」

力が出ない拳を、神裂の顔面へと叩き込む。威力もなく、むしろ殴った上条の拳の方がトマトみたいに血を噴き出す。

それでも、神裂は投げ出されるように後ろへと倒れ込んだ。手を離れた七天七刀が、くるくると回転して地面に落ちた。だがそんな事には構わず、上条はさらに一步踏み出す。

「だったら、テメエはこんな所で何やってんだよ！」

崩れた神裂を見下ろすように、

「それだけの力があって、これだけ万能の力を持っているのに……」  
グラリ、と上条の上半体が揺れる。

それでもなお構わず、上条は、

「何でそんなに、無能、なんだよ……」

バタリ、と上条の体が地面に崩れ落ちる。

（起き、ろ……反撃が、くる……）

視界が暗闇に染まる。

上条は出血多量で視力も回復しない体を無理矢理に動かして、神裂の反撃に備えようとした。

なのに、体は指一本を、イモ虫のように動かすのが精一杯で。

しかし、反撃はこない。

こない。

## 第12章 とある終幕への前奏序曲《プロローグ》（前書き）

前話がほぼ原作通りのため、既読者用に二話同時投稿。

いよいよ『禁書目録編』も最終幕へと突入です！

## 第12章 とある終幕への前奏序曲《プロローグ》

「体の具合はどうです？」

近寄ってきた神裂の言葉に、ステイルは紫煙を吹かしながら答えた。

「問題ないよ。頭を単に思いっきり蹴り飛ばされただけだからね」

「……そう、ですか」

神裂にしてみれば、その事自体が驚きだった。

昨夜、上条と言う少年と戦い、彼を半殺しと呼んでいい程にボロボロにした後、一向に姿を現さないステイルを探してみれば、路上で気を失って倒れている姿を発見したのだ。

その3日前にも同じような出来事があったが、その時とは状況も戦況も全く異なる。

対策は万全で、万に一つの抜け目もなく準備を怠っていない。その上、彼を打ち破った正体不明の力をもつ少年の相手は神裂自身ができることで、その力を無意味とし、見事打ち倒した。

ならばステイルには、障害となる敵はおらず、インデックスを追い詰め、適当なところでわざと逃がす——そういう手筈となるはずだった。

だが結果はステイルが返り討ちに合うというもの。

「……何が、あったのですか」

「化け物だよ」

「ばけもの？」

そうさ、と忌々しげな表情を浮かべるステイルの様子に、神裂はさらに首を傾げる。

「アレは、少年の『右手』以上の化け物だ」

「それほどの相手がこの学園都市に？」

正直なところ、神裂はそれを信じる事なんてできなかった。

超能力。魔術と対を為すもう一つの『異能の力』を、ここ学園都市では人為的に植え付け、その研究を行っている事は神裂も知っている。

それは“才能のない”者が求めて掴んだ力たる『魔術』とは異なり、完全にその人物の“才能”に由来する力で、場合によっては魔術すら凌ぐほどの力を発揮する事もある。

しかし、この学園都市における超能力者とは基本的に単なる学生だ。ましてや、あくまでも彼らは『研究対象』でしかない。『力』を使う訓練は受けていても、それを使って『戦う』ための訓練は受けておらず、そんな『戦闘』とは無縁のただ『力』があるだけの学生に、戦う事を目的とした神裂達魔術師が負けるはずがない、という自負がある。

確かにステイルは、そんな能力者の少年に一度は敗北した。しかしそれは『魔術を打ち消す』という突拍子もない、理不尽かつ予想外の力があつたからだ。

だが、その存在を知り、適切な対処をとれば、昨夜の神裂のように圧倒する事など容易い。異能の差はあっても、性能の差は如何ともしがたい溝があるのだから。

そしてそんな“例外”でもない限り、例えば初見の相手であつたとしても、異端狩りを主とするイギリス清教ネセサリウス必要悪の教会の魔術師に敵う相手がいるはずもない、と確信している。

だからこそ、ステイルの答えは神裂にとって予想外のものだった。

「病院にあの子を運び入れた少女がいただろう？」

「はい。……て、まさか、その少女が！？」

「そうさ。なんでも“あらゆる力を止める能力”とか言ってたな」

「止める能力、ですか……」

「ああ。正直信じたくはないんだが……、実際に僕の炎も、イノケンティウスも、僕自身すら確かに“止められた”。まるで石にでもされたような気分だったね、アレは」



「『石化の魔眼』ですか……」

見た者を石へと変えてしまうと言う、ギリシャ神話に登場する怪物『メドゥーサ』が持つ瞳。

頭髮は無数の毒蛇で、イノシシの歯、青銅の手、黄金の翼を持つという醜怪な姿で描かれ、英雄ペルセウスでさえ、神々から幾多の武器を与えられてようやくその首を斬り落とす事が出来た真正銘の化け物だ。

一方でその力は数ある魔眼・邪眼の中でも最高位に位置するとされ、女神アテナは切り落とされたその首を自らの盾にはめ込んだ事で、絶大な守護の力を得たとされている。

それぐらい『石化の魔眼』と言うモノの力は強大で、敵対する者にとつては絶対的な脅威の象徴とも呼べる代物だ。

それと同等の力を持つとすれば、確かにあの少年の『右手』以上の化け物だろう。

「……神裂、君ならどうにかできそうかい？」

「わかりません。正直なところ、今の話だけでは予測がつかない、としか……」

その少女の力が『石化の魔眼』そのものであるわけではない。ただの超能力であるなら、何かしら攻略する術があるだろうが、ステイルの話聞いただけではそれを見出すだけの情報が不足していた。「だろうね。僕の方は完全にお手上げだ」

ステイルは言葉通り両手を挙げ、首を振るう。

しかし、そんなおどけた態度も次の一瞬で消え去る。

「……それに、アレの恐ろしさは“そんなもの”とは別にある」  
軽く体を震わせたステイルは、底冷えするような低い声で、

「この僕を、思考の世界で生きる魔術師たるこの僕を、最初から最後まで全部自分の思惑通りに踊らせていたなんて……、しかも最後までそれに気付かせないだなんてそんな事、普通の人間に出来る筈

がない」

「だから、化け物、と……」

「そうだ。アレは紛れもない化け物さ。その上、この僕をまだ利用しようとしているんだから、腹が立つ」

「利用？」

苛立つステイルに眉を顰めながらも、その言葉の意味を測り兼ねた神裂は問い返す。

「利用されていると分かっているのなら、拒否すればいいだけの話なのでは？」

「それが出来ればやっているさ。けど、あの子に関する事と言われたら、そうも言っていられない」

インデックスに  
「禁書目録に？」

だから取り乱すような気配を感じるのか、と納得する一方で神裂は、それほど重要な問題とは？ と疑問を抱く。

「ああ、何でもあの子の喉の奥に何らかの魔術が施されているらしい」

「！？ ホントですか！」

「確認はしていない。ただこれだけの事をしてまで、そんな嘘を言う理由もない」

嘘だとすれば、それは確認を取ればすぐにバレる程度のものではない。

そんな嘘をついて時間を稼いだ所で、はたしてどれほどの意味があると言うのだろうか。

「問題は、その魔術の効果が何か、だ」

「……それは？」

「アレが言うにはあの子の頭を吹っ飛ばす『爆弾』らしい」

「なっ——！？」

「あくまで可能性だ。だが、神裂。それは“ありえない話じゃない”」

その言葉を聞いて、神裂も即座に理解した。

確かに“あり得ない”話ではない。『彼ら』が仕掛けたのだとすれば、それは十分にあり得る話だ。

「だから腹立たしいが、ああ、非常に腹立たしいけど、僕は一度向こうに行って確認を取ってくる」

そう言うときステイルは口にしていた煙草を虚空に投げ捨て立ち上がる。

投げ捨てられた煙草は空中でひとりでに炎を巻き上げて燃え上がり、跡形もなく塵となって消えていった。

「……わかりました。ではこちらはあの子の監視と、その少女について調べておきましょう」

「頼んだ」

上条は、喉の渇きと体の熱で目が覚めた。

「どうま？」

清潔感溢れる白い壁や床。どこか見慣れ始めていた部屋のその光景に、ここが病室だと気付いた辺りで、上条はようやくインデックスが覗き込んでいる事、そして自分がベッドに寝かされている事を知った。

「ごきげんよう、上条君。随分と呑気なお目覚めね」

「……水室？」

声がする方を振り向けば、壁に背を預け、相変わらずの皮肉げな笑みを浮かべる水室の姿があった。

「むー……、どうま、私が先に声をかけたのに、サツキの方にだけ返事を返すのはどういう事なのかな？」

「あ、いやー。別に深い意味はないんだが……、？」

ふと頭を掻こうと持ち上げた右手に違和感を感じ、首を傾げる。見てみれば、その右手にはガッチリと白い包帯が巻かれていた。（そうだ。俺、神裂ってヤツと戦って、気を失ったんだっけ……）

敵の目の前で気絶し、なぜ病室で目覚めたのか。

はつきり言って、あまりにも釈然としないため、素直に生きている事を喜ぶ事も出来ない。

「とうま、大丈夫？ まだどこか痛い？」

「なんともねーよ、こんなの」

「ホント？」

「ああ、ホントだって……つーか、俺、丸一晚眠ってたのか？ 今何時だ？」

窓の外から差し込む明るい陽射しに、上条は今は昼間だと判断して部屋を見渡しながら時計を探す。

「一晚じゃないよ」

「？」

呟くように答えたインデックスはどこか鼻をぐずらせているようにも見える。

「3日」

「みつか……って、え？ 3日！？ 何でそんなに眠ってたんだ俺！？」

「全身打撲、肋骨と右腕の骨折、左足にも罅、その上無数の裂傷に伴う出血多量等々……、これだけの大怪我をして僅か3日で目覚めた方が奇跡だと思うけど？」

「げっ！？ そんなにかよ！」

ボロボロにされた記憶はあるが、そこまで酷い怪我をしている自覚はなかった。

よくもまあそこまでボロボロにしてくれたと犯人である神裂とかいう女を恨むと共に、それだけの怪我でよくあそこまで戦ったと自分の頑丈さに呆れ半分称賛半分の気持ちを抱く。

「って、そうだよ！ 魔術師は！ あの神裂とかいう女は！」

「知らないよ、そんなの……！」

突然インデックスが思いっきり叫んだ。

「知らない。知らない、知らない！！ 私ホントに知らなかった！ とうまの家の前にいた、あの炎の魔術師を撒くのに夢中で、とう

まが他の魔術師と戦っている事なんかこれっぽっちも考えなかった！」

その言葉は上条ではなく、自分自身に向けて放たれたもの。

言葉の刃で自身を滅多斬りにするような声色に、上条はますます気圧されて言葉が出せなくなる。

「サツキもサツキだよ！ 私がダメって言うてるのに、言う事聞かないで魔術師と戦って！ 途中で息が苦しくなって気を失ったと思ったら、いつの間にかここで寝てたし！ 気が付いたらとうまがロボロになってたし！ 折角、二人を巻き込まないようにって、逃げ出したのに！ なんで追ってきたの！」

「追うに決まってるだろ、バカ！」

インデックスの物言いに、さすがに堪えきれなかった上条が叫ぶ。「俺達がどれだけ心配したと思ってんだ！ テメエ一人の問題じゃもうねえんだよ、これは！ 見くびるなって言ったこともう忘れたのかよ！ 完全記憶能力なんてもん持ってんだろ！ ならしかりと思ひ出せ！」

「覚えてるよ！ でも、そのせいでとうま怪我したし！」

「んなもん、怪我の内に入んねえんだよ！ この通りピンピンしてるっつーの！」

「でも、3日も目を覚まさなかった！」

「こんだけの大怪我してりゃ、3日も寝込むわ！」

「怪我の内に入らないんじゃないの！」

「言葉の綾だろうが！ 揚げ足とんな！」

「逆ギレっ！ とうま、自分がおかしなこと言ってるのに、私のせいにするんだ！」

「悪いかっ！ 元はと言えばお前が——」

「はい、ストップ！ それ以上は堂々巡り！ 二人とも少し落ち着きなさいっ！」

「「……………」」

氷室の一喝により言葉の矛先を一旦は収めるが、両者は未だ興奮

覚めやらぬ様子でにらみ合っている。

そんな様子に氷室は、「まったく……」と呆れたため息を吐きながら、

「上条君。あなたが目覚めるまでの間、インデックスがどれだけ心配していたのか、わかってるの？」

「ぐっ……、けど……」

小さく呻き、それでも何かを言いたげな上条を無視し、今度は、

「それとインデックスも。気持ちちは分かるけど、残された方の身にもなれば分かるでしょ。あなたが上条君を心配したのと同じように、私達もあなたの事が心配なの。大切に想ってくれる気持ちちは嬉しいけど、自分もそう想われているんだってこと、ちょっとは自覚して」「うっ……、でも……」

唇を噛みしめ、こちらも納得を見せない姿に、氷室はこめかみを押さえながら大きく息を吸い、

「デモもヘチマもない！ 二人とも、言う事は！」

「「……ごめんなさい」」

「よろしい」

鬼の——もとい、鶴の一声により、言われるままに頭を下げ合う二人。

そんな様子を満足げに見つめた氷室は大仰に頷いて見せた。

「第一、あらかた傷は塞がってるとはいえ、それだけ大騒ぎしたらせつかく治りはじめた怪我がまた悪化するでしょうに……」

「うっ……」

「ごめんなさい。とうま、大丈夫？」

「ああ、平気だって言ってるだろ。第一、そんなに痛かったらたた打ち回ってるっつ」

「……、」

上条の空元気に対し、インデックスは何も言わなかった。

無言のまま、ついに耐えられなくなったと言った感じで、じわりと涙があふれてくる。

何かを叫ばれるより、それはよっぽど上条の中心に突き刺さった。そしてようやく知った。“痛みを感じない方が危ない状態”だという事に。

上条は右手を見る。

包帯でグルグル巻きになって、壊れに壊れた右手。キチンと治療はされているのだろうが、感覚が妙に鈍い。痛みと言うより痺れと言った感じた。治療してコレだという事は本格的にヤバいのかもしれない。

「ゴメンね、とうま。ホントは魔術で治せばいいんだけど……」

「そういや、カリキュラム時間割りを受けた超能力者は魔法は使えねーんだっけか。ったくめんど臭え」

「……うん。『普通の人』と『超能力者』は回路が違うから使えないけど」

インデックスは上条の全身に巻かれた包帯を見やり、

「一応、包帯それでも傷は治るみたいだけど……そっち科学って不便。やっぱ魔術こっちの方が早いかも」

「確かにそれもあるけどな。——けどま、魔術なんて使わなくっても大丈夫だろ」

「……、なんて」

インデックスは上条の言葉にムスツと口を尖らせ、

「とうま、この期に及んでもまだ魔術を信じていないんだね。片想いちゃんみたいに頑ななんだよ」

そういう意味じゃねーよ、と上条は枕に頭を押し付けるように首を振った。

「そうじゃなくて……できる事なら、お前が魔術語ってる時の顔ってみたくなーからな」

上条は学生寮の通路で、ルーン魔術について『説明』していたインデックスの顔を思い出す。

まるで青ざめた満月のように冷たく、まるで時を刻む時計の歯車

のような静かな瞳。

バスガイドよりも丁寧で、それでいて銀行のATMより人間味に欠けた言葉。

魔導書図書館、インデックス禁書目録という一個の存在。

それが目の前の少女と同一だったとは、今でも信じる事ができない。

というより、信じたくなかった。

「？　とうまって、説明嫌いな人？」

「は……？　ってか、お前覚えてないのかよ？　ステイルの前でルーンについてカクカク人形みてーにしゃべってたろ？　お兄ちゃん正直アレは引きましたっつってんだけど」

「……えっと、—————そっか。私……また、覚醒めたんだ」

「覚醒めた？」

それはまるで、あの操り人形みたいな姿の方が本物の彼女だと言っているようだった。

今ここにいる、この優しい少女の姿は偽りの姿だと言わんばかりに。

「うん。けど、覚醒めてた時の事はあんまり突っ込まないで欲しいかも」

何でだよ？　と上条が聞くよりも先に、インデックスは初々しそうに顔を伏せ、

「意識がない時の声って、寝言みたいで恥ずかしいからね」

それに、とインデックスは唇を動かし、

「————何だか、どんどん冷たい機械になっていくみたいで、恐いんだよ」

インデックスは笑ってた。

本当に今にも崩れ落ちそうに、それでいて決して人に心配はかけ



ないように。

それは断じて機械なんかを作る事のできない表情だった。  
人間にしか作る事のできない、笑みだった。

「……ごめん」

上条は、自然と謝った。一瞬でも、彼女を人間離れしていると思  
った自分が恥ずかしかったから。

「いいんだよ、馬鹿」

と、良いのか悪いのかよくわからない事を言ってインデックスは  
小さく笑った。

「さて、もういいかしら？」

いつの間にか一人蚊帳の外にいた氷室が、遠慮がちに会話へと割  
り込んでくる。

「あ、ああ」

「う、うん。なにかな、サツキ」

「悪いけどインデックス。ナースステーションまで行って上条君が  
目覚めたって言ってきてくれる？」

「あ、うん……、いいけど……」

氷室の言葉に頷きながらも、チラリ、と上条の方を窺い見たイン  
デックスに、

「大丈夫、上条君の面倒は私が見てるから。それにキチンと診察し  
てもらわないといけないでしょ？ あとこの3日間何も食べてない  
から、食事の用意してもらるように頼んどいて」

「……わかった。じゃあ、ちよつと行ってくるね」

もう一度頷いてインデックスは病室を後にしようとし、

「あ、とうま。ちゃんと大人しくしてなきゃだめなんだよ！」

「子供じゃねー、……って、お前まだ根に持ってるのかよ！」

「知らないよーだ！」

そう言って逃げ出すように病室の外へと駆け出して行った。

「てか、病院の廊下を走るな！ ……やっぱ子供だろ、アイツ」

「嬉しいんでしょ。上条君の無事が確認できて」

「そりゃ、わかってるけどさ……」

上条だって安心した。いつもと変わらないインデックスの姿を見て、元気に走り回る彼女の姿を見て、心の底から安心した。

一時はもう会えないんじゃないかと思っただけに、その思いは一人だ。

「って、そうだ。魔術師は！」

「この3日は大人しくしてゐるみたい」

「そう、なのか？　ってか、氷室の方は大丈夫だったのか。確かステイルってヤツと戦ったって……」

「ええ。軽く捻ってやったわ」

「軽く捻ったって……」

そんな容易い相手ではないことは上条自身が一番よく知っている。「言ったでしょ。私の能力はこと防御に関しては“絶対”だって。

どんな攻撃もダメージを受けないなら、初めから攻撃されてないのも一緒よ」

それより、と氷室は上条の目を真剣に覗き込み、

「そっちはどうなの。そんなボロボロにされて、一体何があったの？」

「それは……」

氷室の問いかけにより、上条はあの夜の戦いの一部始終を思い返し、

「……そうだっ！　制限時間！」

「リミット？」

思い出した。

3日。その言葉を聞いてから妙な引っ掛かりを覚えていたそれがようやく解けた。

「インデックスは！　アイツ、何ともなっていないのか！」

「何ともって……さっき見てたでしょ？　何か問題あるように見えただ？」

「あ、いや……」

何ともなかった。何にも変わらず、相変わらずのお子様振りで、人の事ばかり気にして、そして上条の事も氷室の事も“覚えていた”。それはつまり、まだ魔術師達は記憶の『消去』を行っていないという事。それでいて、さっきの様子を見る限り、インデックスにはまだ自覚症状は現れていないようだ。

上条はホッとすると同時に、貴重な最後の3日間を無駄にした事に自分で自分を殺したくなった。

「……上条君」

「あ、ああ。そうだな。氷室には話しておくべきだよな」

それがどんなに衝撃的で、救いようのない残酷な内容でも、話さないわけにはいかない。

ゆっくりと息を吸って、吐いて、上条は気を落ち着けると、

「氷室。落ち着いて聞いてくれるか？」

「ええ。全部話して。何があったのか、何を聞いたのか、余さず全て」

「……わかった」

小さく頷き、上条は語った。

神裂火織という魔術師の正体と、インデックスにかけられた呪いについて。

全てを語り終えた上条は、そっと息を吐く。

それはじつと黙って聞いていた氷室は、壁に背を預け、何かを考えるように腕を組んで目を閉じている。

きっと上条の語った内容を吟味して、真偽の程を探っているのだろう。

だけど、

「信じられないってのはわかる。俺だって信じたくなーよ。けど神裂ってヤツは嘘を言ってるようには見えなかった。じゃなきゃ、あんな風に感情を剥き出しにしたりしない。だから本当なんだ。本当

にインデックスは……」

「……そんな事はどうだっていいわ」

唐突に上条の言葉を遮るように発した氷室の声は、恐ろしく冷たい何かを感じさせた。

「ひ、むろ……?」

恐る恐る上条は、氷室の表情を覗き込む。その顔は一切の感情を示さず、表情までもが寒々しい思いを抱かせる。

「どうだっていい、って、そんなこと……」

「どうでもいい事よ、その真偽の程だなんて。問題は、上条君がどうしたいのか、でしょ」

そうだ。それは確かに正しい。信じる信じないを論じている余裕はもうないのだ。制限の3日は過ぎ、今日がその日だ。こんな事をしている間にも制限時間タイムリミットは刻々と近付いていく。

「今はちょうどお昼を回ったあたりね。最長で残り12時間。その12時間の間に何をどうしたいのか、何をどうするべきかを探し出して、処置を施して、彼らに明確な結果を示さなければならぬ。そうじゃないの?」

「あ、ああ。そうだ」

「それで? 上条君はどうするつもり?」

「んなもん、決まってるだろ」

インデックスを助ける。なにがなんでも記憶を消さずに済む方法を見つけ出して、あの魔術師達の思い通りにはさせずに助け出す。

「そう」

予想通り、とでも言いたげに氷室は小さく息を吐くと、

「……なら、私からも言っておくわ」

「何をだ?」

何か名案でもあるのではないか、と上条は期待に胸を躍らせ、

「この件に関して私は、一切手を出さないから」

「……………は？」

上条は耳を疑った。

「いま、なんて……」

「聞こえなかった？ 上条君には手を貸さない、って言ったのよ」  
聞き間違いじゃなかったようだ。聞き間違いじゃないのなら、何  
なのか。

「それはつまりアレか。氷室はインデックスの記憶がなくなっちま  
ってもいいって、そういうのか……」

「そうね、むしろ――」

そこで言葉を止めた氷室は、ふいにドアの向こうへと視線を向け  
た。

誰かがやってきたわけでもない。ただ遠くを見つめるかのように  
焦点の合わない瞳で何かを見つめ続けている。

そんな意味の分からない氷室の突然の行動を眺めながら、上条は  
さっきの言葉の意味を反芻していた。

氷室は手を出さない。インデックスの記憶に関して一切手出しし  
ないと、そう告げた。

それはつまり、インデックスの思い出がどうなろうと構わない、  
という事なのか？

（そんな馬鹿な……）

ありえない、と上条は即座に否定した。

氷室にとってもインデックスは大切な存在のはずだ。毎日楽しげ  
に語りあって、上条には理解できない魔術談義に花を咲かせ、イン  
デックスが泣いた時は胸に抱いて泣き止むまで優しくあやしていた。  
そんな氷室がインデックスを大切に想っていないはずがない。

なら、どうして？ どうして、氷室はインデックスを助けようと  
しない？

それとも氷室は、インデックスを見捨てたっというのか？

助ける方法がないからと、あの魔術師みたいに諦めて、切り捨てたっていうのか？

「……一つ、言っておくわ」

「なんだよ」

言葉を返す上条の声には、尋常ならない怒気が込められていた。それをさして気にする風もなく、氷室は変わらぬ口調でつづける。「あれから3日が経ってる」

「んなこと分かってる！ 3日も無駄にしちまったから、もうこれ以上無駄にしてる時間なんてないんだよ、俺達には！」

「そうね。でも、私はそこに含まれない」

「なんでだよ！ なんで氷室までアイツらみたいに、そう簡単に諦めちまってんだよっ！」

「諦めたわけじゃない。もう終わってるのよ」

「違う！ まだ終わってない！ まだ方法はきつと——」

「そうじゃない」

上条の訴えを遮り、氷室はキツパリと告げる。

「もう、“約束の期日は過ぎてる”って言ってるの。あの子はもう“退院している”のよ？」

「—————」

一瞬、理解が及ばなかった。

期日。退院。約束。その言葉が意味するものを上条はゆっくりと噛みしめるように思い出していき、

——退院は術後の経過観察と検査を含めて4日後。

——それまでは現状維持でも十分。私も約束通りあの子を守るわ。

それは上条に選択を迫ったときの言葉。

元々氷室と上条の間にあったのは、互いに守りたいものを守るた

めの相互協力という『約束』だった。

上条はインデックスを。氷室は病院とその関係者たちを。

しかしその『約束』は、インデックスが入院している間のみの期限付きのもの。

言葉にある猶予の4日はとうに過ぎ、インデックスは2日前に退院を済まし、『約束』はそこで途絶えた。

インデックスを守ると言う、上条との『約束』は、2日前ですでに終わっている。

「だから、なのか……」

「一応、上条君が寝ている間はサービスしておいてあげたわ。でも、それ以上は契約外。この病院内で戦闘が起きるなら、ここを守るために彼らと戦うけど、それ以上は手を貸す義理はもうないわ」

「義理って……」

その程度だったのか？ 氷室にとって、あの3日間の付き合いは、ただの『義理』なんて一言で片付く程、軽いものだったっていうのか？

「なんだよ、それ……」

「悪いわね。私は慈善事業をやってる程、暇じゃないの。助かる方法がすでにあるなら、それ以外の方法を探す、なんて無駄な事をしてる余裕はないのよ」

「っざっけんなッ！」

氷室のどこまでも突き放した台詞に、上条の怒りが頂点に達した。「ンだよそれは！ 暇がない？ 無駄な事？ 要するに氷室にとってインデックスの事なんてどうだっていいって事なんだろうが！ 見損なったな。氷室がそんな冷たいヤツだったなんて思わなかった！」

「そうよ。私はそういう人間よ。上条君が勝手に期待して、勝手に

頼って、勝手に見縊っただけじゃない」

「あー、そうだよ。信じた俺が馬鹿だったさ！」

ダンッ、と上条は勢いよくベッドから立ち上がる。

それを冷めた目で見る氷室の姿に、より一層怒りが増した。

「もう頼らない」

「ご勝手にどうぞ」

「インデックスは俺が助ける」

「好きにすれば」

「ああ、好きにするさ！」

吐き捨てるように言い放って、上条は病室の入口へと歩き出す。

「どこに行くの？」

「決まってる。インデックスを救う方法を探しに行くんだよ！」

「そう。でもその前にナースステーションに行った方がいいんじゃない？」

「あん？」

ガラ悪く、意味の解らない事を言う氷室を上条はありったけの怨念を込めて睨み付ける。

「親切心で言ってるんだけど」

「どういう意味だよ」

「それは――」

そこまで言った直後、唐突に氷室が立ち上がった。

「……………チッ」

「……氷室？」

突如それまでの冷徹な雰囲気打ち消して、苦虫を噛み潰したかのような顔をする氷室の様子に、思わず上条は声をかけてしまう。

だが、そんな上条には構わず、何か焦る様な面持ちで氷室は上条の横をすり抜けると、部屋の外へと駆け出す。

「お、おい氷室？」

「ついてきて！」

「ついて、って……」



意味が分からない。今さっきまで完全に仲違いをしていたというのに、どうして上条を誘うような言葉をかけられるのか。

だが、そんな疑問も次の一言を聞いて吹き飛んだ。

「ついてきなさい！ インデックスが倒れたわ！」

「なっ——！！？」

倒れた？ 誰が？ インデックスが？

「どういう事だよ！」

「説明してる暇はない。近くに魔術師達もいる！」

「——っ！？」

どうやってソレを知ったのかは分からないが、もしそれが本当だとすればマズい。

「くっそ——！」

氷室の後に続いて上条も病室を抜け出し、走り出す。

「一体どうなってんだよ！」

「追跡<sup>トレース</sup>してたのよ」

「トレース？」

「あの子の動きのベクトルをずっと追って観測してたって言ってるの！ それがさっきから妙な動きを見せてたから。たぶん魔術師達と出くわしたんでしょね」

「ちつくしろう！ なんでもっと早く言わねえんだよ！」

「言ったじゃない！ ナースステーションに行けって！」

「ちゃんと覚えて言ってるんだよ！」

あんな一言でわかるかッ！ と上条が罵倒する間にもナースステーションが目に見える場所まで辿り着き、そこに群がる野次馬たちが目に飛び込んでくる。

「ちよっと、そこどいて！」

氷室の叫びに驚いたように人垣が左右に割れ、その中心が目飛び込んでくる。

「インデックスっ！」

そこには廊下の床に力なく倒れたインデックスの姿があった。

それと、

「デメェら、インデックスから離れやがれ！」

そのすぐそばに立つ、魔術師——ステイル・マグヌスと神崎火織の姿を目にした瞬間、上条は怪我している事も忘れて拳を握り、飛びかかる。

それを、

「やめなさい、上条君」

「氷室？　なんでだ！」

この場に魔術師達が居て、インデックスが倒れている。そんな状況で考えられることなんて一つしかないのに。

「今はこの子の方が先よ！」

そう言っ、て、氷室は床に倒れるインデックスのもとに跪き、呼吸やら脈拍やらを確認し出す。

その動きに、上条の中の熱が一時的に引いていく。しかしだからと言って、魔術師達に対する嫌疑は消えたわけではない。

きつく睨み付け、二人を守るように間に入って立ちふさがる。

「デメェら、インデックスに何しやがった」

「何もしてない、と言っても信じてくれそうにないね。けど、本当に僕らは何もしてないさ。なあ、神裂」

「はい。私達はただ『足枷』の効果を確認しに来ただけです」

足枷、と言う言葉を聞いて、上条当麻は初めて『敵』の意図を悟った。

インデックスは、一人なら魔術師から逃げられるのだ。これまでだって教会を相手にたった一人で1年近く逃げ回っていたのだから。たとえ無理矢理捕まえて、どこかに閉じ込めたって簡単に抜け出されてしまうかもしれないのだ、彼女一人なら。

制限時間まであと何日もない状態で、1年近く教会から行方をくらます事が出来た彼女に、再び本格的な『逃走』をされたら取り返しのない事態になるかもしれない。どこかに監禁しても脱出さ

れるかもしれないし、『儀式』の途中で逃げられるかもしれない。

だが、上条当麻という『怪我人』を背負う事になれば話は違う。

だから魔術師は上条を殺さなかった。そして、わざとインデックスの側へと帰した。彼女が上条の事を諦めないように、都合のいい『足枷』をはめるために。

インデックスを、より安全により確実に『保護』するためだけに、彼らは悪に徹したのだ。

「もっとも、病室に辿り着く前にここで出会う事になったのは予想外でしたが……」

「目の前で突然倒れられることも含めてね」

つまり、コイツらと出会ったインデックスは対立し、その最中に突然倒れたという事か。

「ま、もうすぐリミットだ。“いつこうなってもおかしくなかった”」

「――ッ!？」

そう、制限時間<sup>リミット</sup>だ。インデックスの記憶が脳をパンクさせるまでの制限時間。それに伴う脳の圧迫に、彼女は時折酷い頭痛に見舞われていた。それがいいよ激しくなって、結果倒れたとしてもなんらおかしくはない。

「じゃ、じゃあ……」

「あと11時間と38分」

「――!？」

ふいに近くにあった時計を見上げる。

今から11時間と38分後――今夜午前零時。

それがインデックスの記憶がパンクする制限時間<sup>タイムリミット</sup>。

「どいてくださーい！」

ガラガラという音ともに看護師がストレッチャーを連れて駆け込んでくる。

おそらくこの状況を聞きつけて駆けつけてきたのだろう。そのすぐ側にはカエル顔の医師の姿もある。

「やれやれ。そっちの少年が目覚めたと聞いてきたんだけどね？」

今度はまたこの子かい？ 忙しい子たちだね？」

肩を竦めながらも看護師達にインデックスをストレッチャーで運ぶよう指示を出す。

しかし、

「必要ないわ」

氷室が手で制し、インデックスの体を両手で抱き上げた。

その様子にかエル顔の医師が不思議そうに首を傾げ、

「……別にわざわざ手で運んでもらわなくてもいいんだけどね？」

「違うわ。必要なのは貴方の方」

「僕がかい？」

「ええ。この子の症状は医者では治せない<sup>もんだい</sup>」

そうキツパリと告げる氷室に、カエル顔の医師から気怠げな表情が消えた。

「どういう意味だい。僕はこれでも腕には自信がある」

「分かっている。それは、“私が誰よりも理解してる”。でも、そういう次元の話じゃないの」

「……原因は分かっているのかい」

「ええ。対処法も」

「そうか……」

対処法、そう聞いて上条はゾッと背筋が冷えた。

そう、確かに対処法はある。“インデックスの思い出をすべて消す”という方法が。

そして氷室はそれを支持していた。その方法があるのなら、ある

かも知れない他を探す気はないと。

「ま、待ってくれ！　まだ時間は……」

「上条君は少し黙ってて」

「黙ってられるか！」

黙っていられるはずがない。この場で、この件に関して、インデックスの味方でいられるのは上条ただ一人だけなのだから。

しかし、そんな上条に氷室はあらん限りの怒気を振りまき、

「いいから、黙りなさい！　ここで話すような話でもないでしょうが！」

一喝した。そのあまりの迫力に、上条のみならず、魔術師も、看護師も、野次馬たちさえ息を飲んで声を失う。

そんな中でただ一人、平然としていたカエル顔の医師が、

「……任せていいんだね」

「ええ、必ず。必ず助けるわ」

「そうかい。なら任せよう」

「……氷室？」

上条は今日何度目とも分からない耳を疑った。

（助ける？　助けるって言わなかったか、今……）

確かに言った。氷室が、インデックスの事を助ける、と。

「けど、そこまで言ったからには、わかっているね」

「もちろん」

カエル顔の医師の問いに、氷室はしっかりと頷く。

その様子を見た医師は、呆然としたままの看護師たちに手早く撤退を告げ、自らもその場を後にする。

「……氷室？」

「ついてきて」

上条の呼びかけにそう短く告げ、

「……その二人も」

有無を言わさぬ声に、魔術師達も黙って頷き、氷室の後に続いて一同は病院を後にした。

### 第13章 とある選択と交渉決裂《ブレイクダウン》

辿り着いたのは病院から少し離れた小高い丘上の公園。

公園と言っても、遊具や砂場がある様なお子様仕様のものではなく、散発的に立ち並ぶ樹木と芝の地面が広がる緑あふれる開けた場所だ。

そんな公園の隅にポツンと置かれたベンチの上に氷室はインデックスを横たえると、少し離れて振り返る。

その先にはステイルと神裂が並んで立ち、上条は少し躊躇ったものの、構図的に氷室の方へとよって彼らと対峙した。

「とりあえず、『人払い』を」

「すでに済ませてある」

「気が利くわね」

一見気安い会話に見えるも、ステイルからの言葉には鋭い棘がある。

「それで、僕達をこんなところに連れてきて、何をしようっていうんだい？」

「話をするのならば、病室でも十分なはずですが」

「そうね。穏便な話し合いになるならそれでもいいんでしょうけど……」

そうはならないだろうと、お互いに理解していた。

「……僕達はそのつもりなんだけどね」

「っざけるな！」

ステイルがチラリと向けた視線に噛み付くように上条が吠える。

「インデックスの記憶なんぞ、絶対消させねえ！ 俺はまだ諦めちゃいねえんだ！」

強い決意を瞳に宿し、上条は魔術師達を睨み付ける。

「俺はまだ諦めちゃいねえ。いや、何があっても諦める事なんかできるか！ 100回失敗したら100回起き上がる、1000回失

敗したら1000回這い上がる！ たったそれだけの事をテメエらにできなかった事を果たしてみせる！！」

そんな激昂に震える上条に対し、

「……君も往生際が悪いね」

魔術師達はあくまでも冷静だった。暴風に晒されながらも自らを撓らせ持ちこたえる柳の木の如く、その激情を受け流す。

「さっきも言ったけど、あの子のリミットは今夜午前零時だ。必然的に、僕達はその時刻に合わせて全てを終わらせるよう予定を組んでいる」

「だったら何だよ」

「命令だよ」

静かに、冷徹に、ハッキリと、ステイルは告げる。

「君の意思がどうであれ、刻限と共に僕達はあの子を回収する。それを邪魔するなら、今度こそ君達を完璧に砕くまでさ」

前回はあえて見逃したのだと、ステイルは断言し、上条の決意を突き放す。

「あなたは、私達の中に残っている人間らしい『優しさ』を頼りに交渉しようと思っているのかもしれませんが……だからこそ、厳命します」

ステイルに続き神裂も平坦な声色で、

「今すぐにでもあの子に別れを告げてその場を離れなさい。あなたの役割は足枷です。用を無くした鎖は、断ち切られるのが宿命さだめですから」

上条に『諦める』事を命じた。

それはただ単純な敵意や嘲りだけで、告げられたのではない。

無駄な努力をするな、と、その分傷つくだけだ、と絶望にひた走る人間を止めようとする、彼らなりの『忠告』だった。

「ふ、……ざけんなよ」

それが上条の癪に障った。

「どいつもこいつも自分の無能を他人に押し付けやがって。大体テ

メエらは魔術師なんだろう、不可能を可能とするから魔法使いなんて呼ばれてんだろ！ それなのに何だよこのザマは。ホントに魔術じゃ何もできねえのか！ 一つ残らず全部まとめて試しつくしたってインデックスの前で胸を張って正々堂々言えんのかよ！」

「……。魔術では、何もできませんよ。できるようならばとつくりやっています」

神裂は悔しげに奥歯を強く噛み砕く。

「我々は魔術師です。『魔術』によって作られた環境では、『魔術』によって解決される恐れがありますから」

「魔術の専門家が作り上げた対オカルト用の防御システムだってかうざってえ、インデックスの10万3000冊使えばどうとでもなるだろ！ アイツを押さえりゃ神様の力を手に入れられるだなんて謳っている割には女の子の頭一つ治せねえなんてみみっちい事あるかよ！」

「魔神、の事です。教会は、禁書目録の『反乱』を恐れています。だから1年周期で記憶を消さなければ死んでしまうという、教会の技術と術式という名の『首輪』をつけた。その教会が、みすみすあの子自身に首輪を外させるような可能性を残すと思いますか？ ……：おそらく、10万3000冊には偏りがあります。例えば、あの子の記憶操作に関する魔導書は覚えさせない、とか。そういう防御線を張っていると思われませんか」

くそつたれ、と上条は口の中で毒づいた。

それは少し考えれば当然のことだ。『禁書目録』なんて残酷なシステムを作り出すような連中が、そんな初歩的なミスを犯すはずがない。準備は万全に、万に一つの見落としすら許さずに仕組みを構築しているに決まっていた。

だが、それは魔術側の人間が考えたものだ。

「……確かインデックスの頭の8割は『10万3000冊の知識』



に食われちゃってんだよな」

「はい。正確には85%だそうですが、魔術師<sup>わたしたち</sup>ではあの10万3000冊の破壊は不可能です。魔導書の原典<sup>オリジン</sup>は異端審問官<sup>インクジショナー</sup>でも処分できませんから。従って、残る15%……あの子の『思い出』を抉ることでしょうか、魔術師<sup>わたしたち</sup>はあの子の頭の空き容量を増やすことはできなかった」

「……なら、科学側<sup>おれたち</sup>なら？」

『魔術』でどうにもできないことでも、『科学』ならどうだ、と上条は考える。

魔術師が自らの領域<sup>フィールド</sup>で四方八方手を尽くしてもダメだったとしても、それとは異なる『科学』ならば、まだ可能性は残されているのではないか。その可能性に賭ける価値は十分にあるのではないか。

例えば彼らが科学に疎くても、伝手<sup>かみじょう</sup>を持っていなくても、それを橋渡しする人間が居れば、その手もあり得るのではないだろうか？

そんな上条の問いに、

「……、そう、思っていた時期もあつたんですけどね」  
神裂は疲れたように口を零した。

「正直、私はどうして良いのか分からない状態です。自分が絶対と信じていた魔術<sup>せかい</sup>ではたった一人の少女を救う事もできない。ならばもう藁をも掴む気持ちになるしかないのは分かりますが……」

「……、」

その先の台詞は、何となく予想がついた。

「……正直、だからと言って大切なあの子を科学<sup>あなた</sup>に渡すのも気が引けます」

それは予想に違わぬ一言であり、  
「魔術師<sup>わたしたち</sup>に出来なかった事が科学側<sup>あなたがた</sup>にできるはずがない、という自負があるんでしょうね。得体のしれない薬にあの子の身体を浸して体<sup>メス</sup>の中を刃で切り刻んで……そんな雑な方法ではあの子の寿命を無

駄に削るだけに決まっている。第一、“機械にあの子が犯される所なんて見たくもない”

「なめやがって……」

上条にとつて看過できない一言だった。

「試した事もねえくせに良く言うぜ。そんなら1個質問だ。テメエ、記憶を殺すなんて言ってるけどよ、そもそも記憶喪失ってのが何なのか分かってんのかよ？」

その問いに対し、魔術師からの返答は――ない。

予想通りの反応に、上条は小さく鼻を鳴らす。

「ハッ。お前、良くそれで完全記憶能力だの記憶を奪うだの語ってられたよな。一言で記憶喪失つつつても色々あるのに」

そう語りながら上条は出来ない己の頭をフル回転し、開発の授業の内容を全力で絞り出すようにして思い返す。

「老化……ってかボケもそうだし、アルコールで酔っ払って記憶がなくなるのもそうだ。アルツハイマーっていう病気もそう、TIA……、ってなんだっけか？」

タラリ、と冷や汗を流しながらチラリと上条は氷室を振り向く。

その視線を受けた氷室は、心底あきれ返ったため息を吐きながら、仕方なくフォローに回る事にした。

「……一過性脳虚血発作。分かり易く言うと、軽度の脳梗塞よ」

「あ、そうそう。それだ」

いっちょまえに啖呵を切っておいて、それはダメだろ……、とでも言いたげな氷室の視線を無視して、上条は構わず続ける。

「とにかく、それでも記憶は飛ぶ！」

「あとはハロセン、イソフルラン、フェンタニールなどの全身麻酔による影響や、バルビツール酸誘導体やベンゾジアゼピン類等の薬の副作用で記憶を失う事もあるわね」

フォローを続ける氷室が内心で「後で小萌先生に報告ね、これは」などと考えている事を、上条は知らない。そのせいで、この後に追加<sup>じく</sup>の補習が待っているだなんて、彼はまだ知る由もない。

「要するに、人の記憶を『医学的』に奪う方法なんていくらでもある、って訳だよ。テメェらにできない方法で、10万3000冊を挟り取る方法が、って意味だ馬鹿」

馬鹿はアンタでしょう、という氷室の小さな呟きは、この場では完全に無視された。

「それに、ここは学園都市だぜ？ サイコメトリー 読心能力者やら マリオネット 洗脳能力やらなんつー『心を操る能力者』なんてものたくさんいるし、そういう研究をやってる機関もゴロゴロある。望みを捨てるにやまだまだ早いんだよ。常盤台には触れただけで人の記憶を抜き取る レベル5 超能力者もいるみたいだし」

むしろ上条にとってこっちの方が本命だ。

先にあげた例は全て『脳を傷つける』ことで『記憶を取り除く』方法だ。脳細胞そのものをその容量ごと削り取ってしまうような乱暴な方法であり、容量が増えるわけじゃない以上、それでインデックスが助かるわけじゃない。

だがそれをあえてここで言う必要はない。今は何としてでも魔術師による強引な『記憶消去』を止めさせなければならぬのだ。嘘でもハツタリでもなんでも使って、躊躇させる必要がある。

「で、どうする魔術師？ テメェはこれでもまだ人の邪魔をするのか？ 挑戦する事を諦めて、とりあえずで人の命を天秤にかけちまおうってのか？」

どうだ、と上条はできる限りの威勢を以て、魔術師達にふっかける。

しかし、

「……、敵を説得する言葉にしては、安すぎますね」

魔術師達はあくまでも冷静だった。

「逆に言えば、私達にはとりあえずあの子の命を助けてきた信頼と実績があります。何の実績も持たないあなたの『賭け』は信用でき

ません。それは無謀の一言に変換する事はできませんか？」

ダメだった。上条の全力を賭した賭けでも、魔術師達の心を揺らすことは叶わなかった。

もう一度、反論の言葉を頭の中に思い浮かべるが、何一つ出てこない。

ならば、もう認めるしかない。

「……、だよな。結局、分かりあう事なんざできねーんだな」

「ですね。同じモノを欲する者同士は味方になる、という公式があれば世界は洩れなく平和になっているでしょうから」

ましてや両者が望むモノは分け合う事のできないもの。となれば、残る選択肢は一つしかない。

「――上等だ」

上条は拳を握る。それに合わせるかのように、神裂も腰の七天七刀の柄へと手を伸ばした。

「……、それで？」

そんな二人をよそに、ステイルは徐に呟く。

「その彼はそう言ってるけど、君はどうするんだい？」

その言葉の矛先は、上条の少し後ろに立つ氷室へと向けられたものの。

ステイルから突きつけられた言葉の槍に対し氷室は、降参するかのようにゆっくりと両手を挙げ、

「この件に関して、私はノータッチよ」

「氷室――！？」

彼女の回答に、上条が思わず声を上げる。

「ふーん。てっきり君も彼と一緒に噛み付いてくると思っていたんだが……」

「無駄な努力はしない主義なの」

「だそうだよ」

彼女の方が分をわきまえている、とでも言いたげな表情でステイ

ルが上条を嘲笑う。

「ちょ、ちょっと待て、氷室！ おまえ、さっきあの医者にインデックスを助けるって……」

「ええ、言ったわ」

氷室は頷く。そして、

「だからこそ、手を出さないのよ」

そのまま上条を突き放す言葉を放った。

「な、――」

てつきり心変わりしたのだと思っていた上条にとって、それは二度目の裏切りに他ならなかった。

「なんでだよ！」

「それより、」

そんな上条の訴えを無視して、氷室はステイルを見る。

「聞いてきて、くれたかしら？」

「『首輪』についてかい？ もう意味の無い事だと思うけど」

「それでもよ。あの子の記憶がどうなろうと、『首輪』がなくなるわけじゃないでしょ」

「なるほど、確かに」

もっともな指摘にステイルは頷いた。

まるで長年付き合ってきた間柄のような気安い二人のやり取りに上条は憤りながらも、しかし内容が見えない話に首を傾げる。

「……『首輪』？」

「そうよ。忘れたの？ あの子の喉の奥にある魔術刻印の事よ」

「あ――、」

完全に忘れていた。確かにそんなものが仕掛けられている、とあの医者が言っていたのを上条はようやく思い出した。

「けど、今はそんな話をしている場合じゃ――」

「今、必要なのよ。……それで、アレは何だった？」

「残念ながら、アレは君の思っているような危険なものじゃない。  
むしろ禁書目録インデックスを守るためのものだそうだ」

「具体的には？」

ヨハネのペン

「『自動書記』——と言っても君には理解できないか。そっちの少年は見たことがあるはずだが……、まあ、簡単に言えばあの子が一人じゃどうにもならない事態に陥った時、その体を無理矢理動かして問題を解決するための魔術、ってところかな」

ようは万が一の保険さ、というステイルの説明に、上条の脳裏にある光景が思い浮ぶ。

それはステイルと学生寮の廊下で対峙した際に見た、人形のような口調で喋るインデックスの姿。

インデックス自身が“冷たい機械”と呼び、恐れていた、あの魔導書図書館としての姿だ。

「ざ、っけんな！ アレがインデックスを守るためのモンだと！ テメエらどこまでインデックスの事、貶めれば気が済むってんだ！」

「僕に言われてもね……、仕掛けたのは僕じゃないし。それにそのおかげで君は僕に“奇跡的に”勝てたんじゃないのかい？」

確かにそうだ。あのインデックスの助言がなければ、上条当麻はインケンティウス魔女狩りの王の対処法なんて思いつかず、無様に逃げ出すか、殺されていたに違いない。

「だからって——！」

「それに、今回は彼女のおかげで無事に病院で治療を受けれたみたいだけど、そうじゃなければ彼女はどうなってたかな？」

ステイルの問いに、今度こそ上条は反論の余地を失った。

あの時、たまたま、偶然、氷室が通るかからなければ上条は当初の予定通り、小萌先生の手を借りて回復魔術を使おうとしていたのだ。その時、インデックスの意識がなければきっと、『自動書記』ヨハネのペンが発動して、回復魔術について手ほどきをしていただろう。

つまり、そういう状況を想定し、それを打開するためにつけられたものなのだ。

「そういうわけさ。だから何の問題もない」

「……分かったわ。わざわざロンドンまで行って聞いてきてくれた

のね。ありがとう」

「ふん。君のためじゃない。僕自身が気になったから聞いてきただけだ」

「素直じゃないわね」

クスリ、と笑う氷室に、ステイルは忌々しげな表情を浮かべ顔を逸らした。

「それで、上条当麻。この状況でもまだ、足掻くと？」

「当然だ！」

確かに周りは敵だらけだ。味方だと思っていた氷室も向こうに回った今、上条当麻に勝ち目は殆どないだろう。

だからと言って、それが“諦める”理由にはならない。

だからこそ、上条当麻は“諦められない”。

最後の最後、世界中の誰もが敵に回ったとしても、上条当麻はインデックスの味方であると、そう決めたのだ。

交渉は決裂。譲歩はない。

互いに譲る事が出来ないものがある以上、それを分かち合う事が出来ない以上、

残された選択肢はただ一つ。

「来いよ、魔術師」

上条は強く右手の拳を握る。

戦況は二対一。過去の戦績はステイルには苦戦、神裂にボロ負けしている。そんな相手と二対一の状況下で、しかも病み上がりのため体はまだボロボロな状態。万に一つの勝ち目がないのは誰の目にも明らかだ。

それでも上条は拳を握り、大地を強く踏みしめる。

万が一に勝ち目がないなら、億が一の勝ち目を拾え<sup>けい</sup>ばいい。億が一でもだめなら兆が一。それでもだめなら京<sup>けい</sup>でも垓<sup>がい</sup>でも幾らでも構わない。ほんの僅かな、ゼロじゃない勝ち目をこの一戦でつかみ取ればいいだけの話だ。

『出来る』『出来ない』は関係ない。

『やる』か『やらない』か、それだけだ。

「テメエらがあくまでインデックスの『思い出』を殺すっていうなら――」

それでもまだ『勝ち目がない』と言うのであれば、

「まずはその幻想をぶっ壊す！」



### 第13章 とある選択と交渉決裂《ブレイクダウン》（後書き）

この一週間で何が!?

PV・ユニーク数が急増し、お気に入りも一気に100を突破して200件に到達!?

驚きのあまりしばらく放心してしまいました。

ともあれ、皆様にご愛護いただいているようで、作者としてこの場を借りて感謝の意を。

と言いつつ、今回は短め。

次回はできる限り早く投稿できると思うのでご容赦を。

感想、誤字脱字報告待ってます。

## 第14章 とある運命からの脱獄法《サードセレクション》

「来いよ、魔術師。テメエらがあくまでインデックスの『思い出』を殺すっていうなら——まずはその幻想をぶっ壊す！」

上条の啖呵に、神裂は静かに目を閉じ息を吐く。

「……いいでしょう。ステイル」

「ああ、神裂。どうせあの様子じゃ、逃げようにも逃げられないだろうしね。少し早い回収しても問題ないだろう」

そう言ってステイルは懷から刻印<sup>ルーン</sup>のカードを取り出して構えた。

「……、」

ゆっくりと息を吐き、上条は間合いを測る。

魔術師達も同じく腰を落とし、臨戦態勢を整え、何時でも上条を殺さんと冷徹な光を目に宿す。

両者の緊張感が徐々に高まり、

その間を真夏の湿った風が吹き抜け、

どこからともなく転がってきた空き缶が、甲高い音を奏でた瞬間——、

（今だ——！）

上条は強く大地をけ

「そういう話なら、私も上条君の味方として参戦するわ」

「……………は  
い？」

その唐突な参戦表明に、場の緊張感が一気に霧散した。

上条は勢い余ってコケそうになった体ギリギリで踏みとどまり、その声の主を振り返る。つまりは氷室へと。

「……どういう意味、ですか」

意外だったのは魔術師側も同じらしく、神裂の声には動揺が見て取れる。

「君、手出しはしないんじゃないのかい？」

「ええ、記憶に関しては、ね」

「……記憶に関しては？」

「そうよ。でもそれ以外については何もしないなんて言っていないわ」「はあ？」

上条には氷室の言っている意味が理解できない。というよりも、「自分が矛盾した発言をしている事を、理解していますか？」

そう、矛盾している。氷室の言っている事はチグハグでてんでバラバラで、全く筋が通っていない。

だが、当の本人はそうは思っていないらしく、

「矛盾なんてしていないわよ？」

「どう見てもしているでしょう！ あなたは記憶の消去に反対していないのでしょう！」

だから魔術師達と敵対する理由はない。むしろ味方に付いたっておかしくない。

インデックスの記憶を消す手段を持っているのは彼らで、彼らにしかそれは行えないのなら、魔術師側につくのが道理だろう。

しかし、氷室は神裂の言葉に対し、不思議そうに首を傾げ、

「そんな事、一度も言った覚え、ないんだけど？」

「……………はあ？」

心底不思議そうな顔をする氷室の答えに、今度は魔術師側が呆け

た。

「い、いや、だって君、手を出さないって……」

「ええ。記憶に関しては、手を出さない、と確かに言ったわ」  
でも、と氷室は続け、

「一度も『記憶の消去』に賛成、とは言っていないはずよ」

確かに言っていない。言っていないが、

「同じことでしょう！ あの子の記憶を消すか、それ以外の方法を  
探るか、道はどちらか一つしかないのですから！」

「いいえ、まだもう一つ、道はある」

ゆっくりと首を振る氷室に、一同は顔を見合わせた。

魔術による『思い出』の消去。科学による『10万3000冊』  
の消去。

それ以外に道なんてあるのか、と。

「それは……？」

誰からともなく零れたその問いに対し、

「なにもしないこと」

淡々と告げられた氷室の答えに、長い沈黙が下りた。

「……ふざけてるのかい」

その沈黙から最初に口火を切ったのは炎の魔術師。

「それがどういう意味なのか、分かって、そんな事を言っているの  
か？」

「もちろん」

「ふざけるなっ！」

ステイルの怒りが文字通り“爆発”した。

その手に炎剣を携え、今にも斬りかかるとばかりに氷室に殺意  
の目を向ける。

「何もしなければあの子は死んでしまうんだぞ！ それを分かって  
いて、そう言っているのかと聞いているんだ！」

「だから、もちろん、と答えたはずだけど？」

「ふ、ざけるなっ！」

轟！ という轟音と共に、ステイルの手から炎剣が氷室に向けて放たれる。

しかしそれは彼女の身に届くよりも前に、初めから存在しなかったかのようにかき消された。

「ふざけてなんてないわ。私は、それであの子が死ぬのなら、そのまま死なせてあげるべきだ、と、そう言ってるのよ」

「それがふざけてると言ってるんだ！ あの子を殺す？ ふざけるな！」

その怒りは上条にとっても同じだった。

「本気……、なのか、氷室」

「本気も本気よ。あの子の記憶は消させない。けど上条君の手伝いもしない。なにもしないで、その結果死んでしまうのなら……、死なせた方がマシよ」

「……ざ、けんなよッ！」

激昂した上条が飛びつくように殴りかかる。

しかし、ひらりと半身を翻し躲かれ、あまつさえその際に足を引っかけられ、上条は地面へと倒れ込む。

うつ伏せに倒れた上条は、即座に起き上がろうとするが、

「なっ——、身体が、うご、かない——!?」

『イマジンプレイカー幻想殺し』の効果範囲は右手の手首より先の部分だけ。なら、それ以外の箇所を『止め』ればいいだけの話よ」

具体的には首、肩、肘、腰、膝に足首……それら各関節の動きを止めてしまえば、人間は身動き一つ取れなくなる。そして右手の手首だけがいくら自由でも、それ以外が満足に動かす事が出来なければ異能の力が働いている箇所に『右手』を触れさせることなんてできない。そして触れられない以上、その力を打ち消すこともできない。

要するに今の上条は、地面に見えざる拘束具で磔にされているよ

うなものだ。

どんなに強力で無敵な武器があっても、それを振るう人間を押さえてしまえばただのゴミ。恐れる必要なんてどこにもない。

無力化した上条を冷めた瞳で見下ろす氷室に、

「七閃！」

神裂の放つ7本の鋼糸が襲い掛かる。

しかしそれは氷室の体へと触れた瞬間、ピタリと静止し、その肉を切り裂く事は叶わない。

「くっ——」

すかさず引き戻そうと試みるが、残念ながら鋼糸は氷室の体に張り付いたかのように留まり、神裂の腕力<sup>せいじん</sup>を以てしてもビクともしない。

それどころか氷室はその鋼糸を纏めて掴み束ねると、思いつきり手前へと引っ張り、その先に繋がった神裂ごと西部劇のカウボーイの投げ縄よろしく振り回し、遙か遠くへとその身を投げ飛ばした。

（これが、あらゆる力を止める『力』……！？）

話には聞いてはいたが、実際に目の前にするとスタイルが恐れたのも分かる。

（なんて、非常識！？）

神裂とて全力で抵抗したのだが、なす術もなく振り回された。抗うために後ろにかけた体重は、地に根を下ろすことなく引っっこ抜かれ、あれよあれよと言う間に引きずられ、振り回され、投げ飛ばされた。

それ以前にそもそも『聖人』である神裂ならともかく、肉体的には単なる少女に過ぎない氷室が、女性としては長身に分類される神裂の体を振り回せること自体が異常なのだ。

しかし氷室にはそれを可能とする力がある。

「はああああ！！！」

投げ飛ばされた神裂と入れ替わるように再びスタイルが炎剣を携え、踊りかかる。

しかし氷室はそれを呆れた様子でチラ見し、

「だから無駄だって――、」

斬りかかる間近で動きを止め、

「――言ってるでしょ？」

「がはっ――！？」

痛烈な前蹴りを喰らわせ、数十メートル先まで大きく吹き飛ばした。

無論、氷室にそんな馬鹿げた脚力があるはずがない。

二人がなす術もなく大きく飛ばされた理由は、氷室が彼らにかかる『重力ベクトル』の量を0にしたからだ。

現実には効果を及ぼす『力』とは、須らく『合力』である。無数に存在する力同士が、互いに助け合い、阻害しあう事で、最終的に残った力が結果となって現実には効果を及ぼす。

例えば左右に力が加えられた場合、その大きさの差だけ大きい方に物体は動く。横と縦という軸の異なる方向に力が加えられたのなら、その2つの力のベクトルを一边とした長方形の対角線方向にその長さの分だけ動く事になる。軸が3つに増えれば立方体の対角線がそれとなる。

そして地上でもっとも大きな力は『重力』だ。

地球と言う大質量物体が持つ『万有引力』によって発生するその力は、各物体の質量に応じた量の下向きのベクトルとして常に存在し、地上における物体の運動に須らく影響を及ぼす。

重いモノが動かしづらいのは、それにかかる重力が動かそうとする力と掛け合わされる事で、ベクトルの向きを下へと大きく傾けてしまうから。鳥が空を飛べるのは骨を軽くする事で質量を小さくし、そこにかかる重力以上の揚力を翼によって得ているためだ。もし鳥の骨の構造が人と同じだったのなら、彼らは空を飛ぶことができなかっただろう。

だが逆に言えば、重力さえなければ人だって空を飛ぶことが出来る。イカロスのように蛾で翼を作らずとも、そこらにある草葉や布きれ一枚だって揚力を得られるのであれば問題はない。

そう、人や物が地上に留まり続けられるのは常に重力によって引かれていたから。その力が無くなれば、それ以外の力が十全に働き、加えた分の力だけのものは動く。

確かに『抑止力』カウンターストップは何か生み出す事は出来ない。出来るのは止めること、殺すことだけだ。

しかし複数ある力をより分け、不必要な力を取り払い、必要な力のみを残せば、望む力を作り出し、求める結果を導き出す事が出来る。

それはいわば力の『剪定』。あらゆる力を選んで殺し、望むモノのみを残す『選定』の力。

力の『独裁』——それが『抑止力』カウンターストップの真骨頂なのだ。

そんな『独裁の力』に再度膝を屈したステイルだが、ただやられた訳ではない。

「————爆ぜろ！」

吹き飛ばされる瞬間に彼が落とした一枚のカードが、氷室のすぐ傍で盛大な爆炎をあげた。

鳴り響く轟音と、荒れ狂う爆風に晒されながら、魔術師達は「やったか？」とその中心に目を凝らす。

しかし、

「……無駄だと、何度言ったら分かってくれるのかしら？」

何事もなかったかのように平然とした態度で、傷一つどころか塵



一つその体に付着せず首を傾げる氷室の姿を見止め、神裂は戦慄いた。

「そんな……」

「くそっ！ 化け物が！」

「……否定はしないわ」

ステイルの悪態にもどこ吹く風といった様子で、一向に意に介しない。

「って、あぶねーじゃねえか！」

そのすぐ足元で、同じく傷一つなく無事だった上条が声を張り上げる。

彼が無事な理由は、爆発の直前で氷室が彼の周囲の空気を止めて防壁としたからである。

「何しやがるステイル！ 俺まで巻き込む気か！」

「巻き込む気か、じゃなく、巻き込むつもりだったんだよ」

「っざけんな！」

「ふざけてなどないさ。君も僕達の敵だってこと忘れてないかい？」

「……………」

もつともな正論に、さすがの上条も押し黙るしかない。

「それより、神裂」

「唯閃を使うしかないでしょうね……」

鋼系の回収を諦めた神裂は、今度こそ柄に握るための手を置く。

『唯閃』は神裂の持つ最大の切り札。その攻撃力はステイルの『イノケンティウス魔女狩りの王』とは比べ物にならない程の威力を誇る一撃となる。当たれば最後、ただの女子学生など簡単に跡形もなく吹き飛ばさう。

しかしそれ程の一撃を振るおうと身構えた神裂の表情は冴えない。ステイルもまた同じだ。

彼らにとってそれは真正正銘最後の切り札、最終手段なのだ。彼らにとって敗北は許されない。『敵』となり泥を啜ってでも守

インデックス  
ると誓った少女を容易く“殺す”と言った化け物相手に、負ける事は絶対に許されない。

だが、その化け物の持つ『あらゆる力を止める』という能力が言葉通りのものであるのならば、『攻撃』と言うベクトルを放つ『唯閃』もまた止められるのではないか。そんな不安が彼らにその切り札を切らせるのを躊躇わせる。

だからその前に、魔術師は目の前の少女に問いかける。僅かでもそこに活路を見出すために。

「……本気で、あの子が死んでもいいと、思っているのか」  
「思っていないわ」

即答。しかしそれは前言と矛盾する答え。

「ならばなぜ、何もしないと言うのです！ 何もしなければあの子は——」

「そうね」  
神裂の言葉に氷室は小さく頷き、

「でも、それが“彼女のため”だと、“救い”になると思うから」  
「救い、だと……」

「そう。救われぬ者に唯一残された『救いの道』」  
「違う！」

遮るように神裂が叫んだ。

「違います。そんなものが『救い』であるはずがありません！！」  
「そうだ！」

地に礫にされたままの上条が、それに呼応する。

「死んだ方がインデックスのためだなんてこと、あるわけねえだろうが！」

死んだら全てが終わるのだ。死んだら何もできなくなるのだ。

これまで散々虐げられてきた、辛い目にあってきた、苦しんでいた彼女が、

本当の自由も得られずに、やりたいことのひとつもできずに、

そんな“当たり前前の『幸せ』”を甘受することも出来ぬまま、死んでいくなんて認められない。認めちゃいけない。

強い眼差しと、固い意志の下に上条は叫ぶ。

「そんなもん救いでもなんでもねえ！　ただ諦めちまつてるだけだ！！」

それも魔術師達の『諦め』よりも性質の悪い、完全放棄。万に一つの望みすら捨て去った、完全なる諦めの極致だ。

「……本当に？」

それでも氷室は意見を覆さず、問い返す。

「本当に、それがただの『諦め』だと言いきれるの？」

「つまりまえだろ！」

「本当に、諦めなければ、あの子は救われるの？」

「救われるんじゃない、救うんだ！　アイツの頭ん中にある10万3000冊さえどうにかしまえば、全部解決するんだよ！！」

そう、全ては『10万3000冊の魔導書』なんてものをインデックスが覚えているのが原因だ。

『禁書目録』なんていう面倒な役割を押し付けられ、それを手に入れようとする魔術師達から追われ続け、逃げ続け、拳句の果てには脳の85%を食われたがために、脳の容量が足りずに1年で記憶がパンクしてしまう事になったのだ。

だが、もしそれが無くなったら？

「1年おきに『思い出<sup>きおく</sup>』を消さなくても死なずに済むようになるし、魔神、なんてよくわかんねーモンを目指そうとする魔術師<sup>やつら</sup>から狙われなくても済むようにもなんだろ！？」

全てが逆転する。インデックスを取り巻く地獄が全て取り払われ、インデックスはそこから解放される。

「要するに10万3000冊<sup>それ</sup>が全ての『元凶』だってんなら、“そ

れさえ消しちまえばインデックスは救われる” ってことじゃねえか  
！！」

同じ終わらせるのなら、こっちの終わりを選択するべきだ。

『死』なんていう安易な終わり方を選ぶのではなく、例え辛くて苦しくて、どんなに絶望に満ち溢れた困難な道でも、諦めなければ届くかもしれないその道があるのなら、全てを終わりにするには早過ぎる。諦めるにはまだまだ全然早過ぎる。

しかし氷室は首を横に振るい、

「残念ながら、無理よ」

上条の語る未来ねがいを否定した。

「残念ながら10万3000冊をすべて消しても、あの子の未来そのやきに『救い』はない」

「何だよ！？ どう考えたって救われるじゃねえか！ 救われなきゃ、おかしいじゃねえか！！」

「そうね、おかしいわ」

でなければ報われない。そう口にした直後に氷室は、「だけど」と続け、

「この世はそんな“おかしな話”がまかり通るものなのよ」

「そんな事は――！」

「ある」

必死に否定の言葉を募る上条を、氷室はバツサリと斬り伏せる。

「あるのよ、上条君。残念ながらね」

寂しげな表情を浮かべ、言うのも辛いといったような視線を向ける氷室の態度に、上条は口を閉ざす。

「もし、仮に、何らかの方法であの子の持つ10万3000冊が失われたとしましょう」

閉口した上条に構わず、氷室は淡々と仮定の話を進める。

「そうすればあの子はもう『禁書目録』ではなくなり、その価値が失われた以上、教会の頸木から逃れ、記憶を消す必要もなくなり、本当に自由に生きられる身の上となる」

「ああ。そうだ、だから……」

だからそれでインデックスは救われるはず、と続けようとする上条に、氷室はもう一度首を振るい、

「でもね、上条君。それをどうやって証明するの？ 10万3000冊が本当に全て失われたのだと、どうやって証明する事が出来るの？」

上条は言葉を失った。

記憶の存在を証明する手立てなんてものはない。

何故ならそれは目には見えないものだからだ。

上条とて、インデックスと出会った当初は『10万3000冊の魔導書』を持っていると言われても、それを信じる事が出来なかった。まさか頭の中に『記憶』として持っているなんて思いもよらなかったし、今だってそれが本当にそうなのかとすら怪しんでいる所もある。実際に10万3000冊の本を目の前に並べられたのなら信じられたかもしれないが、目には見えない『記憶』として存在すると言われても、それを信じ切る事なんてできやしない。

しかし専門家である『魔術師』なら、インデックスの口から語られた内容が真か偽かを判断する事は可能だろうし、記憶の素となった『原典』と照らし合わせれば、その存在を証明する事は出来る。故に、『ある』という証明は出来る。

だが、その逆は？

『ある』ことの証明とは違い、『ない』事の証明は1から10まで全て調べて『ない』事を示さなければならぬ。1から10、10から100、100から1000に至るまで一つ残らず調べ尽くして、それでも見当たらない事を完全に示さなければ、その証明には至らないのだ。

だが、インデックスの口から語られない事が『存在しないことにはならない。ただ黙っているだけかも知れない、と取られれば『ある』可能性は否定しきれない。

記憶を直接覗く能力者は存在するが、彼らの口から語られる事がどこまで信用できるのかという疑念を抱かれれば、たとえば彼らが『ない』と答えた所で、確固たる証拠とはなりえない。

「だから本当にこの子の中から10万3000冊の魔導書の知識が消え去ったとしても、それを完全に証明する手立てはない。完全に余さず一切残っていないのだなんていう証明を行う事なんて現実的には不可能よ。そして証明できない以上、他人から見れば“まだ持っている”と思われるでしょうね」

可能性がほんの僅かにでも残っている限り、そんな懸念は絶対に拭い去る事はできない。

そして全ての可能性を否定できない以上、『ある』と信じる者は必ず残る。

「け、けど！　それがなくなる事でインデックスの思い出を消さずに済むんだろ。それで生きてるってことは、無くなったって事に――」

「ならないわ。一年周期で記憶を消さなければ生きていられない、という情報を全ての魔術師が知っているわけでもないでしょうし、たとえば知っていたとしても、生きているからって“全ての魔導書の記憶”が消えたとは限らない。なら“まだ残っている魔導書”が記憶の中にあるかもしれない以上、この子はずっと狙われ続けるでしょうね」

上条にもその理屈は理解はできる。しかし、認めたくはなかった。インデックスを地獄に突き落した元凶である10万3000冊を消去してもなお、その地獄は消えないだなんて、そんな事、認めたくはなかった。

しかし氷室はそんな願望なんて認めないとばかりに、絶望の未来を突きつけ続ける。

「それにもう一度教会が彼女に原典を見せれば、全て元通りよ。何度消しても、何度も記憶させられてしまえば意味が無い。永遠に私たちごっこが続くだけ……」

「……、」

「まだあるわ。たとえ教会がこの子を使って再度作り直す事を諦めたとしても、過去にその知識を会得したという事実だけで、この子は恐怖の対象となる。覚えていた知識を何かの拍子に思い出すんじゃないか、それが自分たちに向けられるんじゃないか、って思うだけで、この子は彼らの手で抹殺される可能性を秘めている」

救われない。終わらない。インデックスを取り巻く地獄のような世界は、インデックスが『禁書目録』となった時点ですでに永遠に付きまとう事が決定している。だから今ここで何をしようとも、どんな奇跡を起こして10万3000冊の魔導書を消し去ったところで、インデックスが“真に救われる未来”など万に一つもありはしない。

「それはここで『思い出』を消しても同じ。この子は何もかもを失って、でも『禁書目録』である事だけは失う事はできなくて……、だからこの子の地獄は終わらない。変わらない。永遠に、永久に、ずっと生きている限り続いていく……」

それを人は『運命』と呼び、または『宿命』と呼ぶ。

『命』ある限り『運』ばされる、『命』に『宿』った『決定』さだめなのだ。

「だから、死んだ方がマシ、だと……」

「そうよ。『死』だけが運命の頸木から逃れる事が出来る唯一の道——」

運命が、宿命が、命ある限り逃れる事のできない『決定』なら、その前提である『命』を取り去ることだけが、逃れるための道となる。

「——それでも逃れられない『運命』もあるんだけどね」

しみじみと語られたその一言に、一同はもう一度顔を見合わせた。  
「死んでも逃れられない『運命』、ですか……？」

「ええ、そうよ。正確には死ぬことすら許されない『運命』だけど……」

「それは一体……」

思わず神裂は問い返していた。今この場では関係のない話だと、頭の隅では理解していても、氷室の口調に込められた『感情』が、彼女の琴線に強く触れたからだ。

それは決して想像で語られているのではない、と。何かそう思うに至る強い実感があって語られているのだと、神裂の心に強く鳴り響く。

言うなればそれは『経験』。逃れられない運命を自らも背負った事があると、そう言っているように感じ、

「私がそうだから」

「……、」

その予測は当たっていた。

しかしそれは『過去形』ではなく、『現在進行形』。

「ひ、むろ……？」



名を呼んだ上条の声も震えていた。

彼女に何か暗い過去がある事は薄々察していた。しかし、今の言葉はそれがまだ終わりを迎えていない事を示していた。

「何が……」

あったのか。いや、あるのか。

知りたいと思う気持ちと、知れば後悔すると言う直感が、上条の中で犇めき合い、互いに譲らず葛藤を続ける。

しかしその決着がつくよりも前に、氷室は徐に口を開いた。

「……覚えてる？ コールドスリープ 冷凍催眠の話」

「あ、ああ」

それが何を意味するのかは分からなかったが、覚えていた。

「あの医者とその患者を生き返らせたって話だろ？」

「ええ。普通なら不可能な蘇生を、奇跡的に細胞破壊が起こってなかったから、それを可能としてみせた」

通常なら細胞内の水分が凍る際にその体積を膨張させるために、細胞膜が破壊され、解凍しても人体は正常に機能せずには人は死ぬ。

だが、それが起きていなければ氷は再び水へと戻り、細胞は冷凍前の状態を取り戻して活動を再開させ、復活を遂げる事が出来る。

しかし水が氷れば体積が増えるのは自然の摂理であり、変えようのない現象だ。だから普通ならそんな事にはならない。

そう、普通に凍らせたのなら――

「……！？ 氷室、おまえ、まさか……」

上条の中でとある仮説が浮かび上がる。

普通じゃない方法――、

例えば『異能の力』なんてものでその人が凍ったのなら？

例えば『分子の運動を止める』なんて方法で凍らせたのなら？

（例えば『運動量を0にする』なんていう『異能の力』で、人の体を凍らせたとしたら……！？）

本来とは異なる結晶構造となり、氷の体積は増える事はないのではないだろうか。

そして同時に思い出す。

氷室皐月は以前に大怪我を負い、あの医師の手で手術を受けている。

そしてあの医師は不可能とされた『冷凍催眠患者の蘇生』に成功している。

そもそも何故、あの時彼女は『冷凍催眠患者の蘇生』なんてものを例に挙げたのか。

医師の腕を証明するのなら、他にもっと分かりやすい例はあっただろうに。

なのに、わざわざそれを例に挙げたのは、それが氷室皐月にとって“もっとも身近で実感できる『難易度の高い手術』だったから”ではないのか？

だとすれば――

「そうよ……」

氷室は頷いた。上条の予想が正解であると。

「そう。私は自分に、自分の能力を使って、凍らせた。全てを終わらせて、逃げるために……」

地獄のような運命から逃れるために――

## 第14章 とある運命からの脱獄法《サードセレクション》（後書き）

止まらないPV・ユニーク・お気に入り件数の加速的增加現象。

一日のPV数30000、ユニーク数3000件を突破し、お気に入り件数は500件を目前に!?

これは何の幻想かと、逆に戦々恐々してます。

上条さーん、助けてえー!!

それにつられて感想もたくさんいただいております、賛否両論なご意見を聞かせていただいております。

ですが返事は一度、第一話『禁書目録』編を終わらせてから返させていただこうと思っています。でないと、何とも言えない感想もあるので……。

もしかすると『あとがき』という形でまとめて返させていただくかもしれませんので、ご理解の程、よろしくお願いします。

さて次回はいよいよ氷室の過去が明らかに!?

筆者的にはむしろここからが本番です。こうご期待!

## 第15章 とある怪物の無間地獄《ヘルオンアース》

「自殺した、という事ですか」

「捉え方によつてはね。結果的には失敗したし、意図的にそうしたわけではないんだけど……」

「どういう、意味、だ？」

未だにショックから抜け切れない上条は、変わらず震えた声で問いかける。

「能力の暴走よ。その結果、全てを止めて、凍てつかせた。私も、施設も、そこに居合わせた人間全てを含めてね」

「暴走！？ それに居合わせた人間含めてって――」

「そう。殺そうと思っていたわけではないけど、巻き込んで殺してしまった……」

氷室はそこでふと言葉を止め、首を振り、

「いいえ、殺そうとしてたのかもね」

「違う！！」

上条は反射的に叫んでいた。

「能力の暴走なんだろ！　なんでそんなことになったかは知らないけど、自分じゃ抑えきれなかっただけなんだろ！？　それってつまり不可抗力ってことなんじゃないのか！？」

意図しないからこそその暴走だ。望んで殺したわけじゃないのなら、それは氷室が悪いわけではない。そうなった原因に問題があるのだ。

「それでも、私が殺した事には変わりはない。それに、人殺しはそれが最初って訳でもないしね……」

「最初じゃないって……」

それはつまり、他にも誰かを殺した事がある、と。

氷室皐月が、誰かを殺すような人間である、と？

「……嘘だ」

「嘘じゃない。本当よ」

上条が口にした否定を、さらに否定して氷室は首を振るう。

「私は化け物——人を殺すための怪物だから。私の中に居る『彼女』は真正正銘そんな『怪物』で、それは紛れもなく“私”だから……」  
小さく息を吐き、氷室は空を見上げて、

「だから、私は紛れもない『殺人鬼<sup>バケモノ</sup>』なのよ」

「ち、ちが——」

「違うない」

もはや意味もなく否定の言葉を連ねる上条に、氷室はキツパリと言いつ放った。

「だって、考えても見て？ 手も触れず、近寄る事もなく、武器も持たずに指先一つすら動かさないで、人を殺せる存在を『人間』だなんて呼べるの？ たとえ地球の裏側でも、宇宙の果てでも、どこからでも意識一つするだけで、一瞬で人を殺せる存在を『化け物』と呼ばずしてなんて呼ぶのよ」

「宇宙の果てでも、だと……！？」

「それでは、逃れる術などないと言ってるようなものでは————ッ！？」

「そうよ。『抑止力<sup>カウンターストップ</sup>』の発動に必要なのは対象の位置座標だけ。それさえ分かればどの何でも例外なく『止める』ことが出来る」

もつともその場合の『停止』は『完全停止』——その対象にかかる全てのベクトルを止める“絶対零度”の『停止』のみだ。普段使っているようなベクトルの『剪定』を行うとすれば、その観測と選択を行う必要があるため、自ずと目測が可能な近い距離に限られるし、観測だけに限定したとしても数キロ単位がいいところ。それ以上を行おうとすれば、少し無茶をしなければならなくなる。

しかしそれをここで言う必要はない。逆を言えば、無茶さえすれば可能だという事なのだから。

それに、

「そして、地球の裏側でも止める事が出来るのであれば、目に見えない場所だって止められるって事」

つまり、と氷室はぐるりと全員を見回し、

「私その気になれば、今この瞬間、全員の心臓を『止める』事だってできるのよ？」

その視線にステイルは思わず、自らの胸を掻き抱いた。それは無意識の内に心臓を守ろうとする本能的な行為。しかしそんな小さな抵抗も、目の前の少女バケモノの能力には通用しない。

いや、そもそもこの世にその脅威から逃れるすべなんて何一つ存在しないのだ。

逃げる事も、防ぐ事も出来ない。過程も因果も無視して、ただそこに『死』という結果のみを突きつける絶対的な力。

「直死バロールの魔眼だとしても言うのですか!？」

「視線すら必要ないから、それ以上ね」

「……!？」

ケルト神話に登場する、見た者を誰でも殺す事が出来る邪眼を持つ魔神バロール。

幼少の頃に父たるドルイドが唱えていた毒の魔法の霧を誤って目に入れてしまったことでその力を手にし、その強大過ぎる力ゆえ、普段は頑なに閉じられ、扱う際は四人がかりで取っ手を回し、まぶたを押し上げる必要があるほどの嚴重な封印がなされた最強にして最凶の魔眼。

だが目の前の少女にはそんな封印もなければ、目を開く必要すらない。

魔神の力をも超える存在を示す言葉など、この世には存在しない。強いて言うなれば、それは、

「……化け物」

「そう、『化け物』『怪物』……それ以外の呼び名なんてありえな

い。だから私は間違いなく『化け物』と呼ばれるべき存在なのよ」  
違う、と叫びたくなった上条だが、その口から声として発せられる事はなかった。

恐ろしいと、思ってしまったから。もし声を発して、彼女の気を僅かにでも害してしまったのなら、その瞬間、心臓を止められるのではないかと、そんな考えが頭を過ぎったからだ。

けどそれは氷室皐月と言う名の少女を『化け物』だと認める事に他ならない。

「……ち、違う！」

絞り出すように、全力を賭して上条は声に出した。

「違う！ 氷室はそんな事する奴じゃない！！ そんな事出来る人間なんかじゃない！！ 望んでそんな事をやるような化け物なんかじゃない！！！」

「……そうね。私も出来ればそんなことはしたくない」

けど、と氷室は再び天を仰ぎ、

「けど、私はそのために作られた存在だから。そのために生かされているから……」

「つく、られた、だと……？」

動揺を隠せないスタイルの声に、氷室は小さく頷く。

「学園都市では能力者を人為的に生み出している。主な方法として行われているのは薬物の投与や脳への直接的な電気刺激etc……、けどそれらはあくまで表に出せる程度の代物でしかない」

「つまり、実際はそれ以上の事が行われていると……？」

「ええ。もちろんこの街の人間のほとんどはその事実を知らない。けど人目を気にした実験だけじゃ、何時まで経っても先には進まない。目的とする場所に辿り着くのに何百年もかけられる程、人の寿命は長くはないし、気も長くはないから……、手取り早く先に進むために、強引な手段を取って無理矢理進めようとする人間はいつ

の世にも必ず存在するのよ」

即ち、非人道的や非道德的などと呼ばれる類の非合法実験。人の命を無視した、人権なんて言葉の存在しない、凄惨で悍ましい狂気の研究<sup>さた</sup>。

「能力者の脳を輪切りにしてその構造を物理的に調べたり、非道の限りを尽くして心身ともに追い詰め、その際の変化度合いを調べたり、果ては意図的に暴走を引き起こして、その命と引き換えに希少なサンプルデータを取ったり……、そんな事がこの学園都市の裏側では日常的に行われている……こうしている今も、ね」

「何だよ、それ……」

平和な日常に隠された、衝撃的な事実を知らされ、上条は声を震わせ叫んだ。

「そんな事が許されると思ってんのかよ！ 警備員<sup>アンチスキル</sup>は何やってんだよ！！」

「無駄よ。その実験を主導しているのは理事会の連中だもの。警備員<sup>アンチスキル</sup>は彼らに統括されて動いているから、偶然彼らの耳に直接情報が漏れたりしない限り、摘発される事なんてありえないわ」

例え摘発されたとしても、その実験データは闇から闇へと受け渡されて、また別の場所で続けられる事となる。

だから警備員<sup>アンチスキル</sup>にバレたとしても、少し進捗が遅れるだけで、研究結果そのものには大した影響を及ぼさない。

「私が居た所もそう。私の存在は“計画本来の意図”とは違った結果だったけど、彼らにとってはむしろ喜ぶべき“誤算”だったんでしょね。そのせいで私は、彼らを狂喜させる最高の『研究素材<sup>おもちゃ</sup>』として重宝された」

自嘲するように言い捨てたその裏に、並々ならぬ怨念を感じ、上条は背筋を震わせた。

以前、上条が彼女的能力を褒めた際に垣間見た、あの暗さの正体がここにあった。



氷室を作り出し研究していたヤツラにとって、重要なのはその能力だけだ。そこに氷室皐月と言う少女の人間性は一切含まれない。人ではなく、能力を発動する機械のように扱われた彼女の心には暗い影が落ち、今なおそれは晴れる事無くその身を蝕んでいる。むしろそこに刻まれた傷口が膿んでさらに悪化していると言ってもいい。

「その価値は計り知れなかったんでしょね。本来の計画を根底から覆して、もはや別物としてでも『私』を徹底的に研究し始めた。

……いいえ、それだけじゃ飽き足らず、さらにその先を指そうと  
していた」

「その、先……？」

「絶対能力<sup>レベル6</sup>」

「――、！？」

「そう。未だ誰も到達しえない、究極の『超能力者』。最強を超える『絶対無敵』の能力」

「無敵……」

その言葉に、一同はその脳裏にとある人物を思い浮かべた。

いや、想像する必要すらない。彼らが思い浮かべたのは、今すぐ目の前に立つ少女の顔だ。

「……違うわ。私は絶対能力<sup>レベル6</sup>には到達していない。私は、今でも無能力者<sup>レベル0</sup>よ」

「それは、ないだろ。確かに身体検査の結果は無能力<sup>システムスキャン</sup>かもしれないけど、その能力<sup>ちから</sup>が無能<sup>レベル0</sup>なわけ……」

「無能力<sup>レベル0</sup>よ。私は無能力者<sup>レベル0</sup>まま。これまでも、この先も、ずっとそうでなきゃいけないのよ……」

無能力者<sup>レベル0</sup>でなければいけない。誰もがその領域から脱したいと願っているその頸木に、自らしがみ付く事を望む少女。普通に考えれば、まず頭がおかしいのではないかと疑われる行為だが、上条には何となくその理由が理解できた。

学園都市の能力者は全員、身体検査システムスキャンでの結果をその能力の詳細と共に学園都市の総合データベース『書庫』バンクへと登録される決まりとなっている。そしてそこで検索をかければ、どこの誰がどんな能力を持っているのかが一目瞭然で分かる仕組みだ。

何らかの能力による事件が発生した場合に風紀委員や警備員がその犯人の目星をつけるために利用したり、研究者が自らの研究に必要な学生をリストアップするためなどに用いられ、一般的な公開のうりよくしやこそされてはいないが、面倒な手続きを行い申請を受理された者か、最初からその資格を持つものならば誰でもアクセスする事が可能で、簡単に調べ上げる事が出来る。

しかし、学園都市に存在する学生約184万人の内『能力者』と呼ばれる存在はその4割の約74万人しかない。残りの6割——約110万人は無能力者レベル0だ。そして『能力者』を探すために“能力を持たない無能力者”レベル0を調べようとする者はいない。英単語を調べるのに漢字辞典を持ち出す馬鹿はいないように、『能力者』を調べるのに、わざわざ無能力者レベル0まで検索対象に入れる必要はないのだ。

だからこそ、氷室は『無能力者』レベル0に固執する。

『漢字辞典』の中に『英単語』のうりよくしやが混じっていても、最初からその本が開かれる事がないと分かっているならば、見つかるはずがない。それにもし偶然その本が開かれたとしても、110万もの中からたった一つの『英単語』ひむすごひつぎを見つけ出す事は奇跡でも起きなければまず不可能だ。

木を隠すなら森の中と言うが、森の中に咲く1輪の花も、外から見ただけではその姿は木々に覆い隠されて見つかる事は出来ない。

氷室皐月は、自らの存在をそんな風に隠すために、あえて『無能力者』レベル0である事を望むのだ。

「前人未到のその頂に私を押し上げるために、彼らは何だっただわ。薬物、洗脳、精神的な追い込み、そして戦闘——私と同じ実験を課せられて、『失敗作』の烙印を捺された子供達なかまを相手に、彼ら

が死ぬまで戦う事を強要された」

「……だから、殺したのか——!?」

「殺したわ。正確には殺させられた——私の中には『人殺しをするための化け物』が暗示によって植え付けられている。だから、どんなに拒否しても、アイツらがそれを覚醒<sup>めざ</sup>めさせれば、私の意思を無視して、無理矢理にでも人殺しを行わせる。私の意識そのものは消さずにね……」

「な、——!?」

殺人の強要。それも脅迫なんて類の物ではなく、文字通り強制的に行わせるのだ。本人の意思を無視して、目に見えない糸で人形を操作するかの如く。

「科学者<sup>アイツら</sup>達は得意げに『彼女』を『メドューサ』なんて呼んでたけどね」

皮肉よね、と自嘲しながら魔術師達に同意を求めた。

確かに皮肉だと神裂達は思った。魔術師である彼らは、当然『メドューサ』がどんな存在だかを知っている。むしろその逸話は神話の中でも有名なものだ。

メドューサは元々海神ポセイドンすら魅了する美少女だった。

しかし些細なトラブルから女神アテナの怒りを買って、彼女の仕掛けた呪いによって、自慢であった美しい髪は無数の蛇へと変えられ、美貌は身の毛のよだつほどの醜悪なものへと変えられ、見た者をすべて石へと変えてしまうただの化け物へと変えられ、墮とされてしまったのだ。

しかしアテナはそれでも許さず、さらに英雄ペルセウスを喚べて、その首を斬り落とし殺させている。

そしてその力を奪い、自らの盾に宿し、絶対的な守護の力を持つ女神として彼女は燦然と輝く神々の上位に君臨したのだ。

その一方で、尊厳を奪われ、命を奪われ、力まで奪われ、醜い人

殺しの化け物とされた少女。メドゥーサ

だが、この話には裏がある。

『メドゥーサ』とは元々「至高の女性の知恵」と言う意味を持つリビアに住まう女人族アマゾンに信仰されていた女神であり、三相一体の内の破壊者の相を示す一相であった。

そしてその別の相の名を『アテーナー』という。

そう、メドゥーサを貶めたアテナも元は同じ存在。それがギリシヤに持ち込まれた際に、一体であったはずの三相は分離され、輝ける守護の女神『アテナ』、その母にして「知恵」を持つ女神『メティス』、そして恐ろしい化け物『メドゥーサ』として切り離されてしまった。

その後、母『メティス』は主神ゼウスに飲み込まれ彼の「知恵」として取り込まれ、『メドゥーサ』は『アテナ』の手により殺され、盾としてその力を取り込まれた。

そして残った『アテナ』は父である主神ゼウスの従順なる僕としてギリシャ神話では語られている。

その背景には神話を通して女性文化に根差した由来を分断し、女性を男性の下に屈服させようという男性社会の思惑が見え隠れしている。

即ちそれは人の欲。男たちが自らの優位性を主張するために、古の女神を切り裂き、その在り方を歪め、自らに都合のいい存在として淘汰したのだ。

確かにその名は皮肉だ。皮肉以外のなにものでもない。

在り方を歪められ、化け物の役目めがみを押し付けられ、人の欲のためにその尊厳と運命を奪われた一人の少女。

これを皮肉と言わずして何と言うのか……。

「目の前で子供達なにかまが次々に死んでいく様を見せつけられたわ。私の能力で、私じゃない『私』が、彼らを殺すところを延々と、無理矢理に、見せ続けられた……」

やめて！ とめて！ 殺させないで！ と叫んだところそれはで止まらない。

人を殺すだけの道具ばけものと化した少女めがみは、延々と望まない人殺しをし続ける。

「それでも抗ったわ。抗うしかなかったから。でもその度に、処置も酷くなっていった……。道具には感情はいららない、玩具には自我なんて必要ないんだって、そんな風に言われて……」

人格を無視されて、人間であることを拒絶されて、氷室皐月という名の少女めがみはその全てを否定され続け、

「最後の最後まで抗って……、私は『暴走』した」

能力の暴走。それは時に意図しない程の大きな力を齎す。

「結果、私はその施設に在った全てを止めて、凍おわらせた。そこに居た研究者も、同じ境遇にいたはずの子供達なにかまも、たぶんそこでそんなことが行われていると知らない、偶然訪れただけの一般人も含めて全部……」

そして自分自身をも凍おわらせた。

「全部、私が殺したの。殺して、殺して……」

全部凍おわらせて、全部を終わらせたのに、  
なのに、

「――私だけが生き残った！」

その元凶たる自分だけが、卑しくとも生き残った。

「アイツらが――私の能力ちからに価値を見出す連中アイツらが、私を無理矢理甦よみがえらせた……」

他の、何の罪もない者達の事は放棄して死んだままにしたのに、殺した本人である少女だけが蘇よみがえった。

「あのまま、あのままずっと氷漬けのまま眠しんでっていた方がよかった

のに！」

人の欲が、その価値を失うわけにはいかない、身勝手な思惑の下に、本人の願いを無視して強制的に蘇えらせた。

「私は望んでなかった！ 生き返る事も、こんな能力を持つことも！」

望んで得た力ではなかった。むしろこんな力、望んでなどいなかった。いっそ本当に無能力でもよかったぐらいだ。その方がずっとずっと幸せだっただろう。

だけど、一度得てしまった能力は変えられないし、失われる事もない。

超能力とは『才能』だ。その才能は埋もれさせることはできても、失う事はない。それこそ脳を全部ぐしゃぐしゃにかき回して、ズタズタに切り刻んで、徹底的に破壊し尽くしさない限り、失う事なんて出来やしない。

「例えば自殺を試みても、おそらくその度に生き返らされる。……いえ、むしろこの『力』さえあればいいのだから、『私』と言う『人格』<sup>そんざい</sup>はいらないから、機械に繋いで命だけを維持して、能力だけを使うための文字通りの『道具』にされかねないっ！！」

「そ、んな……」

「そうよ！ そんなことは許されない！ けど自分で捨て去る事も出来ない！！ ……だから私は、どうあってもこの無間地獄から抜け出す事なんて出来ないのよ！！！」

地獄なんて言葉じゃ物足りない。本物の地獄の方がまだマシだ。死ぬことすら許されぬ、人の欲によって作り出された生き地獄。

全てを奪うだけでは飽き足らず、その命の一片までを搾り取らんとする、そんな現世に作られた地獄の沙汰に、氷室皐月は晒され続けている。

「けど、今は——！」

こうして普通に暮しているじゃないか、そう声を上げる上条に、「終わってない。まだ終わってない！」

氷室は叫んだ。

「今こうして表で生きてる。でも価値が失われていない以上、何時でも裏の連中は私を引きずり込もうとやってくる」

いくら光ある場所に出ようと、その身に繋がれた漆黒の鎖は碎けない。むしろ光を浴びてより鮮明にその色を主張し、闇の中へと引きずり込もうと頑なにその身を縛り付ける。

「だから抗うしかないの！ 抗って、抗って……、それが無駄な行為だと分かっている、もうそれしか道は残されていないのよ！！」  
悲痛なその叫びに、一同はただ押し黙るしかなかった。

ステイルⅡマグヌスは、その脳裏に一人の少女を思い浮かべ瞑目した。

10万3000冊の原典を記憶させられ、あらゆる魔術の対抗手段を生み出すための道具とされ、『禁書目録』と言う名の価値を押し付けられ、世界中の魔術師からその身を狙われて、あまつさえ覚えさせられた記憶のせいで一年ごとに記憶を失わなければ生きてはいけない、一人の少女の生き様を思い浮かべた。

神裂火織は、同じだ、と思った。

自分たちが守りたいと、救いたいと願ったインデックスと言う名の少女と、目の前で涙の一滴すら流せず泣き叫ぶ少女は同じなのだと。同じ地獄に生きる存在なのだと。

上条当麻は、そうか、と理解した。

氷室皐月がインデックスに優しくしていたのは、母のように、姉のようにその存在を守ろうとしていたのは、彼女に自分の姿を重ね合わせていたからなのだという事を。

違うのだ。彼らとは根本的にその立場が違い過ぎるのだ。

上条や魔術師達が居る場所は地獄の淵。そこから深淵の底を眺め、

インデックス  
もがき苦しむ少女の姿に胸を痛め、何とか助けられないかとしているのに対し、

インデックス  
目の前の少女は、その少女と同じ地獄にあって、共にもがき苦しんでいるのだ。そこから彼らのいる光ある世界を見上げ、必死にそこへと手を伸ばしているのだ。

だからこそ、彼女は言う。

「もうたくさんよ！　こんな地獄を味わうのは、私一人で十分よ！  
！」

その苦しみを誰よりも知っているから。

その痛みを誰よりも理解しているから。

その辛さを共に経験しているのだから。

だからこそ、その言葉は誰よりもインデックスの心情を表す。

「だから、させない」

生き地獄を味わうのは、自分一人で十分だから。

「これ以上、あの子をこんな地獄に付き合せたりなんてさせない」

いっそ同じ地獄に落ちるのであれば、せめて本物の地獄へ。

「だから、貴方達がこれ以上、あの子を地獄に突き落す気だというなら……」

氷室が一步前出る。

その気迫に魔術師達が自ずと一步退く。

構わず氷室はさらに一步踏み出す。



その背に『絶望』と言う名の地獄を背負って。

その手に『抗い』と言う名の一振りの鎌を握りしめて。

氷室皐月と言う名の『死神』はゆっくりと、じっくりと、一步一步前へと突き進む。

「私が『止める』。私の能力は<sup>ちから</sup>そのために在る」

カウンターストップ  
『抑止力』。

その名は氷室が生き返った後に、自らの願いと想いを託し名付けたモノ。

理不尽に抗う理不尽な力として。

理不尽を押し付けようとする者に対する、強大な理不尽として。

理不尽と言う名の引き金を引くその指を、躊躇わせるための絶対的な理不尽として。

それは決して放たれる事のない、誰も傷つける事のない、理不尽を止めるためだけの理不尽として。

『留める』と言う意味の理不尽の名をそこに名付けた。

「けど、それでもこの先に進もうと言うならば」

そんな理不尽がすでに放たれてしまっているのならば、もう『抑止力』に意味はない。

それを止めるためには、もはや同じ『理不尽』を放つしか方法はない。

ならば、

「踏み入るのならば、死を覚悟なさい」

絶対的な『死』と言う名の理不尽を放つ、その力を解放する。

それは少女に見出された価値であり、それは少女に求められた役目であり、それが少女の力に宿った力のあり方でもある。

そう、その名はまさしくこの能力にふさわしい、と氷室は瞑目する。

もう二度と名乗りたくはなかったその名を、  
今ここで名乗る必要があるのであれば、  
躊躇う必要はない。

この身は『化け物』。人を喰らい糧とする『怪物』だ。  
地獄に踏み入ろうとする者を、その命を喰らって止める地獄の『  
悪鬼』だ。

ならば名乗ろう。その化け物としての名を。  
名乗る事で、最後の一線を退かせる事が出来るのであれば。

「悪いけど、ここから先は『通行止め』デッドエンドよ！」

それがこの能力の本当の名。

氷室皐月が立つ無間地獄の名だ。

## 第15章 とある怪物の無間地獄《ヘルオンアース》（後書き）

祝！ 真名解放！！

細かいことは活動報告に書きましたので、よろしければそちらもご確認ください。

## 第16章 とある呪縛の叙述誤謬《ミスリード》

「悪いけど、ここから先は『通行止め』デッドエンドよ！」

片腕を広げ、そう宣言する氷室の姿に魔術師達は息を飲んだ。

デッドエンド。即ち、死を以て止める。

彼女ならば、それも可能だろう。

自らを化け物と称し、事実化け物じみた反則級的能力を持った彼女であれば、ロンドンでも十指に入る『聖人』たる自分を相手にしても勝ちうると、神裂火織は瞑目する。

「……あなたの想いはわかりました。きっと、私達よりもずっとあなたの方が理解できているのでしょう」

彼女の抱く想いを神裂は否定する事は出来ない。その言葉はそのままインデックスの言葉だからだ。

同じ境遇に立ち、同じ地獄を味わう彼女は誰よりもインデックスの心を理解している。そしてその口から放たれる言葉の想いは、そのままインデックスが胸の内に秘めた想いとも繋がる。

神裂達には分らない、彼女よりずっと長く一緒にいても理解する事のできない領域の『想い』を唯一知る彼女の願せんたくいを神裂火織は否定する事は出来なかった。

「ですが、」

それでも認められない事がある。許すわけにはいかない事がある。

「それでも、あの子を死なせるわけにはいきません。あの子が死ぬ

なんてこと認めるわけにはいきません！」

ありったけの想いを込めて叫んだ神裂は、今度こそその腰に下げた七天七刀の柄を強く握りしめる。

「……ああ、そうだ。君の言うとおりきつと僕たちのしている事はあの子を地獄に付き落とす事でしかないのかもしれない」

ステイルはゆっくりと立ちあがりながら、神裂の叫びに呼応する。

「けど、僕も神裂も、もうとつくの昔にその覚悟はできてるんだ。たとえ憎まれようとも、恨まれようとも、何があってもあの子を守ると……、そう誓いを立てたんだ」

だから覚悟はできている。

例えばそれがインデックスの救いとならなくても、守ると、その命だけでも守り続けると、その誓いを胸に強く刻んだから。

「——Fortis931《我が名が最強である理由をここに証明する》！」

インデックスを守るために、刻んだその名を高らかに宣言する。

「やるぞ、神裂」

「当然です」

刻印のカードを周囲にバラ撒きながら構えるステイルに神裂も並び、強く頷く。

「……それに『死』が彼女の『救い』となると言うのであれば、私はこの魔法名を名乗る事に躊躇いはありません」

上条に対し、頑ななまでに名乗る事を拒絶していた神裂火織の魔法名。

二度と名乗りたくないと願ったその名を、神裂は想いをこめて叫ぶ。

「――Salvare000《救われぬ者に救いの手を》!!」

それは『聖人』である神裂が『聖人』であるからこそ刻んだ魔法名。

その名を名乗りながら、少女一人救えず、逆にその『思い出<sup>こいしゅ</sup>』を殺す事しかできなかった無力な魔法名。

しかし目の前の少女の『救い』が、そこにあると言うのであれば、神裂火織はその名に従い、救いの手を伸ばす。

「足掻くのね」

「当然だ」

「あなただってそうなのでしょ？」

「……そうね。なら、仕方ないわね」

そう、人はいつだって足掻くのだ。どんな残酷な運命にも、どんなに避けようのない結末が待っていても、それでもたった一つの願いと想いを胸に、必死で抗って僅かな可能性に賭けるのだ。

そこに救いがあると、希望があるのだと信じて。

「私は貴方達を止めるわ。あの子の記憶は消させない」

「我々はあなたを倒します。あの子は絶対に死なせない」

魔術師と能力者が。

『聖人』と『化け物』が。

互いに譲れないもののために、牙を剥き出しにして睨みあう。

その様子を眺めながら、上条は一人、どちらにもつけずに茫然と  
していた。

上条も魔術師達と同じくインデックスを死なせたくはない。だから氷室側につく事はできない。

しかし魔術師達のしようとしている『思い出の消去』には賛同できない。だから彼ら側にもつく事は出来ない。

そしてだからと言って氷室を殺してでも止めるなんて事、上条当麻にはできっこなかった。

だから上条には両者の争いを止める事はできない。

止める事が出来るとすれば、インデックスの記憶を消さずとも彼女が生き残れる術を示さなければならない。

だが今の上条にはそんな都合のいい名案はない。

可能性としては存在するが、それを確実と証明できるだけの証拠は一つもない。

そしてそれを探している間にも、決着はついてしまう。

それこそ氷室がその気になれば、一瞬で決着がつく。心臓を直接止めると言う、究極の殺害方法を用いて。

(けど、だったらどうすりゃいいつつつんだよ!)

上条は声にはならない悲痛な叫びをあげる。

この戦いは止めなければならない。止めなければ必ずどちらかが死ぬ。

どちらも同じ、インデックスを『救いたい』と願っている同じ者同士が、その方法の違いから命を奪い合う事になるなんて、そんな事、上条当麻は認められない。

しかしそれを止める術を上条当麻は持ちえない。

インデックスの脳の85%を占める10万3000冊の魔導書の記憶だけを消す確実な方法なんて知らない。

けどそれを消さなければ、インデックスの脳はパンクして死んでしまう。

そうしないためには代わりに残る15%の『思い出』を消さなければならぬ。

そしてまた一年後にも脳をパンクさせる『思い出』を消し続けなければならぬ地獄が永遠と続いていく。

「……、あれ？」

と、そこまで絶望的な考えを巡らせていた上条は、ふと自分の言葉に違和感を覚えた。

それは歯の間にモノが挟まったような、喉の奥に魚の小骨が刺さったような、そんな些細な違和感。

その正体を探るために、上条はもう一度状況を整理する。

インデックスの脳はその85%を10万3000冊の魔導書を覚えるために使われている。

そのためにインデックスは脳を圧迫されて、残る15%ではたった一年分の思い出を溜めて置くことしかできない。

それ以上無理に『記憶』し続ければ彼女の脳はパンクしてしまう、と。

（けど、ちょっと待て）

上条は気が付いた。その違和感の正体に。

どこの歯にモノが挟まっているのかを。喉のどの部分に小骨が刺さっているのかを。



「ちょ、ちよつと待った!」

気が付いた瞬間、上条は叫んでいた。

一触即発の空気を撒き散らす戦場の中に、それをぶち壊す上条の叫びが強引に割って入る。

「なに、上条君。あなたもあの子の『思い出』を消すっていうのなら――」

「何ですか、少年。あなたもあの子が死んだ方がマシなど言うのであれば――」

「い、いや、違う! どっちも認められないけど、そうじゃなくて――」

美少女二人に殺す視線を投げかえられ、恐怖に震えながらも上条は必死に自らの考えを訴える。

「インデックスの脳の85%は10万3000冊に埋め尽くされてるんだよな」

「……何をいまさらな事を」

「ああ。だから残りの15%で『思い出』を記憶し続けて、それは一年で一杯になっちゃうんだよな?」

「だから、そうだと言っているんです」

「だから僕たちはその思い出を『殺す』しかないんだよ。それとも何か? 君はあの子の中の10万3000冊の記憶を消す方法でも思いついたとでも? その確たる証拠を示せるとでも?」

「いや、そうじゃない。けど――」

ステイルの指摘に首を振るう上条は、それでも退くことなく前に歩みだし、

「15%も使って、たった一年分しか記憶できないって、どういう事なんだ?」

それが違和感の正体。

「ですから、それは。あの子には完全記憶能力があるからで——」  
「そうじゃない。確かに忘れる事のできない脳には記憶が蓄積してやがてパンクするのは分かる。けど——」  
そう、けど。

「……それじゃ、10万3000冊なんてモンがなくても、最初から六歳か七歳で死んじゃうって計算じゃねーか」

「——、!？」

そう。そうなのだ。そういうことなのだ。  
おかしい。絶対におかしい。

確かに『完全記憶能力』というのは珍しい体質なのかもしれない。世界でどれほどその能力を持っている人物が居るのか、上条にはわからない。けど、少なくとも世界中を探してインデックス一人だけ、なんて事はないはずだ。

そして、他の完全記憶能力者は『魔術』なんて馬鹿げた方法で記憶を消したりはしない。

だとすれば、世界中に存在する『完全記憶能力者』は全員、6〜7歳で死んでしまうという事になってしまう。

そんな不治の病じみた体質ならば、もっと有名になっているはずだ。

いいや、それ以前に。

「神裂。あんた、どこから85%だの15%だのって数字を導き出したんだ？」

それは一体、どこの誰に聞いたものなんだ？

そして一体、

そもそも、その85%って情報は、本当に正しいのか？

「それは……」

神裂は答えない。答えられないことがもうすでに答えだった。

つまり魔術師達は、その話を誰かから聞いて、それを鵜呑みにしていただけなのだ。

だからその85%という数字には何の根拠もない。残りの15%って数字もそうだ。

だとすれば、そうなのだとすれば――

思わず上条は氷室へと振り返る。

そして、

「はあああああああああああああああああああああ  
 ……」

「え、えっと、氷室さん。その心底呆れ果てた、というようなため息はなんでせうか？」

「心底呆れ果てているのよ、地核の底から……」

「マントル超えたっ!？」

むしろ地球の中心を意味しているから、これ以上ない程に呆れ果  
てているって事だ。

「って、ちよつと待って！　もしかして、知ってたのか？」

「当然でしょ」

「――、ツ！？」

さもありなん、と言った様子で答えを返す氷室に、上条は声にならない叫びを上げた。

「何で黙ってたんだよ！」

「聞かれなかったから」

「聞かれなくても言えよ!？」

そうすればこんな馬鹿げたやり取りする必要はなかった。

「てか、だったらインデックスは——」

「ええ。たった一年で記憶がパンクするなんて嘘。他の完全能力者の中には100歳超えてもピンピンしている人もいるわよ」

「じゃあ、記憶を消さなくても——」

「死なないわね。元々人間の脳は140年分の記憶が可能と試算されているわ。容量的には140テラbit——即ち12テラbyt。これは電話帳換算で約100万6633冊分。一般的な新聞紙朝刊でおよそ200万年分とも言われているわ」

「200万年!？」

「そう。10万3000冊の魔導書の一冊当たりがどれほどのものかは知らないけど、少なくとも全然余裕があるってのは事実ね」

もっともこれは脳の神経細胞一個一つの『素子』として計算した値——大脳資質を構成する神経細胞約140個×シナプス結合数一個につき一万という単純計算をもとに弾き出された数字だ。実際にはその全ての細胞が学習記憶に使われるわけではないから、記憶の箱としての容量はそれよりも少なくなる。だが記憶の仕組みによっては逆に多くなる可能性だってある。

人の脳がどれだけの容量を持っているのかなんて、最先端科学を有し『超能力』なんていう脳に直結した研究を行っている今の学園都市にだってハッキリとした数値は分かっていないのだ。

「それに、そもそも問題としての話の前提そのものが間違ってる」

「前提が間違ってる?」

「……一口に記憶って言っても種類が複数存在するの。代表的なのは言葉の意味や知識を司る『意味記憶』、運動の慣れなどを司る『手続記憶』、そして人の思い出にあたる『エピソード記憶』……、これらは独立した別の記憶として脳に記録され、格納されるの」

「え、えっと、……言ってる意味がよくわからないんだけど」

「要するに『10万3000冊』と『思い出』は記憶される『容れ物』が違うって意味よ」

「な——、!?!」

「だから、いくら『意味記憶』<sup>10万3000冊</sup>の容れ物が一杯になったからって、『思い出』<sup>思い出</sup>『エピソード記憶』の容れ物が少なくなるなんてことはないのよ」

「そんな——!?!」

衝撃の事実<sup>はこ</sup>に神裂が思わず声を上げた。

信じられないとばかりに目を見開くそんな魔術師達に、氷室は容赦なく現実を突きつける。

「考えてもみなさい。記憶喪失になった患者が、いきなり赤ん坊みたくばぶば言ってハイハイするわけじゃないでしょ？ ちゃんと人間の言葉を話して、二本の足で立ち上がって歩ける。『思い出』を失っても『知識』や『運動の慣れ』は残るわけだから、その逆もしかり、よ。それとも貴方達があの子の『思い出』を消した後、彼女は赤ん坊みたくなった？」

その問いに神裂は首を振る。もしそうならば、わざわざ敵にまわって追いかけて回し、攻撃を仕掛ける必要なんてどこにもない。

「つまりはそういう事」

「じゃあ、本当にインデックスは『思い出』を消さなくても——」  
「脳がパンクする事はない。……つというか、『記憶術』の授業で習った範囲の内容よ、コレ？」

「うぐっ……」

だから地核の底から呆れ果てられたわけだ。

上条がちゃんと授業の内容を覚えてさえいれば、無駄にあたふたする必要はなかったのだから。

「もしかして、氷室が『手を出さない』って言ったのは、」

「そう。初めから手を出す必要がないのに、わざわざ手を出すなんて全くの無意味じゃない」

「じゃあ、インデックスを見捨てたわけじゃ……」

「いつ、私がそんな事を言ったのかしら？」

言っていない。一度も見捨てて、見限るなんて言葉を氷室は口にし

た事はなかった。

死んだ方がマシ、とは言っていたが、だからと言って殺すとは一言も言っていない。

要するに、

「上条君が勝手に勘違いして、勝手に失望して、勝手に見限っただけでしょ？」

「……………」

何処かで、それもつい最近聞いた覚えのある台詞を吐かれ、上条はガツクリと肩を落とした。

「わかりづれえんだよ、全く……」

しかもそれすら分かっていながら今まで黙ってほくそ笑んでいたと思うと、その意地の悪さに腹が立つ。

「絶対ドSだろ、おまえ」

「あら、今頃気付いたの？」

「……、」

上条はもはや何かを言う気力もなくして、ガツクリと膝を折った。「と言うわけよ」

安堵と言うべきか落胆と言うべきか、とにかく気の抜けた上条をほっといて氷室は魔術師達へと向き直る。

「あの子の思い出を消す必要はない。あの子の脳がパンクするなんて全くの嘘、デタラメ、虚言。それでもまだ、やるっていうの？」

魔術師たちは確かに科学には疎い。だが今の内容で事の真偽が理解できない程馬鹿じゃない。

「だ、だが！ それならあの子が今苦しんでいる理由はなんだ！それが何よりの証拠じゃないのか！」

記憶に脳を圧迫されているから頭痛を擁し、それが高じて今まさに死にそうなほど苦しんでいるのではないか。

その理由は？ 記憶に問題がないのなら、何故あの子は苦しんでいるというのか。

「だから、記憶以外のモノが原因だってことでしょ？」

氷室は自らの首を指さしながら、そう告げた。

「まさか——!？」

「そ。そのまさか」

首、正確にはその向こうにある喉の奥。インデックスの喉の奥に隠すように仕掛けられた魔術刻印。

「ステイル……貴方の上司はこう言ったのよね。 “『首輪』は『禁書目録』を守るためのもの”、と」

「そ、そうだ。アレは『自動書記』の——」

「だとしたら、何故わざわざそれを『首輪』と呼ぶの？ 何故『首輪』でなければならぬの？」

「そ、それは——」

「守るためのもの？ 何から？ 何時の時代から『首輪』は防具に分類されるようになったのかしら？ ましてや『歩く教会』なんて法王級の防御結界を常に身に着けている彼女に、さらにそんなモノをつける意味はあるのかしら？」

『歩く教会』が壊されたのはつい最近の話だ。そもそも『幻想殺し』<sup>イカー</sup>なんていう例外中の例外、反則級の異能でもなければ『歩く教会』が破壊される事なんてありえない代物だ。そしてそれがあらゆる攻撃を防ぐのであれば、『自動書記』<sup>ヨハネのペン</sup>なんて代物が必要となる場面なんてほとんどないと言ってもいい。万が一を想定したにはあまりにも想定し過ぎているきらいのある代物だ。いつそやり過ぎとも呼べる。

「古来より『首輪』の役目はただ一つ」

「……拘束具」

「そう、その身を縛り付け一つの場所に留めるもの。この場合、どこに、なんて聞くのは愚問ね」

教会——イギリス清教、第零聖堂区『必要悪の教会』<sup>ネセサリウス</sup>。一人の少女を『禁書目録』へと作り変えた忌まわしき場所。

「けど、『首輪』単体じゃ『拘束具』としての意味をなさない」

犬や猫に首輪だけをしたところで、放し飼いにしていれば好き勝手に外を出歩いて迷子になる。最悪帰ってこない可能性だってあり得る。

「『首輪』には『鎖』が必要よ。留める場所と繋がった『鎖』がね」  
「鎖、だと……」

「そうよ。私はキチンと言ったはずよ、ステイルⅡマグヌス？ 金の卵を産むガチョウを野放しにする馬鹿はいない、と。あの子の『首輪』は一定期間を過ぎると発動し、あの子に何らかの苦痛を与えるものである可能性がある、と」

「――！？」

言った。確かに目の前にいる少女はその可能性を示した。

だがステイルが確認を取ったのは、もう一つの可能性――頭を吹き飛ばす『爆弾』ではないのかという事だけ。ステイル達にとってはそのちちの方が重要で、問題が大きかったから。

だからただ苦痛を与えるだけの可能性なんてものは捨て置かれた、捨ててしまっていた。それが真実に最も近い回答だなど知らぬままに。

「一年という長さを持った『鎖』に繋がれ、それを過ぎると『苦痛』を与え、解放されるために“『教会』に戻らなければならぬ”ように仕向けるために仕掛けられた『首輪』。それが全ての元凶よ」

「う、嘘です……、だって、そんな……」

神裂の声が震える。当然だろう。もしそれが本当なら、それが本当であるのなら、今まで自分たちのしてきたことは……、その意味は……、その全てがひっくり返る。

「それともう一つ。この『首輪』は貴方達をも縛り付けるモノよ」  
「ぼく、達を……」

「……ステイル、あなたあの子の記憶を消すために何か道具をもらってるんじゃない？」

「だ、だったらなんだ……」



ステイルは思わずポケットの中にあるソレへと手を伸ばした。

小さな十字架のついたネックレス。インデックスの記憶を消すためにイギリス清教から借り受けた魔術の道具――霊装。

「ソレ、おそらく作れるのは年に一個、しかも一度使えば壊れるか二度と使えなくなる類のモノじゃない？」

「――、！？」

「凶星、ね」

息を飲んだステイルの態度に、氷室はニヤリと笑みを浮かべる。

「教会が最も恐れているのは『禁書目録』を誰かに悪用される事。

あの子自身も当然ながら、その側近としてつく魔術師達もそうはならないという保証はない。なら、そんな人物を何の枷もなくインデックスの隣に立たせるわけがないでしょ？」

だから1年置きに記憶を消すための霊装を、1年に1個しか作れない1度きりの使い捨て式にした。

「あの子の命を人質にして貴方達が彼女を連れて教会から逃げ出さないように、裏切らないように……、もし裏切っても1年後には戻らざるを得ないように」

逃げ出した最初の1年はどうにかなるかもしれない。すでに出来上がった霊装を手に逃げ出せば問題ない。しかし次の1年はもう打つ手はない。霊装の製造法は教会の上層部が秘匿しているだろうし、安易に盗み出せるようなものでもないだろう。

だから必ず、最後は戻らざるを得なくなる。インデックスを助けるために、助けたいと願う限り。

「ましてやあの性格よ。よほどの性悪かひねくれ者でもなければ、誰にだって好かれるでしょうね」

そして彼女に課せられた運命を知り、地獄を知り、どうにかしたいと思ったが最後、その者は教会の頸木にその身を縛り付けられる。裏切る事は出来ない、逆らう事すらできない。教会側には最悪、今のインデックスを放棄して、別の『禁書目録』を作るという選択肢も持っているのだから。それを行使させないためには、ステイル

私たちはどんな理不尽な命令にも頭を下げて遂行するしかない。

「いいわねエ、いい感じに狂ってるわア、貴方達の上司ってのは」  
思わず惚れちゃうかも、と上気した頬に手を当て笑う氷室とは対照的に魔術師達の表情からは血の気がほとんど引いていく。

インデックスが苦しんでいるのは記憶が圧迫されているからだと言わされていた。放置すれば脳がパンクして死んでしまうのだと告げられていた。だから15%の『思い出』を、一年間の『思い出』を消す事だけがあの子を救う唯一の方法だと信じて実行してきていた。

しかしそれが最初から嘘だったのならば。目の前にいる少女が言うとおり、全ては教会が仕掛けた『首輪』のせいなのだとしたら。  
「最小限の嘘と情報統制。それによる誤謬<sup>ミスリード</sup>を誘発して、しかもあの子を守りたいという美しき愛情の心を利用して、その実、その子を自分たちの手で地獄のどん底に突き落とさせてるんだもの」

しかも彼らはその事実が付かない。科学を厭い手を出す事すらしようとしなない彼らは。そんな事する必要が初めからないことになど気付く事が出来ぬまま、むしろ自分達の行いがその子を救うための唯一の方法だと、苦渋の決断なのだと信じ込み、酔いしれ、なおの事インデックスに、教会の頸木に縛られていくこととなる。

「で、では、私達のしてきたことは……」

「全くの正反対。する必要ない『記憶の消去』を行ってきただけ。  
あの子を『救う』のではなく『貶める』だけの行為だったって事よ。  
教会のクソツタレな迷惑どおりに、ね」

記憶を失ってしまえば、その一年でインデックスが何を思うとも関係ない。裏切る要因が生まれても、悪感情を抱く何かがあったとしても、一年後には全部忘れてリセットされる。そして真っ新たな記憶に残るのは自分が『イギリス清教』の人間であると言う知識だけ。  
『禁書目録』と呼ばれるものを抱え、それを使って教会に貢献すると言う役割だけ。それ以外は何もなく、それだけが彼女を支える存在意義となる。いわば刷り込み<sup>インプリンティング</sup>だ。生まれたての雛鳥が、最初に認

識したモノを親だと思い込むように、それが自らを保護してくれる存在だと無意識に認識してしまうように。

その手助けを、彼らはずっとやってきていたのだ。そうとは知らず、誤解したままに。

「そ、んな、事……」

「信じられねえってか？」

未だ現実を拒絶し続ける魔術師達に対して、上条は立ち上がる。

「冷静になれよ、冷静になって考えてみろ！ インデックス 禁書目録なんて残酷なシステム作りやがった連中が、テメエら下っ端に心優しく真実を全部話すと思ってるのか！」

上条とて彼らが現実を直視したくない気持ちは分からなくもない。唯一と信じてきた手段が、その実、全く真逆の行為だったなんて、そんな残酷な現実を認めたくないのは理解できる。

だけど、

「テメエら、ずっと待ってたんذار？ インデックスの記憶を奪わなくても済む、インデックスの敵に回らなくても済む、そんな誰もが笑って誰もが望む最っ高に最っ高な幸福な結末ハッピーエンドってヤツを！」

何度も挑戦して、何度も失敗して、それでも諦めきれず、ずっとずっと探し続けてきたはずだ。

「ずっと待ち焦がれてきたんだろ、こんな展開を！ 英雄がやってくるまでの場繋ぎじゃねえ！ 主人公が到着するまでの時間稼ぎじゃねえ！ 他の何者でもなく他の何物でもなく！ テメエのその手で、たった一人の女の子を助けてみせるって誓ったんじゃないのかよ！？」

魔法名は単なる『殺し名』だけじゃない。そこには彼らが魔術を使う意味を、その目的を、願いの在り処を示し刻んだ宣誓の名だ。

ステイル・マグヌスは『強者』を。誰にも負ける事のない、あらゆる外敵からインデックスを守ると、そのための『強さ』を求めて。神裂火織は『救済』を。その人の枠を超えた力が、自身には過ぎた力が、絶望に瀕した者達を救うための力となるようにと、願いを

込めて。

「ずっとずっと主人公になりたかったんだろ！ 絵本みてえに映画みてえに、命を懸けたてたった一人の女の子を守る、そんな魔術師になりたかったんだろ！ だったらそれは全然終わってねえ！！ 始まってすらいねえ！！ ちっとぐらい長いプロローグで絶望してんじゃねえよ！！」

言いながら上条はようやく気付いた。

（そうだよ、“まだ始まってすらいねえんだ”！）

ちよっとぐらい長いプロローグで絶望していたのは魔術師達だけではない。上条もだ。

救いはないと言われて、救われる未来は存在しないと言われて、その先にある高い壁を示されて絶望していたのは上条も同じだ。

けど、それは単なるプロローグに過ぎないのだ。やってみなければ、突き進んでみなければ、その壁が本当に絶望するしかない壁なのかなど分かるはずもない。立ち向かってみれば、案外簡単に打ち壊せる壁なのかもしれない。

諦めないと言った。最後までインデックスの味方であると決めた。いた。

なら『答え』なんて最初から決まっていたのだ。

なのに上条はずっと臆して、怯んで、縮こまって、悩んでいるふりをして逃げていただけなのだ。

「ああ、そうだよ。たったそれだけの事なんだ！」

上条は拳を握る。強く、強く。決意と共に。

「そろそろ逃げるのは終わりにしようぜ——」

現実から、不安から、逃げて蹲っているだけじゃなにも変わらない。

変えるためには、拳を握り、立ち上がって、歩き続けるしかないのだ。

どんな壁も、どんな困難も、ぶつかって、ぶつかり続ける事でしか壊す事なんて出来ないのだから。

「――手を伸ばせば届くんだ。いい加減に始めようぜ、魔術師！」

上条はもう一度その右手の拳を強く握りしめる。

少なくとも今、目の前にある壁は、上条が『右手』を伸ばせば壊せる壁だ。

そう、今までずっと役立たずだと思ってきた『右手』。神様の奇跡すら打ち消せると言っておきながら、不良の一人も倒せない、テストの点も上がらなければ女の子にモテたりもしない、何の役にも立たないと思っていた、『右手』。同じ無能力の烙印を捺されながら、少女の傷を止め、魔術師達を圧倒し、化け物と蔑まれ、恐れらるほどの力を持った氷室の能力とは比べ物にならない程、無力な力。けれど、たった1つ。

目の前で苦しんでいる女の子を助ける事が出来るのは、紛れもない、そんな無力で役立たずと思っていた『右手』の力だ。

氷室の能力でもない、魔術師達の魔術でもない、この世でたった一つ、それだけが今少女を救える唯一の力なのだ。

ならそれは、何にも勝る素晴らしい力だと上条は思う。

「……良い顔になったわね」

その声に振り返れば、氷室が笑っていた。

何かを誇るように、羨むような、そんな微笑みを。

「ああ。氷室のおかげだな」

彼女が上条に示したのは“後悔しないための後悔の道”なんかじゃなかった。“後悔しないための強い決意を抱く道”だった。

きっとこの先、上条の道行く先には様々な困難や絶望が待っているだろう。完全にインデックスを守りきれるかどうかなんてわからない。もしかすると敵の手に奪われて、膝を屈するしかない場面に出くわすかもしれない。

けど、何も知らぬままであったのならそこで絶望するしかなかっただろう。絶望に打ちひしがれて、ただひたすらその場に膝を折っ

て蹲っているだけだったはずだ。でもそんな絶望を先に知っていれば、そこから再び立ち上がって、彼女を取り戻すための行動を再開する時間は短縮される。絶望に打ちひしがれて手遅れになる前に、絶望が後悔へと至る前に、立ち上がるための力となる強い決意を今ここで刻みこんでいれば、インデックスを救い続ける事が出来るのだと。

「ホント、分かり辛いよなあ……」

「そうかしら？ 『恐怖で立ち止まってしまうような経験をする度に、力と勇気と自信が手にはいる』——第32代アメリカ大統領夫人エレノア・ルーズベルトの言葉よ。人の言葉を鵜呑みにして、得られる自信なんて露程の価値もない。人の言葉を鵜呑みにして、得られた結果が、今の彼らよ」

必要なのは悩むこと。悩んで、悩んで、悩み抜いた先に、確固たる自信と力を手に入れる事が出来る。悩んだ分だけ、その芯は揺るぎ無いものとなる。

「見せてあげなさい、貴方の覚悟を。貴方の決意の程を。歩みを止めて、絶望に屈した彼らに、まだ終わってないってことを、これから始まるんだってことを」

「ああ」

やるべきことは分かっている。その先に待つ壁も理解した。そしてそこに立ち向かう力と自信と勇気を、確固たる芯と共に上条は手に入れた。

なら、もう悩む必要はない。躊躇うべきことなんて何もない。

その手に力があって、その胸に自信と勇気があって、手を伸ばせば届くのなら——。

「行きなさい、上条当麻。<sup>ヒーロー</sup>あの子を地獄の底から助けてあげて」それは命令にも似た願いだった。氷室皐月が、心の底から乞う純粹な願い。

もう、誰も同じ地獄を味合わせたくない、そこから掬い上げて欲しいという、切なる願い。

「ああ、当然だ！ もう二度と、アイツにそんな地獄は味あわせねえ！ そんな地獄げんそう、俺がこの右手でぶち壊してやる！」

拳を握り、振り返る。助けるべき少女が横たる方角へと向けて、一歩踏み出す。

「……だから、氷室」

「……なに？」

数歩、進んだ所で立ち止まった上条に、氷室は首を傾げ、

「インデックスは必ず助ける。けど、それが終わったら――」

右手の拳を握り、首だけで振り返った上条は、

「次は、氷室の番だ」

「――、ッ!？」

どこまでも真剣な目を向けて告げたその一言に、氷室は息を飲んだ。

「氷室の地獄ってのが、どれほどのもんかまだよくわかんねーけど……、でも、ほっとけない。ここまで世話になったんだ。俺に出来る事があるなら、力になる。絶対に、今度は氷室を、その地獄から救ってやる！」

「……ば、馬鹿言ってるんじゃないわよ。今は目の前の事に集中しなさい！」

「そう、だな」

もう一度拳を強く握り、「行ってくる！」と駆け出した上条の背中を見送りながら、

「全く……」

氷室は赤く染まった顔を手で覆い隠し、深いため息を吐いた。

「あれを何の計算もなく素でやってるんだから、始末に置けないのよねえ……」

氷室が元男だったからよかったものの、普通の女だったらまず間違はなく今で惚れる。そして本当に救ってみせられたのなら……たぶんそんな事すら関係なく確実に惚れ込む。

とはいえ、さすがにそれは遠慮したい。女としての自意識を確立

している氷室ではあるが、こと恋愛感に関しては未だ男時代のままで。もっともそれを貫けば肉体的百合となるしか道はないため、それはそれでどうなのだろうという思いもある。

もっともそれ以前に、今の氷室は生きる事に必死で、そんなこと恋愛事に感  
けている精神的余裕がない。

それにたとえ余裕があったとしても、

「私はある意味、“売約済み”だしねえ……」

恋愛感情とは無縁だが、その身はとある存在に縛り付けられている。

だから他に目を向けている余裕なんてどこにもない。目を背けたら最後、喰い喰われる関係なのだから。

第一、氷室を取り巻く問題は上条一人がどうこうしたところで、救えるほど安い地獄ではない。むしろ実際のところは彼もまた、その地獄の一端に取り込まれているのだ。そうとは知らず、この先も知らぬまま、彼は事件に巻き込まれ続けていくだろう。

だからこそ、氷室は今回少しばかりお節介を焼いてみた。

この先もずっと介入を続け直接的に手助けできるわけではない。氷室には氷室のすべきことあり、上条ばかりに感けていられるわけではない。

かといって、彼に容易く死なれてもそれはそれで困るのだ。

上条当麻は氷室皐月の『敵』に対するジョーカーの一枚でもある。出来る事なら欠かずに温存しておきたい。

だから例えその場に自分がおらずとも少しでも糧として、力として何かを残せていれば……。そんな思いで、上条には徹底的に悩んで悩んで悩み抜いてもらったのだ。その分だけ、彼は成長し、強くたくましくなるだろうから。

もっとも、こんな事をしなくても上条当麻ならば自ずとこれから



迫りくる困難を乗り越え、加速度的に成長をしていっただろう。

なにせ、彼は『主人公』なのだ。この世界の中心に立つ、真正銘本物の正統派『主人公』。

困った時には颯爽と駆けつけ、彼が瀕した時には自ずと周囲が手を差し伸べ彼を助ける。それが『主人公』が『主人公』たる所以なのだから。

だからこそそのお節介。やってもやらなくてもどっちでも構わない、けどやった分だけ多少の利益は出るかもしれない、そんな単なるお節介だった。

「……さて、貴方達はどうする？」

振り返るとそこにはそれぞれの得物を手に動きを止めた魔術師達の姿があった。

いや、実際には上条が走り始めた直後に攻撃を仕掛けようとして、『止められた』のだが。

「まだ信じない。認めたくないと言うのであれば、証拠をみせてあげる」

「証拠、だと」

「そう。ステイル、貴方が持ってきてくれた証拠よ」

「僕が……？」

「ええ。それが何かはすぐにわかるわ」

そう言って、再び上条達の方へと向き直る。

インデックスの傍に跪き、何かを必死に語る上条。

そして意を決したかのように、その手を彼女の口の中へと差し込み、さらにその奥の喉へと到達した瞬間、

バキン！ と。上条の右手が勢い良く後ろへと吹き飛ばされ、

ゴッ！！ という凄まじい衝撃と共に上条の体が氷室たちのもとまで吹き飛ばされた。

「……始まったわ」

目の前で展開する異常事態に、氷室はポツリと言葉を漏らす。

それは最終幕、最後の一幕の幕開け。

エンディングへと至るための、最後の一戦<sup>ラストバトル</sup>を告げる終焉の笛。

「さあ、始めましょう、魔術師。長いプロローグの終わりを、物語の始まりを」

『とある魔術の禁書目録』は、ここから始まるのだから……。

## 第16章 とある呪縛の叙述誤謬《ミスリード》（後書き）

さて次回はいよいよラストバトル。

第一話もうすぐ終わり。さて、その結末や如何に！

活動報告にもいろいろ書いておりますので、よろしければどうぞ。

## 第17章 とある魔術の禁書目録《インデックス》

「行ってくる！」

そう告げて走り出した上条は、インデックスのもとへと駆けつける。

ベンチの上で横たわる彼女は熱病に魘されるように大量の汗をかき、浅い呼吸を繰り返しては苦悶の表情を浮かべている。

それもこれも教会の連中が施した『首輪』のせいだと思うと、とりとめのない怒りが沸々と湧いてくるのを感じる。

「けど、もうこれで終わりだ」

そう、そして始まるのだ。誰の思惑にも従わず、自由に選択し、動く事の許される、そんな日々が。

「……とうま？」

ふと強く拳を握りしめた上条の耳に、か細い声が響いた。

「インデックス!？」

「と、うま……ここ、どこ？」

見覚えのない周囲の光景にインデックスは視線を巡らせ、

「……魔術師!？」

上条の背後に立つ魔術師の存在に気付き声を上げた。

もう動かせない体を無理矢理に動かして、インデックスは跳ね起きようとする。ズキン、とその顔が苦痛に歪んだ瞬間、上条は思わずインデックスの両肩を掴んで無理矢理にでもベンチに押し戻した。

「とうま、魔術師が来てるんでしょ! 逃げなきゃダメだよ!!」

ましてや視界に映る魔術師は、戦闘態勢を整え今にも襲い掛からんとしている。

魔術師という存在が一体どれだけ危険なのかを知っている彼女は、心の底から上条を心配している。

「……、もう、良いんだ、インデックス」

「とうま!」

「もう終わるんだよ。……もう、終わらせることが出来るんだ!」

「とう、ま……?」

怒りとも、決意とも取れる強い眼光に、インデックスは思わず体を震わせた。

「なあ、インデックス。これが終わったら、どこか遊びにいかねえか? せっかくの夏休みなんだからさ、思いっきり遊ばないと損だろ」

もう記憶を消す必要のない彼女には、今まで以上に幸せな記憶を与えてあげたい。

「どこがいい? やっぱ夏だから海か? あー、でも夏休みの補習があるから、それが終わってからだな」

こればかりはしょうがない。この時ばかりは、自分の成績の悪さを悔やんだ。

「けど、氷室もそれは一緒だしな。どうせなら三人で行くか! 知ってるか? 海の家焼きそばってマズイクセに妙においしく感じられるんだぜ?」

「マズイのに、おいしいの?」

変なの、とうっすらと笑うインデックスに上条も微笑み返す。

「それに学園都市の遊園地もすごいらしいぞ? 俺も行ったことはないけど話に聞いただけでも滅茶苦茶らしいからな。外じゃ絶対に味わえない経験ばっかりだ。ちなみに超次元スクリーツイスターチュロスなんてどうねじ曲げてんのかよくわかんねえドーナッツ(?) も売ってるらしいぞ?」

他にもたくさん美味しいもんがある、と上条は知り得る限りのグルメを言い募り、

なんならいっその事、夏休みが終わったら学校に転入してくるか? と笑って告げた。

「……だからもうちょっとだけ待ってろよ。絶対、完璧に助け出してみせるから」

インデックスの目には、それがどんな風に映ったのか。

インデックスの耳には、それがどんな風に聞こえたのか。

自分が今どんな状況で、どんな地獄を強要されているかも知らない彼女には、その言葉の本当の意味を理解する事は出来ない。おぼえてい

だけど、

「分かった。待ってる」

インデックスは笑った。

ボロボロの笑顔で、完璧な笑顔で、今にも崩れそうに、笑ってくれた。

上条は分からない。

どうして彼女がこんなに人を信用してくれるのか、そんな事は分からない。

だけど、上条を心の底から信頼してくれているのであれば。

「ああ、待ってろ！」

既に覚悟は決まっている。そして最後の一押しをインデックスにもらった。

ならば上条当麻はもう後には引かない。

ちよつとスマン、と断りを入れて、インデックスの口をこじ開ける。

その奥、喉の深い部分に、ソレは確かにあった。4の字を變形させたような不可思議な紋章。マークインデックスを苦しめ地獄に付き落と続けた、その元凶。

「インデックス。今、テメエを苦しめている地獄をこの右手でぶち壊してやるからな！」げんそ

一気に右手を突き入れ、その紋章目<sub>げんきよう</sub>がけて奥まで押し込む。

ぐっ、と強烈な吐き気にインデックスの体が大きく震えた――ような気がした。

パチン、と静電気が散る様な感触を上条は右手の人差し指に感じると同時、

バギン！ と。上条の右手が勢い良く後ろへと突き飛ばされた。

「がっ……………!?!」

ぽたぽた、と地面に血の珠がいくつも落ちる。

まるで拳銃で手首を撃たれたかのような衝撃に、上条は思わず自分の右手を見た。元々神裂に引き裂かれた傷が開いて、ボタボタと音を立てて鮮血が地面の上へと落ちていく。

そして顔の前へ持ってきた右手の、そのさらに向こう。

ぐったりと倒れていたはずのインデックスの両目が静かに見開き、その瞳は赤く光っていた。

それは眼球の色ではない。

眼球の中に浮かぶ、血のように真っ赤な魔法陣の輝きだ。

(まずい……………ッ!!)

上条が本能的な背筋の震えに、壊れた右手を突きつける前に、インデックスの両目が恐ろしいぐらいに真っ赤に輝き、そして何かが爆発した。

ゴッ!! という凄まじい衝撃と共に上条の体が氷室たちのもとまで吹き飛ばされる。

強かに打ち据えた背中の痛みに呻きながらも、上条は何とか立ち上がる。その両足はガチガチと震え、ともすれば崩れ落ちてしまいうのだが、それでもまだ終わっていない。

「さあ、始めましょう、魔術師。長いプロローグの終わりを、物語の始まりを」

そう、ここからが本番だ。だから上条当麻に倒れている暇なんてない。

「――警告、第三章第二節。Index—Librorum—Prohibitorum——インデックス禁書目録の『首輪』、第一から第三までの全結界の貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状、10万3000冊の『書庫』の保護のため、侵入者を迎撃します」

のろのろと。インデックスは、まるで骨も間接もない、袋の中に

ゼリーが詰まっているかのような不気味な動きでゆっくりと立ち上がる。その両目に宿る真紅の魔法陣が上条を射抜く。

それは眼であって、目ではない。

そこに人間らしい光はなく、そこに少女らしいぬくもりは存在しない。

かつて、上条はこの瞳を見たことがある。神裂に背中を斬られ、学生寮の床に倒れている彼女が機械のようにルーン魔術について語った、あの時だ。

『自動書記』ヨハネのペン。魔術師達がインデックスを守るためと言っていた、その魔術だ。

「……そういやあ、一つだけ聞いていなかったっけか」

ボロボロの右手を握りしめながら、上条は口の中で小さく言った。「超能力者でもないテメエが、一体どうして魔力がないのかって理由」

その理由がおそらくコレだ。このためにインデックスの魔力は全てそこに注ぎ込まれてしまっていたのだ。

「――『書庫』内の10万3000冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術ローカルウェポンを組み上げます」

インデックスは、糸で操られる死体のように小さく首を曲げて、

「――侵入者個人に対して最も有効な魔術の組み合わせに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』セントを発動、侵入者を破壊します」

バキン！ と凄まじい音を立てて、インデックスの両目にあった2つの魔法陣が一気に拡大した。インデックスの顔の前には直径二メートル強の魔法陣が2つ、重なるように配置してある。それは左右一つずつの眼球を中心に固定されているようで、インデックスが軽く首を動かすと空中に浮かぶ魔法陣も同じように後を追った。



「。、」  
インデックスが何か——もはや人の頭では理解できない『何か』を歌う。

瞬間、インデックスの両目を中心としていた魔法陣がいきなり輝いて、爆発した。ニュアンスとしては空中の一点——インデックスの眉間のあたりで高圧電流の爆発が起き、四方八方へ雷が飛び散るような感覚。

ただし、それは青白い火花ではなく、真っ黒な雷のようなものだった。

全く非科学的な表現ではあるが、それは空間を直接切り裂いた亀裂のようなモノに見えた。バキン！と。2つの魔法陣の中心を接点に、ガラスに弾丸をぶち込んだように、空気に真っ黒な亀裂が四方八方へ広がり、周囲を取り囲むように走り抜けていく。まるでそれ自体が何人たりともインデックスに近づけさせまいとする、一つの防壁であるかのように。

「ば、馬鹿な！ 何であの子が魔術を使えるんですか！」

神裂がもう何も信じられないと言ったように金切り声を発し、叫んだ。

「だから、そういう事だろ！」

口の中に溜まった鉄臭い血の味の混じった唾を吐き捨てながら、上条はインデックスから目をそらさず叫ぶ。

「ステイル！ テメエ言ったよな。アレは『インデックス禁書目録』を守るためのモンだって！」

「あ、ああ、そうだ……、て、まさか！？」

「そうさそうだよですよ！ テメエの上司は一言も少女を守るもんだなんて言ってねえ！ ソイツらが守るって言ったのは『インデックス禁書目録』つつーシステムの事だけだって話だろうが！」

「死に物狂いで解決法を探し、藁にも縋って科学側サイドに答えを求めれば、こんな嘘、すぐにでもバレる。でも、例えそれがバレたとしても、彼らは問題視しない。なぜならそれを知って、真実に辿り着い

たとしても、解呪しようと手を出した瞬間、その者は消される事になるから。他ならぬ、あの子に仕掛けられた『自動書記』ヨハネのペンと言う名の人殺しの化け物によってね」

だから、自分とよく似ているのだと、氷室は淡々と告げる。

インデックスだってこんな事、望んでなどいない。望まぬ人殺しを他人の仕掛けた『呪い』によって強要され、それによってその価値に縛り続けられる事になる運命を背負った二人の少女。救おうとする者すら殺してしまう、地獄の呪い。

（ふ、ざけるな！）

そんなこと許されるはずがない。許していいわけがない。

（絶対にそんなことさせねえ。その前に全部終わらせてやる！）

めき……、と。何かが脈動するように、亀裂の内側から膨らんでいく。

僅かに開いた漆黒の亀裂の隙間から流れ出るのは、獣のような匂い。

それを目にした上条は、唐突に知った。

それは理論や論理ではない、屁理屈や理性ですらない。本能に近い部分が叫んでいる。あの亀裂の中にあるものが『何か』は知らない。だがそれを見たら、それを真正直に直視したら、たったそれだけで上条当麻という一存在は崩壊してしまう、と。

（だから何だっていうんだ……）

それでも全く上条は揺るがない。むしろ震えていた。

どんどんどんどん亀裂が広がっていき、その内側から『何か』が近づいてきている事を知っても、上条は揺るがず、震えていた。

恐怖に、ではない。歓喜に。上条当麻は嬉しさのあまり震えていた。

（ようは、『それ』さえ倒しちゃえば、いいんだろうが！）

上条はもう一度駆け出す。

その距離は10メートルもない。ボロボロの病み上がりの体でもたかが数秒で辿り着く事のできる距離だ。

そしてその距離さえ埋めてしまえば、全てが終わる。その右手が触れる距離に近づきさえすれば、インデックスを救う事が出来るのだから。

恐怖はない。恐いはずがない。この程度の脅威で揺るぐほど弱い決意をした覚えはない。

逃げるつもりはない。逃げ出す道理もない。手を伸ばせば、ただそれだけで届くのだ。そんな時を上条当麻だつてずっと、ずっと待ち望んでいたのだから。

だから、上条は『亀裂』へ——その先にいるインデックスの元へと走った。

その右手を握り締めて。

こんな残酷な物語の、無限に続くつまらないつまらない結末を打ち消すために。

同時、ベギリ——と、亀裂が一気に広がり、『開いた』。

ニュアンスとしては、処女を無理矢理引き裂いたような痛々しさ。そして公園の端から端までを繋ぐかのような巨大な亀裂の奥から、『何か』が覗き込んで、

ゴッ！　と。亀裂の奥から光の柱が襲い掛かってきた。

それは例えるなら直径一メートルほどのレーザー兵器に近い。太陽を溶かしたかのような純白の光が襲い掛かってきた瞬間、上条は迷わずボロボロの右手を顔の前に突き出した。

じゅう、と熱した鉄板に肉を押し付けるような激突音。

だが、痛みはない。熱もない。まるで消火ホースでぶち撒かれる

水の柱を透明な壁で弾いているかのように、光の柱は上条の右手に激突した瞬間、四方八方へ飛び散っていく。

それでも、『光の柱』そのものを完全に消し去ることはできない。まるでステイルの魔女狩りの王のように、消しても消してもキリがない感じ。地面につけた両足がじりじりと後ろへと下がり、ともすれば重圧に右手が弾き飛ばされそうになる。

（違う……これは、そんなもんじゃ……ッ!?）

上条は思わず空いた左手で吹き飛ばされそうな右手の手首を掴む。右手の掌の皮膚がビリビリと痛みを発する。魔術が上条の右手に食い込んできている証だ。『右手』の処理能力が追い付かず、ジリジリとミリ単位で光の柱が上条の方へと近づいてきているのだ。

（単純な『物量』だけじゃねえ……ッ！ 光の一粒一粒の『質』がバラバラじゃねえか!!）

ひょっとすると、インデックスは10万3000冊の魔導書を使って、10万3000種類もの魔術を同時に使っているのかもしれない。1冊1冊が『必殺』の意味を持つ、その全てを使って。

「……ど、『竜王の殺息』って、そんな」

目の前で起きている伝説級の魔術に神裂の震えた呟きが漏れる。

「おい、光の柱<sup>コイツ</sup>が何だか知ってんのか!」

上条は振り返らずに叫ぶ。

「コイツの名前は？ 正体は!? 弱点は!? 俺はどうすればいい、一つ残らず全部まとめて片っ端から説明しやがれ!!」

「……けど、そんな……だって」

「じれってえ野郎だな、これでもまだ信じられねえってのかよ!」  
無理矢理に光りの柱を押さえ続ける右手の手首が、グキリと嫌な音を發した。

それでも、上条は諦めない。

「いい加減認めろよ! 現に今こうしてインデックスは魔術を使ってる。なら、教会の連中が嘘ぶっこいてたっつーなよりの証拠じゃねえか!」

バキン、と右手の人差し指の爪に亀裂が走り、真っ赤な鮮血が溢れてきた。

それでも、上条は諦めたくない。

「もう分かってんだろ！ 何が正しいのかなんて！ どうすりゃいいのかなんて！ とつくのとうにわかつちまってんだろ！！」

魔術師の声が、消えた。

上条は絶対に諦めない。その姿に、魔術師達は何を見たのか。

「なら認めて、とっとと目え覚ましやがれ魔術師！ テメエらはインデックスを助けたかったんだろうが！！」

手を伸ばせば届くのだと。それはもうすぐそこにあるのだと。

必死に訴える上条の右手の小指が、

グギリ、と妙な音を立てた。

不自然な方向に曲がって——折れた——と気付いた瞬間、恐ろしい勢いで襲い掛かる光の柱は、ついに上条の右手を弾き飛ばした。

上条の右手が、大きく後ろへと弾かれる。

完全に無防備となった上条の顔面に、凄まじい速度で光の柱が襲い掛かり、

「————Salvare000!!」

光りの柱がぶつかる直前、上条は神裂の叫び声を聞いた。

同時、神裂の持つ、二メートル近い長さの日本刀が大気を切り裂いた。7本の鋼糸ワイヤを用いる『七閃』が音を引き裂くような速度でインデックスの足元——彼女の立つ粗末なベンチをバラバラに切り刻むんだ。

ガクリ、と足場を失ったインデックスはそのまま後方へと倒れ込む。その彼女の眼球と連動していた魔法陣が動き、上条を狙ってい

たはずの光の柱が大きく狙いを外し、天高くへと向けられ宇宙の彼方へと真っ直ぐに伸びていく。

「それは『竜王の吐息』——伝説にある聖<sup>セント</sup>ジョージのドラゴンの一撃と同義です！ いかな力があるとはいえ、人の身でまともに取り合おうと考えるいでください！」

神裂の言葉を聞きながら『光の柱』の束縛から逃れた上条は、地面に倒れ込んだインデックスの元に走ろうとする。

だが、それよりも先にインデックスが首を巡らせた。

巨大な剣を振り回すように、青空を引き裂いていた『光の柱』が再び上条に向けて振り下ろされる。

“また、捕まる”！

「————魔女狩りの王！」  
イノケンティウス

と、身構える上条の前に炎が渦を巻いた。

人のカタチを取る巨大な火炎は、両手を広げ真正面から『光の柱』の盾となる。

まるで、罪から人を守る十字架の意味そのままに。

「行け、能力者！」

ステイルの叫びが聞こえた。

「身勝手な事をして僕達を無理矢理巻き込んだんだ！ ならその責任を果たせ！」

『自動書記』と化した今のインデックスの目的は侵入者の排除。  
ヨハネのペン

さらに言えば秘密を知りえた存在全ての消去にある。ならばもはやステイルたちもその脅威が向けられる存在だ。機械的に役目をこなす今の彼女に例外はない。  
インデックス

上条当麻が倒れれば、その次に狙われるのは紛れもなく彼らだ。

そして上条当麻だけが、この事態を解決に導く事が出来る。彼の持つ『あらゆる異能を打ち消す右手』だけが唯一全てを救いたる手段なのだ。

「できなかったら許さないからな！ 地獄の果てまでも追いかけて、その身を消し炭にしてやるから覚悟しろ！」

「ハッ！　ならそっちは感動にむせび泣いてもいいよう、ハンカチの用意でもしておけ、魔術師！」

憎まれ口を叩きながらも、上条は一切振り返らない。

そんな事をする前に、ぶつかり合う炎と光を迂回するようにインデックスの元へと、振り返る事無く走り寄った。

振り返る必要なんてない。その背にはステイルの、神裂の、氷室の、そして何より上条とインデックス自身の想いと希望を乗せている。その重みが、上条を前へ前へと押し出していく。一步一步突き進む力を与えている。

その全てを原動力として、ボロボロの体を強引に動かして、

上条は走る。

走る！！

「――警告、第六章第十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を変更、戦場の検索を開始……完了。現状、最も難易度の高い敵兵『上条当麻』の破壊を優先します」

ブン！！　と『光の柱』ごとインデックスは首を振り回す。

だが、同時に魔女狩りの王も上条の盾になるように動いた。光と炎は互いが互いを食い潰し合いながら、破壊と再生を繰り返し延々とぶつかり合う。

上条は無防備となったインデックスの元へと、一直線に走り寄る。

あと10メートル。

あと9メートル。

あと8メートル！

あと7メートル！！

「――警告、第二章第一節。炎の魔術の術式を逆算に成功しました。曲解した十字教の教義モチーフをルーンにより記述したものと判明。対十字教用の術式を組み込み中……第一式、第二式、第三式。命名、『神エリ・エリ・サバクタニよ、何故私を見捨てたのですか』完全発動まで十二秒」

『光の柱』の色が純白から血のように赤い真紅へと変化していく。その変化に比例するように魔女狩りの王の再生スピードがみるみ

る弱まっていき、『光の柱』へと押されていく。

インデックスまでの距離はまだ残り半分。

（間に合うのか……！？）

今の上条にいくら力が湧いていようと、その体はすでにズタボロ。万全の状態の一步が二歩も三歩にも伸びている。

弱気が上条の脳裏に過ぎる。心を挫こうと襲い掛かる。

（――だからどうした！！）

不安は一瞬で過ぎ去った。上条当麻の胸に宿った決意が、弱気を押し流し、心を一瞬で奮い立たせる。

立ち止まっている暇なんてない。そんな事にかまけている間にも、イノケンティウス魔女狩りの王は徐々にその力を失い、消えようとしているのだ。

だから上条は走る。ただひたすらに、一秒でも早く、全てを終わらせるため。

残り5メートル。

残り4メートル。

残り3メートル！

残り2メートル！！

「ダメです！ 間に合わない――ッ！」

神裂の悲痛な声が響く。

イノケンティウス盾として立ちふさがる魔女狩りの王が、今まさに風前の灯火となつて消えかけようとしている。

あと1メートル。あとほんの1メートルの距離が間に合わない。

「――まだあ！」

絶望に瀕する一同を鼓舞するかのような氷室が叫びが聞こえた。

右手を突きだし、『光の柱』へと向ける。

イノケンティウス途端、魔女狩りの王が僅かに息を吹き返した。

「何を――！？」

「逆算終了！ つつても、高々4万ちよつとだけど……、十分ですよ！！」

あらゆるベクトルに干渉し、その量を0にする氷室の『抑止力』。カウンターストップ



そこにベクトルがあるのであれば、例え『魔術』なんていう未知の力であっても、捉える事さえできれば『止める』事が出来る。

そのために戦闘開始からずっと氷室はただひたすらに『竜王の吐息<sup>レス</sup>』が発生させるベクトルの逆算を行っていたのだ。

ただし、インデックスの放つ『竜王の吐息<sup>ドラゴン・ブレス</sup>』は10万3000通りの量と質を誇る攻撃。その全てをこの短時間で逆算しきるには少しばかり時間が足りなかった。それでもおよそ4割を解析し、その力を僅かにでも止める事が出来たのなら、

「行きなさい！ 上条当麻！！」

これで稼げる時間はわずか数秒<sup>イノケンティウス</sup>。魔女狩りの王の構成そのものを焼き尽くす『神よ、何故私を見捨てたのですか』<sup>エリ・エリ・サバクタニ</sup>は、例え6割に落ちた出力でも確実にその身を削っていく。

けどその“数秒”が、この場、この瞬間では千金にも勝る価値を持つ。

「うおおおおおおお！！」

氷室の声を聞くまでもなく走り続けていた上条は、残りの1メートルを見事踏破し、その右手を大きく振り上げる。

その右手に宿るのは『幻想殺し』<sup>イマジネブレイカー</sup>。この世のあらゆる異能<sup>げんそく</sup>を打ち消す力。それが異能の力であるのなら神の奇跡だって打ち消す事のできる、対不条理用<sup>オカルト</sup>の最強兵器。

（この物語<sup>せかい</sup>が、神様の作った奇跡<sup>アンタ</sup>通りに動いているってんなら——）

上条は握った拳の五本の指を思いっきり開く。

まるで掌底でも浴びせるように、

（——まずは、その幻想をぶち殺す！！）

そして上条は右手を振り下ろした。

そこにある黒い亀裂、さらにその先にある亀裂を生み出す魔法陣。上条の右手が、それらをあっさりと引き裂いた。

本当、今まで何でこんなものに苦しめられていたのか笑いたくなるほどに。

あっさりと、水に濡れた金魚すくいの紙でも突き破るように。

「――警、こく。最終……章。第、零――……。『首輪、』致命的な、破壊……再生、不可……消」

ブツン、とインデックスの口から全ての声が消えた。

光りの柱も消え、魔法陣もなくなり、公園中に走った亀裂が消しゴムで消すように消えていく。

全てが、初めから何もなかったかのように綺麗サッパリ消え失せて、

「……終わった、のか」

「いいえ」

魔術師の呟きに氷室は小さく首を振る。

「始まったのよ。ようやく、ね」

力なく倒れる少女を抱き締める、満身創痍の少年の姿を見つめていた氷室は、そっと空を見上げた。

青く澄みきった空には、大きく切り裂かれた入道雲が一つ。

まるで今まさに開かれた扉のようなその雲の先に、氷室はまだ見ぬ未来の行く末を垣間見て思いを馳せる。

一つの物語が終わりを迎えた。

けどそれは新たな物語へと続くプロローグに過ぎない。

物語は続く。

ずっと、永遠に、その命ある限り。

だけど、今は――

「お疲れ様、<sup>ヒーロー</sup>上条君」

## 終章 とある終わりと始まりの声 《ギャラホルン》

「ねえ、とうま、聞いてるの!？」

ここは第七学区にあるとある病院。カエル顔の医師が務める上条にとってはおもう馴染みの病院だ。

あの戦いが終わり、無事にインデックスを教会の頸木のろいから解放する事が出来たわけだが、その代償は大きく、

ありていに言うと、入院期間がさらに伸びた。

言わずもがな。ただでさえ全身ボロボロだったのに、あれだけの無茶をすればさもありなん。特に右手は致命的で、指の骨はほとんど骨折もしくは罅が入っており、これでもかと言うほど頑丈にギブスが巻かれガチガチに固められている状態だ。

ぶっちゃけあのカエル顔の医師の説明によれば、一步間違ったら切断しないとダメだったかもね、とまで言われ、思わず背筋が震えた上条だった。

けど、それでも――

「とうま!」

「あー、はいはい。聞いてますよー、インデックスさん」

「おもいっきり、欠片も聞いている人の態度じゃないよね、それ!!」  
こう耳元である戦いの結末に対するお小言を元気に言い募る少女の姿を見ただけで、上条は救われたと実感する。これを手に入れるためならば、例え二度と右手が使えなくなっても、十分その価値はあったと思えるから。

「大体、いきなり人の口の手を突っ込むなんてどうかしていると思うの!」

「い、いやあー、上条さんの力は右手で触れないとどうしようもないんで、アレはああするしか……」

「それでも! ちよっとぐらい説明があってもいいと思うんだけど!」

「あ、あー、うん。それは何と言うか……時間が……」

無かったわけではない。魔術師達の動きは氷室が完璧に止めていてくれたから、きちんと説明するぐらいの時間は確かにあった。

とはいえ、一刻でも早く解放してやりたいと思ったのも事実で……

「それに！」

ぶすー、という擬音が聞こえてきそうなほど頬を膨らませたインデックスはギロリとベッドに横たわる上条を睨み付け、

「何で、あの時食べ物の事ばかり論ったのかな？」

海の家焼きそばとか、遊園地のチュロスとか。

「いや、それは、ですね……」

それ以外にもいろいろ言った覚えはある上条なのだが、比率的には9…1で食べ物だった気もしなくもない。いや、確実に食べ物ばかりだった。

「……とうま」

「な、なんでせうか、インデックスさん」

顔を俯かせ、低いトーンで上条の名を呼ぶインデックスの姿に、ダラダラと冷や汗を流す上条。

プルプルと震える少女の肩が、上条には何かを予兆しているような気がしてならない。

いや、間違いなく何かとてつもない嫌な予感がする。

「とうまには私がそんなに食いしん坊に見えるんだ」

ギクリ、と上条は体を強張らせた。

ぶっちゃけ図星だった。というか出会いからして、笑顔で行き倒れを主張され、食べ物を強請られるという状況から始まった関係だ。その後も処々に事欠かない食いしん坊ぶりを見てきた上条にとって、インデックスⅡ食いしん坊の図式はもはや公式として記憶されている。

が、しかしここで馬鹿正直にそんな事を言えば、結末は目に見えるている。

そしてチャンスはおそらく一回。その一回で、インデックスの機

嫌を直し、惨劇を回避するような名案を思い付かなければ上条当麻に後はない。

（考えろ、考えろ上条当麻！ おまえはこんな所で挫けるほどの半端な覚悟をしたわけじゃないだろ！）

正直、覚悟の方向性を全く以て間違えている気がしなくもないが、追い詰められた上条にはそんな事は関係ない。

だがしかし、目の前の修道女様は、そんな悩める仔羊かみじように慈悲の時間を与えてはくれず、

「……見えるんだ」

「あ、えーつと……」

時限爆弾爆発まで、残り5秒。

いよいよ追い詰められた上条のたった作戦は、

「あ！ そろそろ昼飯じゃね？」

その結果は……、言うまでもないだろう。

ギャー、という少年の小気味いい悲鳴を聞きながら、氷室皐月は病院の廊下でクスリと笑みをこぼした。

「全く、何をやってるんだか……」

「と、言いつつ、実は羨ましんでしょ？」

「フンッ……」

忌々しげな表情でそっぽを向いた赤髪の少年の姿に、氷室は再度噴き出して笑う。

「言っておくが、別に僕達は彼にアレあの子を譲るわけじゃない。情報を集め、然るべき装備を整えるまでの間、一時的に預けておくだけだ！」

「イギリス清教の下した判断は表向き、『首輪』の外れた彼女を大至急連れ戻すように、と事ですが、実際は様子見、といった所です。教会が用意した『自動書記』ヨハネのペンによるものとはいえ、あの子が10万3000冊の魔導書を用いて魔術を使ったのは事実。そして、自動ヨハネのペン

書記そのものが破壊された今、あの子は自分の意思で魔術を使えるかどうか……、仮に自動書記ヨハネのペンを失った事で『あの子の魔力が回復した』のであれば、我々も相応の態勢を整えなければなりませんから」

「要するに、触らぬ魔神かみに祟りなし、って事ね」

「そういう事です」

神裂の説明に、暴論と言えば暴論な結論を告げた氷室だったが、それはあながち間違いじゃない。

魔術師達にとって、10万3000冊を操る魔術師——即ち『魔神』という存在はそれだけ危険な存在なのだ。下手に触れてその矛先を向けられてはたまらない。今迄はそれを自らの手でコントロールできていたからこそ平然としていられたが、それが無くなった今、彼らの中には恐怖と畏怖の感情しか持ち合わせていない。

だからこそその様子見。触れず、干渉せず、下手を打たないよう細心の注意を払いつつ、それでいて再び頸木に繋ぐ機会を虎視眈々と狙っている、と言うのが彼らの心情と言った所だろう。

「だが、それもこれも準備が整うまでだ。整い次第、すぐにでもあの子を取り戻しに来るから、首をよく洗っておくよう伝えておけ！

……いくぞ、神裂」

怒鳴り散らすようにスタイルはそういうと、一分一秒すら無駄には出来ないとばかりに踵を返し病院から出ていく。

「ホント、素直じゃないわねえ……」

「全くだ。ですが、一応、アレでも感謝はしているんですよ、一応は……」

「一応を二度も付けなきゃいけないあたり、まだまだ子供14って事なのかしらね」

クスクスと笑う氷室に、神裂も思わず破顔した。

「……で、貴女は追いかけてなくてもいいの？」

「いえ、私もすぐにでも出発します。しかしその前に……」

神裂は氷室の方へと完全に向き直ると、背筋を伸ばし、

「礼を言います、氷室皐月。あなたのおかげであの子を救う事が出

来た」

「……それは上条君に言うべき台詞よ。私はただ状況を引っ掻き回したに過ぎないもの」

「ですが、あなたが居なければ彼も我々も、真実には到底たどり着けなかった」

そして再びしなくてもいい『思い出の消去』を行う事になった、と。

「それでも、よ」

「……そうですか」

なおも礼を拒絶する氷室の態度に神裂はあっさり身を引く。

「ですが、それでも我々が感謝をしている事実は変わりませんので」

「……頑固ねえ」

「あなた程ではありませんよ」

クスリと笑いあい、神裂は歩き出す。

そしてふと立ち止まると、

「一つ、聞いてもいいでしょうか？」

「……何？」

どこまでも真摯な目を向けられ、氷室はたじろぎながら問い返す。

「あなたはあの子と同じ地獄にいると言っていましたね」

「そうね。でもあの子はもう私のいる地獄とは別の場所にたどり着いたわ。もうこっちに来ることはおそらくないでしょうね」

その前に上条君が助けるだろうから、と。

もちろん、力及ばず引きずり込まれそうになる事はあるかもしれない。けど、その度に上条当麻が、ステイルⅡマグヌスが、神裂火織が、全力を賭してあの子をそこから奪い返すだろう。

だからもう二度と、インデックスが逃れられ<sup>むげんじごく</sup>ない運命に堕ちる事はない。

「そうですね」

神裂はその言葉に深く頷き、

「ですが、あなたはどのようなのです？」

まっすぐな目を向けて問いかけた。

「あなたには、あの少年のように全力で最後まで諦めずあなたを救ってくれようとする人が居るのですか？」

それは神裂にとって当然の問いだった。

なにせ、

「『救済』——それが貴女の魔法名でしたよね」

「ええ、そうです。『救われぬ者に救いの手を』。それが私が魔術を求めた理由です」

常人を超えた力をもつ『聖人』たる神裂が、その力を自らのためでなく、誰かのために使う事を望み、決意とともに刻んだ魔法名。

その彼女が、救われぬ者を前に救いの手を伸ばさない道理はない。

「……一つだけ、言っておきます」

「何を……？」

今度は神裂が氷室の問いに問い返す。

「私は『救われる』事を求めません」

「な、——ッ」

それは神裂にとっては衝撃の一言だった。

「私は誰かに『救われたい』とは絶対に思いません」

「な、何故です！ あなたは今いる地獄から、抜け出したいのではありません！？」

自殺を行うまでに追い詰められ、それでもなお逃げ出す事のできない、その無間地獄から。

「それでも、『救われたい』とは思いません」

キッパリと、神裂の差し出そうとしていた手を拒み、氷室は首を振る。

「神裂さん。もしそれでも私にその手を伸ばそうとするのであれば、『救う』事の本当の意味を理解してきてからにしてください」

「『救う』事の、本当の意味……」

「そうです。それが分からないうちは私はどんな救いの手も拒み続けます。私は『救われる』事を望んでなどいないから」



「……、」

明確な拒絶に、神裂はそれ以上何かを言う事は出来なかった。

「……わかりました。ですが、もし、何かあれば……」

「ええ。その時は力を“貸してもらおう”事もあるかもしれませんが  
またしても矛盾。目の前に立つ少女の言葉はいつだって『矛盾』  
に満ちた言葉ばかりが目立つ。だがその裏には、明確な意図が、隠  
された真実がある事を神裂は今回の件でよく理解していた。

（とすれば、きっと今の言葉の『矛盾』にも、何らかの意味がある  
はず）

それは神裂が抱える大きな問題に関わる、何か、だと直感し、そ  
こまでこの少女が見抜いているのかと思うと戦慄を覚えた。

ステイルは言った。彼女は化け物だと。彼女の本当の恐ろしさは  
その能力ではなく、先を見通し他者を躍らすその頭脳であると。

そしてそれは今回の一件で証明されたと言ってもいい。その見通  
す力が、今回の事件の真相を暴きだし、解決へと導いたのだから。  
けど、その力が化け物だとするのであれば、それはきっと――

（悪戯好きの精霊――妖怪つといった所でしょうか）

それ自体は善でも悪でもなく、対する者に応じて態度を変える気  
まぐれな化け物。正しく接すれば幸を齎し、そうでなければ荒ぶる  
神となって禍を齎す存在。逆に言えば、扱い方さえ間違わなければ  
決して敵には回らない相手だ。

「……いいでしょう。その時は必ず力になります」

「その前に、答えを見つけてからにしてくださいね？」

「わかっています」

ここでその答えを問いただしても彼女は絶対に答えないだろう。  
他人に与えられた答えに、意味はないと、彼女はあの少年にもそ  
う告げていた。

だからその『答え』は、神裂が自らの手で見つけ出さなければな  
らない『答え』だ。

もう一度、神裂は頭を下げ、その場を後にする。

その姿を見送った氷室は、ひとつ大きく伸びをし、

「不幸だあ——!？」

「今日も平和ねえ……」

病室から聞こえた平和な叫びいっしょどおりの声に呑気な感想を述べると、そんな彼に魔術師達からの伝言を伝えるべく、病室の扉を叩くのであった。

## 第01章 とある趣味と二次原作《スピニアウト》

7月18日。

待望の夏休みまで残すところあと2日といった今日。世の学生たちの心の内はすでに夏休みモードに半ば足をつっ込んでおり、氷室皐月もまたそんな有り触れた学生の一人としてその中にいた。

もったも、彼女の場合は夏休み初日から一週間は補習のためその身を縛られることになるのだが、それでも残りの日数は思う存分優雅な長期休暇を満喫する事が出来る、

(……はず、よね?)

タラリ、と冷や汗と共に嫌な予感を感じる氷室だが、その悪寒に違わず『原作』の頸木に囚われる事になるなど、この時の彼女は知る由もない。

それはさておき。

あと2日で夏休みである。

そして夏と言えば海。海と言えば水着。

“服集め”が趣味の氷室にとって、この定番商品を買わずに夏を迎えることなど出来ようはずもない。

そんなわけで夏休みを目前にした今日、氷室は『セブンスミスト』でこの夏を彩る水着選別に没頭していた。

セブンスミストは全国規模に展開する大手衣料品チェーン店だ。品質やデザインなどでは高級ブランド店には一歩も二歩も劣るものの、幅広い年齢層に対応した豊富な品揃えと、お財布にも優しい手頃なお値段が、ちょっとおしゃれはしたいけどお財布事情が厳しい学生達にとっては非常にありがたい、人気の店となっている。

特にここ学園都市にあるこの店はビル丸ごと一つを借り受けて営業しており、その品数はかなりの規模に及ぶ。無論種類も豊富で、学生寮の多い第七学区にあるのも人気を集める理由の一つだろう。

かくいう氷室も普段から良く利用する店の一つとして馴染みの店だ。

三日後に隣の第二二学区地下街にて行われる『夏休み突入記念サマーバーゲンセール』でも水着は物色するつもりではあるものの、バーゲンという戦場で悠長にデザインを検討し選んでいる余裕はないだろう。アレはまさに戦争なのだ。一分一秒の躊躇が、確実に戦況を傾け、完全なる勝利への道筋を閉ざす恐れがある。そのため、とりあえず目についた品物は確保し、必要とあらば糸目をつけずに購入するぐらいの気概でなければ敗北は免れない、恐るべき戦場なのである。

しかしだからといってデザインや質にこだわりを持たないのも問題である。そのため、確実な一品を手に入れるためにはこうして余裕のある時にじっくりと吟味して選ぶ事も重要なのだ。

今、氷室の目の前に置かれた水着は2点。

一つは白を基調としたビキニタイプだ。ホルターネックタイプのオーソドックスなデザインで、パステルブルーのラインが爽やかな印象を強調する。下半身にはラインと同じくパステルブルーのパレオが巻かれ、その生地には鮮やかな花の模様があしらわれているのもおしゃれでかわいい。全体的な印象としては清楚で愛らしいといった所か。

もう一方はそれに相反するかのようなセクシー系路線の黒ワンピースだ。ワンピースと言っても露出面積で言えば先のビキニと大差なかったりする。同じくホルターネックから胸元にかけて交差するように生地が伸び、そこから背中でもう一回クロスしてローレグのアンダーと繋がっているデザインだ。余計な装飾は一切なく、交差

したシルエットと単色の黒という色使いがこれでもかと言うほど着用者のスタイルを強調する攻撃的なデザインとなっている。スタイルにはそれなりの自信がある氷室が着れば世の男たちの目をくぎ付けにすること間違いないだろう。

これ以外にも候補はいくつかあったのだが、選別に選別を繰り返してようやくこの対極たる2点にまで絞り込んだところだ。

「うーん……、こっちは少し過激すぎる気もするんだけど、でも白ってイメージでもないのよねえ、私……」

「あ、あのおー、お客様？」

ブツブツと残り2つを天秤にかける氷室に、引き攣った笑みを浮かべる店員が声をかける。

「あ、あちらで御試着もできますが……」

「ちょっと待って。もう少し考えさせてちょうだい」

「そう言ってもうかれこれ30分以上もお悩みに……」

ちなみにそれ以前にも複数種類からの選別を行っているため、実際はそれ以上の時間を要している。これではさすがの店員も声をかけざるを得ないだろう。

「だから、もうちょっと。もうちょっと考えさせて。どっちが本当に私に似合うのか、今、その瀬戸際なんだから……」

「は、はあ……」

だったら着てみて決めればいいじゃん、と店員が小さく呟いた事にも気付かず、氷室は再びうんうん唸っては、両者を睨み付けるように見比べ続ける。

店員の意見も確かにもっともだ。実際着てみた方がどちらが似合うかなんてすぐにわかる。

しかし、それは氷室にしてみればそれは一種の“負け”なのだ。

氷室にとって『服』とはただ着ればいいというものではない。むしろ“着る”ことそのものには意味を見出してはおらず、“着せる

”という意味の方が強い。

一見どちらも同じことのように見えるが、そこにはある種男性が好きな女性を自分色に染めたいという欲求にほど近いものを発端としているという背景がある。

氷室にとって今の自分は『理想の女性』だ。女性として生きると決めた際にそのあるべき姿として描き、目指したのがソレなのだから、ある意味当然と言える。

そして今の自分が『理想』の姿である以上、理想は追求して然るべき存在だ。追及なき『理想』は単なる『憧れ』に過ぎない。どこまで行っても追いつけない、眺めるだけの存在だ。『理想』とは辿り着いてこそ意味がある。

そういう意味では氷室はある種『学者』タイプの人間だと言える。物事に対して理論的、客観的観点から考察し、その真髓を極めんとどこまでものめり込む性格。そのためには手段を問わず、時に残酷と呼べる手法すら厭わない。

その過去の経験から『科学者』という人種に対して強い嫌悪感を持つ氷室だが、同時に自らが同じタイプの人間であることに對する同族嫌悪もそこには若干含まれていた。しかしだからと言って、倫理や道徳、常識までも無視してまでしようとは絶対に思わない。たとえ法を犯す事になっても人として踏み越えてはいけない一線だけは何が何でも守りきる。もしそこを踏み越えてしまったのなら、それこそ自らが最も嫌う者達と同じ存在となってしまうから。

#### 閑話休題。

ともかく、理想の追求に妥協は許されない。

そして理想を追い求める『学者』には2つのタイプが存在する。

一つはとにかく何でも試してみ、その中から答えを導き出す『実践』タイプ。数多の実験の中で得られた『問い』に対し、再び実

験を繰り返して徐々にその真相を明らかにしていく“論より証拠”な行動派だ。これは時に思いもよらない世紀の発見を齎す事も多く、『天才』と呼ばれる偉人にはこのタイプの人間が多い傾向にある。

もう一つはそれとは逆に“証拠より論”な『理論』タイプだ。まず理論ありきで、それを突き詰め得られた『解』を最後に実験で確認する。この手のタイプは往々にして秀才型が多い。そして氷室もこちら側に属する人間だ。

とにかく慎重で、失敗を恐れ、用意周到に物事を進めていくことが出来るが、慎重すぎるがあまり時にその思考が空回りし、理論そのものも宙に浮く――即ち『机上の空論』を実践しかねないデメリットがある。

今の状況がまさにソレだ。

選択肢が限定されているのであれば、考えるより試した方が早い。特に二者択一の状況なら尚更だ。

しかし理論を重要視するあまり、それに囚われて他が見えなくなっている。頭の中で多角的に検討しすぎるあまり、思考がループしている事に気が付けず自分一人じゃ抜け出せなくなってしまうっているのだ。

無論、これが普通の洋服ならインナー、アウター、ボトム、それらの重ね着に小物の選択など複数種類を組み合わせて着るため、そこから導き出される『解答』コーディネートは無数に存在する。それを全部試していたら時間も手間もかかるし、店側も逆に迷惑だろう。しかもその店限定で組み合わせるのであればまだいいが、他の店やこれまで購入したものもそこに含めてコーディネートするとなるとその組み合わせはまさしく『無限』と呼べ、とてもじゃないが『実践』で最高の『解』を導き出すのは不可能と言える。

氷室がこの趣味を『ファッション』ではなく『服集め』と称するのは、これが理由だ。購入する服は『資料』に過ぎない。理想のコーディネート『最高の

解』を導き出すため、考察するため『資料集め』がその目的なのだ。決して“着る”ことが目的ではなく、『理想のコーディネート最高の解』を“着せる”ための準備段階。それが氷室皐月の趣味『服集め』の正体である。

しかし『水着』はそれ一品でコーディネートが完成する衣装だ。水着の重ね着と言うのはあまり聞かない。普通のファッションの一部として取り入れる事はあるものの、水着本来の用途として選ぶのであれば、求められる理想の解は常の一つだ。

そしてこの場における解の選択肢は残すところ2つに1つ。どちらがより『りそ正答』に近いのか、それを考える事小一時間。

「うーん」

店員の冷ややかな視線込みの営業スマイルに晒されながらも、平然と腕を組み悩み続ける氷室に、

「……氷室さん？」

ふと、声がかけられた。

振り返るとそこには、セーラー服に身を包んだ中学生と思しき少女の姿が。

「……初春？」

「はい！ お久しぶりですね」

「そうね……、二か月ぶりくらい？」

「えっと……、それくらいになりますかね」

頭にお花畑を咲かせた——と言っても比喩的な意味ではなく、文字通り大量の花があしらわれたちよつと奇抜な髪飾りをつけた——後輩、ジャッジメント初春飾利は少し考えてにへら、と笑みを浮かべた。

「まあ風紀委員の仕事は忙しそうだしねえ……というか、そのマスク。風邪？」

「ええ、ちよつと」

可愛い顔の半分を覆う（といっても、今は顎の下に退避している）真っ白なマスクを目にし、氷室は首を傾げる。

「休んでなくていいの？」



ピッタリとその額に手を当ててみると、若干高い熱を感じる。一応微熱の範疇に収まる程度ではあるものの、風邪というのはひき始めの対処が肝心なのだ。それを怠ると、すぐに症状は悪化してこじらせてしまう。

「そうしたいのは山々なんですけど、ここ最近、能力者がくせいの事件が増えてて……」

「そうなの？」

「ええ。虚空爆破事件とか、連続発火強盗とか……。あ、でも強盗の方はこの間、解決したんですけどね」

その事後処理とかいろいろ大変なんですよ、と初春は苦笑する。

「初春は事務方担当だしねえ」

「けど、私はそれぐらいしかできませんし……」

ぶっちゃけ、腕立て伏せ一回すら出来ない程に貧弱な初春だ。現場で活躍する事は不可能なため、必然的に前線ジャッジメントを支える後方担当となる。とはいえ、その方面においては風紀委員の中でも飛びぬけて優秀で、特に電子捜査とデータ解析には目を見張る腕を持つ。だからこそ、裏付け捜査やら細々とした書類整理なんかで事件後の方が忙しくなったりしているわけだが。

「でも、早めに病院には行きなさいよ？ 拗らせて倒れたら元も子もないんだし」

「分かってはいるんですけどね……」

そんな暇も……、と続けようとした初春の脇を、隣に立つ同じセーラー服の少女が小突いた事で中断せざるを得なかった。

「ちょ、ちょっと初春。この人、誰よ。知り合いなの？」

「あっ、すみません佐天さん。すっかり忘れてましたあ」

あはは、と苦笑いを返す初春を、佐天と呼ばれた少女は半眼で睨み付ける。

「忘れてたってね……」

「お友達？」

「はい。クラスメイトの佐天さんです」

「佐天涙子です！ 初春の親友やってまーす！」

「氷室皐月よ。よろしく」

笑顔で握手を求めると、少し戸惑いながらもしっかりとした手付きで握り返してきた。

（元気な子ね……、にしてもまたしても『原作キャラ』かあ……）

笑顔を絶やさぬまま、氷室は心の内で一人愚痴る。

原作と言っても、初春や佐天は『禁書目録』の方ではなく、そのスピニアウト作品『とある科学の超電磁砲』での登場人物だ。

『禁書目録』のヒロインの一人、学園都市第三位の超能力者『超電磁砲』御坂美琴を主人公とした漫画で、『禁書目録』が魔術側をメインとしているのに対し、こちらは科学側での事件を主とした物語だ。独立してアニメにまでなった作品でもあり、比較的男性キャラも多い『禁書目録』とは異なり、ほとんど女性のみのキャラクターで物語が進行していくそれは、世の大きなお友達の間で人気を博するのも当然だろう。

とはいえ、前世での氷室は残念ながら『超電磁砲』にはまるっきし手を出していなかった。

別に興味がなかったわけではない。ただ『彼』のテリトリーは主に文庫小説を基本としており、どこぞの大英図書館特殊工作員程ではないが生粋の活字中毒者でもあり、今でも必ず数冊は鞆の中に忍ばせ、暇さえあれば読みふけている。

ただ『彼』は会社員だったため一日の大半を仕事に取られ、夜は疲れてそのまま眠ってしまう事もしばしばあった。そのため一冊読み終わるのにも数日かかる事も多く、毎月出る大量の新刊を捌ききる前に次が出る、というサイクルを繰り返すうちに漫画やアニメ等は二の次となり、そのままズルズルと読む機会を逸してしまっていたのだ。

だから漫画とアニメだけで展開されていた『超電磁砲』に関してはこんなキャラクターが居るらしい程度の知識しか持っていない。

（今にしてみれば、ちゃんとそっちも読んでおくべきだった……）  
スピンアウトとはいえ、物語の展開は『禁書目録』とリンクしていたらしく、核心に至る内容もそこには載っていた可能性がある。  
氷室皐月を取り巻く問題を解決するためには、その核心が何よりも重要となるため、悔やんでも悔やみきれない事柄だ。

もちろん、後悔したところでもう遅い事は分かっている。それにキチンと読んでいたはずの『禁書目録』さえ、その知識が曖昧な現状、どこまで覚えていられたかは不確定だ。それにまさか『転生トリップ』なんてするなど思いもよらない事態なのだ。それを見越して読んでおくなどできるはずもない。

しかしそれでも読んでいれば、いや最低でもあらすじ程度でも覚えていれば多少は有利な展開に持ち込めたかも知れない。そう思うと、やはり失意を感じざるを得なくなる。

「氷室さん？」

「え、ああ。なんでもないわ」

唐突にため息を吐き出した事を不審に思ったのか、不安げな表情を浮かべる初春たちに苦笑を返してごまかす。

とりあえず知識がないのはどうしようもないとして、それならばこの繋がりから情報をその場で取得すればいいと考え直し、氷室はもう一度笑みを返した。

「で、お二人はどんな関係で？」

「普通の知り合いよ、ね？」

「え、えっと……私は、命の恩人、だと思ってるんですけど……」

「命の恩人？」

何やら物騒な表現に、佐天が声を上げる。

「別にそこまでのモンじゃないでしょ」

「そんな事ないですよ！ あの時、氷室さんに助けてもらわなかったら、私も白井さんも危なかったんですから……」

「高々、銀行強盗の隙を突いて伸した程度で、そこまで言わなくて

も……ねえ？」

「えっ、いや、そこで私に振られても……」

事情がよくわからないし、と慌てる佐天に、氷室はもう一度苦笑を浮かべる。

「っていうか、銀行強盗倒しちゃったんですか!？」

「そうなんですっ!」

佐天の驚きに、触発されたかのように初春が目を輝かせて当時を振り返る。

「私がまだ正式な風紀委員になる前の話なんですけど、たまたま立ち寄った銀行でATM強盗が起きて!」

「まあ、当時はまだ若かった白井さんが暴走して犯人の一人を取り押さえたのはいんだけどねえ」

隠れて潜んでいたもう一人の仲間が、その隙に初春を人質にとつてしまったのだ。

「人質って! 初春、大丈夫だったの!？」

「はい! その時、氷室さんが颯爽と現れて、あっという間にその犯人を取り押さえてくれたんです!」

「へえ」

キラキラとまるでヒーローに出会った話をする子供みたいに興奮した表情で語る初春とは逆に、氷室の表情は段々と引き曇っていく。  
「たまたまよ、たまたま。向こうが人質を取った事で油断してたから隙を突けただけで、じゃなきゃ無能力者の私がそんな大それたこと出来るわけないでしょう?」

「そんなことないです! 能力者だって普通はみんな怖がって何もできなかったはずですよ!」

「って、無能力者なんですかつ!？」

「ええ。書庫に登録されている強度は無能力よ」

あくまで公式上は、と暗に告げているのだが、これだけで本当は超能力にも匹敵する力を持っているなど思いもよらないだろう。

現に佐天は額面通りに解釈し、目を見開いた。

「うわあ、それで銀行強盗倒しちゃったんですかあ!？ あたしには絶対無理だわ」

「そんなことないわよ。いざとなったら佐天さんにだって出来るって」

「いえいえ、絶対に無理です！ あたしにそんな大それたことなんて……」

「大それたことなんかじゃないわ。要はそれをするだけの“意義”をそこに見出せるか否かよ」

「意義……」

「そう。理由、でもいいわ。大切な誰かを、譲れない何かが目前で傷つけられそうになっている……、例えばそれが初春だったとして、そんな状況を目の前にしたら佐天さんは本当に黙ってみていられる？」

「それは……」

自信はない。助けたという思いはあるが、自分が本当に彼女を助けられるかどうかの自信はない。けど、黙って見過ごしていられる自信もまたない、といった様子で佐天は視線を彷徨わせる。

「今は分からなくてもいいわ。でも、その時になればきっと自然に体は動く。そこに力のあるなしは関係ない。そうするべきだと、心が強く振れば、それだけで体は勝手に行動するはずだから」

「氷室さんも、そうだったんですか？」

「ま、あの時はある程度勝算があった上での話だったけどね。でなきゃ単なる無謀でしかないし」

「あはは……、そ、そうですよねえ」

絵に書いたような一般人に過ぎない佐天には、その勝算を見出す時点でありえない、と苦笑いを浮かべた。

「それより、氷室さんもお買い物ですか？」

「ええ、水着をね……」

チラリと氷室が目を向けると、自然と残る二人の視線も商品ハンガーの上に乗せられた二着の水着へと注がれる事となる。

「もしかしてその2つで悩んでるのか？」

「まあ、ね……」

「珍しいですね、氷室さんがこの手のもので悩むなんて」

「そうでもないわよ？ 特に水着はごまかしがきかない代物だからね」

「うへえ、こりやまた対極的なデザインで」

「だからこそ、悩んでるのよ……」

再び腕を組み、「うーん」と唸りだした氷室の後ろで初春と佐天が目を合わせる。

「やっぱりこっちの白いビキニの方がいいんじゃないですか？ そっちは、その……ちよっと大胆すぎるっていうか……」

「えー、氷室さんってスタイルが良さそうだから、むしろこれぐらい大胆な方が似合うんじゃない？」

「で、でも、肌も白くて綺麗だから、こっち方が清楚なイメージでお嬢様っぽいというか……」

「色白だからこそ、黒が映えるんじゃない」

初春が白ビキニを、佐天が黒ワンピースをそれぞれ手に取りながら意見を出し合う。

と、そこへ

「あ、いたいた。二人ともまだ水着見てたんだ」

サマーセーターを着た制服姿の中学生が二人の姿を見つけ近づいてくる。

初春たちとは異なるその制服は学園都市でも五指に入る超エリート女子校『常盤台中学』のものだ。

「……って、誰？」

ふと二人と一緒にいる女性を目にし、常盤台の制服を着た女子中学生は首を傾げる。

「あ、御坂さん！ この人はですね……」

「『超電磁砲』……」

初春が紹介するよりも早く、氷室がぼそりと声を漏らした。

「へえ、私の事知ってんだ」

「当然でしょ。学園都市に7人しかない超能力者<sup>レベル5</sup>。その第三位。常盤台の電撃姫こと『超電磁砲<sup>レールガン</sup>』御坂美琴」

「ま、有名すぎるのも考え物よね」

超能力者はこの学園都市に暮らす学生達すべての憧れの的だ。たった7人しかない頂点に立つ人物であり、その第三位ともなれば名と顔が知れているのも当然だ。特に御坂の場合、常盤台というブランドも背負っているためとにかく目立つ。それゆえ、彼女自身が知らずとも相手が自分の事を一方的に知っているなんて事はよくある話だ。

「で、そういうアンタは？」

「え、えっと。この方は氷室皐月さんと言って……」

「初春の命の恩人らしいですよ？」

「命の恩人？」

「だから、そこまで大したものじゃ……」

「それより御坂さん！」

「な、なに……!？」

謙遜する氷室を無視して、佐天が手に持った水着を抱えながら御坂へとにじり寄る。

「この水着と、初春の持ってる水着、どっちが氷室さんに似合うと思います？」

「へ……?」

一瞬何を言われたのか理解できなかった御坂だが、初春の持つ白いビキニと佐天の掲げる黒いビキニとを見比べ、ようやく話の内容を悟った。

どちらも彼女らが着るには少々サイズが大きすぎる。特に黒い方はちよつと……、なんだ、いろいろアレな部分が決定的に足りない感が……。

そう思い、ふと御坂はそれを着る当人の姿を眺め見る。

歳の頃はおそらく高校生だろう、自分より2つ3つ上にも関わら

ず雰囲気はかなり大人びているため、印象としてはさらに上——大  
学生ぐらいにも見て取れる。身長も女性にしては高めで、長い黒髪  
は艶やかな光沢を放ち、少し動くだけでサラサラと解れ、肌は嫉妬  
するほど白くきめ細かい。無論、顔だちも良く、何よりスタイルが  
服の上からでも十分読み取れるほどいい。とりわけ胸元のあたりが  
……。

「……、」

ふと自分の胸元へと視線を落とし、落胆した。と同時に言い知れ  
ぬ怒りが沸々と湧いてくる。

もちろん、それをぶつけるのはただの八つ当たりに過ぎないのは  
分かっている。だが同じ女性としてその差を明確に突きつけられる  
のは、かなり悔しい。

そして目の前に提示された二着の水着はいずれもそんな『女性の  
象徴』をこれでもかと主張するようなデザインであり、主張の乏し  
い御坂には絶対に着る事のできない代物だ。

（くっ……、落ち着きなさい、御坂美琴。別に私に対して喧嘩売っ  
てるわけじゃないんだから）

そう選択としては、非常に遺憾ながら間違っていないと思う。ど  
ちらを選んでも目の前の女性には良く似合う水着だろう。方向性が  
180度異なるだけで、どちらを選んでもかなりの高評価を得られ  
る選択肢だ。

「あ、フーキイインのおねえちゃんだ！」

「アラ、あなたは昨日の……」

ふと幼い声が響いたかと思うと、その声に違わぬ幼稚園児と思し  
き少女が初春へと無邪気に抱きついた。

「……知り合い？」

「はい。昨日この子が失くしたバッグを一緒に探してて……」

「ああ、なるほど」

ジャッジメント  
風紀委員の活動は能力者犯罪を取り締まるだけではない。むしろ



そちらは本来警備員アンチスキルの役目であり、風紀委員の仕事は校内の治安維持が基本だ。各学校内におけるトラブルを解決し、また未然に防ぐことこそが、彼らの本業である。

しかし学園都市はその約8割が学生によって構築されており、大人は残りの2割ほどしかない。しかも警備員アンチスキルはそんな大人の中でも『教師』という役職に就く者の中の、さらに有志として名乗りを上げた者達によって構成されており、事件の量に対し圧倒的に手が足りていないのが現状だ。

そのため校外であっても危険度の少ない案件や、軽犯罪などに対して風紀委員ジャツジメントが“協力する”という形で携わる事もあり、それらの中にはちよつとした道案内や交通整理、迷子や遺失物の搜索なども仕事として含まれているわけだ。

無論、中には傷害などの事件に発展する例もあり、成行きで風紀委員ジャツジメントがそれらに携わる事もある。特に能力を用いた捜査などでは、警備員から直々に協力を要請される事も少なくない。

だが『子供を危険にさらす訳にはいかない』『危険を蹴散らすだけの力を子供に持たせない』などの大人の事情から、基本的に積極的な介入はあまりいい顔をされないのも確かだ。

ともかく、風紀委員ジャツジメントとは学園都市の様々な問題に携わる『何でも屋』的な存在だったりするわけだ。

「ねえ、そのみずぎ。おねえちゃんがきるの？」

初春に抱き着いていた幼女の目が、その手に持たれた白ビキニへと注がれる。

「ああ、これは私じゃなくて、あっちのお姉ちゃんのだよ」

「へえ」

初春の言葉に幼女の視線が氷室へと注がれる。

と、そこに佐天が徐に割り込み、

「ねえ、お嬢ちゃん。こっちの水着とそっちの水着、どっちがあの

お姉ちゃんに似合うと思う？」

自分の持っていた黒ワンピースを示しながら少女へと問いかけた。

「ちょ、佐天さん！ 何もこんな子に聞かなくても……！？」

「えー、いいじゃん。幼くたってどっちがいいかぐらいわかるもんねー？」

「うん！ オシャレなひとはここにくるってテレビでいってたの。だからわたしもここでオシャレするんだもん！」

どうどうと胸を張って主張する少女の微笑ましい姿に、佐天はニコニコと笑みを返しながら「そうなんだー」と頭を撫でてやる。

「で、オシャレなお嬢ちゃん的にはどっちがいいとおもう？」

「うーん、と……」

二度目の問いかけに少女はコクリと首を傾げると、一度氷室の方を向き、それから2つの水着を見比べ、

「……こっち！」

ビシリ、と指さしたのは、

「「ええーっ！！」」

「おおっ！ 小っちゃいのにわかってるねえ」

佐天の方へと向いた指先に、初春と御坂の悲鳴が上がり、佐天の感心したような声かけられる。

「な、なんでですか！？」

「だっておねえちゃん、せくしーでだいなまいとぼでいだもん」

「だ、ダイナマイト……」

いつの死語だと思いつつも、少女からの思わぬ発言に氷室の頬が引き攣る。

一方、少女の発言に同じく度肝を抜かれた初春と御坂は、もう一度氷室の肢体を観察し、それから自らの身体を見下ろし……

（た、確かに……）

改めて我彼の戦力差を実感し、ガックリと肩を落とした。

「で、御坂さんはどっちだと？」

「わ、私は……」

御坂はもう一度双方を見比べ、

「……こっちの白い方かなあ。さすがに黒いのは、ねえ」

「そ、そうですよね！ 大胆過ぎますよね！」

仲間を得たとばかりに意気投合する初春と御坂の姿に、苦笑を浮かべながら佐天は氷室へと向き直る。

「だ、そうですよ？」

「……じゃあ、こっちな」

そう言って氷室は迷わず佐天の手から黒いワンピース水着を手にとった。

「「ええっ!？」」

そのあまりの即決ぶりに再度ビキニ派の二人から声上がる。

「ちょ、なんでソッチなのよ！」

「そ、そうですよ。状況的には2対2ですよ！」

しかもうち一票は年端もいかない幼女の意見だ。

「と、言われてもね……」

苦笑とも呆れとも取れる表情を浮かべ、氷室は小さく嘆息する。

「そっちの意見には私情が多分に混じってたし……」

「「うっ……」」

「こっちの二人の意見は純粹に私だけを基準にしたものだもの」

「「あう……」」

自分には似合わない、一緒にいられると恥ずかしい、そう言った“私情”がビキニ派にはあった。

だがあくまで着るのは氷室であり、議題の論点はそんな彼女に似合うのはどちらか、だ。個人的な“私情”の入ったビキニ派の二票は残念ながらこの場では無効票とするしかない。となれば2対0で黒ワンピの圧勝となる。

二人もその自覚はあるのか、肩を落とし小さく縮こまってしまふ。一方勝利した佐天・幼女組は視線を合わせあってハイタッチで喜びを分かち合っていた。

「ま、そんなわけで……」

対極的な双方の姿に苦笑しつつ、氷室は初春の手からも水着を取り上げると、

「すみませーん。この二つくださーい！」

ズルツ、とその場にいた全員（店員含めて）がずっこけた。

「って、アンタ両方とも買うんかい！」

「じゃあ、なんで悩んでたんですか!？」

「いや、どっちがより似合うのかなあって……優劣はつけておくべきでしょ?」

「買ってから付けなさいよっ!！」

ごもつとも。

その場にいた全員の気持ちが1つとなった記念すべき瞬間だった。

## 第02章 とある予兆の虚空爆破《グラビトン》

氷室皐月は今、セブンスミストの店内階段を全速力で駆け上がっていた。

いや、厳密に言えば“駆けている”と言うよりも“飛んでいる”、もしくは“跳ねている”と称した方が正解か。

階段の踊り場の壁を蹴って一階上の踊り場まで一直線に滑空していくその姿は、作り話であるはずなのに何故か外人のみならず生粋の日本人までそれが“真実”だと信じてやまない忍者——否、『INJA』の如き光景だった。

無論、それを可能としているのは彼女が隠し持つ『抑止力』という超能力によるもの（重力ベクトルを0にし擬似的な無重力状態を生み出し、切り返しの際に慣性ベクトルを0にして壁を蹴った力を100%推進力に変換している）だが、ぶっちゃけ大手洋服量販店などという公共の場でそれをやっちゃ全然隠せてないじゃん、とツツコミ必死の状況だ。が、幸いにもエスカレーターやエレベーター完備されたビル内で好き好んで階段を使おうという健康志向旺盛な人物は一人もおらず、その姿が誰かの目に止まる事は一切なかった。それに彼女がバレル事を覚悟で能力を使ってまで急いでいるのは訳がある。

「爆弾——ッ!？」

水着他、数点の買い物を済ませ初春達のもとに戻ってきた氷室が、神妙な面持ちを浮かべる一同に首を傾げ、その理由を聞いただしてみた所、返ってきた答えがソレだった。

「そうなんですっ!　ここ最近立て続けに起きている連続爆破事件、通称『虚空爆破事件』の兆候が——重力子の加速がこの店で観測されたらしくて……!？」

「つて事は、犯人は能力者か……」

それも重力子の加速という現象から推測するに量子操作系の能力者だ。

それによる爆破現象として考えられるのは何らかの物体——たぶん金属物——を起点とし、そこへ重力子の加速を行うことで異常な程大きな重力場を生み出し、それにより物体の構成バランスが崩壊、核となった物体の縮退圧が減少し『爆縮』を引き起こした後に起こる爆発的衝撃波の放出——即ち“超新星爆発”にも似た現象を引き越しているのだろう。

「はい！　なので、すみませんが避難誘導に協力を——」

「わかったわ」

その場にいた全員が神妙な面持ちを浮かべ、力強く頷く。

「それじゃあ——」

「初春は店の人に話をつけて店内放送を！　理由は適当にでっちあげて無意味な混乱は避けるようにして」

「は、はい、分かりました！　すぐにお願ひしてきます！」

「佐天さんは出口で避難してきた人の誘導と整理を！　ドミノ倒しなんていう二次被害が起きないように、迅速かつ冷静な退去を呼びかけて」

「了解ですっ！」

「私は上から回る。御坂さんは下の方をお願い。逃げ遅れた人がいないかの確認を」

「——って、なんでアンタが仕切ってんのよ！」

口火を切ろうとしたところを氷室に奪われた御坂が額の先に僅かな放電の火花を散らしながら氷室に食って掛かる。

だが対する氷室はそれを一切取り合うことなく、

「誰がやろうと同じよ。下らない事を言う前に動く！　被害が出てからじゃ遅いのよ！」

「くっ……」

氷室の鋭い指摘に御坂が小さく呻くも、正論であるがゆえに「言

われなくてもわかってるわよ！」と負け惜しみ染みた声を挙げてその場から駆け出した。

そんな彼女の後姿を確認し、手に持った荷物を壁際に放り投げ氷室も踵を返して走り出す。

そして話は冒頭へと戻る。

（とりあえずこれで最低限の安全は確保できたはず……）

この場合の最低限とは、氷室の顔見知り限定した話だ。

言うまでもなく外への出入り口は全て一階に存在するため、上層階の方が逃げ遅れる危険性が高い。ましてやどこに爆弾があり、どれだけの規模の爆破が引き起こされるかも不明とあれば、やはり上に行くにしたがって危険度は跳ね上がる事となる。

そのため一番弱い佐天を入り口に配し、初春は店員との連携と応援に駆け付ける風紀委員や警備員との連絡係を、超能力者であり多少の危険ならば独力で回避可能な御坂を下層から見回りさせることで、出来る限り彼女らを一階近くに集中させるのが氷室の狙いだっ

た。

無論、その分の危険を氷室一人が背負い込むことになるが、それについてはなんら問題ではない。

彼女にはいついかなる時も、例え世界中の爆発物が間近で全部爆発しても傷一つ負う事なく完全に防ぎきる事のできる絶対防御『反応停止』が存在する。故に万が一は絶対に起きえない。ならば氷室がその役目を担うのは当然の事だ。

それにあの中で肉体的にも精神的にも最も年上なのは氷室であり、社会的に見れば義務教育中で子供に分類される彼女らを守るのは大人である彼女の責務でもある。

とはいえ、御坂が食って掛かってきたには、多少焦った。威圧と正論で即座に封殺できたからいいものの、手間取れば面倒なことに

なっていただろう。

もっとも御坂の言い分も理解できないわけではない。

彼女は超能力者<sup>レベル5</sup>だ。学園都市に7人しかいない最も強力な能力者であり、その力は一軍に匹敵するとも言われている。

そんな彼女が危険の高い場所に自ら率先して赴こうとするのは、自らの力に絶対的な自信があるのに加え、その力を持つが故の責任を無意識の内に抱いているからだろう。

だからと言って、一皮むけばただの女子中学生に過ぎない彼女を危地に放り出すことなど出来るはずもない。

氷室皐月は『抑止力<sup>カウンターストップ</sup>』だ。理不尽に対する理不尽。その名を冠す以上、危地に赴くのは彼女の役目である。

それに能力強度<sup>レベル</sup>で言うならば氷室とて同じ――、いや、“それ以上”だ。なら、彼女より自分の方が危険度の高い場所を担当するのは当然の事だった。

最上階まで“跳ね上がり”、フロア全体を見渡す。

おりよく初春が店側に話をつけ終わったのか、氷室が到着するのとはほぼ同時に店内放送が流れ、一時茫然としていた客が一斉に逃げ出そうと一階へと繋がる階段やエスカレーターに群がりはじめた。

そんな彼らを声を張り上げながら誘導しつつ、氷室は能力の『眼』をフロア全体へと向けた。

探しているのは『爆弾』だ。

重力子の加速が観測されたのであれば、そのベクトルを捉える事で『爆弾』の場所を特定できる。あわよくばそのまま加速を“止め”て、爆発を未然に防ごうという魂胆だ。

だがそこには一つ大きな問題がある。



氷室の能力『抑止力』は基本的に一点に対し作用する能力だ。当然その観測能力も点を対象に行われる。

そのため大きさを持つ物体を一つと見做して能力を発動する事は出来るが、不特定多数の物体が散乱している中から特定のベクトルを持つものを見つけ出すのは至難の業だ。

波形や流れが存在するのであればそれを起点に逆算する事も可能であるが、そもそも重力波の振幅は非常に小さく観測そのものが難しい。

複数の点を同時観測してそれらに存在する全てのベクトルを観測する事も出来るが、その数が多ければ多いほど脳への負担は加速度的に増していくため、これだけの広さを誇る店内全てを同時観測するのは不可能だ。

もしくはいくつかのブロックに小分けして観測を行うことも出来るが、全てを観測し終わるのに一体どれほどの時間がかかるのかと考えるとこの方法もあまり現実的とは言えない。

そのため、あわよくばと言うレベルで『爆弾』の探索をしている程度だ。

まず優先すべきはお客や店員、初春達も含めた人員全ての避難である。

爆弾を見つけ起爆を防げれば被害は確かに0とすることが出来るが、見つからなければ高い確率で被害が発生する。最悪、死亡者が出る可能性も高い。

だが全ての人間を安全圏まで避難させてしまえば、万が一爆発が起きたとしても器物の破損程度で損害は抑える事が出来る。

店にとってそれはかなりの痛手にはなるだろうが、取り戻せない損害ではない。だが命だけは、神の奇跡でも起きない限り取り戻す事のできない唯一無二のものだ。

ならば0にするのではなく、可能な限りの最小限に抑える事を優先して行動を起こすべきだ。

常に最善を狙う必要はない。“極端”は無意味な被害を齎すだけだと、氷室は誰よりも知っている。

自らの持つ能力がその極致にあるからこそ、その重要性を誰よりも理解していた。

だからこそ、その“極端”の犠牲を生み出さないよう最善ちよくせつではなく次善まわりみちでその力を使う術を日々構築しているのだ。

次善を以て、最小限の被害と最大限の利益を模索する。

それが氷室皐月の目指す『善』の在り方。

そのために『悪』が必要ならば、躊躇うことなくその引き金を引く。

それもまた氷室皐月の『善性』である。

——とにもかくにも閑話休題。

「ここまででは問題なし……」

最上階の避難誘導を終え、渋る店員を無理矢理先に逃がし、一階を隈なく駆け回りながら逃げ遅れた人と『爆弾』の在り処を探していた氷室は、その何れも発見することなく元の階まで降りていた。

それが幸運なのか不幸なのかはさておき、時間的に見てもそろそろ限界だろうとあたりを踏む。

氷室自身としては限界を超えたとしても居残る気はあるが、それでは初春達にいらぬ心配をかけてしまう。それは氷室の歓迎するところでは決してない。

ここは一旦御坂と合流して、一度退避するべきかと思考が至ったところで、

「……？」

氷室の視界の端——階段脇の物陰になにやら人影を見た気がした。

躊躇うことなく近づく、案の定一人の男子学生がそこに居た。

「ちよっと、その君！」

氷室が声をかけるとビクリと男は肩を震わせ、こちらへと振り向く。

その態度を一瞬不審に思った氷室だったが、状況が状況だ。突然の事態に動揺して、ついそんな態度を取ってしまう事もあるだろう、と判断し避難勧告を続けることにした。

「ここは危ないから外に――」

「逃げて下さい！！」

唐突に浴びせられた叫び声に、氷室がそちらを振り向く。

その視線の先には、先ほどの少女を何かから守るように抱きかかえ蹲る初春の姿があった。

その背の向こうには不自然にひしゃげ潰れていくぬいぐるみ。

（あれが『爆弾』――！？）

即座に『眼』を向けると、確かに重力子の加速が見られる。

いや、もはやそれは臨界点まで達し、爆縮が起きる段階にまで至っている。

細かい調整をしている余裕はない。そう判断し、速度重視で重力子のみを止める『剪定停止』を放棄し、全てのベクトルをまとめて全部停止させる『完全停止』を決断。

（間に合え――！！）

カウンターストップ

気合と共に放たれた『抑止力』は即座にその効果を示した。

店内に冷気を纏った暴風が吹き荒れる。絶対零度の『停止』によって生じた極端な温度差が齎す空気の乱流だ。

それは爆発寸前だった『爆弾』を中心に全てを巻き込んで凍結させる。

そして数秒後――、

「……………あ、あれ？」

何故か初春達を背に庇い爆弾の方向へ右手を差し出す格好で立ち尽くすツンツンヘアアの男子学生が、呆けた声をあげた。

「ってか、さぶっ!？」

周囲を見渡せば壁や床が凍結し一面に霜が降りてはいるものの、人的被害はゼロ。一番近くにいたはずの初春にも大した被害はなく、せいぜい多少髪が乱れ、トレードマークの花飾りが少し散った程度だ。もちろん彼女が身を挺して守っていた幼女も無事だ。

「はあ……」

その結果に氷室はホッと一安心する。

『爆弾』の停止と同時進行で、初春達の周囲の気体へと干渉し、冷気の嵐からその身を守る防壁を築いたのだ。

ただ咄嗟の事だったため、きちんと機能しているか不安ではあったが、何とかギリギリ間に合ったようだ。

周囲の被害も『爆弾』が爆破したのに比べれば、圧倒的に少ない被害で留まっている。低下した気温は空調によって程なく元へと戻るだろうし、霜の降りた壁や床面は溶けた後に拭き取れば何の問題もないはずだ。暴風により衣類が散乱し、いくつかは売り物にならなくなっているものの、その程度は大した損にはならないだろう。

それよりも気になるのは、

「……なんでここに上条君が居るのよ」

さすがに彼の登場は予想外だったため、さすがの氷室も彼の事は守り切れてはいない。

天下御免の理不<sup>チート</sup>尽能力『幻想殺し<sup>イマジンプレイカー</sup>』も副次的な効果までは防げないため、一気に低下した気温に半袖のワイシャツを手繰り寄せながら身を抱いて震えている。

が、別にそれで死ぬわけでもなし、彼にとってはいつも通りの『不幸』に過ぎないだろう。

そんな不幸の代名詞たる少年をあっさりと見捨てて、氷室はくる

りと振り返る。

理不尽に慣れ親しんだ人間（本人が聞けば「そんなモンに慣れたくも親しみたくもありませんっ!」と声高に主張するだろうが、それは天地がひっくり返っても無理）よりも、そんな不幸に一生お目に掛らず過ごせていたはずの一般人への対応が優先されるべきだ。

「もう大丈夫みたいですから、」

ニツコリと笑みを浮かべ優しく安心するよう声をかけた瞬間、

「――っ!？」

「……って、ちょっと!」

弾かれたように男子学生はがその場から駆け出した。

そのあまりに突然な行動に、不意を打たれた氷室はしばし呆然とその場に佇んでいたが、

「……………チッ、そういうことかッ!」

舌打ちと共にすぐさまその後を追いかけるため、自らも駆け出した。

あの『爆弾』は能力によるものだ。ならば当然、どこかで犯人がその能力を使用していなければおかしい。

だが超能力というのは基本的に目に見える範囲に対して作用する。中には死角や目視できない場所へと干渉する事のできる能力者（氷室もその一人）もいるが、それはごく稀な存在であり、普通はまず対象となる存在を正しく認識し、その存在を自らの演算領域に組み込まなければ能力というものは発動しない。

氷室とて地球の裏側もしくは宇宙の果てにでも理論上は干渉可能ではあるが、そこに何かがあるのかを知らなければそもそも能力の発動のしようがない。

だとすれば常識的に考えて、『爆弾魔』<sup>はんにん</sup>が爆弾の近くに潜んでいるのは明白だ。

そして事件後、声をかけられただけで突如走り出した人間が不自然でないはずがない。

(アイツが犯人か！)

気付けなかった事への反省は後回し。意外とすばしっこい少年の背を捉え、裏口から店外へと出ていく。

「待ちなさい！」

一瞬、能力を使って無理矢理止めようかとも思ったが、この先の地理を思い出し中止した。

むしろこの状況で能力を使えば、その能力者が自分だと言っているようなものだ。

先ほどの一件は緊急事態だとして目を瞑るとしても、出来ればバレルようなことはしたくないのが氷室の本心である。

裏路地を駆け抜け、追い立てるように角を曲がり、その最奥まで追い詰めた。

「悪いけど、その先は通行止めよ」

というか、ただの行き止まりなだけだが。いずれにせよ『通れない』という意味では同じだ。

「さあて、これで逃げられないわよ」

「に、逃げるだなんて、そんな……。僕はただ……」

「ただ？」

「ひっ——！！」

ニツコリと笑みを浮かべる氷室が愛らしく首を傾げるが、その目はまったく笑っていない。

「ただ……、なに？」

「お、追いかけられたら、普通逃げると思うんだけど……」

「そうかしら？　むしろ先に逃げ出したのはそっちじゃなかったっけ？」

「そ、そう、だった、かな……」

「かな、じゃなくて、そうよ」

一歩一歩ゆっくりと近づく氷室に、少年は背後に手をまわしながらジリジリと後ずさる。

「言い逃れは無用よ。観念なさい、爆弾魔<sup>ボマー</sup>」

そう言って最後の一步を詰めようとし、

「くっ……！」

後ろに回されていた少年の手が、“何か”を握った状態で突き出された。

だが、それが何であるかを確認するよりも早く、氷室の足がその手を蹴り上げる。

少年の手からその“何か”が離され宙を舞うのを視界の端に認めながら、氷室はさらに少年の腹に向け前蹴りを喰らわせ突き飛ばす。  
「がっ……………!？」

背中に襲い掛かる強烈な痛みに、少年が苦悶の声を上げる。

その様子を眺めながら、氷室は宙を舞って落ちてきた“何か”をキャッチした。

それは銀色の輝くアルミ製のスプーン。

「ふーん……。こんなもので、何をしようとしていたのかしら？  
それに……」

つい、と地面に目を向ければ、少年が所持していたバックの中身が散乱し、そこから大量のアルミスプーンと黒い手袋が零れ落ちているのが目につく。

「随分と大量に持ってるのね……」

「そ、それは、能力の訓練にと思って……」

「へえ……、じゃ、あの手袋は？　こんな真夏に手袋なんて、どうして持っているのかしら？」

「そ、それは……」

往生際悪く言い訳を募ろうとするも、うまい言い訳が出てこない少年はジリジリと背後の壁へと背を押し付けていく。

「……くどい」

冷たく言い放った言葉と共に、氷室がスプーンを握った手を少年の顔のすぐ横のコンクリート壁に突き立てる。

それを横目で目にした少年はビクリと身を震わせた。

通常、アルミ製のスプーンが固いコンクリートの壁に突き刺さる事なんてありえない。

特にアルミは金属の中でもとりわけ柔らかな物体だ。コンクリートの壁に突き刺さるより前に普通ならまずスプーンの方が変形して刺さらない。

だが強い力を加えれば、それを押し通して刺さる事も考えられない事ではない。

もっとも氷室にそんな馬鹿力があるわけがない。

それは単に“刺さる”事を妨害するコンクリートからの応力を0にし、一方的に突き刺さる方向だけの力を許したがための現象に過ぎない。そのためどちらかといえば“埋まる”と称した方が正しい現象だ。

だが、そんなことを知る由もない少年にしてみれば、氷室が単なるアルミ製のスプーンをコンクリートに突き刺すほどの怪力を持っているように映る。

そんな“怪力”を持つもう一方の手をスプーンが突き刺さるのは逆の壁に突き立て、少年の顔を挟み込むような形で氷室は顔を近づける。

「さあ、吐いてもらおうか」

怒気を孕んだ低い声色に、少年の息が一瞬止まった。

その光景を傍から見ればカツアゲする不良とそれに怯える幼気な少年と映し出されただろうが、路地裏の奥まった場所に人目があるはずもなく、誰かに見咎められる事もなかった。

恐怖に震え顔を真っ青に染める少年に構わず、氷室は顔を近づけさらに眼光を鋭く光らせる。

「言え。何が目的だ」

「な、なんの……」



「恍けんなッ！」

ガンッ！ と殴りつけられた壁からボロボロと破片が零れ落ちるのを目にし、少年の目尻に涙が滲む。

「お前らの目的は何だ！ こんなことをして何をしようと企んでる！」

鋭いナイフのような視線と棘のある鈍器のような威圧感を備えた言葉を容赦なく浴びせる氷室。

この少年を間近に捉え、一目で理解した。

コイツは小物だ。小心者のクズでしかない。

そしてそんな人間が自分の意思で連続爆破事件など起こすとは到底思えない。

だとすれば何者かに指図され動いているか、はたまた言葉巧みに騙されて知らずに踊らされているかのどちらかだ。

そしてこの学園都市まちそういう事をする輩はガラの悪い不良集団か、もしくは『裏』に関わる連中かの何れか。

だが、この学園都市まちにおける『不良』とは文字通り能力をほとんど持たない“不良”な生徒——即ち『無能力者』レベル0の事を指す。無論、能力者が全くいないわけではないが、せいぜいレベル1か2程度といった力の弱い者がほとんどで、能力開発の壁にぶち当たり挫折した負け犬ばかりだ。

しかし先ほどの『爆弾』は明らかに大能力レベル4はあった。咄嗟の事ではあったがキチンと観測はしていたので間違いはない。

となれば、彼が不良である可能性は低く、残る選択肢は1つだけ。

そしてもし“そう”なのであれば、それは氷室皐月にとって“他人事”ではない。決して看過してはならない出来事だ。

「言え。何を企んでる」

再度問いただす。

だが恐怖のあまり震え竦みあがる少年がガタガタと震えるだけで、一向に口を開こうとはしない。

やりすぎたか、という思いが一瞬氷室の脳裏を掠めたが、すぐさまこのまま押し切る事を選択する。

恐怖も過ぎれば自ずと口を開く。

そう判断し、大きく拳を振り上げ――、

「ぼ、僕は悪くない！」

唐突に少年が叫んだ。

「僕は悪くない！ 悪いのはオマエらだ！」

「な、――」

「力あるヤツはみんなそうだ！ そうやって僕らを力でねじ伏せて好き勝手やってやがる！」

圧倒的不利な状況にも関わらず、むしろ殺してやるとばかりに少年は氷室を睨み付ける。

恐怖が一転して怒りへと転化されたのだろう。もしくは振り切れて開き直ったか……。

「風紀委員だってそうだ！ 下らない事ばかりに気を取られて、クソみたいな連中を野放しにしてやがる！ ソイツらを掃除するのがオマエらの仕事だろうがッ！」

恨みの籠った視線を向け一人ヒートアップする少年。

一方で、そんな彼に熱を奪われたかのように氷室の心は一気に冷めきっていた。

（チッ……）

心の内で舌を打つ氷室は、自らの勘違いに気付いた。

この少年は誰かに利用されていたんじゃない。利用する価値すらない、本物のクズだ。

『裏』の存在を危惧するあまり、そんな事にも気付けなかった自分に嫌気が差し少年から一步身を引いた。

だがそれを勘違いしたのか、少年の怒りはますます熱を帯びていく。

「クソッ！！ 殺してやる！ テメェら全員まとめてぶっ飛ばしてやるッ！！」

「るっせーんだよ、ドクズがつ！！」

怨嗟を募る少年の少年の鳩尾を氷室の右足が貫いた。

「ごちゃごちゃごちゃごちゃ下らない事言ってるけど、アンタだって同じでしょうが！」

「な——、僕は違う！ 僕は——」

「同じよ。無関係な人間巻き込んで、自分の力を振りかざして——、そのどこが違うって？」

まさに無差別と呼べるような犯行を行っておいて、どの口が言うのかと氷室は少年の顔横の壁を蹴り飛ばした。

ダン、と鈍い音と共に突き立てられた右足に少年が竦んで目を瞑る。

「大方、誰かにイジメられて、それを助けない風紀委員ジャッジメントに逆恨みしたってところでしょうけど……」

おそらく少年の供述と状況的に見て狙いは初春だったのだろう。

彼女の右腕には風紀委員である事を示す腕章が付けられていたから。

ビビッてもはや足腰も立たない少年の態度に、氷室は冷ややかな視線を向け、肩を竦めながら蔑むように鼻で笑うと、

「力ある人間が弱者を虐げる？ それが許せない？ 馬鹿じゃないの。ならアンタのやろうとしていた事はなに？ 『爆弾』なんて言う無差別な“力”で抵抗する術を持たない相手じゃくしやを一方的に勝るだけの行為じゃないの？ 自分はコソコソ陰に隠れて、彼女たちが傷つくのを見てほくそ笑もうとしてたんでしょ？ それを『自分だけは違う』？ 『僕は悪くない』？ ふざけんのも、大概にしるよクソ虫がッ！」

壁に突き立てていた足を振り払い、少年の顔面を蹴り飛ばす。大した抵抗もなく吹き飛んだ少年の顔から眼鏡が零れ落ちた。

「アンタが弱いのは力のあるなしじゃない。アンタが虐げられているのはその性根が腐っているからよ。……どうせその様子じゃ、自分をイジメた連中に仕返しなんて出来ないんでしょ？　けど、まずやるなら真っ先にソッチが先じゃないの？　それも出来ず、無関係な人間に八つ当たりをして憂さを晴らすしか脳のないゴミ虫が、何をしようとも所詮クズはクズよ」

毅然と少年の前に立ちふさがり腕を組む氷室は、根性の捻じ曲がった少年を見下し、

「誰かを憎む前に、世界を恨むより先に、まずは己が身を鑑みなさい。現状を拒絶するなら、まずはその壁をぶち壊しなさい。じゃなきゃ、アンタは一生ドクズで弱虫のままよ。それを能力ちからなんて言う“付属品”のせいにして自分を勝手に見限ってんじゃないわよ。他の誰のせいでもない、アンタの敵はアンタ自身よ。自分が弱者であることに甘んじて全てを正当化しようとするその腐りきった根性を、堀の中でもう一度一から叩き直してらっしゃい！」

言葉と共に放たれた蹴り足が少年の顎先を捉え脳を揺さぶり、その意識を闇の中へと落としていく。

ゆっくりと地面へと倒れ行く少年の姿を眺めながら、最後に一言だけ呟く。

「そうよ。泣いて蹲って全てを拒絶しているだけじゃ、何も変わらないのよ……」

それは誰に向けられた言葉なのか。

その答えを得られぬまま、少年の視界は闇に閉ざされた。

### 第03章 とある疑念と事件体質《トラブルメーカー》

「へえ、結構やるじゃない」

「覗き見とは趣味が悪いわね、常盤台のお嬢様は」

パチパチと手を打ちながら物陰から姿を現した御坂に、氷室は鋭い視線をぶつけて皮肉を返す。

「別に覗く気なんてなかったわよ。単にソイツが『爆弾』に使われていたぬいぐるみを持っていたのを見てたから、犯人だと思って探しにきただけよ」

「なるほどね」

そしてこの現場に出くわしたと。

（迂闊だったわね……）

人の気配には故あってかなり敏感なはずなのだが、彼女が自ら姿を現すまで見られている事に全く気付かなかった。

（そろそろ“限界”かしら……）

前回の『診察』から一ヶ月経とうとしている。そのため色々なところに無理が生じて反応が鈍くなってきたようだ。

（けど、『診察』は来週だし、何とかもつでしょう）

それは毎月の事でもあるため、そのあたりの采配は心得ている。特に問題はないと判断し、氷室は御坂の横を通り抜け路地を抜けだそうと歩き出す。

「つて、ちょっと待ちなさい！ どこに行く気よ」

「初春の所よ。アンチスキル警備員に連絡して、犯人を回収してもらわないといけないでしょ。なんなら、ここで見張ってもらえる？」

「携帯で連絡すればいいだけでしょが！」

「おおっ！」

その手段を忘れていたとばかりに氷室が思わずポンと手を叩き、その案を実行するためポケットの中から携帯を取り出す。

「アンタねえ……」

呆れた表情を浮かべる御坂を無視して氷室は初春に状況と場所を知らせると、パタリと携帯を閉じ、

「すぐに警備員を超越すそうよ」

「そう」

携帯を閉じ結果を伝える氷室の言葉に、短く答えを返した御坂の表情は硬い。というよりも、敵意を帯びた視線を氷室へと投げかけている。

「……なに？ 何か文句がありそうな顔してるけど」

少なくとも氷室には御坂に恨まれるような事をした覚えはない。

いや、確かに現場での指揮を横取りしたし、犯人の目星がついていたにも関わらず彼女より先に取り押さえてしまったが、現場指揮は本来なら御坂でも氷室でもなく風紀委員である初春の役目だし、犯人確保も成行き上の事でしかない。それで恨まれるのは筋違いというものだ。

だが御坂の敵意の原因は、別の所にあった。

「アンタ、何者」

その問いに氷室は一瞬息を飲んだ。

「……意味がわからないのだけど？」

心の内の動揺を押し隠し、氷室は恍ける。

だが御坂の追求はそんな事では止まらない。

「恍けても無駄よ。あの『爆弾』を止めたの、アンタでしょ」

「何を根拠に……」

「あの場であんなことが出来るのはアンタ以外にいないわ」

初春は力の弱い低能力者<sup>レベル1</sup>で、佐天にしては無能力者<sup>レベル0</sup>。年端のい

ない幼女が高位能力者である可能性は低く、御坂は超能力者<sup>レベル5</sup>とはい

え電気を操る電気使い<sup>エレクトロマスター</sup>だ。どう能力を行使したところで『凍結』な

んて現象は引き起こせない。そして乱入した上条の能力は異能を打ち消すモノであり、御坂はその詳細を知らずとも、その事実だけは理解していた。そしてその他の店員や客は全て外へと非難しており、あの場にいた人間でそんな事が出来るのは氷室以外に考えられない

と言うわけだ。

「なるほどね。でも、私以外の誰かが潜んでたって可能性はないの？」

「あのフロアの避難が終わってるのは確認済みよ。私達以外誰もいなかったわ」

「でも、“絶対”じゃない」

人間誰しも見落としやミスをする。完璧だと思っけていても、実際はそうではないことなどいくらでもある。

「それにもし私がやったとして、一体“何”をしたっていうの？」

『爆弾』を止めて、同時に周囲を凍らせる能力なんて聞いたことがないんだけど……」

「そ、それは……」

氷室の問いに御坂の視線が泳ぐ。

「そ、そう。凍らせたのよ。凍結能力ってヤツ？」

「凍らせたぐらいじゃ、あの『爆弾』は止まらないわよ。アレは温度じゃなく圧によるものだもの」

もつとも全くの無関係と言うわけではない。

爆縮を引き起こす過程には物体が高密度・高温となる必要があるため、それに至る前の段階ならば『凍結』で防ぐことも出来ただろう。

しかしすでに爆縮現象が起きてしまった後では『凍結』ではなく、圧力の発散を押さえる『停止』でなければ止める事が出来ない状況だった。

「うっ……」

推論を論破され、御坂が言葉を失って呻く。

そう、普通の考えでは氷室の能力を言い当てる事なんてまず出来ない。『あらゆるベクトルの量を0にする』なんて能力、実際に目にした所でその考えに行き着く訳がない。

単にモノを止めるだけなら念動力系サイコキネシスの能力でも可能だし、凍らせ

るだけなら温度操作が可能な発火系能力の亜種として見る事も出来る。  
パイロキネシス

むしろそういう風に思考が誘導されるような能力の使い方をしているため、氷室が能力者であることに行き着いたところで、その真相までに辿り着く事は不可能だ。

「なんらな調べてみれば？　そうすれば私が無能力者だってすぐに分かるはずよ」  
レベル0

システムスキャン  
身体検査の結果が無能力である事は変えようのない事実だ。  
システムスキャン  
というよりも、そうなるように氷室は身体検査で手を抜いていた。

基本的に超能力とは0を1にするか、もしくは1を1のまま別の何かへと変化させるか維持するかの何れかに該当する。

そのため1を0にする氷室の能力は通常の検査方法では計測するその前提を覆すものとなる。

無論、モノによってはその変化を読み取る事も可能だろうが、その場合は計測機器自体を“止めて”計測不能を叩き出させるか、もしくは能力そのものを使ったフリをしてしまえば問題はない。  
エラー

とはいえ、そのフリを見破る方法がないわけではない。

能力者は必ず無意識の内に微弱な能力を外へと発散している。それは『A I M拡散力場』と呼ばれ、精密機器を持ち出さなければ計測できない程の力でしかないが、それを調べ上げればその人物がどんな能力を持つのか、それはどの程度の強度レベルを持っているのかなどを判断が出来るとされている。

そのため、通常なら使ったフリをした所でA I M拡散力場を計測すればその“嘘”は簡単に見破られてしまうのだ。

だがしかし、氷室に限ってはそれは絶対にありえない。  
カウンターストップ  
何故なら『抑止力』はA I M拡散力場を発生させない特異な能力



だからだ。

おそらく“力を0にする”という特性上の事だと推測されているが、実際のところは彼女を研究していた研究者達にも分かっていたなかった。

だからこそ、彼らは氷室の能力を解明しようとやっきになっていたわけでもある。

従来の理論ではありえない、例外中の例外。起こりえない筈の事が実際に起こっている以上、その理由を探ればそこにまだ見ぬ新たな法則の発見と学園都市の最終目的『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』――通称『SYSTEM』へと繋がる道が隠されているはずだ、と。

故に研究者たちの目はただその一点にのみ注がれ、その他の事――氷室皐月という少女の事など全く眼中になかった。目の前にいても、彼らには彼女の存在など見えてはいない。彼らが見ていたのはその内に秘められた『能力』だけだった。

そのためには彼らはなんでもする。能力の解明、その進化のために、あらゆる手段を用いて、そのみを追い求める。

それは研究者としては酷く純粋で当然の行為ではあるが、人として『人』を扱う研究という前提を無視した行為は決して褒められるべき代物ではない。

暗い過去へと思考がずれ始めた事を感じ、氷室はゆっくりと首を振って気を取り直す。

「確か、貴女のルームメイトも風紀委員ジャッジメントだったはずよね？ 別に初春でも良いけど……、彼女らに頼めば書庫バンクにアクセスできるはずでしょ？」

もつとも御坂の能力をもつてすれば、彼女らの手を借りずとも非合法な手段で調べる事も出来るだろうが。

「って、アンタ、黒子の事も知ってるわけ！？」

「ええ、まあ……」

「お呼びになりましたか？」

「うわあっ!？」

突如自身の隣に現れたツインテールの少女の姿に、御坂がその場から飛びのいて驚く。

「く、黒子!?? 何でここに!??」

「こちらで虚空爆破事件の犯人と思しき人物を確保したと聞きましたので」

御坂と同じ常盤台の制服を身に纏った少女の腕には、風紀委員であることを示す緑色の腕章が掲げられている。

彼女の名は白井黒子。初春の先輩風紀委員であり、御坂の学校で後輩であり、同時に寮のルームメイトでもある少女だ。

そして氷室皐月にとっては初春を助けたあの事件以来、何かと関わり合う機会の多い人物でもあった。

「久しぶりね、黒子」

「ええ、皐月お姉様もお元気そうで」

ニッコリと微笑みあう二人の様子に、両者が知り合いであることを確信する御坂。

「それで……、」

「ああ、アレが犯人よ」

チラリと背後で倒れている少年に目を向け、指し示す。

「……分かりましたわ。彼はこちらで引き取らせていただきます。

ですが、皐月お姉様? 出来る事なら犯人確保は我々風紀委員に任せて欲しいのですが……」

「しょうがないでしょ、声をかけたらいきなり逃げ出したんだもの。それともまさか初春にやらせろと?」

「……無理ですわね」

「でしよう?」

低能力者である事ながらも、初春は身体面でも低能力者である。

なにせ腕立て伏せの一回も出来ない程の——まあ、それは出会ったばかりの頃の話で、今は多少マシになっているかもしれないが——

―貧弱さだ。逃げる犯人を捕まえるなんて無理というより絶対不可能な領域。もし運よく捕まえられたとしても即座に返り討ちに合うのは目に見えている。

そんな人間に犯人を捕まえろだなんて、死んで来いと言っているようなものだ。

さすがにそれは黒子も認めざるを得ない。

「そもそも、犯人の確保は風紀委員ジャッジメントじゃなくて警備員アンチスキルの仕事でしょうが」

「それでも、一般人である皐月お姉様よりかは遥かにマシですの」

「まあ、そうだけど……」

かといって見逃した方がいいのかと問われればそれはNOだ。あの場で逃がせば、また別の場所で同じことを起こし更なる犠牲者を出してしまう事となる。

無論、彼女の主張も理解できる。もちろん、氷室だって他に任せて解決できるのであればあえて自分が危険を冒して飛び込む必要はないと思っている。そこまで正義感に溢れているわけではないし、無謀でもない。けどその場で出来るのが自分一人で、それが可能な力をもつのならば、出来る限りやるべきだと思うのだ。

「ともかく、今回は助かりましたわ。これ以上放置していたら、今度はこそ死亡者が出る可能性もありましたから」

「でしょうね。かなりの威力っぽかったし、アレ」

直撃を受ければ初春の命は危うかっただろう。最低でも重体は免れなかったはずだ。

「ま、どこかの親切的な能力者が止めてくれたおかげで、誰も傷つかずに済んでよかったわ」

「……ですわね。何処のどなたかはわかりませんが」

苦笑を浮かべ白井は氷室の言葉にうなずいた。

「ちょ、黒子っ！ それで納得する訳！？ アレは絶対にコイツが……」

「お姉様！」

納得できないと食って掛かる御坂に、白井がずい、と身を乗り出して睨み付ける。

「目上の方を指さして『コイツ』呼ばわりはどうかと思いますの。常盤台の生徒としてその態度は品性を疑われますのよ。だいたい、お姉様は学園都市に7人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>。だからこそ強気に出てしまわれるのもわかりますが、それ以前に人としての――」

「あー、」

突如始まった白井の説教に、御坂が心底嫌そうな顔を浮かべ両手で耳を塞ぐ。その内心で「アンタは私の母親か!？」と文句を言っているのだが、それを言った所で白井の追求は止まらない事も理解していた。何せ二人は寝食を共にするルームメイト。お互いの事は誰よりも深く理解している。

「まあまあ、別に私は気にしてないから……」

「そういう問題ではありませんの」

「でも今は、事件の処理の方が優先でしょ？」

説教なら帰ってからすればいい、と暗に告げられ、白井も仕方なく矛先を収めた。

「それもそうですわね。……分かりました。お姉様、このお話はまた後ほど」

「うげっ! まだする気!」

「当然ですの。そのはしたない言葉遣いも含めて、今度という今度は徹底的に言わせていただきますの!」

「はぁ……、勘弁してよ、もう……」

ため息を吐いたところで、御坂の運命は変わらない。ルームメイトである彼女らの帰る場所はどちらも同じ部屋なのだから。

「それと、黒子。あの犯人なんだけど……」

「? 何か問題でもありましたの?」

「問題というか、腑に落ちない点がね」

「何がですか?」

「どうやら犯行の動機はイジメの腹いせらしいんだけど……」

「それでどうして風紀委員を……、いえ、逆恨みという事ですね」

「やっぱ狙いはソッチか」

「ええ。これまで被害にあった9名、その全てが風紀委員ジャッジメントですの。  
ですので今回の標的はおそらく……」

「初春ね」

「ええ。今回ばかりはさすがに肝が冷えましたわ」

はあ、と深いため息を吐く白井の態度からは、初春に対する思い入れの深さが窺い知れる。

「後輩想いね」

「皐月お姉さま程ではありませんわ。……聞きましたのよ？ 初春やお姉さまを差し置いて自ら一番危険な役割を担ったと」

「一応社会的には、大人に数えられてもおかしくない年齢だからね。大人が子供を守るのは当然でしょ？」

年齢差は高々二、三歳程度でしかないが、彼女らは中学生であり義務教育を受けるべき『子供』。一方氷室はその義務を終え、選肢肢の一つとして進学を決定した高校生だ。進学していなければどこかに就職して社会人として働いていてもおかしくはない年齢である。だから社会的には『大人』として見られ、その義務として『子供』の面倒を見る必然性がある。

なのだが、白井にしてみれば公的権力を持たない一般人に過ぎない氷室が、自ら率先して危険を担う真似をしてほしくはない。

（といっても、聞き入れてはくれないのでしょうか……）

本人は気付いていないようだが、白井の眼からすれば氷室はかなりのお人好しだ。それと同時に自らを身の危険にさらす事に頓着しない性格である。いや、むしろ一切ッ考慮に入れない節が見受けられる。

その理由は彼女の身を守る絶対防御『リアクティブ・アーマー  
反応停止』の存在があるからなのだが、それを知らぬ白井の身からしてみれば、かなり危うい性格をしていると見える。

もちろん氷室が身体能力も比較的高く、思考の回転が速くて機知

にも富んでいるため、大抵の危機は独力で切り抜けられる事も理解している。だからと言って、それだけの理由で全ての危険を一人で背負う必要はないのだと、白井は常々思っているのだった。

もつとも、それも言った所で本人にその自覚がなければ意味のない忠告にしかないのだが……。

「……それで、気になる点というのは？」

「ええ。彼の供述に嘘はないと思うんだけど……、あの『爆弾』は最低でも大能力クラスレベル4の威力があった」

「高位能力者がイジメに合うとは考えにくい、という事ですのね」「そう。だからちよつと気になってね……」

それに量子操作系の能力者がどれほどいるかは分からないが、大能力クラスレベル4の能力者となればその数は限られるはずだ。にもかかわらず、犯人の目星がついていなかったという事も氷室には引くかかる。

学園都市の能力者は須らく、その能力と強度と共に氏名、年齢、在籍する学校、それまでの履歴等含め全ての情報が一括して『書庫』に登録されているはずである。

そして風紀委員や警備員はその役割上、『書庫』へのアクセス権限を持ち、能力による犯罪が発生した場合は、即座に該当する能力者を調べ上げ、その容疑者の割り出しを行うはずだ。

ならば『虚空爆破事件』が発生してから一週間あまりもの時間があつて、彼をマークしていなかった事実には疑念が残る。

ましてやあの性格なら、ちよつとつつけばいくらでも埃を出しそうなものだ。

となれば考えられるのは短期間で急速に能力が上がった事ぐらいだが、それは少し考えにくい。

残るは何らかの意図が介在していて、ワザとその実力を隠していたか、隠されていたかのどちらかだ。

氷室自身のように……。

（けど、彼自身が実力を偽る必然性はない……）

それならばとっくの昔に公表して、イジメに合うなんて事にはなっていない筈だ。

（となれば、別の“誰か”が何らかの目的があって彼の情報<sup>データ</sup>を偽っていた……）

しかし、何故？ という疑念が拭えない。

それにそんな事をして得をする人間がいるようにも思えない。

少なくとも、『表』側の人間には――。

（また深読みし過ぎてるかもしれないけど、しないで見逃すよりかはマシよね）

『裏』が『表』を侵す事実を氷室皐月は見逃せない。

『裏』は裏の中で完結し、『表』には決して影響を及ぼさないのが暗黙<sup>ルール</sup>の了解だ。それが表沙汰になるという事は、即ち不特定多数の無関係な人間が危険にさらされると言うことでもある。

その事実を氷室皐月は看過するわけにはいかない。

『抑止力』として、理<sup>カウンターストップ</sup>不尽<sup>ストップバー</sup>に対する理<sup>うら</sup>不尽として、そう言った事態を“止める”のが彼女の役目なのだから。

「ま、事情聴取すればすぐに分かると思うけど、出来たら後で教えてくれるかしら？」

「捜査情報は機密事項なので……。まあ、犯人確保に協力してもらいましたし、内容次第では考えなくもありませんわ」

「悪いわね」

「構いませんの。確かに気にはなる話ではありますし……」

ふむ、と腕を組み顎に手を当て考え込む白井に、これで情報源が確保できたと氷室は内心で安堵する。

無論、内容次第ではあるが、話せないという事となればいよいよも

って怪しい事態だという事となり、本格的に動き出す理由にはなる。無意味に“彼女”を頼って借りを作らずに済むだけでも十分益のある話だ。

「じゃ、そういう事で、後は頼んだ」

「って、どちらに行かれますの？」

「どこって、帰るんだけど？」

「ダメですの。皐月お姉様にも事情を聴かなければなりませんので」

「……そっちででっちあげて、」

「ダメですの！ こればかりはいくら皐月お姉様の頼みでも聞けませんの！」

「ちえー」

「可愛らしく拗ねても、ダメなものはダメですの！ それが嫌なら今後一切こういったことは私達に任せてくださいませ！」

「私としてはそうしたいところなんだけどねえ……」

事件が向こうからやってきては、避けようものも避けられない。

上条程ではないにせよ、自らも相当な事件トラブルメーカー体質であることを思い

返し、氷室は深々とため息を吐くのであった。



## 第04章 とある計画と幻想御手《レベルアップ》

「ちょっとそこのアナタ！」

「はい？」

病院の受付脇に設置された自販機を前に突如かけられた怒鳴り声に氷室は首だけで振り返る。

「……って、婦長さん？」

「はあ……、またアナタなのね」

氷室の顔を見るなり、盛大なため息を吐いたこの病院の看護婦長の姿に氷室は眉間に皺を寄せる。

「いや、またってなんですか、またって……」

それだといつも何かしら面倒を起こしているように聞こえる。

少なくとも氷室はこの病院内で事件<sup>トラブル</sup>を起こした事はないはずだ。

……あくまで自らは、だが。

「えっと……、それで何の用でしょうか？」

「何の用も何も、皐月さん、アナタそこで何をしてるの？」

「何って、見ての通りジュースを買ってるだけですけど？」

自販機を目の前にそれ以外何をしろと？ まさかお金を入れるとバイクに変形する訳でもないし、出てきた缶がタコや鳥に変形するわけでもない。

（……いや、学園都市なら可能かも）

誰もやろうとしないだけで、たぶん出来る。やる意味があるのかは置いておくとして……。

「だけってねえ……」

呆れと恨みが混じりあったような婦長の視線が、氷室の足元へと向く。

「アナタ、この自販機の飲み物を全部買い占める気？」

「えっと……」

婦長の視線の先にはビニール袋の中にこれでもかと詰め込まれた大量の缶ジュース。

「しかもまだソレを飲んでるのね……」

缶の表面に描かれた『宇治抹茶珈琲ガラナ風味—微糖—』のラベルを目にし、婦長は深々とため息を吐いた。

「な、何を飲もうと私の勝手だと思えますけど……」

「確かに勝手だけど、度が過ぎてるのよアナタの場合は。それに医療にかかわるものとして、ソレの大量摂取は見過ごせないわ」

不眠症を誘発しかねない、かつてはそれで訴訟まで引き越した一品の暴飲は、看護師として、それらを取り纏める責任ある立場として見過ごすわけにはいかなかった。

「まったくもう……、先生も何をしているんだか」

氷室の親——厳密には保護責任者——は、この病院に勤める医師だ。それも筆頭とも呼べる一番の実力を持つ医師。どんな症例を持つ患者でも、いかなる難病を抱えていようと、必ず治療し快復へと導いてしまう奇跡の医者。通称『冥土帰し』<sup>ヘンキヤンセラー</sup>。

そんな彼が、この事態を知らながら何もしていないことに婦長は頭痛を覚えた。

「とにかくこれは没収します!」

「ああっ——!!」

氷室が止める暇もなく、足元に積まれた大量の『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』は袋ごと婦長の手に接収されてしまった。

というか、これだけ大量の缶が入った袋を軽々持ち上げるとは、意外と力持ちだ。この病院に勤める人間は、誰も彼も普通じゃないらしい、……いろんな意味で。

「これは夢乃先生に預けておきますから、飲みたければ彼女の許可をとってからにしないさい。いいですね!」

「は、はい……」

「それと、今後こんなことはしないように! 他の患者さんから、

自販機を占領している怪しい少女が居ると苦情が来てたんですから」  
「あ、あはは……」

確かに、これだけの量を自販機で買い込んでいれば怪しくも映る。  
「わかりましたね!!」

「は、はい!」

「よろしい」

満足げに頷くと、婦長は両手いっぱい缶ジュースを引っ提げ廊下の向こうへと消えていった。

「ま、いいけどね……」

婦長の姿が消えた事を確認し、氷室はそっとため息をついた。

どの道、買ったジュースはどこかで保管しておいてもらうつもりだったし、その手間が省けたと思えばむしろ良かったと言える。

チラリと自販機のボタンに目を向けると『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』の所だけ『品切』のランプが赤く点灯していた。

氷室の目的はまさにそれだった。この後に行う予定の『企み』に向けての準備として、この病院内から『宇治抹茶珈琲ガラナ風味』を排除するためにこんな奇行を行っていたのだ。でなきゃ普段通り業者<sup>メーカー</sup>に直接連絡して箱買いをしている。誰も好んで奇異の目で見られるような真似はしたくはないのだ。

ともあれ、これで一応目的は達せられたわけで、いよいよ本番に向けて動き出そうと、とある不法滞在の少女とその保護者の少年の待つ病室に向けて歩き出す。

「にしても、今日は随分と忙しそうね……」

少し様子を見てみれば、緊急搬送されてくる患者が多いことがわかる。

「どこかで事故でも起きた? にしては、目立った外傷はないみたいだけど……」

夏場だから集団食中毒でも起きたのかもしれない、と推測しつつ氷室は病院内の廊下を歩いていく。

と、そこでふと見知った顔を見つけ足を止めた。

「……黒子？」

「あら、皐月お姉様ではありませんの。こんな所で会うなんて奇遇ですわね。もしやどこかお体の具合でも……？」

「違うわ。ここに知り合いが入院してるのよ」

I Dを持たない不法侵入の少女で、知り合って数日という付き合いではあるが、知り合いは知り合いだ。

「それはもしかして……」

僅かに悩むそぶりを見せた黒子が、不安げな表情を浮かべ氷室を見上げると、

「皐月お姉さま。その方——」

「黒子っ！」

白井の言葉は、病院には似つかわしくな大声によって打ち切られた。

常識を弁えない行動に氷室が怪訝な顔を浮かべ振り返ると、息を切らして茶髪の少女が走り込んできていた。

「佐天さんが倒れた……って、アンタは!？」

非常識極まりない不良少女——御坂美琴は、白井の隣に立つ氷室の姿を目にした途端、敵意剥き出しの視線をぶつけ声を上げた。

ガルルル、と猛獣の如き唸り声が聞こえてきそうな威嚇行動に、

白井は思わず痛む頭を押さえつけた。

「お姉さま……。出会うなりその態度は、些か礼を失すると言うものではありませんの？」

「んなこと言ったって、コイツは……」

「ですから、それは誤解だと何度も申しましたでしょう。皐月お姉さまは無能力者だと、書庫には確かにそう登録されておりますと何度も申し上げておりますの」

「そ、それは……、そうかもしれないけど……」

白井の言葉通り、御坂もその事実は確認している。

以前から暇つぶしがてら書庫のデータを覗き見していた御坂にと

って、それを探るのはそう難しい事ではない。無論、それは違法な行為ではあるものの、電子を自在に操る事のできる学園都市最強の電撃姫によるハッキングを止められる者はいないだろう。

そして軽々と仕入れたデータには、確かに彼女が無能力者である事が記載されており、そこに何一つ不審なところはなかった。

それでも御坂は虚空爆破事件で彼女に抱いた不信感は拭えないでいた。

御坂にとって『レベル0 無能力』という公式はほんの一月ほど前からかくも崩れ去っている。

御坂の繰り出すあらゆる攻撃を尽く右手一本であしらってくれるあのバカげた少年のように、無能力者と認定されていても実はほんでもない能力を隠し持っている人間が他にもいるのではないかと、つい邪推してしまうのだ。

奇しくも慧眼である。

が、残念ながら彼女が真実に辿り着くには、未だ氷室に対する情報が決定的に不足していた。

「というか、ちょっと待って。佐天さんが倒れたって……」

御坂の台詞に聞き捨てならない単語を聞きとめ、氷室が目を剥いて白井へと問いかける。

「ええ、そうです。先ほど初春から連絡があって……」

「……それってやっぱり『幻想御手』がらみ？」

「ええ、どうやらその線のようなのです」

「レベル、アッパー？」

聞きなれない単語に氷室は首を傾げると、小さく咳をして喉を整えた白井が氷室へと向き直り説明を始めた。

「実はここ最近『幻想御手』と呼ばれる音楽ファイルが学生たちの間で密かに広まっているようです」

「ただの流行曲、ってわけでもなさそうね、その様子だと」

「ええ。なんでもそれを聞いた学生たちの能力の強さが短期間に著しい上昇を見せるのだとか……」

「はあ？」

白井の説明に、氷室は思わず素で間抜けな声を上げてしまう。

「いや、それはありえないでしょ」

「常識的に考えればそうですね。ですが現に捉えた犯人の能力の強さと被害状況が食い違うケースがここ数件立て続けに起きております。昨日、皐月お姉さまがお捕まえになった虚空爆破事件の犯人もその内の一人ですの」

「……なるほど」

確かにあの事件では犯人の供述と行おうとしていた犯行の規模とが食い違っていた。

だが、もし本当にその『幻想御手』なるものが能力強度を引き上げるものならば説明はつく。

「でも、そう簡単に能力強度は上がるものではないでしょ？」

通常は数年〜数十年単位で『開発』が行われて初めて一つ、もしくは2つほど上がるのがせいぜいだ。

それをたかが音楽を聞いただけで上がるとは到底信じられるものではない。

むしろそんな簡単に上げられるのであれば、世の研究者たちの苦労は何だというのか。それでは立つ瀬がなくなってしまう。

「それが、どうやら『共感性』を利用したもののようでして……」  
「なるほど、その手があったか」

共感性とは、ある刺激に対し通常の感覚だけでなく異なる種類の感覚をも生じさせる人間特有の知覚現象で、例えば風鈴の音を聞いて涼を感じたり、赤い色を見て熱を感じ取ったりするものの事だ。本来音や色だけでは温度を感じる事ができない筈なのに、人の脳はそこからさまざまな事柄を連想し、実際には感じ取れない筈の感覚まで連鎖的に感じ取ってしまう、いわば脳の錯覚である。

それを利用すれば単一の刺激に対し五感全てを刺激させ、『学習<sup>テスト</sup>装置』と呼ばれるも機械と同様に脳に強い作用を齎す事が出来る。それこそ能力強度<sup>レベル</sup>を短時間で一段階引き上げる事が出来る可能性もあり得ない話ではない。

「けど、その『幻想御手』<sup>レベルアップバー</sup>が佐天さんが倒れた事とどう関係するわけ？」

「ええ、問題はそこですの」

氷室の問いに白井は眉間に眉尻を下げ、

「どうやら『幻想御手』<sup>レベルアップバー</sup>には副作用があるらしく、使用した学生たちが次々と意識を失い、病院に運ばれた後も目を覚まさず昏睡状態が続くといった症例<sup>ケース</sup>が発生していますの。それもかなりの人数が同じ状況に陥っているようで」

「じゃあ、さっきから運ばれてきている患者は……」

「ええ、おそらくは……」

ため息を吐くように頷いた白井の言葉を聞き、氷室は静かに奥歯をギリリと噛みしめた。

この事件はただ事ではない。誰かが意図的に引き起こしている事件だ。

そしてその話から推測できる事件の規模からして、おそらくは相当大きな被害が出ているものと思われる。

だとすれば、『表』の人間の仕業とは考えにくい。もしそうだとしても、そこには『裏』の人間が陰で糸を引いている可能性が高い。

「それで佐天さんは……」

「そうとは知らず使用してしまったようですの」

こんな事ならもっと早くその事実を公表するべきでしたわ、と氣落ちする白井は、疲れたように顔を手で覆い隠し肩を落とした。

「現在専門家の方に解析を依頼しておりますが、下手をすれば、」

「このまま一生目覚めない可能性もなきにしも非ず、と」

「そういう事ですの。無論、全力を尽くすしかないのですが、佐天さんが倒れたことで初春が責任を感じてしまっていて……」

「そういえば、その初春さんは？」

「木山先生の所へ」

御坂の問いかけに白井が答える。

おそらくその『木山』という人物が、『レベルアップ幻想御手』の解析に協力しているという専門家なのだろう。

「そう……。でも、少し休ませた方がいいんじゃない？……」

「わたくしもそう言ったのですが、自分が風邪で休んでいたせいで『レベルアップ幻想御手』への対処が遅れたんだと言って聞かないんですの」

ましてやそれで親友が倒れたとあっては、黙って休んでいることなど出来ないのだろう。

「あまり無理しなきゃいいけど……」

心配そうに外を見つめる御坂。

しかしだからといって無理に止めても、今の初春には逆効果でしかない。多少自由に動かさせて少しずつ発散させてやらなければ、下手に爆発してどんな無茶をしでかすかもわからない。

無理を“し過ぎない”よう周りが気を遣いつつ、今は彼女の好きにさせるのが一番適切な対応と言えるだろう。

「あー、ちよつといいかい？」

そんな彼女らの背後から、唐突に男性の声がかけられた。

一同が振り返れば、そこには白衣を身に纏った医者と思しき男性。

「おや、君も居たのかい？ 何と言うかアレだね？ 相変わらず厄介事に首を突っ込んでいるみたいだね？」

その男が氷室の姿を確認するなり、首を傾げた。

「だから好きで突っ込んでるわけじゃ……。いえ、いいです。それでもう」

顔見知りに会う度にそんな評価しか受けられない自分を鑑み、氷室はガックリと肩を落とした。

「えっと……。お知り合いですの？」

「知り合いというか……。親」

「「親！？」」



思わず両者の顔を見比べてしまう御坂と白井の姿に、カエルにも似た面持ちを持つ医師は苦笑する。

「正確には保護責任者だけどね？」

「な、なるほど……」

「そ、そうよね……」

カエル顔の医師の言葉に二人は引き攣った笑みを浮かべつつ、言い知れぬ安堵感を味わっていた。

「それで、何か用？」

「うん。実は今運ばれてきている患者——『レベルアップ幻想御手』の使用者について少しわかったことがあってね？」

「ホントですよ！？」

その発言に白井が食いついた。

「うん。ま、こんな所で話すのも何だから、少しついてきて貰えるかな？」

「もちろんですよ！」

場所を移してカエル顔の医師の研究室。  
ジャッジメント

風紀委員である白井はもとより、それに付き添う形で御坂と氷室も部屋へと入っていた。

研究室と呼ぶには少しばかり簡素な室内に置かれたパソコンの前に腰かけたカエル顔の医師がキーボードを操作しながら説明を開始する。

「『レベルアップ幻想御手』の患者達の脳波に共通するパターンが見つかったんだよ？」

そう言うのと、その脳波を示すのであろう波形グラフをモニターに表示する。

「人間の脳波は活動によって波が揺らぐんだね？ それを無理に正せば……」

「人体の活動に影響が出るわね。下手をすれば身動きが出来なくな

るくらいに……」

強力な電磁波の影響を受けて電気製品が動作不良を起こすのと一緒にだ。

「つまり、被害者は『幻想御手』<sup>レベルアップバー</sup>に脳波を無理矢理いじられて植物状態になった……って事？」

「誰が何のつもりでそんな事を……」

昏倒の原因を知り、二人の表情が僅かに青ざめる。

一方、その話を聞いてなお表面上は平然とした顔をしている氷室は、腕を組んだまま医師へと問いかける。

「それだけじゃ、ないんでしょ？」

「まあね？」

そう前置きして、カエル顔の医師は再びパソコンを操作し始める。

「僕は職業柄、いろいろと新しいセキュリティを構築していてね？ その中の1つに人間の脳波をキーにするロックがあるんだね？」

「相変わらず手広くやってるわね……」

呆れた、とため息を漏らす氷室に対し、

「患者のプライバシーを守るのも僕の仕事だからね？」

平然と言ったのけ、カエル顔の医師はとあるデータを画面に表示した。

「調べてみた所、それに登録されているある人物の脳波が植物患者のものと同じだという事がわかってね？」

その言葉に促されるよう、御坂達が画面を覗き込み、

「登録者名——『木山春生』っ!？」

愕然とした表情で驚きの声を上げた。

「……知り合いかね？」

「知り合いと言うか……、『幻想御手』<sup>レベルアップバー</sup>の解析を依頼している専門家の方ですの」

「って、ちょっと待って! 『幻想御手』<sup>レベルアップバー</sup>で強制された脳波と彼女の脳波が一致するってことは……」

「彼女が犯人である可能性が高いわね」

「——ッ！ 今、彼女の所には初春がいますの！」

「——黒子ッ！」

「分かってますわ。すぐに連絡を取ってみますの！」

答えよりも先に動き出していた白井が、携帯利用可能エリアに向けて部屋を飛び出していく。

「……けど、何故脳波を自分のモノに調律を？ 『<sup>レベルアップ</sup>幻想御手』の効

果を見る限り、無関係のように思えるんだけど……」

木山の脳波が能力の強さ<sup>レベル</sup>を引き上げる特殊な効果がある、などと言うわけでもあるまい。

だ<sup>トリック</sup>とすればどんなからくりがそこに仕込まれているのか。『<sup>レベルアップ</sup>幻想御手』を使って彼女は何をしようとしているのか……。

「それなんだけどね？」

「何か心当たりがあるとでも？」

こう見えても彼は世界最高位に立つ医者だ。それもあらゆる分野に精通し、時にそれは医療とは全く無関係な分野にまで及ぶほどの見識ある人間だ。

そんな彼ならば、木山春生の思惑について何か心当たりがあったとしても不思議ではない。

「うん。……確か君は超能力者<sup>レベル5</sup>第三位の『<sup>レベルガン</sup>超電磁砲』、だったよね？」

「あ、はい。そうですけど……」

視線を向けられ問いかけられた御坂が大きく頷く。

「そんな最強の発電能力者<sup>エレクトロマスター</sup>である君に相談したいんだけどね？」

椅子を回し、御坂へと振り返ったカエル顔の医師は、自らの頭を指さし、

「同一の脳波を持つ人達の脳波パターンを電気信号に変換したら、その人達の脳と脳を繋ぐネットワークのようなものを構築できるかな？」

「そりゃ……、脳波を一定に保つ事が出来るなら可能かもしれないけど……、そんな事を木山先生が？」

考えを巡らす御坂の横で、氷室は人知れず驚愕に目を見開いていたがそれが誰かに見咎められるよりも先に、

「お姉様！」

そこへ白井が携帯を片手に握りしめたまま慌てた様子で駆け込んできた。

「どうしたのよ、黒子。初春さんに何か……」

「それが、その初春と連絡が取れませんの」

「!？」

その言葉に戦慄が走る。

もしそれが単に取り損なった、というだけならば問題はない。

だが、そうでなかったとしたら……。

彼女が向かった先は容疑者である木山春生の牙城だ。もし本当に彼女が犯人だった場合、そこにはその証拠が隠されている可能性がある。

それを偶然見つけたとして、それを木山に悟られでもしたら……。

「マズイわね」

「と、とにかく一度支部に戻って情報を！ それと警備員アンチスキルにも協力を要請しますわ」

「そうね。急ぎましょう！」

そう言うなり二人は挨拶もそこそこに病院から駆け出していく。

「……君はいなくていいのかい？」

一人残った氷室に、カエル顔の医師が問いかける。

「……行きたいのは山々だけど、今は手が離せないから」

氷室にとって初春は過去や今なお続くしがらみに関係なく、初めて出来たと言ってもいい友人だ。心配でないはずがない。

だが現在氷室が抱えている案件は、彼女の手を離れればどう転ぶかもわからない程、不安定な状況にある。

ここで感情の赴くままに行動して今日という日を逃せば、それこそ取り返しのつかない事態に発展する可能性も出てくるほど、重要な時期だ。

それを防ぐため、最良の結末へと導くために仕込みを済ませたにも関わらず、それをふいにすることはできない。

だから、口惜しくともここは彼女達に全てを委ねるしかないのだ。「それに『超電磁砲』<sup>レールガン</sup>が関わっているのなら、私の出る幕はないわ」仮にも学園都市最強の発電能力者<sup>エレクトロマスター</sup>。その戦力は一個軍隊に匹敵する。木山春生がどう動くかは分からないが、さすがに超能力者<sup>レベル5</sup>相手に抵抗しきれるとは思えない。

「それでも心配なんじゃないのかい？」

「心配よ。でもここで手を出す事は出来ない。分かってるでしょ？」氷室皐月の存在は表側の人間には秘されるべきものだ。彼女の存在が公となれば無用の混乱を世間に広める事になりかねない。

それ以上に、『通行止め』<sup>デッドエンド</sup>が生存している事実を『裏』の人間に知られるわけにはいかないのだ。

無論、一部ではすでに知れ渡っている事ではある。だが無暗に広く知られた場合、いらぬ被害を招きかねない事に繋がる。

それを避けるため、多くの人間が苦心して、その存在の秘匿に協力をしてくれている。

そんな彼らの努力を、一時の感情で無下にすることは絶対にしてはならない行為だ。

だからこそ、なおの事氷室はこの件で動く事は出来ない。

事態がここまで発展してしまった以上、裏で動いて解決する事は不可能なのだから。

「それより、彼女の目的は何？　そこまで見当がついているんですよ？」

「確証はないけどね？」

さもありませんと軽く答えを返すカエル顔の医師に、氷室は睨むような視線を向け無言で先を促す。

「彼女は元々とある実験に携わっていたらしいね？　小児用能力教材開発所で行われたA I M拡散力場の制御実験、と言えば君になら理解できるかな？」

「『木原』の体晶実験!？」

「木山春生はその実験体として使われた子達の先生役を務めていたようだよ？」

「……、」

そんなのは詭弁だ。教師と偽って、実際は実験に必要なデータを取っていただけに過ぎない。

「……何を考えているのかは分かるけどね？　彼女はそこまで腐っていないようだよ？」

「……どういう事？」

氷室の問いに、カエル顔の医師は再び画面に別のデータを呼び出す。

「これは……？」

「彼女が申請していた『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の使用申請書だ」

『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』とは学園都市が独自に打ち上げた人工衛星『おりひめ1号』に搭載されている世界最高峰のアブソリュートシミュレーター超高度並列演算機である。

より完全な天気予報を行うため、という名目で開発されたその演算能力は『予測』を遥かに超え『予言』と呼べるレベルにまで達している。

例えば従来の天気予報では『明日は80%の確率で雨が降るでしょう』というレベルでしか予報を出す事ができないが、『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』による天気予報は『明日の午前9時10分00秒に雨が降ります』といった具体的なレベルでもたらされ、事実その通りに雨が降る。

その原因は予報に対する方式の違いだ。

従来の天気予測は過去の気象データと照らし合わせ、似通った天気図の時のデータを元に統計学的に数値として示されていたものだ。そのため全く同一の気象条件でもなければ断言など出来ず、同時に一見同じに見えても実際は微妙に異なることなどザラだ。それゆえ、

あくまでも確率としてしか天気の予測を行うことしか出来なかった。  
しかし『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』は、世界中に流れる空気の粒子の動きを完全に予測演算シミュレートすることで、求める場所と時間帯の気象状況を完璧に割り出し、その結果を弾き出す事が出来るのだ。

まさに学園都市の最先端科学を象徴する存在とも言える代物であり、それ優れた性能であるが故に多くの国家・組織から狙われている存在でもある。

そのため、それら外敵からその身を守るために、『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』は空の彼方——衛星軌道上へと人工衛星に載せられ打ち上げられたのだ。

その上、その開発資料及び関連技術は完全に破棄され、現存するこの一機が失われれば再現は不可能と言われている。

それ故、各国も下手に手を出す事が出来ず、結果『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』は宇宙で安全にその役目を担っているのだ。

一方、その天気予報はもとより外れるはずのない予報のため毎日のように演算し直す必要はない。というよりも完全に無駄な行為だ。そのため月に一度、一か月分の予報をまとめて演算すれば十分事足りてしまう。

では残りの時間を何に使用しているかというと、学園都市の各所で行われている様々な研究の予測演算のために利用されているのだ。

例えば薬物反応、生理反応、電子反応、これら全てを『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』に演算させて、出てきた答えを確かめる程度に二、三度実験すれば安全で効果的な新薬をいとも簡単に作り出す事が出来る。実際、そうやってできた薬も多く、それにより多くの難病患者が救われた例も多い。

また研究者の中では完全に『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の演算に任せて、臨床実験すら実際には行わずに済ませる者もいるらしい。それでもキッチンと結果を出せるのだから、『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の性能がいかに

に馬鹿げているかがよくわかるだろう。

当然、そんな『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』には毎日数多くの使用申請が送られており、それら全てに対応しては消化しきるまでに何百年単位の時間がかかってしまうと言われている。

そのため学園都市は事前にその内容を精査し、その必要性があるかを判断して使用の認可を行っている。

そして目の前の提示された書類は、その申請に用いられるものだ。そんなものをどうやって、とはこの際聞く必要はない。この男は必要と感じればどんな手段を用いても用意する人間だ。『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の使用申請書如き、赤子の手を捻るより易く手に入れる事が出来るはず。

促されるまま、氷室はその文面へと目を通す。

「……これって」

「どうやら彼女の目的はその実験の犠牲となり意識不明に陥っている子供達の恢復法を探る事、のようだね？」

「そのために『レベルアップ幻想御手』を？　それで他の人間を意識不明にしてたら本末転倒でしょうが！」

「その意見はもっともだよ？　でも同じ申請を彼女は23回も行つて、その全てを却下されているね？　だからこそ、別の手段に踏み切るしかなかったんだね？」

木山の真の目的は脳波ネットワークによる『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の代用。それによって子供達の快復法を探ること。

そのための手段が『レベルアップ幻想御手』を使った脳波の均一化と、それによる電氣的なネットワークの構築というわけだ。

確かに人の脳はある種の演算機と言える。人の脳の性能は時に単純計算しかできないコンピューターを上回る能力を発揮する事もあるぐらいだ。それらをネットワークでつなぎ合わせれば『ツリーダイアグラム樹形図の



設計者』と同様の並列演算機を作り出す事が出来き、快復法を探るための予測演算機として扱う事が可能かもしれない。

そして学生達が注目していた能力強度レベルの上昇は、そんな並列演算機に自らの脳が組み込まれたことで、単独では弱い能力しか持たない能力者の処理能力が向上し、一見すれば能力強度レベルが上がったように見えた事によるものだ。また同系統の能力者の思考パターンが共有される事で、より効率的に能力が使えるようになった、といった側面もあるのだろう。

だが、そのためには脳波をネットワークに対応したモノへと常に調律する必要がある、それにより脳への負担が増加。結果、昏倒状態へと陥ったというのがこの事件の真相だ。

「だからって、許される行為じゃない！」

「そうだね？　けど、この件に関してはあの子たちや警備員アンチスキルに任せるのだから？」

「……ええ」

事態はすでに解決に向けて動き出している。

木山の目論見はすぐにでも露呈し、その身柄は警備員アンチスキルによって拘束されるだろう。

その予測はおそらく裏切らない。単なる一科学者が抵抗できるほど、警備員も超能力者アンチスキルレベル5も甘くはない。

だから、

「この件に関して、私に出来る事は何もない。けど……、」

「……何か気になる事でもあったのかい？」

「大有りよ」

カエル顔の医師の問いに、氷室は怒りに燃えた表情で強く頷いた。

「この裏には“アイツ”が関わってる」

「……やはりか」

「予想は出来てたのね」

「『彼』との付き合いは結構長いからね」

遙か昔、瀕死だった『彼』を助けたのはこの男だ。正直なところ「何故助けた！」と責めたいところではあるが、それが彼の仕事であり使命である以上、文句を言うのは筋違いというものだ。

例えばそれが犯罪者であれ、お金のない浮浪者であれ、彼は目の前で苦しんでいる人がいればその素性に貴賤を抱かずそれを助ける。

それが医者というものであり、医者としてあるべき姿だ。少なくとも『冥土<sup>ヘブンキヤンセラ</sup>帰し』という医師は、そういう人間である。

それを否定する事は氷室にはできないし、むしろ賞賛すべきだと思う。

どんな人物に対してであれ、私情を挟まず、状況に流されず、平等に接する事が出来る人間など、そうはない。それこそ聖書に記された『聖人』と呼ばれる人物でもそこまで徹底できた人物が、はたしていただろうか……。

だからそれを非難するのではなく、むしろ誇るべきだ。そんな人物を『親』として持てた奇跡に喜びと感謝を抱くべきで、まかり間違っても責めたてるなんて事をしてはならない。

だが、そんな彼をも裏切って『彼』は事を為そうとしている。

この学園都市をでっちあげ、とある『計画』を誰にも悟られず、誰も逃れられないよう十重二十重に策を弄して囲いながら、その実現に向けこの街に住まう全ての者を人知れず操っているのだ。

そして氷室皐月はその『計画』の中心に近い位置に立たされている。

カウンターストップ

『抑止力』の力を『彼』がどう扱おうとしているのかは未だ不明瞭ではあるが、大凡の見当もついている。

だが、わざわざそんなふざけた思惑に乗ってやる義理などどこにもない。

『彼』は敵だ。氷室皐月にとって唯一にして最大の宿敵。ラスボス

しかし対抗しようとも、今の氷室ではその術はない。

それを理解した氷室は、当然の如くその力で『彼』が居ると“さ  
れている”『窓のないビル』に攻撃を仕掛けようとした事があった。

その結果は……、失敗。

何故なら“捉えられなかった”からだ。

氷室はそこに居る筈の『彼』の存在を『抑止力』カウンターストップで捉える事が出来なかった。

その時の感覚を言葉で例えるのなら“雲を掴むよう”と表現するべきだろうか。それよりもっと曖昧で虚な“幻”を掴んだと言った方が正しいのかもしれない。

とにかく『窓のないビル』に外部から干渉する事は不可能だった。『窓のないビル』そのものの破壊も含めて、だ。

かといって内部への侵入も事実上不可能だ。

入口すら存在しないそのビルに入るには、『案内人』テレたる空間転移能力者の協力が必要だが、彼女を真に味方につけられるかどうかという問題もある。それに失敗すれば、壁の中や地中深くへと飛ばされ生き埋めにされる可能性がある。

それに例え彼女を味方につけられたとして、自らが歓迎しない人物を『彼』が受け入れるだろうか？

『彼』ならば、それこそ転移中の人物に干渉して、その出現座標を狂わせることぐらいやってのけるだろう。

故に、万に一つの可能性に賭け玉砕覚悟で挑むほど、氷室は馬鹿ではない。

いや、もしかすると本当はそこに居ない可能性すら存在する。

もしくは『彼』らしき存在が居たとして、それがはたして本物の『

『彼』なのか、それともホログラムによる虚像か、よく似たクローンか……。

その何れの可能性も否定できず、この学園都市ならばそんな事すら当たり前可能にしまう技術力がある。

いずれにせよ、『彼』自身を攻めるのは、現段階では現実的な方法とは言えない。

それに良くも悪くも学園都市の裏表を制御しているのが『彼』であり、『彼』が居るからこそある一定の秩序が保たれているという側面も存在する。

無論、『彼』自身がその秩序を乱す要因ともなり得るのだが……。

ともかく、『彼』に対抗しようとするのであれば、その『彼』が企てている『計画』の根幹を、原作でも語られていなかった『真の目的』を探り出し、潰すのが一番だ。

そのために氷室は前世で得た原作の知識と、実際にこの世界で起きている現象、そして原作では得られなかった様々な知識と理論をかき集め、必死にそれを見抜こうとしている。

そのためにはあえて踊らされ、『彼』の思惑に従う事も容認する。そこから見えてくるものがあるのなら、率先して飛び込むこともやぶさかではない。

だが、自分以外の人間が……、特に誰かを想い、行動し、『善』を為そうとする者達の、そのかけがえのない良心すらも利用し、彼らを絶望の淵に貶めようとしているのであれば、許容することなど出来はしない。

それに対抗する事など、今はまだ出来ないとわかっていても許すことなど出来るはずがなかった。

しかしこの事件で氷室皐月に出来る事はもはや何もない。

黙って事の推移を見守り、被害が最小限で済むことをただ祈る事しかできないのだ。

それを口惜しく思っている、どうにもならない現実がある。

全てが思い通りになる現実など、この世には存在しえないのだから。

（けどそれは テメエ も同じだ いつまでも 思い通りに なるだな なんて思っ  
て思わないことね、 “アレイスター” ！）

拳を握り、心の中で宣誓を新たにして、氷室は思考を切り替える。

「……それで、治せるの？」

「誰にモノを言ってるんだい？ 僕は医者だよ？」

「……そうね、愚問だったわ」

原因が分かり、目の前に患者が居て、彼が医者として立つのであれば、その結果はもう見えている。

「任せるわ。私の友人もそこに含まれているから……」

「言われるまでもないね？ それが僕の仕事だからね？」

「うん、よろしく。それと……」

「それもわかってるよ？」

氷室の言わんとしていた事を先に察したカエル顔の医師が、強く頷きその意を汲んだ。

「……ありがとう」

「構わないよ？ 君に言われるまでもなく、そのつもりだったからね？」

「そうね。貴方は医者だものね」

「そうさ。そうでない僕は、僕じゃないからね？」

冗談めかしに答えたその言葉に、氷室はクスリと笑顔を浮かべた。  
「じゃあ、もう行くわ。折角の仕込みもきちんとして調理しなくちゃ意味が無いからね」

「また何か企んでいるのかい？」

氷室の不穏当な発言にカエル顔の医師が眉を顰める。

「失敬な。それじゃあまるで、いつも私が悪だくみをしているように聞こえるじゃない」

「……そうかね？」

顔にありありと「疑ってます」と書かれた顔を向けるカエル顔の医師に、むすう、と頬を膨らませた氷室だったが、これ以上問答している暇もないので、身を翻し部屋の扉へと歩き出す。

「……と、そうだ。今夜、おそらく重体患者一名が追加される予定だから、そのつもりで」

「それが事前にわかっているのなら、未然に防いでもらいたいのだがね？」

「出来ればそうしてるわよ」

悲しげな表情を浮かべ言葉を返す氷室の姿に、カエル顔の医師はそれ以上追及する気を失った。

「やれやれ。君は相変わらず厄介事ばかり持ち込んでくれるね？」

「それを如何にかするのが、貴方の仕事でしょ？」

「医者としてならね？」

「頼りにしてるわ」

それじゃよろしく、と扉の向こうへ消えてく氷室の姿を見送ったカエル顔の医師は、もう一度深いため息を吐き仕事へと戻っていた。

医者として、苦しみに喘ぐ患者を救う、そのために。

## 行 間

### 行 間 一

学園都市にはいくつもの重要施設が存在する。

例えば第二学区には爆発物や兵器等の試験場があり、第三学区には外部の重鎮を招く施設が多数存在する。

そして当然、そういった場所には常時かなりの人員を配置し、当然の如く厳重な警戒態勢が敷かれている。

ここもそんな重要施設の一つ。

『ツリーダイアグラム樹形図の設計者情報送受信センター』。

第二三学区に存在する一般人立ち入り禁止区域に指定されている、学園都市内でも有数の最重要施設である。

そんな重要施設内をハンドライト片手に歩く男は、変わり映えない真っ暗な廊下に嫌気が差し、ふいに大きな欠伸を漏らした。

「ふあゝ」

「……おい、気を抜くな」

それを見咎め、同僚からの注意が飛ぶ。

「んなこと言ってもよお……こうも暇だとあくびの一つも出ちゃうっての」

目頭に滲んだ涙を拭いながら男は恨み言共に半眼を同僚へと向けた。

「だいたい、こんなところを襲ってくる奴なんていねえって。ここは学園都市でも一番警備が厳重な施設とこころだぜ？」

宇宙に浮かぶ『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』との交信はこの施設でしか行われていない。つまり学園都市が誇る世界最高のコンピューターとの唯一の玄関口と呼べる場所だ。

当然その警備は他にも増して嚴重で、各所にはあらゆる種類のセンサーが備え付けられ無数の警備ロボットが敷地内及び施設内を隈なく巡回している。

「これだけ機械警備セキュリティが充実してるってのに、俺達みたいな人間がわざわざ見回る必要なんてあるのかねえ……」

当然それらの警備機器も学園都市製の最先端科学の結晶とも呼べるモノばかりだ。それを十重二十重と設置していれば正直なところ、人の手などいらんのではないかと男は思う。それこそ機械が発見してから駆け付けたって十分間に合うはずだ。

だが、同僚の意見はそうではないらしく、

「……所詮、機械は機械だ。人間ほど融通は利かん」

「そんなもんかねえ……」

むしろ融通を利かすようでは警備の意味がないのでは、と思ったが男は口には出さなかった。

「しかし、これだけ暗くて変わり映えもなしとなると、やっぱり眠たくなるわ。しかも、こちとら3日連続で夜勤だぜ？」

「……だからといって手を抜いて良い理由にはならない」

「はいはい。……ったく、オメエは真面目だなあ。もうちょっと気を抜かねえとぶっ倒れちゃうぜ？」

「……問題ない。体は十分鍛えてある」

「あー、そうかよ。ったく、融通の利かねえのはどっちだよ……」  
これなら黙ってる分、機械の方がまだマシだと男は内心で嘆息する。

「そーいやあ、テメエ、前は警備員アンチスキルだったって聞いたけどホントか？」

「……昔の話だ」

「マジなんだな。……けど、なんでまたこんな場所の警備員なんてやってんだ？ 同じ“警備員”なら『アンチスキル』の方が華があるじゃねえか」

「……アレは基本的にボランティアだ。金にはならん」



「あー、まあ、確かに……」

警備員は、同僚の言葉通り基本的にボランティア活動だ。給料なし、能力者を相手取るため危険度高し、と激務の割に利益がほとんどない。

とはいえ、全くない、というわけでもない。それなりの報酬は支払われるし、各所でいろいろと融通が利くようになる。何よりこの学園都市の大半を占める学生たちに一目置かれるため、舐められる事がなくなるという事もあり、志願者はそれなりに多かったりする。

だがそれが仕事の内容と見合うかと問われれば、答えはNOだ。その点、施設警備なら最低限の体力と腕前さえあればどうにかやっていけるし、給料だって安定している。二束の草鞋を履くよりかは随分とマシな状況だ。

それに先にも述べたとおりこんな場所を好んで襲ってくるような輩は滅多におらず、いたとしても大抵は各所に設置された防犯設備セキユリタイによって発見され、即座に取り押さえられる事になる。危険度としても警備員アンチスキルよりかはかなり安全で楽な仕事と言えるだろう。

「……そういや、テメェんところは今度子供が生まれるんだったか？」  
「……ああ」

真面目で仏頂面な同僚の顔が、僅かに崩れたのを男は目にし、そういう顔も出来るんだなと純粹に驚く。

と同時になるほどと納得した。

生まれてくる子供のため、その世話をする妻のため、この同僚は危険度の高い警備員アンチスキルを辞め、安定した職種へと転職を行ったのだから。

だがしかし、それでもなお“警備員”を選んだのは、この同僚にはそれ以外に取り得などなかったという事なのだろうか。

恰幅のいいゴツイ体と鉄面皮とも言える強面な表情は「お前どこの軍人だよ」と思わずツツコミたくなるような容姿だ。そんな彼が街を歩けば自ずと道が開かれるであろうことは想像に難くない。そ

してそんな容姿でサラリーマンだの接客業などといった職種に就くのはまず不可能で、となればその他人を寄せ付けない雰囲気を利用した警備員ぐらいしか取る道はなかったのだろう。

（けどま、顔はこんなだが、話してみれば結構気のいい奴だしな）融通の利かない生真面目過ぎる性格を除けば、の話ではあるが。

「かぁー、羨ましいねえ。こちらら結婚どころかここ数年まともに女と付き合ってすらいねえってのに……」

「……先週、新人と花街に行ったと聞いたが？」

「花街って……また古い言い回しじゃがって」

死語どころのレベルじゃない、旧時代も過ぎるほどの昔の言い方だ。

「まあ、行くにはいったがな。けどダメだ。全部あの野郎に持って行かれちゃった……。くそ、どいつもこいつも人を顔で判断しやがって！」

「……顔だけではないだろう」

「あ？ そりゃどういう意味だ？」

「……、」

男の凄みに同僚は答えず、再び元の仏頂面へと戻って仕事へと視線を向けた。

「……チッ。まあ、それは後で問い詰めるとしてだ」

手に持った懐中電灯を振り回しながら男は首を鳴らし、

「こう言っちゃあ不謹慎だが、いっそどこぞの馬鹿でも忍び込んでくれねえかねえ。そしたら、そいつをとっ捕まえて特別ボーナスでもせがめるのによお」

「……その前に警備体制の不備を指摘され、減給されるのがオチだ」  
「おいおい。それじゃあどの道俺らの給料が上がる事はねえってことじゃねえか」

「……そうなるな」

「はぁー……、安い給料で連日連夜の退屈な巡回たあ、なんとも割の合わねえ仕事だぜ、まったく……」



なロングコートを羽織り、手には黒手袋、頭にはパーカーまで被っており季節感を完全に無視していると思えない格好だった。その上、その顔にはアフリカあたりに住まう少数民族が使っているようなおどろおどろしい仮面が被さっており、それだけでも十分不審者に値する姿だ。

しかしそれを眼にするものは誰一人として存在しない。

彼女の周囲には制服を着た男たちが揃いも揃って居眠りをし、床に倒れて寝転がっている者まで存在する。

部屋には当然の如く監視カメラが設置されているのだが、それを見咎めて人が駆けつけてくる様子もない。

学園都市でも有数の最重要施設にもかかわらず、不審者を絵に書いたような女は何に憚る事もなく平然とこの施設の『宝』へと手を触れ、作業を続けている。

「無駄だとは分かっていたけど……。マズイわね」

このままじゃ“止まらない”。そう呟き、コンソールにかけた指を手早く躍らせていく。

「……チツ、やっぱダメか。軌道制御のアクセスにはかなり嚴重なプロテクトがかけられてる。これは私じゃ無理ね」

何より時間が足りない、と息を吐き、

「仕方ない。“アレ”しか方法はないか……」

忌々しく呟いた女は、また別のデータを画面に表示させ、その全て脳裏に焼付ていく。

そして最後にその痕跡を消す作業を終えると音もなくその場から立ち去っていった。

後に残るのは勤務時間中にもかかわらず居眠りに耽る職員達だけ。

いや。この夜、『ツリーダイアグラム樹形図の設計者情報送受信センター』に詰めていた全ての人間が眠りに落ち、侵入者の姿を捉えたものは機械を含め、何一つ存在しなかったという。

それは第七学区のとある公園から伸びる光の柱が目撃されたと報道がなされた、その夜の出来事だった。

## 第05章 とある新友と秘密部屋《シークレット・ガーデン》

初春飾利は浮かれていた。

その原因は彼女の隣に座る一人の人物に由来する。

春上衿衣。

本日よりめでたく初春のルームメイトとなった少女だ。

夏休みの中盤という中途半端な時期ながら、第一九学区から初春達の通う柵川中学に転校してきた彼女の面倒を初春は風紀委員である事を理由に、担任教師から仰せつかっていた。

初春としてもその言葉に異存はなく、むしろ嬉々として転校まもなく不安の多い彼女の面倒を見るために張り切っていた。

もっとも駅まで彼女を迎えに行っている間に引越し業者が寮の扉の前に彼女の荷物を放置して行ってしまうわ、最近頻発している地震に関して警備員アンチスキルとの合同会議に出席するため中座せざるを得なくなるわと、のっけから失敗続きだった。

とはいえ、それらもすべて片付き今はゲームセンターで撮ったプリクラ写真を彼女の携帯に転送してあげている所だった。

「これでよし。……はい！」

「うわぁ……」

初春がニッコリと笑ってデータを送り終えた携帯を返すと、春上も自らの携帯にも映し出された映像を見て、感動に振るえ表情を綻ばせる。

はたから見れば仲のいい友人というよりも、姉妹のような雰囲気漂わせている二人だった。

「なんというか……、不思議な子ですわね」

「そう？　可愛いじゃない」

少し離れた場所にある自販機の前で、初々しくも微笑ましい二人の様子を暖かく見守っていた白井と美坂が、話題の中心に居る春上について互いに異なる評価を口にした。

春上衿衣という少女を一言で言い表すのなら『天然』。言い方を変えれば独特の感性の持ち主だった。

例えば先ほど『モグラ叩き』のゲーム機を前にした時のことだ。

『モグラ叩き』というゲームは言うまでもなく、穴から顔を出す『モグラ』をハンマーで叩いて、その回数を競うゲームである。だが春上はハンマーをギュッと抱きしめたまま、ヒョコヒョコと顔を出す『モグラ』をじっと見つめ、制限時間が過ぎるまでその光景をひたすらに愛でていた。それを見かねて「叩いてみれば？」と勧めてみても首を振って「可哀そう」と拒否。そうでありながら都合4回もやろうと———というか、愛でようとしたときはさすがに御坂達も失笑を禁じ得なかった。

またしゃべり方も『おっとり』というより『のんびり』といった感じで、何かにつけて新鮮味を帯びた驚きを示し、まるで何もかもが初めてといった様子を見せている。

少なくとも白井や御坂の周囲にはいなかった種類の人間だ。

「なんか、昔の初春を思い出しちゃった……」

しみじみとした口調で呟いた佐天の言葉に、御坂達が疑問符を頭に思い浮かべる。

「……むかし？」

「あ、いや、入学したての頃に……」

御坂達の疑念に答えようとした佐天だったが、ふと視線の先にいた春上が立ち上がりふらふらと歩き出すのを目にして言葉を止めた。

「春上、さん……？」

初春の声にも反応を示さず真っ直ぐと直進する春上の目の前に、

「あ、あぶない！」

静止の声も間に合わず、透明なガラスに頭をぶつけてしまい春上が蹲る。

「だ、大丈夫ですか、春上さん！」

慌てて初春が駆け寄り、介抱に赴く。

「……どうしたの？」

その突飛な行動の理由を佐天が尋ねると、

「アレ……」

ぶつけた額を押さえながら春上がガラスの向こうにある一枚のポスターを指さした。

「アレって……」

「花火大会のポスター？」

河川敷を舞台に行われる夏恒例の花火大会の開催を知らせるポスターだ。

「あ、そういや今日じゃないですか、それ」

「ねえ！ みんなで行こっか！」

「いいですわね！ 浴衣なんか着て……！」

御坂の提案に白井が飛びつかんばかりに喜びを露わにする。とうか実際に飛びついて、御坂に押しのけられていた。

「行きましょっか」

初春のかけた言葉に春上が驚いたように振り返る。

それに何を言うでもなく初春は微笑みで返し、春上の手を引いて立ち上がらせた。

「あ、そうだ！ どうせなら、氷室さんも誘おうよ！」

「あ、いいですね！」

「氷室って、確か虚空爆破事件グラビトンの時の……」

「ええ、そうですわ。お姉様が無意味に難癖をつけられていた方ですの」

「難癖って、アレは——！」

白井の言い回しにあの時の感情が再燃した御坂が食って掛かる。



そんな二人の様子を初春が苦笑気味に眺めていると、

「……どうしましたか、春上さん？」

ふと春上が自らを見つめているのを感じ、声をかけた。

「あ、あの……、氷室さん、って誰、なの？」

「私達の先輩で高校生の人です。とっても美人で良い人なんですよ。きつと春上さんとも仲良くしてくれます」

「そう、なの？」

「はい！ 絶対です！」

グッ、と拳を握りしめ力説する初春に少しビビりながらも春上が頷きを返す。

「……ですが、今日の夜となると急な話となりますし、皐月お姉様にもご予定があるのでは？」

先ほどとは立場の逆転し、喰いかかってくる御坂を適当にあしらう白井がふと疑念を漏らす。

「私、電話して聞いてみます！」

気合を入れて手を挙げた初春がそそくさと携帯を取り出すと、氷室の番号へと呼び出しを掛ける。

少し長めのコールが続き、しばらくして回線がつながった。

「――あ、氷室さんですか？ 初春です」

『お久しぶり』

開口一番のやんわりとしたその返答に、初春の脳裏に穏やかな笑みを浮かべる氷室の表情が思い浮かぶ。

それこそが初春が一番に思い浮かべる『氷室皐月』の姿だ。

「あの、今、お時間大丈夫ですか？」

『今……？』

電話先で氷室がしばし逡巡するようなそぶりをみせ、

『まあ、大丈夫でしょ。それより何か御用事？』

「いえ、用という程の事ではないんですけど……」

徐に話を切り出そうと初春が口を開きかけた所で、

パンツ、という乾いた音が電話の向こうから響いた。

（今のって……銃声！？）

日本では銃刀法によって所持する事が禁じられているものだが、ここ学園都市ではそんな法律などお構いなしに結構目にする機会が多いものだ。

もっとも一般人なら『外』と変わらずまず目に掛る機会はないだろうが、ジャッジメント風紀委員である初春は、そうした銃火器で武装した『不良アウトグループ』と出会う機会も幾度があり、その音が本物かどうかなど電話越しでも判断はつく。

「ひ、氷室さん！？　今の音は……！！」

『……ああ、そっちにも響いちゃってたか』

何事かと声を荒げた初春とは裏腹に、返ってきた氷室の声は穏やかなままだった。

『テレビよ、テレビ』

「テレビ？」

『そ。丁度今、ホラーを見ている真っ最中なのよ。違法実験を行っていた研究施設に通りすがりの殺人鬼が襲い掛かって、中にいた研究員たちの四肢を次々と折りながら猟奇的なオブジェを築き上げていくっていうB級ホラー。それを臨場感たっぷりのリアルサウンドで実行中』

「な、なんでそんなものを……」

『夏だからじゃない？』

理由になっているのかいないのか。よくわからない返答を返されたが、ともかく初春が抱いた懸念が杞憂というかただの勘違いだと判明し、そつと胸を撫で下ろした。

『えーっと……これでOKかな？　初春、何か聞こえる？』

「いえ、何も」

『ならOK』

ボリューム大方音量を下げたのか、スピーカーの向こうから聞こえてきた銃

声やそれに続く悲鳴は一切聞こえなくなった。

『……それで?』

「あ、はい。実は――」

春上が転校し、ルームメイトとなった事。その彼女が今夜の花火大会に行きたがっている事。そしてどうせなら氷室もどうかと誘いの電話を入れたことを一通り話終える。

「と、いう事なんです、どうでしょうか?」

『そっか。もうそんな時期なのね……』

初春の話を聞き、氷室は感慨深げに呟きを漏らすと、

『……でも、ごめんなさい。残念ながら今夜は行けそうにないわ』

「そう、ですか……。残念です」

『ホント、ごめんなさいね』

「いえ、いいんです。急なお誘いでしたし、ご予約があるなら仕方ありませんから」

『そう言ってもらえると助かるわ。しばらく忙しくて手が離せそうにもないんだけど、月末辺りには時間が取れそうだから、もしよかったらその時にでもまた誘ってくれる? もちろん、新しいルームメイトの子も一緒にね』

「あ、はい! その時は是非に!」

『じゃ、悪いけど、ちょっと続きが気になるから……』

「はい。急にお電話してすみませんでした」

『いいのよ。また、いつでもかけてきて』

「はいっ! ではまた」

ピッ、と終話ボタンを押し電話を切ると、白井が口火を切って結果を尋ねてきた。

「ダメでしたの?」

「ええ。別の予定が入っているらしくって……」

「そうです。まあ、仕方ありませんわね」

「けど、その予定って、彼氏とデートだったりして……!」

残念だと息を吐く白井の横から佐天が茶化すように声を上げた。

「まさかっ!？」

「いやいや、わかんないよー。氷室さんって超美人だし。彼氏の一人や二人いてもおかしくないんじゃない？」

「美人なのは認めますけど、二人とかはありえません! 二股じゃないですか、それっ!？」

そんなことするような人じゃありません! と初春は声高に主張し、佐天へと詰め寄る。

「まあまあ、初春さん落ち着いて。そんな話をここでしたってどうしようもないでしょう。それにほら、春上さんが置いてけぼりを喰らってるわよ?」

御坂が示す通り、この中で唯一氷室との面識のない春上が所在なさ気に輪の外で一人佇んでいた。

「あ、すみません、春上さん!」

「ううん。いいの。初春さんにとって、その氷室さんって人は大事な人なんでしょう?」

「それは、その……」

「そうそう。初春にとって氷室さんはヒーローだものねえー」  
「ヒーロー?」

「そ、そんなんじゃないよ! ただ昔助けて貰った恩人ってだけです! それに氷室さんは女性ですよ! ヒーローじゃなくてヒロインじゃないんですかっ!」

「いやいや。今時のヒーローは女性もありっしょ。それに氷室さんだったらお姫様よりも王子様の方が似合いそうだったけどなあー」

「そうですわね。確かにどちらでもいいける口ですわね」

「ですよねー!」

「あー、もう! その話で盛り上がんって言ってんでしょ!」  
ブチリと何かが切れる音と共に御坂が吠えた。

「なんのですの、お姉様。幾ら皐月お姉様と馬が合わないからと言って、私たちに八つ当たりされずとも……」

「そうじゃないっ! 今はそれよりも花火大会の事でしょうが!？」

「あ、そういえばそういうお話でしたわね」

「忘れてたんかいっ!？」

ツッコミと共に御坂の額から紫電が散る。

と、そこへ店員らしき男が近づき、

「お客様。申し訳ありませんが、店内での電撃のご使用はお控え願えないでしょうか？」

「……すみません」

店員の額に青筋が浮かぶのを見て、御坂は即座に頭を下げた。

「——ってえ!？」　なんで私が怒られなきゃならないのよー!」  
ごもつとも。

(それもこれも、全部あの女のせいだっ!)

くしゅんっ!?

「……風邪でも引いたかしら？」

もしくは誰か噂でもしているのか？　と、鼻を吸いながら氷室は首を傾げた。

『一誹り、二笑い、三惚れ、四風邪』と言う諺を当てはめれば、悪い噂をされているのだろうが、他にも『一に褒められ、二に憎まれ、三に惚れられ、四に風邪をひく』や『一に褒められ、二にふられ、三に惚れられ、四に風邪』など一と二には諸説あり過ぎるためどれが本当か当てにはならない。

「ま、いっか。どうせたいした噂でもないでしょうし？」

どこぞの誰かが難癖でも吹っかけているのだろう(正解!)と断じ、氷室は部屋中に木霊する耳を劈くような悲鳴をBGMに、再び目の前の“ホラー”へと集中するのだった。

「それはそうと春上さん。浴衣、持ってます？」

初春の問いに春上は小さく首を横に振るう。

「ううん。持っていないの」

「じゃあ、買わないとダメですね」

「いいの。このままでも」

「ダメですよ、そんなの!」

「そうだよ。せっかくの花火大会なんだしさ」

「ですわね。私服では少々風情に欠けますし……」

「でも浴衣って高いの」

「なら、歓迎祝いつて事で皆で折半して買ってあげましょうよ」

世の理不尽さを呪い暴走していた御坂が、ふと我を取り戻し、そんな提案を告げる。

「あ、それ良いですね!」

「そんな! 悪いの!」

「そんな事ありませんよ。ね、皆さん?」

その言葉に一同が頷くのを見て、初春は気にする必要はないと春上に微笑みかけた。

「でも……」

初春達の善意に戸惑いを隠せない春上は、しばし悩むそぶりを見せたが、しばらくしてギュッと両手を胸の前で握りしめると、

「……やっぱり、悪いの。大丈夫。このままでも花火をみるだけなら十分楽しめるの」

「春上さん……」

出会ってから間もないためか、頑なに皆からの好意を拒絶する春上の姿に初春は胸を痛め、表情を曇らせる。

他の面々の間にも「どうしようか」といった雰囲気の流れ、お互いに顔を見合わせるも、このまま強引にプレゼントしたところで春上の気を害すだけにしかならないとわかつているため、無理を押し通す事も出来そうにない。

微妙な空気に覆われる中、唐突に初春が「あ!」と声を上げ、

「“あそこ” ならあるかもっ!」

「あそこ?」

「はい！ “あそこ”ならお金がなくても大丈夫です！！」

心機一転、鼻息も荒く主張する初春に、春上は事情が分からずにキョトンとした顔を浮かべ、同じくその意味の理解できていない御坂と佐天が思わず首を傾げながら顔を見合わせた。

そんな中、ただ一人、白井だけがその言葉の意味を理解し、腕を組んで頷く。

「なるほど。その手がありましたわね」

「黒子。アンタ、初春さんの言ってることがわかるの？」

「ええ、まあ。ただ、お姉様には少々不意かもしれませんが……」

「？ どういうこと？」

「行けばわかりますわ」

それ以上の言葉は告げず口を閉ざした白井の態度に、御坂が首を傾げる一方で、気合十分な初春が春上の手を掴み、

「さあ、行きましょう！ 春上さん！」

「えっ？ あ、あの……、どこに……？」

「『シークレット・ガーデン』です！」

「「「シークレット・ガーデン？」」」

「うわぁ……」

「これはまた……」

「すごい……」

初春と白井の先導で連れてこられた先に待っていた光景に、御坂達が思わず感嘆の声を上げた。

見渡し限り目に映るのは服、服、服の山。

もっともそれ以外にも、テーブルやらソファーやらテレビなどといった家具やボードゲームやらカラオケ等といった遊具設備も置かれてはいるのだが、部屋の半分以上を占めているのは全て『服』だ。

服とそれを整理するためのハンガーや箆筒、後は大きな姿見がデカデカと置かれており、その様はまさに――

「なんだか、お店みたいなの」

「ここが『秘密の部屋』？」  
シークレット・ガーデン

「はい！」

「って、ここ『個室サロン』だよー！？」

「そうですわ」

佐天の問いかけに白井は静かに頷いて肯定の意を示した。

『個室サロン』とは、言うなれば「ちよつと豪華なカラオケボックス」である。

ただ一点、違う所があるとすれば、それは部屋の中でする事がカラオケのみに留まらないという事だ。

そもそも学園都市は無数の学校が乱立する街であると同時に、街そのものが一つの学校のような存在として成り立っている。

人口の約八割を占めるのが学生であるからこそとも言えるが、それ故に、この街で暮らしていく上で子供達は「学生らしい生活」を直接的または間接的に強いられる事となる。

分かりやすい例で言えば、交通の要であるバスや電車の運行時間。これらは全て学校の登下校に合わせるように運行予定が組まれており、完全下校時刻後は「夜遊び禁止！」とばかりにプツリと便が途絶える。そのため時間ぎりぎりまで学校に居残ってしまった学生や、遅くまで遊び惚けていた学生は徒歩での帰宅を余儀なくされる事になる。

また娯楽関係の商品やサービスには高額な税が掛けられており、無駄遣いが出来ないように間接的な制限が掛けられていたりもする。もっともその代りに生活費として出ていく水道光熱費や電気代はかなり安くなっているため、多少の贅沢ぐらいなら無能力者の奨学金レベル0 おきめうりようでも十分できる程度には余裕が生まれるように出来ている。無論、



その裏にはあまりに締め付けすぎると逆に反感を買い、犯罪に走る者があらわれかねないと言う懸念があるからなのはどういうまでもない。それでも犯罪に走る学生は居るのだが……。

ともあれそうした制約が常に付きまとい、かつそれらを取り締まる目もそこら中に散らばって存在している。

街中では警備員や警備ロボットが、学校では教師が、家となる学生寮ではそれを管理する各校が管理人を派遣しており、生活の至る場面で常に大人たちの監視の目が学生達に向け光っているのだ。

そんな状況に晒されていたら、子供だってストレスを感じ嫌気が差してしまう。

それを解消するための場所として存在するのが『個室サロン』と呼ばれる商売だ。

カラオケボックスと同様に、時間を区切って部屋を借りる事が出来る。料金は部屋の大きさや設備の内容、利用時間によって決められ、その時間内であれば自由に何をしてもかまわないようになってる。もつとも当然“公序良俗に反しない範囲で”という事にはなるものの、ゲームをしたり、パーティーを開いたり、もつと単純にだらけてテレビを視たり、本を読んだりと誰の目を気にすることなく好き勝手に構わない。

思う存分、時間の許す限り学生達が思いっ切り羽を伸ばせる空間を手に入れる事が出来る、それが『個室サロン』である。

ただ1つ難点があるとすれば、通常のカラオケボックスよりも少々割高である事だろうか。

そもそも学園都市の地価相場は『外』と比べ総じて高い。その上、部屋の中には娯楽用の道具・設備が完備されているため、先にも述べた娯楽税と相まってどうしても基本料金が高く設定されてしまうのだ。

それ故そのあたりの事情が世の学生に「ちよつと豪華なカラオケボックス」等と呼ばれる所以でもあり、同時においそれと手を出しづらい雰囲気を与えてしまっている原因でもあった。

そのため、絵に買いたたいような一般学生である佐天にとって、初となる『個室サロン』だったりもする。

だが、そんな佐天でも、連れてこられたこの部屋があまりにも異常である事ぐらいは理解できる。

「まあ、驚くのも無理はありませんわ。この部屋は少々特別ですから……」

「どういう事よ？」

「ここは皐月お姉様が年間契約で独占している部屋ですよ」

「はあ！？ つーか、『皐月』って……」

「ええ。お姉様が毛嫌いしているあの『皐月お姉様』がここのオーナーですよ」

ようやく白井の言った『不本意』の意味を知った御坂は、その顔に隠すことなく渋面を刻んだ。

「何よそれっ！ というか、そもそも“年間契約”なんて、聞いたことが無いんだけどっ！」

「なんでも株主への優待特典だとか」

「株って……。あの女、株なんてやってんの？」

「ええ。実質的な運用は専門家にまかせっきりとこの事ですが、かなりの利益を得ているそうです。それで得たお金で、この部屋やここにあるお洋服を取り揃えていらっしゃるのですわ」

「ってことは……、ここにある服って全部氷室さんの！？」

「どんだけ金持ちなのよ！」

御坂も自分がそれなりに裕福であるという自覚はあるが、さすがにここまですっ飛んだお金の使い方はできない。

目に映る服のほとんどが服だ。店舗ビルの最上階半分のスペースを使ったこの部屋の、その半分以上が服で埋め尽くされていること

から考えてその数は最低でも100や200着は下らないだろう。もしかすると一桁異なるかもしれない。

しかもその種類も多種多様だ。パツと目につく所にあるものだけでもカジュアルとフォーマルが入り乱れており、その中でもスポーティなものやボーイッシュなものもあれば、女性らしいフェミニンなものやギャル風のもの、セレブ系でもゴージャスなものからクラシックなものまでほとんど全てのジャンルが取り揃えられているように見える。

もちろんそれだけにはとどまらない。少し奥へと進んでみれば各国の民族衣装に各種制服、メイド、バニー、ゴスロリ、ボンテージ等といったコスプレ衣装も見取れる。また別の場所には下着に靴、アクセサリーやバッグなども各種揃っているようだ。

そして最たるは壁際に整然と並んでいる和洋中の鎧や兜、宇宙服、ウエディングドレス、着ぐるみetc...

「いや……、あれも『服』と言えば『服』だけどさ……」

「広い意味で言えば『服』ですよ、確かに……」

もはや『服』というカテゴリを“身に着けるもの”という意味で以て極限まで拡大解釈し詰め込んだような部屋だった。

それはまるで服の『博物館』——否、その雑然とした様子からすればむしろ『樹海』だろう、ここは。

「それで、ここで春上さんの浴衣を探そうってわけ？」

「そうです。確か前に来たとき、こっちの方で見た気が……」

うろ覚えの記憶を頼りに初春が部屋の奥へと進んでいく。

それに連れられるように御坂達も洋服の樹海へと足を踏み入れた。

中に入ればその異様さがさらに際立つ。

よく見てみればサイズも結構バラバラで、この部屋の主である氷室には到底合わないような小さなサイズのものまでが置かれている。

「これって、子供用のよね？　ほとんど新品だけど……」

「ああ。それはおそらく寄付用に購入なされたものですわね、きつ

と」

「寄付用？」

「ええ。そもそもこの部屋にあるものは基本的に全て、ここに入ることが許された人物なら誰でも自由に持って帰っていいことになっておりますの」

「持って帰っていい、って……タダでって事ですか!？」

「もちろんですの」

「さしずめ、お金のいらないフリマってどこか……」

「ですわね。もともと皐月お姉様は服を“買って”“集める”のを趣味としているらしく、買った後に“着る”事にはさほど興味は持たれていらっしやらないようですの」

そのため一緒に買い物に出かけたりすると、目についた商品を片っ端から買っていったりするため、その大人買いっぷりに度胆の抜かれ、逆に買う気が失せてしまうことも多かったですの。

「ですので、増え続ける服を処分するために、こうした部屋を用意して無償で提供されているのですわ。なので、佐天さんも気に入った服があればどうぞ好きなだけお持ちになって構いませんのよ」

「い、いいんですか？」

「ええ。おそらく佐天さんでしたら、皐月お姉様もお許しになられると思いますし」

「……その言い方だと、私はダメみたいに聞こえるんだけど？」

「そんなことは言っておりませんわ。ただ基本的にこの部屋に入れるのは皐月お姉様がお認めになられた方だけですの……」

顔を会わせる度に喧嘩腰で睨みつける御坂では、とてもじゃないがそんな関係にはならないだろう。

直接口には出さずとも言外にそう告げられた御坂は、自らもなんとなくそうじゃないかと理解しているが故に眉を顰めるだけでそれ以上の追及は行わなかった。

ちなみに認められた場合、その証としてその人物の携帯に特殊な認証キーが送られる。それを受付で見せれば部屋の鍵を無料で借り

ることができる仕組みとなっている。無論、それは『個室サロン』のサービス外のものではあるが、さる筋からの口添えもあって特別にそういうシステムをこの店限定で行わせてもらっていた。それにより、白井や初春、その他のメンバーはそれぞれの好きな時間に自由にこの部屋への出入りができるようになっているのだった。

「けど、それでもこれだけの数は処分しきれないんじゃない？」

「ええ。ですので、しばらくしても貰い手のないものに関しては定期的に児童保護施設などに寄付しているんだそうですよ」

「そのためにわざわざ子供用の服を用意してるってわけ？　つていうか、どうせ寄付するなら現金で直接寄付すればいいでしょうが」

「それはそうですね……。ですが、それではあまりにもあからさま過ぎて少々無粋と言えるのでは？」

「けどそっちの方が手っ取り早いじゃない」

確かに現ナマで直接手渡すのは少々趣にかけるところはある。

しかし『物』で寄付してしまうと、それだけにしか使い道がない。だが現金なら施設側が必要とするときに必要とするだけ買えるため、最終的にはそちらの方がありがたいはずだ。

だがしかし、だからこそ氷室は『現物』での寄付を行っているのだ。

そもそも氷室が児童保護施設などに寄付を始めたのは、自らの境遇があつてのことである。

諸般の事情により手に余る資金源を手に入れた氷室がその資金の使い道を求め、それならばと自身と同じ置き去り達チャイルドエラーが少しでも豊かに過ごせるようにとの思いから、始めたことだ。

だが氷室が『闇』の実験の被検体として使われたように、学園都市にあるその手の施設には置き去り達を実験台として『闇』モルモットに提供するための窓口となっていたりもする。

またそうでなくても、助成金が降りるのをいい事に、多くの子供

を受け入れて最低限の養育しかせず、資金の大半を懐に仕舞おうとする施設も多く見受けられる。

もちろんそうでない、真っ当かつ健全な施設も存在する。だがそれらをより分けるのは非常に難しく、精査にはかなりの時間と手間を必要とする。しかもそこに『闇』が関わっているのならばなおさらだ。連中も貴重な実験材料の調達先を失わないよう、巧妙な情報操作を仕掛けている。そう簡単に尻尾を掴ませる程、学園都市の『闇』は甘くはないのだ。

しかしだからと言って何もしいでもいらなかった。

故に、悪用される可能性のある『現金』での寄付ではなく、より確実に子供達のもとに届くよう悪用のしようのない『現物』での寄付を行っているのだ。

とはいえ、そんな裏事情を知らない者達から見れば、回りくどい酔狂な行いとし映らない。

「まあ、皐月お姉様も少々他人とは異なる独自の感性をお持ちの方ですからね。私達のような者には理解の及ばないところもありますの」

そういう意味では氷室もある種の『変人』であると言えるだろう。

そもそも氷室皐月という女性はどこか捉え所のない人物だと白井は評価している。

羽振りがいいと思えば妙なところでケチだし、正義感に溢れているかと思えば敵と見做した相手には一切の容赦なく、それこそやり過ぎだと思ふほどに徹底的に、完膚なきまでに、相手の心身を挫く冷血な面をも持つ。かと思えば親しい人物にはとめどない慈愛に満ちた母親のような暖かな面を見せる事もある。大らかかと思えば繊細で、気が強いかと思えば優柔不断で、知的かと思えば変なところでバカを見せ、大人のように子供であり、時に老人のように達観し

た考えを見せることもある。

それはまるで『人間』というものの要素を全部詰め込んだかのよううだ。

人間という存在の『理想』が、実態を伴って存在するかのようで、しかしいざ触れてみようとするれば、幻のようにするとその手の中から抜け出してしまう。

目の前に在るのに、決してたどり着けない。砂漠に見る蜃気楼のような女性——それが白井の知る『氷室皐月』と言う名の人物だった。

（もっとも、それは皐月お姉様が意図的に隠されているからなのでしようけど……）

おそらくはこの中で『氷室皐月』という人物について一番よく知っているのが自分であるという確信が白井にはある。

例えば白井は氷室が能力を秘し『無能力者』<sup>レベル0</sup>として振る舞っている事を知っている。その能力についても断片的ではあるが、本人の口から聞いたことがあった。

それはようやく白井が風紀委員として一人前と認められ、少々浮かれていた頃の話だ。<sup>ジャツジメント</sup>

今思えば恥ずかしい限りなのだが、その頃の自分は随分と後先考えない無鉄砲な子供だったと後悔している。

その時もそうだった。

偶然、路地の奥で一人の女性がガラの悪い連中に絡まれていたところを目にした。女性は無視してその場から立ち去ろうとしていたようだったが、不良達はその肩を掴み、強引に付け合せようとしていたのだ。何に付き合わせるのか、などと問うまでもない。この手の連中が考えることは大抵皆同じだ。

一人前の風紀委員と認められ独り立ちした白井は、その溢れる正義感から腕に巻いた盾をモチーフにした緑色の腕章を掲げ、颯爽と名乗りを上げた。

が、もとより同年代と比べても小柄な白井の姿に、不良達はバカにした笑いを浮かべるだけで相手にすらされなかった。そしてそのまま無視して強引に女性を連れ去ろうとしたのを目にし、白井は実力行使での解決を選んだ。

もとより風紀委員として訓練を積み、未だ自身の転移は出来ずとも高位の転移能力者である白井の前に、たとえ年上であろうとも能力の壁に挫折しグレて不良となった無能力者が敵うはずもなく、決着はあつという間についた。

だがそれが一番の油断だったのだろう。

助けた女性が以前、銀行強盗事件で世話になった女性――氷室であることを知り、驚きとともについ話に夢中になったのが仇となった。

かろうじて意識のあった不良の一人が、背を向けた白井に向け取り出したナイフを片手に突っ込んできたのだ。

とっさの事態に避けることもできず、白井はそのまま刺されてしまったことを覚悟した。

だが、その凶刃が白井の身に突き刺さることはなかった。

反射的に飛び込んだ氷室が白井の体を抱きかかえ、その身を盾にして白井の身を守ってくれたからだ。

けどそれは白井の代わりに氷室が刺されたという事実を示しており、即座に不良を蹴り飛ばし壁に叩きつけて無力化した氷室に白井は慌てて駆け寄ると傷口を確認しながら救急車を呼ぼうとした。

が、驚くことにその必要はなかった。

凶刃に対し無防備を晒していたはずの氷室の体には傷一つついていなかった。怪我をしていないのなら救急車を呼ぶ必要はない。

だがそれは明らかな異常だ。確かに不良が向けたナイフは氷室の体へと突き刺さり、避けることも防ぐこともできなかったはずなの



だ。ましてや以前の銀行強盗事件の際に彼女は自身が『無能力者』<sup>レベル0</sup>であると称していた。にも関わらず、怪我はおろか衣服にも一切損傷が見受けられない。何らかの特殊な力でも働かない限り、それはあり得ない現象だ。

赴くままにそのことを問いただした白井に、氷室は面倒そうな表情を浮かべたが、そのあまりのしつこさにしぶしぶと秘した能力について語ってくれた。

だが同時に鬼気迫る表情で『口外無用』『秘密厳守』の約束を取り付けられた。

もとよりどんな能力を持つのかという情報はプライベートに根差すところがあるため、滅多なことでは他人に語らないのがこの街でのマナーだ。だから白井も端から口外する気などさらさらなかった。しかしその時の雰囲気あまりにも尋常ではなかったため、それを不審に思い白井は彼女について調べてみることにしたのだ。

命の恩人でもあるし、自らの不手際に対して助けられたのはそれで二度目。自尊心の高い白井には受けた恩をただ黙って受け取り放置しておくことなどできなかった。

何より自分はこの街に暮らす人々を守る風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>である。

もし仮に氷室が何か問題<sup>トラブル</sup>を抱えているのなら、それを解決することが自らの役割である。

持てる力と権限を駆使し、白井はできる限りの情報を集めてみた。その過程でこっそり『書庫』<sup>バンク</sup>の登録データを盗み見たことがある。

結果はそこでも『無能力者』<sup>レベル0</sup>。『書庫』<sup>バンク</sup>のデータを偽装するのは基本的に不可能であるため、身体検査<sup>システムスキャン</sup>で意図的に手を抜いているか、もしくはそれを可能とするだけの政治的権力を持っているということになる。

その後の調査でも氷室が与えられた寮の部屋には碌に帰らず、方々を出歩き寝泊りしていることが多いことや、何やら怪しい連中が彼女を嗅ぎまわっているらしい噂などを知ることができたが、それ以上のことは何もわからず仕舞いに終わった。

だがそれだけでも氷室皐月という人物が、何らかの問題を抱えているらしいことはわかる。

しかしそれがわかってても白井に何かできることはない。風紀委員として経験を積んだ今ならば、それが自分の手の及ばないことであることに感づいている。

いや、自分だけではない。一学生に過ぎない風紀委員でも、おそらくは警備員ですら手を出すことのできない領域の事態。それこそ政治やこの街の暗部に関わるような根の深いところに存在する事件である可能性が高かった。そこに下手に飛び込めば、白井自身のみならずその周囲の人間にまで悪影響を及ぼしかねない。あの時、氷室が必死に口外を禁じたのには自分の秘密を守るためだけではなく、それを一番に案じていたためだと気が付いていた。

（ですが、それが分かっているが何もしないことも辛いのですのよ？）

その後も何度か助けてもらったことがある。先の虚空爆破事件でもそうだ。この部屋に関しても時々利用させてもらい、色々と役立たせてもらっている。

なのに、自分は何一つ彼女に返せてはいない。守るべき立場にある自分が逆に守られている。

そのことが白井には許せず、折をみて更なる調査を秘密裏に行っているのだが、未だ尻尾すらつかめない。風紀委員として多くの経験を積み、いくつもの事件を解決してきた自分をもってしてもその片鱗すら掴めない事情。あるいは一人ではなく、誰か——例えば彼女を敬愛する初春とか——に協力を頼めば掴めるかもしれないが、それはその人物を危険にさらすことになりかねない。それは避けるべきだ。

何かをしたいと思うのに、何もすることができず、もどかしい気持ちを抱えたまま白井は一人やりきれない想いを抱き続けていた。

「あっ！ ありました！ 浴衣ありましたよ」

御坂達がアレコレとこの部屋の事情について語っている中、黙々と探索を続けていた初春が歓喜の声を発した。

「どれどれ……」

「へえ、結構いっぱいあるじゃない」

「ホントですわね」

開かれた桐箆笥の引き出しを覗き込めば、色とりどりの浴衣が丁寧に折りたたまれ仕舞い込まれていた。

「……アラ、これなんてオシャレじゃありません？」

そう言っただけで白井が取り出したのは紫色の浴衣だ。基本無地ではあるが、その分大きくあしらわれた枝垂れ藤がより際立つようなデザインとなっている。

「アンタ、ホント紫とかそう言う毒々しい色が好きよねえ」

「毒々しいとは心外ですわ、お姉様。色気のある大人の色と仰って下さませ」

「大人ねえ……」

むしろ身の丈に合わない色使いは逆に背伸びをしようと頑張っている子供のような印象を与えるだけのようだが、御坂はあえて口には出さなかった。言っても無駄だろうし。

「あ、これなんて春上さんにはいいんじゃない？」

初春と共にアレコレと浴衣を選別していた佐天がその中の一枚を取り上げ、春上へと当ててみせる。

「いいですねえ。白地に淡い藍の配色が清潔感があって綺麗です。とっても似合ってますよ、春上さん」

「そ、そうかな……」

「うんうん。じゃ、浴衣はこれで良いとして……、帯は？」

「それならこっちで見つけましたよ。……ほらっ！」

また別の箆笥を開けると中から帯や足袋、その他着付けに必要な小物などが現れた。更に上棚にはバッグや巾着が入っており、下駄や草履なども揃っているようだ。

「確かにこれなら下手なお店に行くより便利だわ」

洋服ならばともかく、浴衣を普通の店で試着して選ぶなんてことはそうそうできない。しかしここならそれも憚ることなく出来るし、帯や小物もいろいろと合わせてみる事が出来る。

そしてなにより、どれを選んでもタダだ。

便利を通り越して都合のいい場所だと言わざるをえない。

「こうなったら、私達のもここで選んじゃおうか！」

「そうですね！」

佐天の提案に初春が目を輝かせ賛同を示した。

元は春上のためとはいえ、そこはやはり女の子。着せ替えが好きなのは全世界女子共通の趣向であり、可愛い服が目の前にあれば、ついテンションが上がって着てみたくなる。とりわけふだん着れないような服ならばなおさらだ。

「じゃあ、私は……」

「これがいいとおもうの」

いつの間にかちゃっかり混じっていた春上が取り上げたのは全面に色とりどりの花が描かれた淡いピンク色の浴衣だ。

「あ、それいい！　じゃあ帯はこの白いのか、こっちの紫のもいいよね。いや、これはあえて同系色で攻めてみるのも……。御坂さんはどっちがいいと思います？」

「……へ？　わ、私？」

唐突に話を振られた御坂がビクリと体を震わせ、声を裏返させた。よく観察してみればその頬が若干赤らんでいることがわかる。視線が不自然に泳ぎ、明らかな動揺が見て取れた。

ふと白井はその視線が最初に向けられていた場所へと目を向けてみる。

そこに見たものを確認し、その目が半眼に閉じられ再び御坂へと向けられた。

「お姉様？　ま・さ・か、とは思いますが、もしやあそこに見えるゲコ太柄の帯を締めていこうなどとは思いいなられていませんかよね？」

「そ、そんなこと、あ、あるわけないじゃない。ね、ねえ？」

「声がかさってありますわよ」

語るに落ちるとはこのことか。

ちなみに『ゲコ太』とは御坂お気に入りofラブリミトン社が売り出しているカエルのマスコットの事だ。

ケロヨンという主役キャラの隣に住むおじさんで、乗り物に弱くすぐにゲコゲコ吐いてしまうから『ゲコ太』なのだとか。

他にもピヨン子という女の子キャラも存在し、子供達に大人気のキャラクターである。

ただし“小学生以下”のお子様に限っての話。

「まったく……。あんな浴衣を着て、それが常盤台の生徒であると知れたら名門の名が泣きますのよ？　そもそもお姉様は学園都市に7人しかいない超能力者のお一人ですの。全学生の憧れの的ですよ？　それを理解しておいでなら、もう少し節度ある態度と品格というものをですね……」

「だーからー！　着ないって言うてるでしょうが！？　私だってアレを着て表を歩くななんて恥ずかしくて出来ないわよっ！」

いくら愛してやまない大のお気に入りキャラがプリントされているとはいえ、それとこれとはまた別の話。誰も見ていない場所ならともかく、公衆の面前ではさすがに無理だ。

「でも、これ、かわいいの」

「えっ——！？」

騒ぎをよそに淡々とマイペースを貫いていた春上が、御坂の心を奪い取ったゲコ太帯を手にはポツリとそんな事を漏らした。

「か、かわいいと思う？」

「うん。すごくかわいいの、このカエル」

小さく微笑みながら首を縦に振る春上に、御坂は思わずその手を

掴んで包み込んだ。

「そうよねっ！ 可愛いわよねっ、ゲコ太！」

「う、うん……」

ようやく同志に出会えた、と目を輝かせ——というか充血させ、鬼気迫る表情で詰め寄る御坂に春上は気圧されながらも再び小さく頷く。というか、この状況では頷く以外の選択肢は取れなかった。怖くて。

「お姉様。同好の士が出来て嬉しいのは分かりますけど、少し落ち着いてくださいな。春上さんが怯えておりますわ」

「あ、……。アハハ、ご、ごめんなさいね、春上さん」

「う、ううん。いいの。平気、なの」

「そ、そう……」

自分でもちよつと興奮しすぎたと思ったのか、御坂が頬を赤らめ乾いた笑いを浮かべる。

「それと、そろそろ私達は一旦寮へと戻りませんと」

「あ。もうそんな時間か……」

部屋の時計を見れば完全下校時刻が近づいてきていた。

「もしかして門限ですか？」

「えっ！？ 花火大会こんなの日！？」

「ええ、そうですの……」

「まったく、うちの寮監ときたら融通が利かないと言うか、頭が固いと言うか……」

「お姉様。そんな事を仰っていたと知れたら、また酷い目に遭わされますわよ？」

「別にいいでしょ、愚痴ぐらい。アンタが言わなければ良いだけの話だし」

「それはそうですが……」

「それにアンタだってそう思ってたでしょ？」

「まあ、確かに。ホント、今日ぐらいは大目に見てくれてもいいですのにねえ……」

「大変なんです、お嬢様学校の生徒ってのも」

「ま、ね……。けど、そういう規則なんだからしょうがないわよ」

規則とはそれを守ることと同時に自らの身を守ることにもつながる。いかに御坂が学園都市で7人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>と言えど、一介の女子中学生に過ぎない。世間見ればまだまだ子供であり、社会的立場は低いのだ。それを保護するのが法であり、規則であり、それに守られる立場である以上、自らも守る必要がある。

けして寮監が恐ろしいからではない。ないっただけ。

「それじゃあ、お姉様」

「そうね。じゃあ、初春さん、佐天さん、春上さん。また後で」

「花火大会の会場で合流しましょう」

「はい！」

頷く初春達を認め、御坂は踵を返し部屋を後にしようとし、

「——ちよっとお待ちを！」

「ぐへえ!？」

白井に襟首を掴まれお嬢様らしからぬうめき声を発した。

「ちょ、黒子! なにすんのよ!」

「何を、ではありませんわ。その手に持った帯は置いて行ってくださいですの!」

「あ——、」

いつの間にかしっかりと握りしめていたゲコ太柄の帯を見咎められ、御坂は乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4098x/>

---

とある最強の抑止力

2011年12月24日01時49分発行